明治三十四年十二月廿四日
第三種郵便物認可

明治三十六年十月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第三巻第十三號

記事要目




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

女學世界 第参巻 第拾三號 目次

輕便瓦斯の煑焼徳用

▲瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煑焼用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

▲三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得へし

▲瓦斯竈は本社の發明品にて専賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく徳用且便利なり



▲工事費は前金拂は一割引とし又廿ヶ月賦拂にて約定す

▲臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に専用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

▲尚各種瓦斯器具は當社搆内陳列所又は銀座所等へ陳列縱覧に供居候御立寄御一覧被下度候

神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

羅馬の智惠の女神



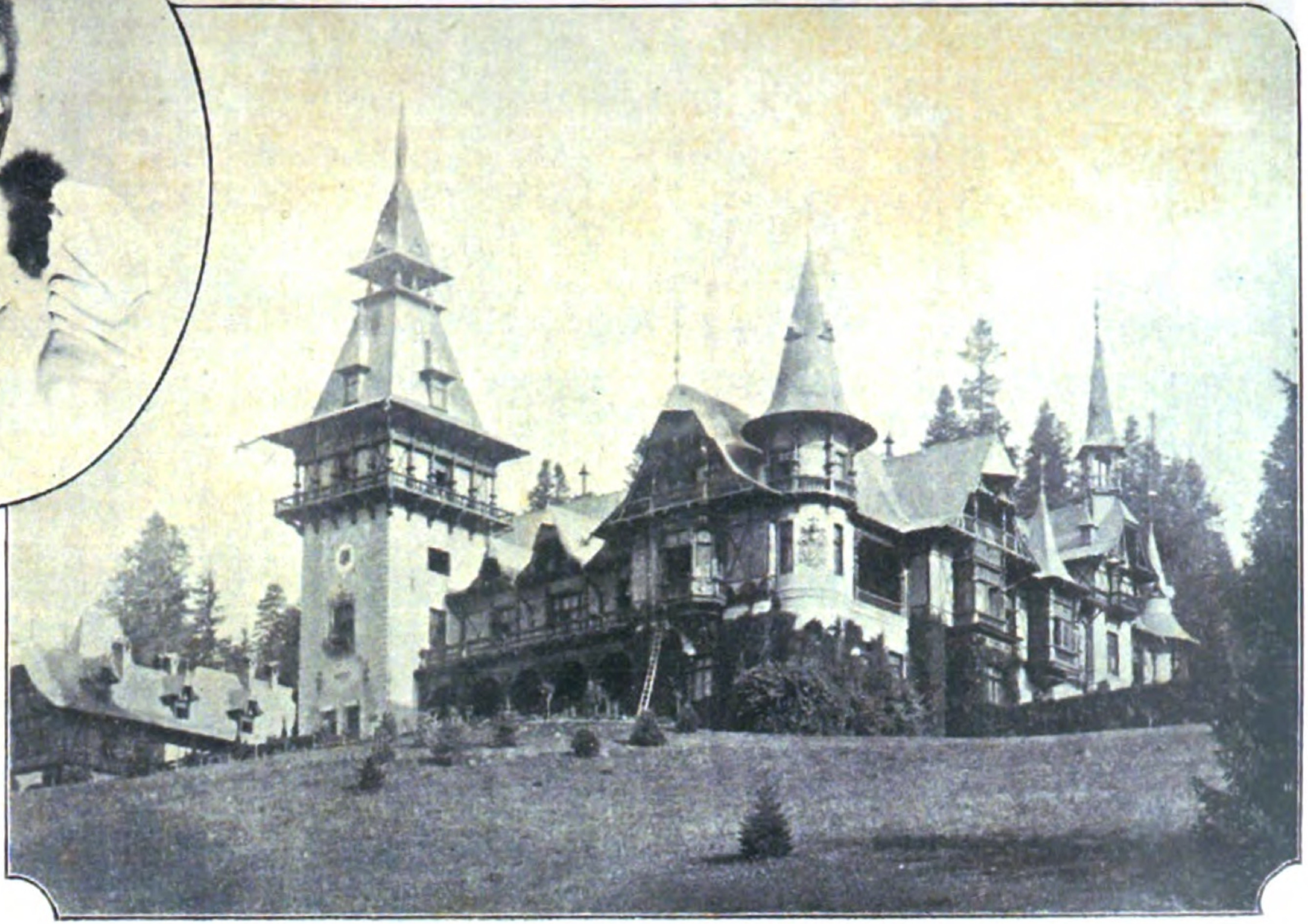
室　内　装　飾　（西洋風の書斎）



羅馬尼皇后の離宮



皇后エリサベツタ陛下



(記事參照)

千壽の舞（癸卯園遊會活人畫）



演者　須賀川夫人　　彈琴　伊集院夫人

（博進社工場印行）

竹柏園主人 佐々木信綱先生著

（近刊）

歌集 おもひ草

全壹册 洋裝中判總クロース 頗美本

●思ひ草は佐々木先生が十數年苦心の作をあつめし書なり

●思ひ草は溫雅なる調もて清新の想をうたへる歌集なり

●思ひ草は新派舊派を問はず歌人の必讀すべき書なり

●思ひ草はかつて出てし短歌々集中最もすくれし書なり

和歌革新の聲盛になりて既に數年、新派諸氏の歌集、世に公けにせられしもの其數少なからずと雖も徒に新奇を衒ひ流行を追ひ、概ねこれ浮華の調、眞に人を動かし、ものありや否や

わが竹柏園先生頽俗奔波の間に特立し、其操守を變せず孜々として斯道に盡さるゝこと多年、早く國歌革新の旗幟をたて清新の想と馴雅の調と、其特色を發揮して益純固の域に詣らんとす

こゝに十數年苦心の作を集め、思ひ草とし、世に問はれんとす、或は惱める人の胸に限りなき慰籍を與ふべく、或は險しき世路に活らきて休を求むる人の心に美妙の調を傳ふべく、若し延いては、浮薄なる現今歌壇の面目を一新するを得殊に依田學海森鷗外兩先生の序文野口寧齋先生の題詩は長原止水氏が繪事の美と共に錦上に花を添ふるの觀あり

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

(甲の一)

（甲の二）

村井弦齋著 （家庭第一實用の書）

增補註釋 食道樂 夏の卷

正價 八拾錢 郵券代用必一割增送賃 ▲市内五錢▲地方十錢▲臺灣、朝鮮清國三十錢▲米國行開封廿四錢

口繪 岩崎男爵家二階建臺所眞景 挿畫十枚註釋澤山

附錄 西洋食器價格表百三十種
西洋食品價格表三百五十八種

◉夏の卷と云ふと雖も所載の料理法は四季通用なり
病人曰く「私どもは毎日何んな食物を戴いたら可いでせう
醫者曰く「食道樂を讀んで消化吸收の良い料理をお拵へなさい
▲一升の酒を飲まんより此書一冊を買ふに如かず

夏の卷は十月十五日より發行

夏の卷初版は印刷中に賣切れ再版着手中なり
速に申込まれざれば再び賣切れとなるべし

春の卷は十七版 正價郵稅夏の卷に同じ

附錄日用食品四百五十種の滋養分明細表あり

發行所 東京市京橋區卅間堀三丁目 電話新橋二千三十六番 報知社出版部

新刊◎出來

英文山櫻著者　藤生貞子著
表紙意匠考案　梶田半古君筆
挿畫　鏑木清方君筆

英文 はなかつら

◉本書は英文學讀本として斯學入門の最好資料なり

菊版やまと綴優美高雅コロタイプ版及錦繪寫眞版等と數種數葉入

定價金四拾錢◎郵稅金六錢

英文學堪能の女史として曾て山櫻の著者として其名聲一時我文壇に嘖々たりし藤生貞子の艶麗なる筆は柳櫻をこき交ぜて萬朶の花を咲かしめた時ならぬ空に再びるかの觀あり「英文花かつら」は實に我近代に於ける女秀才その文壇第一流作者の手に成れる玉文の數々を撰びとりて之を英文に譯したるもの彼の民權論者たり社會改革者たり演說家たり文人たり果ては貞淑の貴夫人として變化縱橫迎接遑なかりし中島湘烟女史が名殘りを日記に留めて世を去りたる傳記逸事を初として樋口一葉女史がおほつごもり梶田薄氷女史が鬼千疋大塚女史の忍音、三宅花圃子の由緣等とりどりに面白く哀れならぬはなし」夏の夜の竹椽、秋の夜の燈下繙いて思ひを故人の上に馳せ濃かなる情懷を水莖の跡にとゞめたる露に袂を沾せは或は滂沱たる淚の我乍ら止め難き或は熱血の湧いて津々胸の内に躍るなど原文の妙味其儘にたる趣味卷を蔽ふを忘れて夜も更けなむ世の英文學るの士願はくは本書一部を座右に備へて著者苦辛慘憺の勞に酬いよ

◉花かつらは本邦第一女流の文彩を發揮したるもの也

(甲の三)

發兌元　東京本郷區森川町一　育成會　關西大賣捌所　大阪市備後町

受驗問答叢書

全部貳拾四冊

毎月二冊發行

既刊

第一編●新撰日本地理問答　上村左川
第二編●新撰日本歴史問答　宮田修
第三編●新撰世界地理問答　武田櫻桃
第四編●新撰東洋歴史問答　松原三十三階堂
第五編●新撰西國歴史問答　長谷川天溪

第六編●新撰國文問答　鷹野勇雄
第七編●新撰漢文問答　太田才次郎
第八編●新撰算術問答　竹貫登代太
第九編●新撰代數問答　竹貫登代太

第拾九編

上村左川君著

新撰和英文典問答

●全壹冊洋裝袖珍上製美本
●正價金貳拾錢　郵税四錢

此書は學生諸氏が暗記に便なるやう、和英兩文典中緊要適切なる條項につき多數の問題を假設し一々之に答解を附したるものにて英文典和文典の兩部に別ち双方編次の体裁を同一にしあれば彼此の對照に依りて殊に理會を容易ならしむる利あり此書を繙かば普通の文典を學ぶ者の時間の半を以てして双方の文法に精通するを得て入學試驗等に際し如何なる問題に遇ふも容易に解答を作るを得べし

第貳拾編

徳谷豊太郎君著

新撰心理論理問答

●全壹冊洋裝袖珍上製美本
●正價金貳　錢　郵税四錢

本書は素と問答体に編纂せるものなれども首尾一貫して毫も支離滅裂の弊あらず且つ重要なる人名術語書名には一々原語を挿入し卷末には斯學研究の參考書をも附記したるを以て啻に世の受驗者の良參考書なるのみならず尚又初學者にとりて、好個の楷梯となすことを得べし叢書完成に留意する諸彥は請ふ精細に本書を攻究せられて可なり

既刊

第十編●新撰幾何問答　竹貫登代太
第十一編●新撰化學問答　武田桃櫻
第十二編●新撰物理問答　上村左川
第十三編●新撰動植物問答　寺崎留吉
第十四編●新撰地文天文問答

第十五編●新撰法制經濟問答　中村重造
第十六編●新撰文官普通及裁判所書記試驗問題　小野拓
第十七編●新撰倫理教育問答　永廻藤一郎
第十八編●新撰鑛物地質問答　寺崎留吉

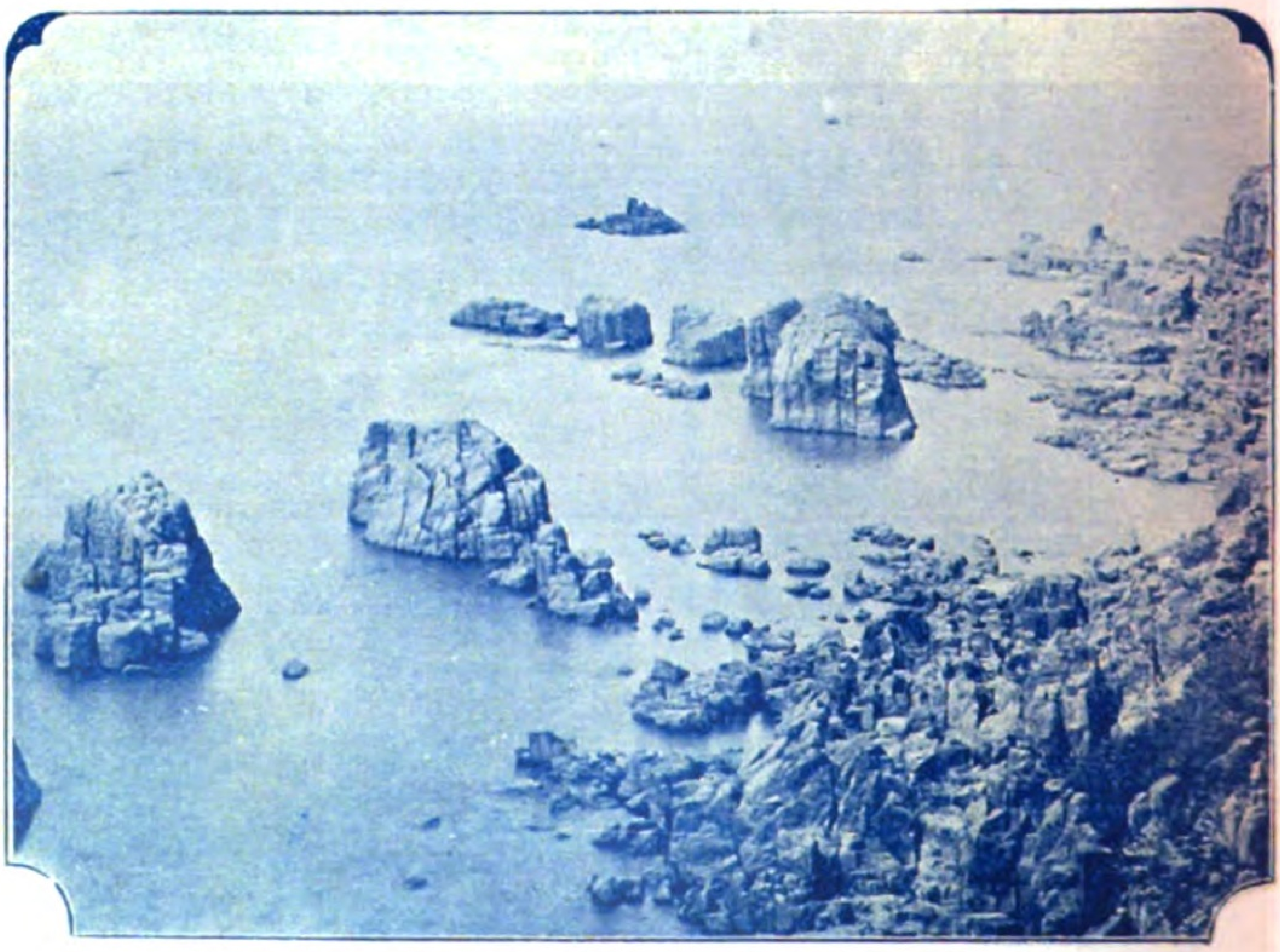
(甲の四)

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

雨中の漁船



（伊豫國松山　宇野和吉氏）



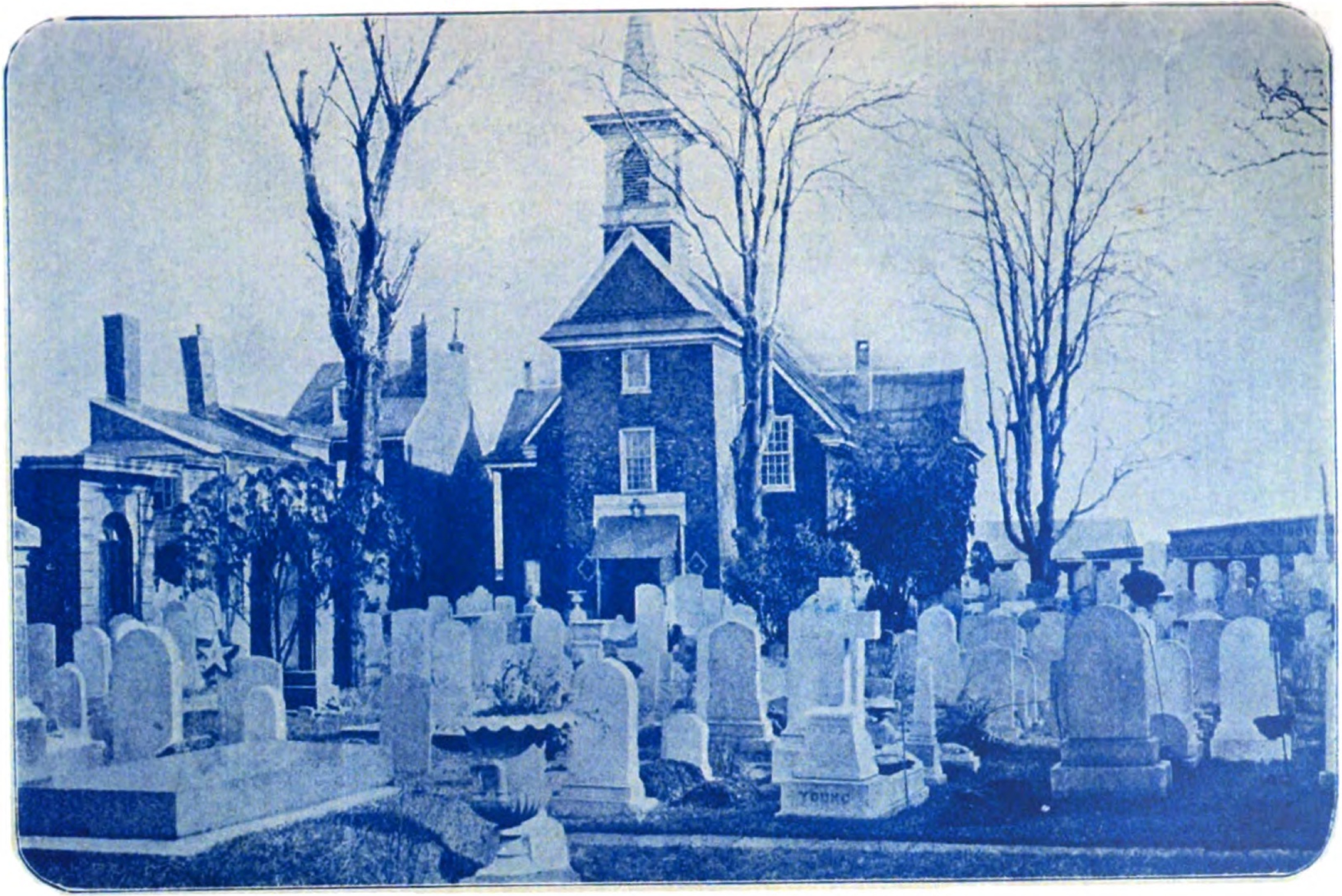
（小石太治郎氏）

材木巖（越前三國の名勝新唐保）

泰西風物

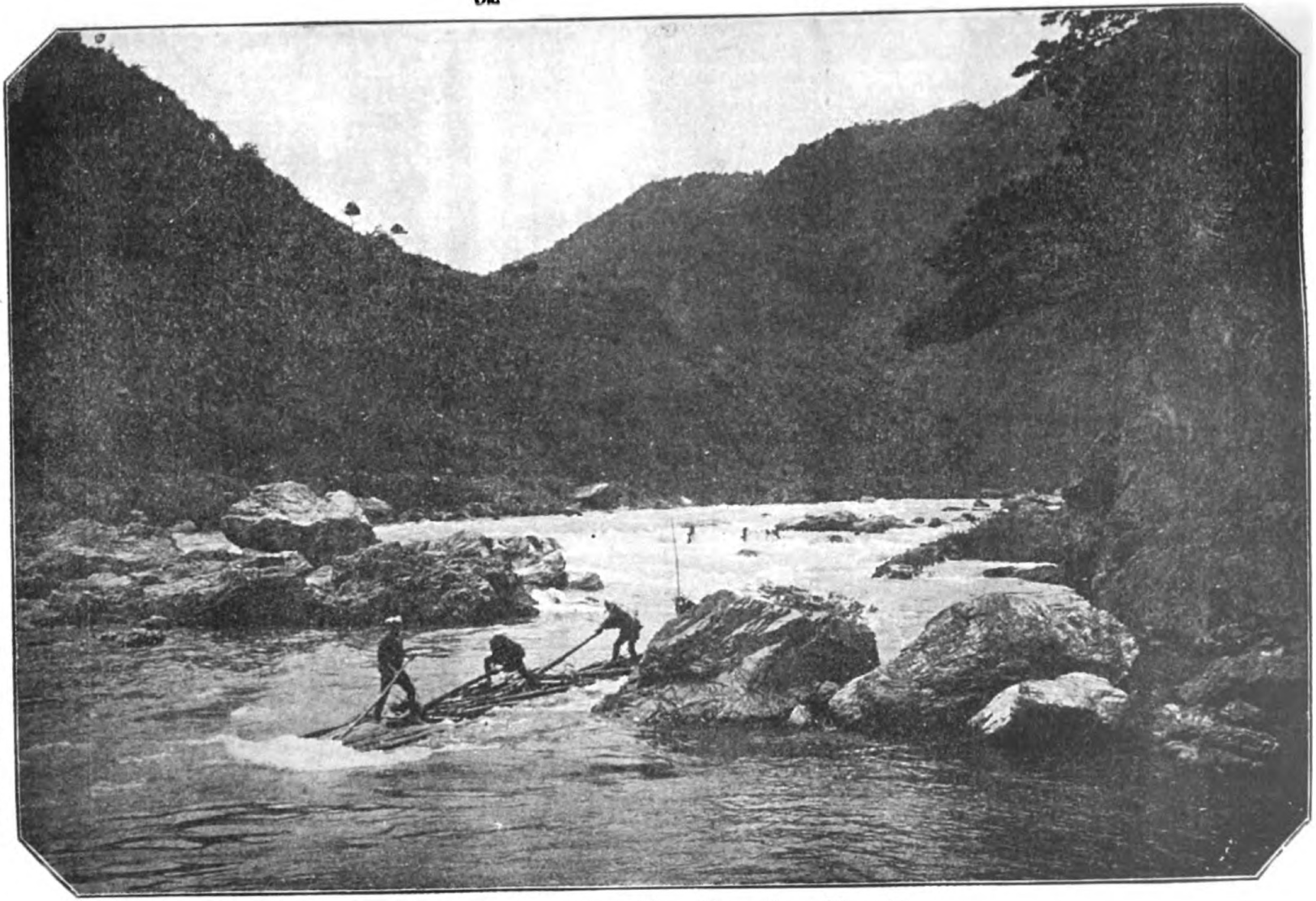


米國アポンシヤイア市の郵便局



米國紐育オールドスヰダス寺院の墓地

清流



（京都 關嘉十郎氏撮影）

京都保津川の上流

文學書類の新刊廣告

文學士大町桂月君著
國文評釋
定價卅五錢 郵稅四錢

佐々木信綱君著
國歌評釋
定價四十錢 郵稅四錢

河東碧梧桐君著
俳句評釋
定價卅錢 郵稅四錢

文學士飯田龍泉君著
漢文評釋
定價卅錢 郵稅四錢

文學士久保天隨君著
漢詩評釋
定價十五錢 郵稅四錢

文學士淺野馮虛君著
英文評釋
定價卅錢 郵稅四錢

文學士戶澤姑射君著
英詩評釋
定價卅錢 郵稅四錢

文學士武島羽衣君著
文學概論
定價卅錢 郵稅四錢

文學士鹽井雨江君著
韻文作法
定價卅五錢 郵稅四錢

文學士久保天隨君著
支那文學史
價壹圓卄錢 郵稅十二錢

發兌元 東京神田錦町二丁目五番地 人文社

(乙の二)

新奇發明 **増酒資料**

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明 新法なり
(附錄)腐敗酒直し法、醬油三倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内：：右今回披露の爲拾萬部限り **無代進呈** す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる **大有益** の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す

確實

(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無效の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ：：(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

● 肉體 **色白新劑**

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體 **純白色に變化** し艶美の容貌となるを確証す世上種々雜多の色白ー藥を用ひて奏效なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特效を覺ゆ眞に奇效顯著の確證新劑價は並製八拾錢特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくし(下) 通經劑

本劑は胃腑を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち **快通流下** する特效あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及 **惡血毒血** を一掃すること確證す但し本劑は其奏效極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



● **わきが**(腋臭症) **根治確證 新發見藥**

醫務實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても **誓て根治** し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵劵代用必ず二割増の事(電話下谷五四六番)以上貳藥

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

(乙の二)

●奏効可驚靈藥●

●目下醫科大學を始め、諸大醫の賞用せられつゝある獨逸輸入の新藥を以て原料とし醫學士田代義德先生醫學士田村光顯先生の協賛を得て調製せる者なれば奏効確實なる事神の如し

太陽丸

●梅毒●淋病●胎毒●痔●脚氣等の根切藥にして數年難治の結毒を一掃して再發の患なく、殊に毒氣多き人●通じ惡き人●逆上性の人は持藥として最も効有

定價 三週分壹圓廿五錢 二週分金八十五錢 一週分金四十五錢 三日分金二十錢 一日分金七錢 郵送料各二錢

發賣元 東京日本橋區本石町三丁目大通角 電話本局二八六番 博愛堂

（取次所）
神田區三河町二丁目 博愛堂分店
神田區鍛冶町 大木合名會社
横濱松ヶ枝町 加藤回陽堂
大阪心齋橋通馬喰町 盛大堂分店
大阪平野町堺筋北 丹平商會分店
越後長岡裏一ノ町 星伊商店
札幌南一條西一丁目 秋野幸三郎
函館辨天町 國領半七
函館地藏町 金田一健次郎
能登輪島鳳至町 久保利平

●近所の藥店に品切の節は直接御注文あれ即時發送す

治肺新法

附録 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一 藥學得業士 金澤巖
（電話下谷二二五九番）

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

千葉縣安房國北條町 川名助次郎

男女學生用 輕便實用靴



輕く軟く屈伸自在、學生職工官吏俻員小僧乘自轉車遠足旅行運動用に適し經濟尤も徳用

特別價減 金五拾五錢

送料四錢郵券一割増三足以上引替小包諸足袋の文數知らせ

發賣元 大坂市内本町松屋町南入 中川商店

總目録進呈

弊館發行圖書目錄入用の方は往復端書にて御申込次第早速送本申上候

東京本町 博文館小賣部

（乙の三）

通俗農藝文庫

第八編

園藝編

農學博士横井時敬先生校閲

農學士井上正賀先生編著

○金壹冊洋裝每編繪入

○正價金貳拾錢　郵稅六錢

園藝とは蔬菜果實及び花卉類を栽培するの藝術にて吾人が日常欠くべからざる食料の要品なり之を栽培するに於ては各作物の性質品及び氣候土壌等の利害を悉知せざるべからず讀者本書に依り其一斑を知らば啻に園藝の趣味を樂しむのみならず大に自他を益するに足るべし

博文館發兌

蠶業叢書

第拾壹編

養蠶新論

農學士本多岩次郎先生序文

望月關馬先生編著

○全壹冊洋裝紙數三百頁

○正價金三拾五錢郵稅八錢

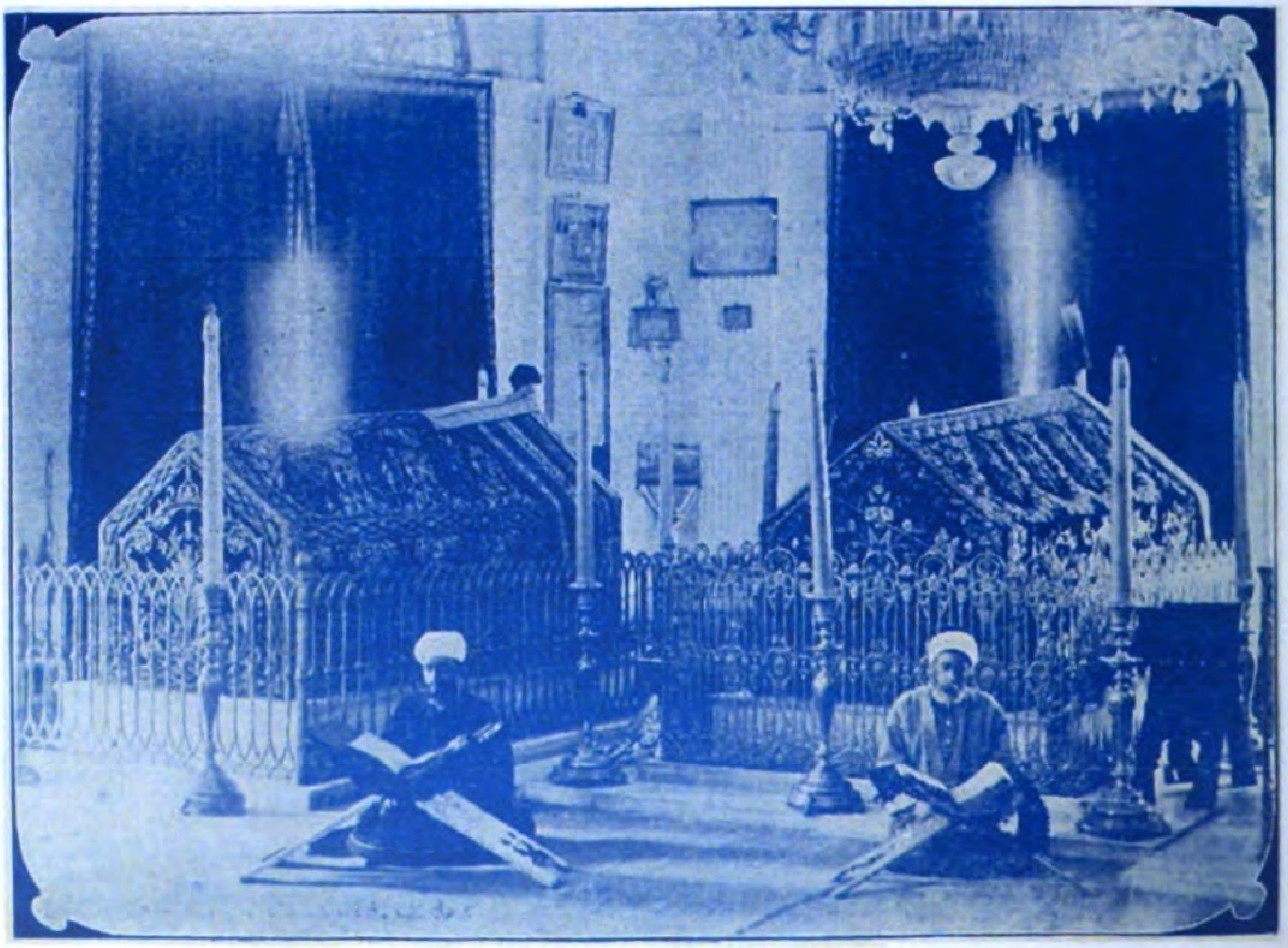
我國生產物中養蠶は主位にあるものにして其發達に關しては當業者は素より政府も間接に力を用ると一方ならず然れども氣候の不順飼養の方法等により確實なる收穫を期しがたきは夙に斯界の痛事たり望月關馬先生玆に見る所あり那邊に伏在せる欠點を講明して本書を編まる大方當事者是非一本を購讀せられよ新らしき研究は新しき貢献を爲すべし

博文館發兌

（乙の四）

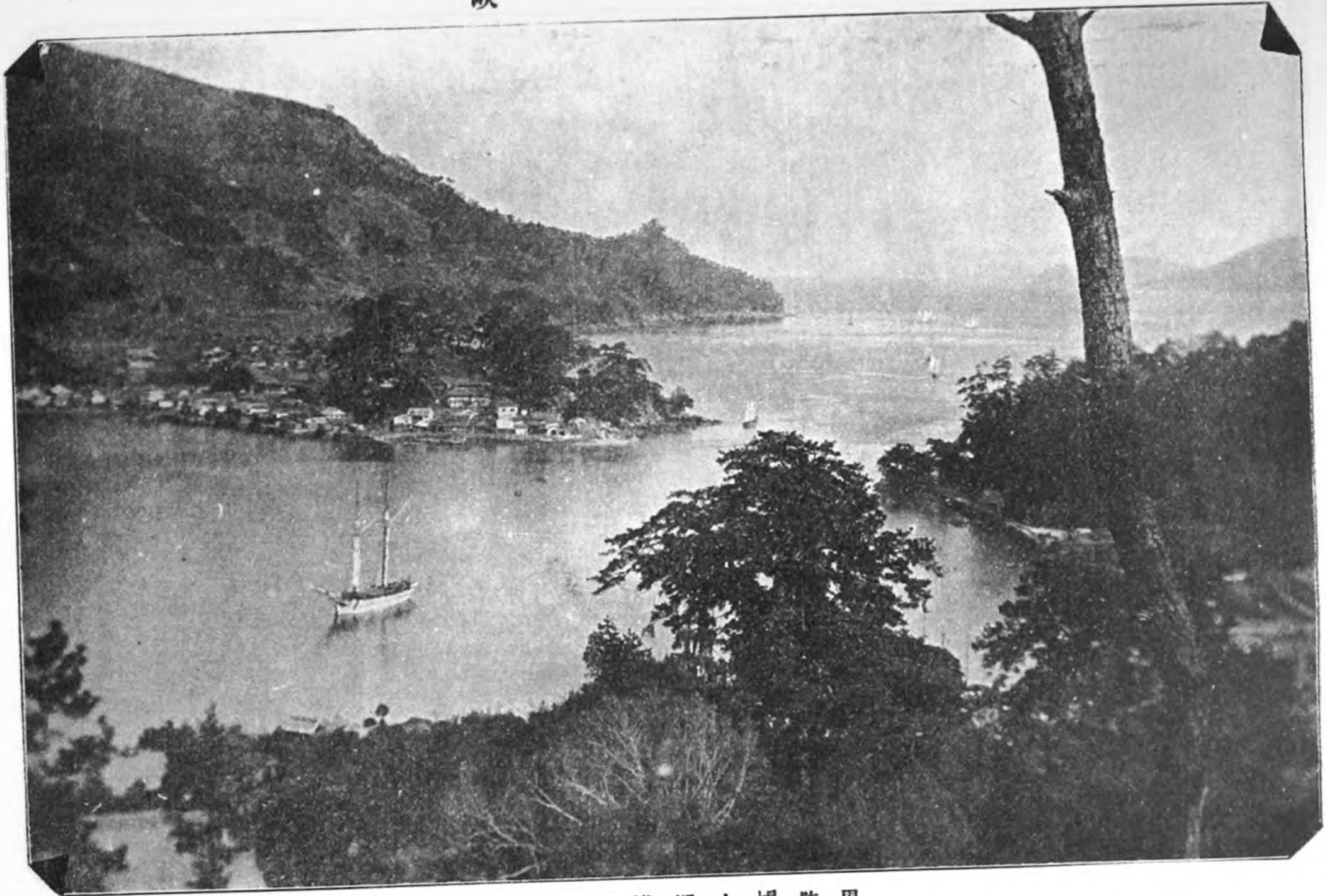
英國上院の議席





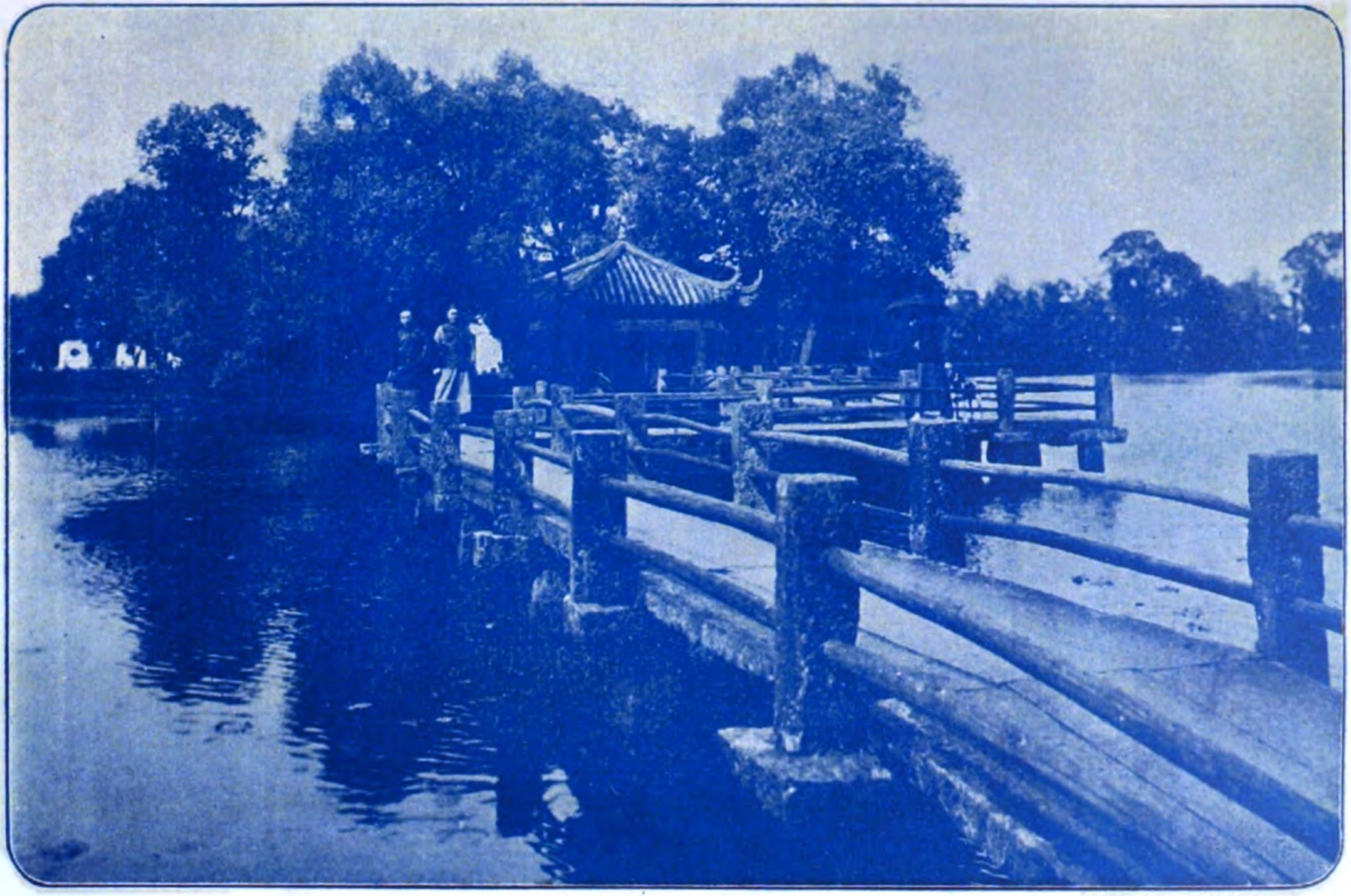
土耳其皇帝の墓陵（僧侶の讀經）

海峡



周防國上關港の海峡

西湖の曲欄



西湖は清國浙江省杭州府の名勝にして山水の配合極めて妙實に支那屈指の風景なり

羅馬尼婦人の風俗



貴婦人



令孃

（記事參照）

明治少年節用

博文館發兌

十一月三日天長節發兌
紙數七百頁内外
挿繪約數百個
總クロース美本
定價郵税未完

學習院長公爵　近衛篤麿君題字

帝國大學名譽教授文學博士男爵　加藤弘之君序文

巖谷小波君
武田櫻桃君
木村小舟君
共編

明治少年節用は出でたりこの書口繪には我が東宮全妃兩殿下をはじめ奉り兩皇孫殿下の御尊影をかかげ各訂盟國々旗及び日本勳章の等級陸海軍服制等すべて精巧無比なる彩色石版を以て印刷したるもの内容にいたりては巻頭にお伽噺二十四題、日本歴史、西洋歴史、日本立志談、西洋英雄傳、等を収めまた本文には教育勅語を始め、天文、地文、地理、物理、化學、動物、植物、礦物、農業、工業、商業、体操、遊戯、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、内外事物起原、格言集、福引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟誦用詩歌、笑話、養魚法、昆虫採集法、救急法、學校案内、旅行案内、郵便案内、遊學案内、皇室一覽、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覧、和漢洋對照年表、年齢早見表あり　日本少年座右の寶典とは即ちこの書の謂也

（丙の一）

新刊書類

文學士 田中西熊先生譯

英文譯註 みさを物語

（英學新報社藏版）

洋全 壹冊 正價金參拾五錢
裝冊 郵稅六錢
●製本既成●

本書收むる所例により英和對譯、三篇『みさを物語』は貧賤なる生活と薄運なる家庭との下に萌え出でたる潔白崇高の愛情を寫したるもの、故に卑陋なる分子は毫もこれなし、文は簡勁にして餘韻嫋々たり。『雪人形』は無邪氣にして、しかも詩趣饒く、淡々としてしかも精緻を極めたるもの若しそれ此篇の淵乎たる含蓄に至つては、正に美妙なる一個の眞理を穿ち得て餘りあるものといふを得べし。『旅役者』には滑稽あり諧謔あり、罵言あり譏謗あり、しかも和風蕩然、其間興味自ら津々たり、譯文はすべて流暢平易、加ふるに頭註の精細なるを以てす、蓋し英學者必讀の良書。

●英文譯註 **奇々怪々** 淺野文學士譯註 正價金參拾錢

●英文譯註 **世捨人** 戸川明三君譯註 正價金參拾錢

……

●英文譯註 **帳中說法** 豐島定君譯註 正價金參拾五錢

●英文譯註 **浮世の旅** 戸澤文學士譯註 正價金貳拾五錢

英文懷中日記

●英學新報社編纂●

明治七年用 冊 正價金貳拾五錢
郵稅四錢
●十月一日發賣●

方今我國に於て英文日記の需要急なること今更喋々するを要せず、昨冬本社の之を編纂出版するや大に江湖の好評を博し、國民新聞は此種のもの、最も完全に近きものと評し、メール新聞は最も美の日記と讃せり、本書は編纂に最も意を注ぎて實用と美術とを兼備せしめ、數多の金言と大家の肖像を挿みて日々教訓を受くる所あらしめんとせるもの、概ね昨冬出版と其趣を同くすれども附錄其他最要用なる事項を增補し大に面目を改めたり、印刷、用紙、製本に於て寸毫の缺點を存せず、而して價格の廉なること他に其比を見ざるべし。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館 東京神田表神保町 東京堂

（丙ノ二）

工業叢書

工學士　淺野幸作君著

アルミニユーム製造法

（近日發行）

全壹册

洋裝上製總クロース金字入
正價金七拾錢
郵稅金拾錢

「アルミニユーム」の發見せられたる當時は其價一斤四百圓なりしも次て金に彷彿し銀に按近し今や銅に迫りつゝあるなり而して其製作品は益々銅の好敵となれり而して其製造方法も始め化學法なりしも今は全く電氣化學法となり尙其詳細なる點に就て益改良せられつゝ其應用に就ても著く發達しつゝあるなり此の如く既に日用金屬となりは〻にも係らす我國にありては尙珍奇品として扱はれ之れが製造應用學に干する智識を欠く本書は茲に見るあり綫に著者歐米に在學の日其見聞したるものを基礎とし「アルミニユーム」並に「アルミニユーム」諸化合物の性質「アルミニユーム」の製造法「アルミニユーム」の諸應用及び合金並に之等の分拆等の斬新の新進を網羅して一册とし之を世に行ふと然り

（丙の四）

理學士　齋藤賢道君著

工業用植物纖維

（近日發行）

全壹册

洋裝總クロース
金文字入極美本
正價金
郵稅金　未定

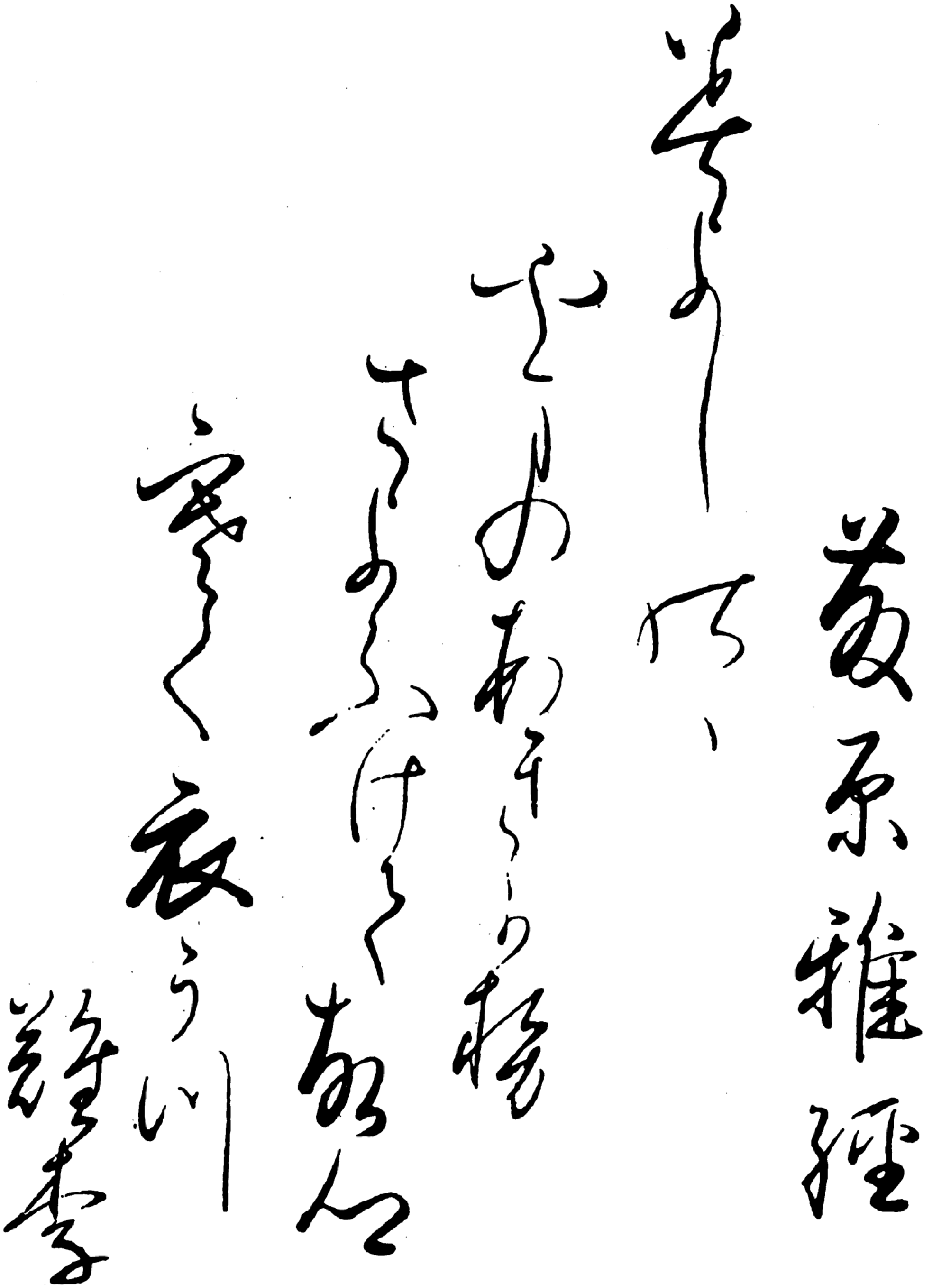
歐洲各國に於て近時化學的工業の研究甚だ多き中に植物纖維の調査早く學者及び實業者の注意を惹ける所となれり

本邦に於ては這般の文献は殆んど無く唯だ纖維植物の栽培製出に關する二三の書あるのみにして未だ完全なるものなし編者嘗て該方面の研究を行ひたることあり之を基礎として更に歐米の書を參酌し本邦に適切なる一書を公にせんとの目的に出てたり請ふ愛讀あらんことを

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

藤原家隆朝臣

した紅葉かつちる山の
夕時雨ぬれてやひとり
鹿のなくらむ


藤原雅經

坂正臣先生筆

明月　秋寒し

柿實　柚子　鶉

菊花　もみぢがり

しめぢ茸　大根

阪正臣先生筆

御差出しの小包本日
無事に相届き申候
御像いつもよりハ見
事に出来満足いたし
申候このしこ

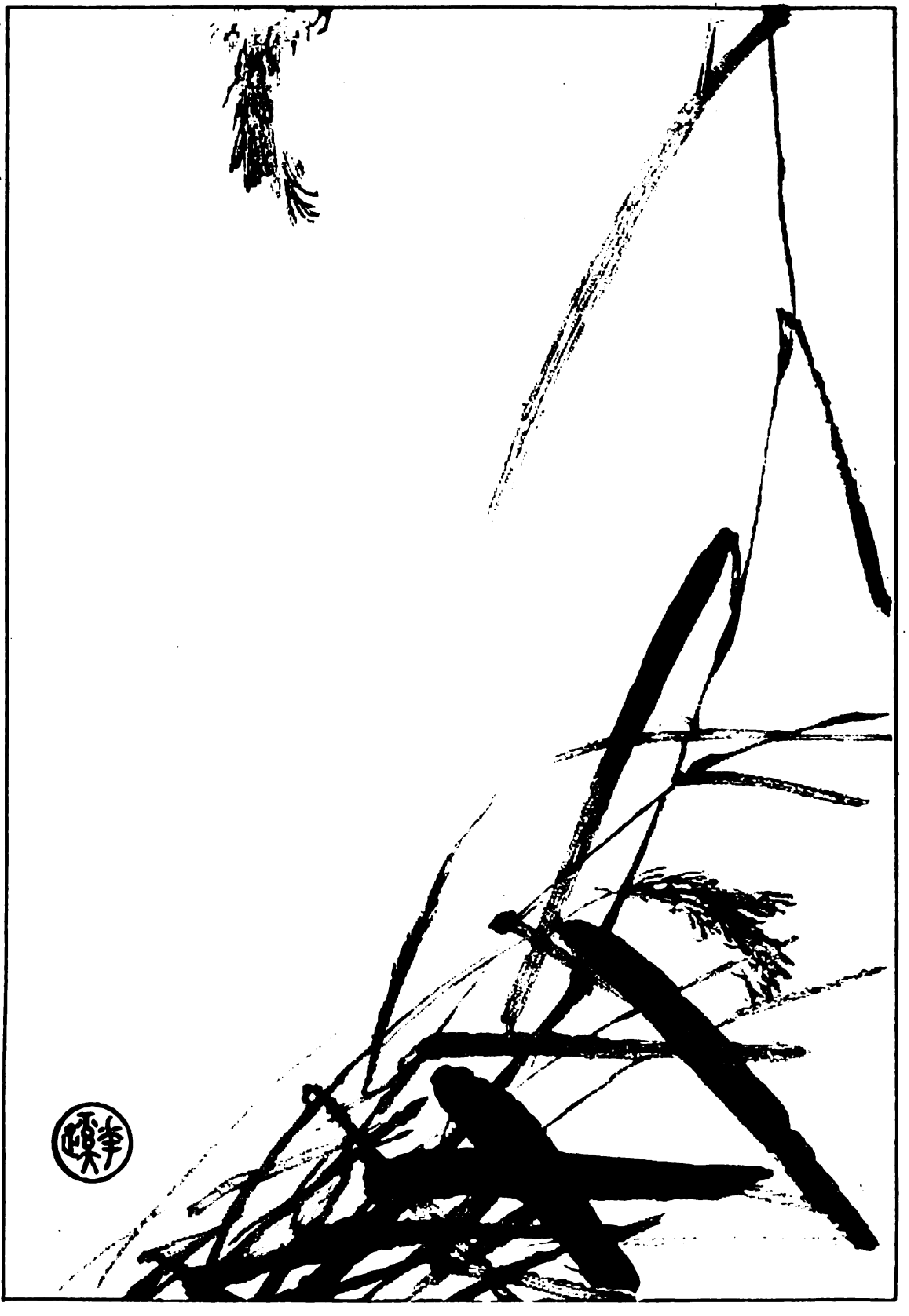
枝ゝ豆



跡見花蹊女史筆

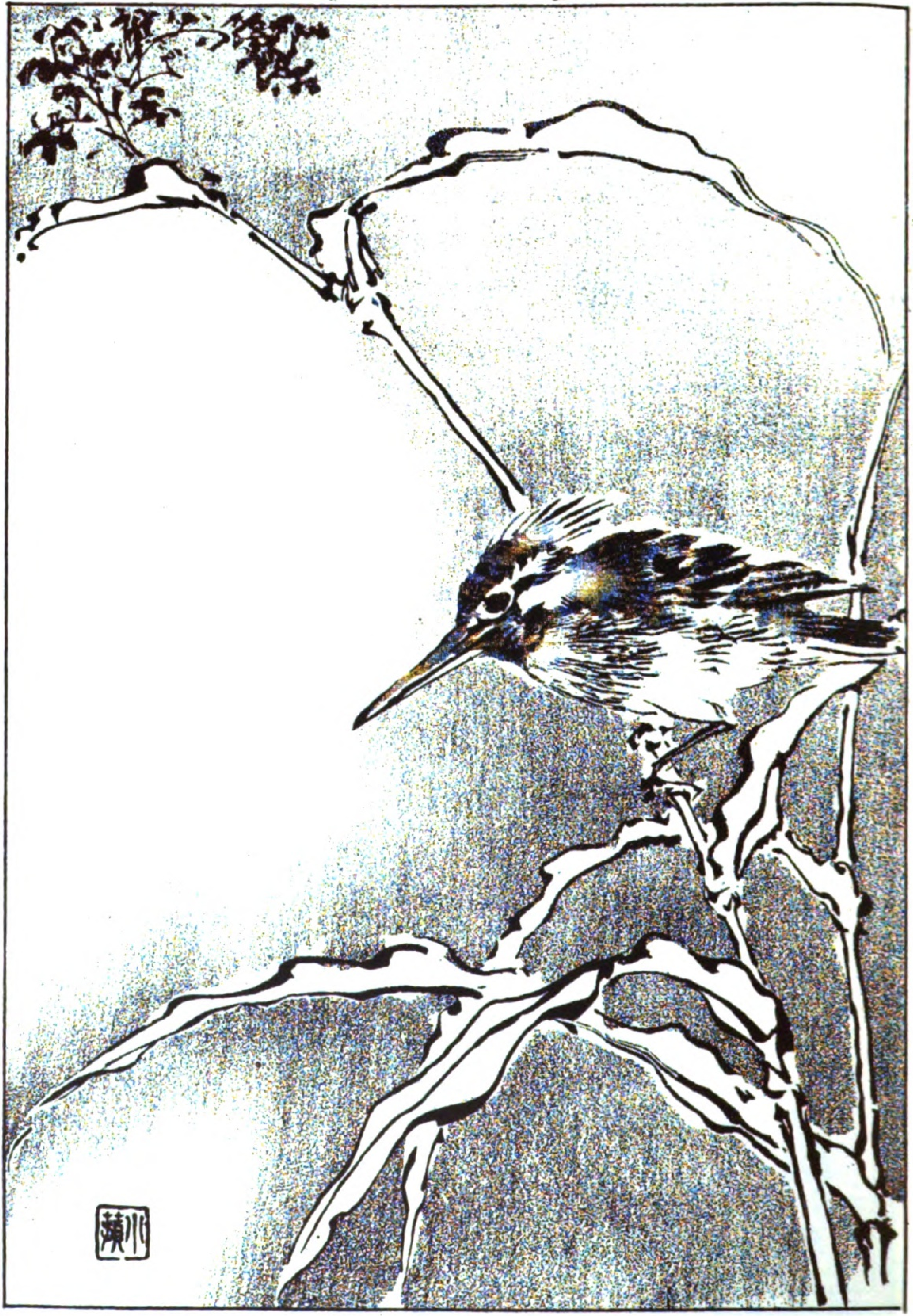
蘆花

跡見花蹊女史筆



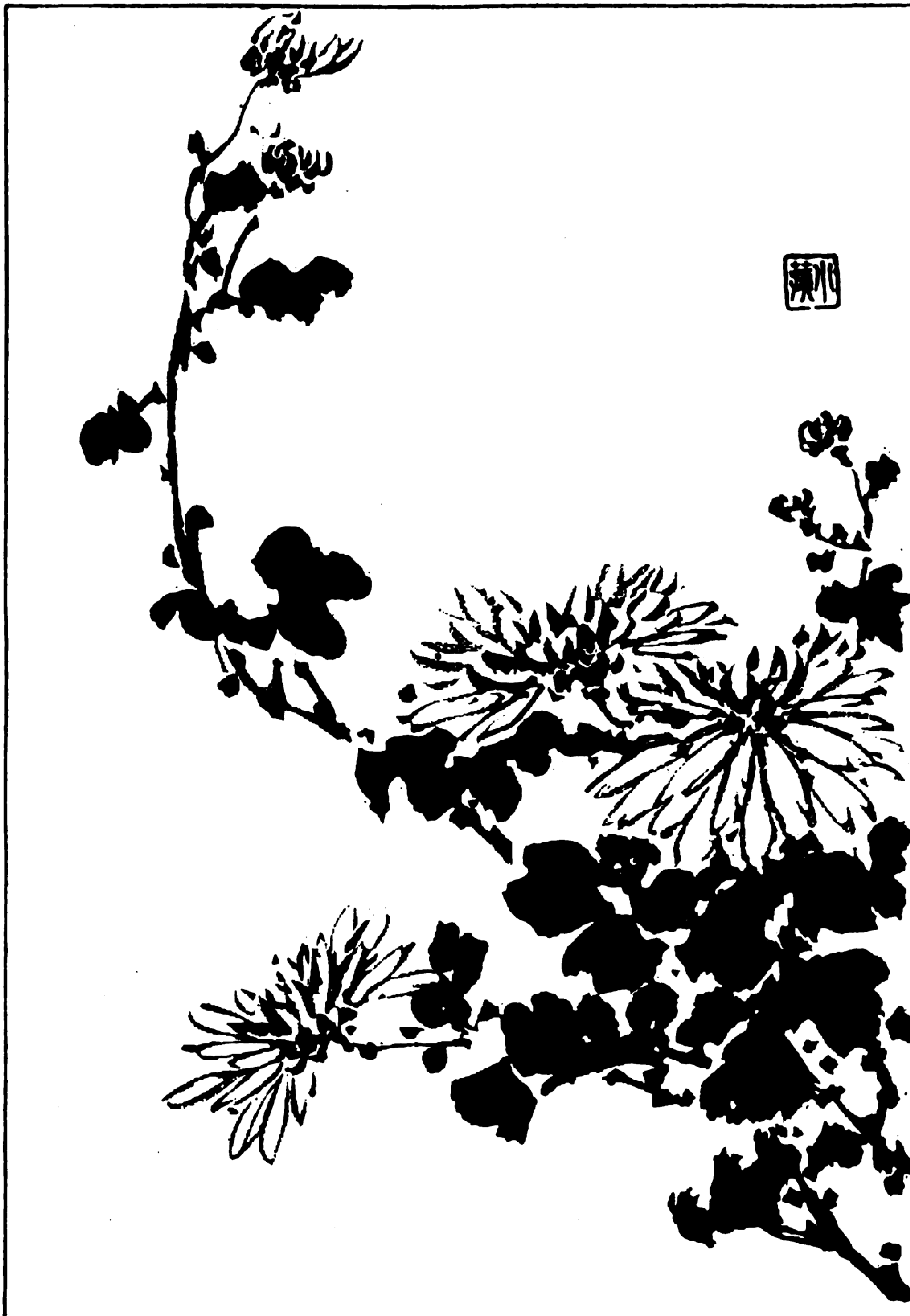
蘆ノ翡翠

野口小蘋女史筆



菊花

野口小蘋女史筆



各宗本山名所圖會

天台座主三津玄深大僧正題字
翠葉石倉重繼君著
青木香葩君畫

善光寺名所圖會

全壹册

洋裝美本
紙數三百頁
定價金四拾五錢
郵稅金八錢

口繪

●後西院天皇御宸翰●光格天皇御所持御中啓●孝明天皇御所持御末廣●皇太后陛下御所持御烟草入●聖護院盈仁入道法親王御遺品氣業●伏見宮●同御息所●山階宮●久邇宮●小松宮各親王殿下御歌●輪王寺宮貞享三年掟書●徳川家康下知書●天海僧正の掟書●善光寺口割證文●運慶作阿彌陀如來木像●善光寺如來緣起其他善光寺●大勸進大本願堂塔外景內容數十種

信濃國善光寺は、畏くも欽明天皇の御代、百濟國より貢献せる一光三尊の阿彌陀如來を安置せる、我國最古の佛刹にして、壯麗なる殿堂は巍然として雲間に聳え、宗義の差異、僧俗老幼のきらひなく歸依渇仰する事尤も深く、日に數千の參詣者を絶たず、殊に歴史上偉大なる關係を有し、加ふるにそが法要儀式の莊嚴なる、他各宗本山に於て到底見るべからざるの一大趣味を有す、著者即ち例の周到緻密なる史的觀察と精密なる實地調査とにより、流暢なる行文を行てこれが委曲を詳述し盡す、加之寶物古文書殿堂の外景內容及び諸遺跡數十種を、精巧優美なる寫眞銅牌として卷頭に掲け、且つ香葩畫伯が墨筆に成れる挿畫數十種を文中に挿入せるが如き、蓋し行文を裝ふに餘りあるべく、宜しく座右の珍寶とすべきものなり。

◉本派本願寺名所圖會（定價金六十錢 郵稅金十錢）
◉大谷派本願寺名所圖會（定價金四十錢 郵稅金八錢）
◉佛光寺名所圖會（定價金廿五錢 郵稅金四錢）
◉日蓮宗各本山名所圖會（定價金五十錢 郵稅金十錢）
◉成田山名所圖會（定價參十五錢 郵稅金六錢）
◉日光名所圖會（定價六十五錢 郵稅金十二錢）

（丁の一）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

新築落成に付來る
十日より開店賣出仕候

四方御華主樣益御清福に被爲在大慶至極に奉存候
次に弊店此度店舖の全部を陳列式に改め度と存じ先年來新築工事に着手致し居り候處殆んど落成開店の運ひに至り候は偏に各位樣御厚情の御餘光と謹んで御禮奉申上候
此後は一層勉勵從來の御引立に酬ひ奉らんと存じ業務全般に大改良を加へ殊に內外製產地より最新精良なる呉服洋服地澤山着荷致候に付階上階下に陳列して御縱覽に可奉供且開店御披露に因み『祝ひ切れ』反物等例年より夥多有之候間何卒不相變御愛顧を垂れさせられ開店當日より御來觀の上多少に拘はらず御購めの程伏して奉希上候謹言

白木屋
呉服店 洋服店
東京日本橋通壹丁目
電話本局八、一八、二八、三(特)四七五
SHIROKIYA TOKYO
SILK & WOOLLEN STORE

(十の二)

林吾一先生題字
中島義弌先生著

（訂正再版）

新撰女子作法書

全壹册

木版彫刻圖畫五十餘圖挿入 正價金廿五錢 郵稅四錢

禮式を說きたる書極めて多し然れども多くは舊式に泥み徒らに形式的のみ、本書の著者は東京府女子師範學校其他の數校に於て多年實地に教授せられたる教授案を高等女學校禮法教授要目に照し創正し各種心得を丁寧懇切に緻密なる挿畫もて說明を加へたるものなれば師範學校高等女學校、の禮法教科書として、はた家庭に於て作法を修めんとする婦女子の必用缺くべからざるの要書なり

飼鳥大家川口清五郎翁著

實地應用 諸鳥飼養全書

定價未定

諸鳥實色石版色刷拾貳葉木版圖數個入

此書の特色は記事の正確にあり、書中片言隻語たりとも亦不確實なるなきは勿論、著者は宮內省動物園に於てはた土耳古帝室內動物園に於て、多年之を擔任實驗せしものなれば、以て本書の價値を想知すべきなりされば書中挿入圖書の如き、何れも實物の寫生彩色畫を用ひ、以てその正價を併行せしめたり、殊に附錄として鳥類の捕獵法をも添へたれば幸に本書を繙くものは、悉くの鳥類飼養法を知るのみならず春郊秋野に之を捕獵する事をも修得せしむる、亦に斯道の良師たる有益の珍書たるべし。

小川文雄先生著（近刊）

新案圖解 玉突術

木版彫刻圖畫九十餘圖挿入美製本

定價未定

發兌元 東京日本橋區本町 博文館
發兌元 東京神田表神保町 東京堂

（丁の三）

十千萬堂藏版

紅葉先生の病むや天下擧げて嘆惜せざる莫く、文を贈り藥を貼りて同情を寄する者多し、殊に門下生に至りては、殆んど寢食を癈して先生の枕頭に侍し其快愈の速かならんを祈れり然も至誠を致もの悉さゝらんを恐れ、相謀りて各心を籠めたる一文を草し床下に献して秋夜の伽と爲す、曩日各新聞紙上に美談として傳へられたる『換葉篇』此れなり、小説あり、隨筆あり、句あり、歌あり、紅紫錯互金碧掩映して一幅の美觀を極む眞個に此れ文壇稀に觀る所の佳話にして先生師弟の情の如何に濃かなるかを見るべし今や剞劂漸く成り併せて天下有情人の淸覽を辱ふするに至れるは本堂の光榮とする所なり。

十千萬堂出版部 敬白

換葉篇

目次

目次

全壹冊洋裝上製　金文字入美本

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

〈丁の四〉



女学世界

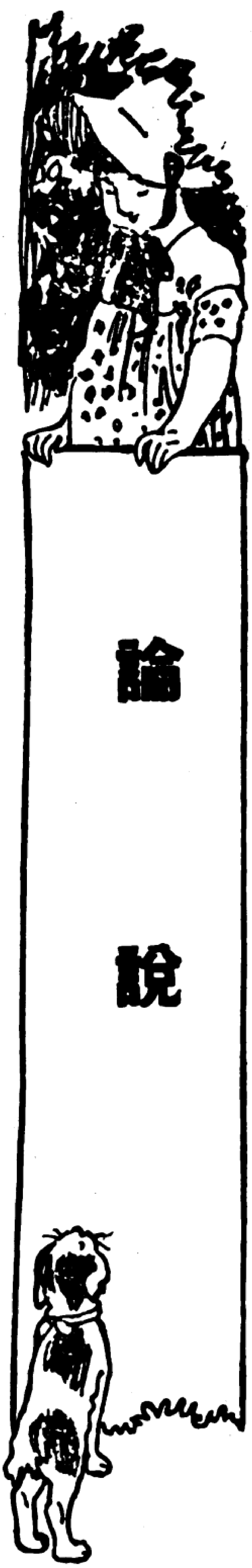
第參卷第拾參號

學問の應用

理科の學問は人間處世の根本なり、今日世の家政を行ふ婦人に欠ぐ可からざるは實に應用理科學に在り。理科の應用を知らざる者家事を執つて誤なきもの尠し、抑も婦人家を治む、一日瞬時もこの智識と離る可からず、この學問に通達し、この智識を應用して始めて家政を執るを得べし。

一日の内には朝夕の理科學あり、一年の内には春夏秋冬の理科學あり、二十四時に通し、三百六十五日に通じ、一時一刻も離るべからざるは實にこの理科學に在り、されば時々刻々、その時に觸れ物に應じ、場合に遭遇して變化自在に應用誤らざるに至つて始めて家事の本務を盡したるものといふ可し。

さらば如何にしてその學問智識を修得すべきか、徒らに高尚深遠の物理を攻究せんよりは寧ろ鄙近の科學を修めて之を日常の家事に試み理科の智識を實地に應用するの經驗を積む可きなり。



女子と理科學

（女子教育上理科奬勵の必要に就て）

寺田勇吉

時勢の要求

晩近普通教育の普及上進するに從ひ、小學教育を終りたる女子にして猶ほ進で中等教育を受けんとする者續々輩出し、之が爲に高等女學校又は之と類似の女學校の設立せらるゝもの漸次增加の傾向を呈し、殊に東京市の如きに在ては女學校の私設せらるゝもの陸續其踵を接し、俗諺の所謂一雨毎に增殖するの勢あり、是れ吾輩の數年來主唱せし女子教育の必要の國民一般に是認せられたる徴候の一斑にして甚た喜ぶへき現象なりと雖も、吾輩は審に其內容を觀、深く其成績を察し衷心竊に杞憂の念に堪へざるものなきにあらず。何を以て之を謂ふや、曰く女子教育の大主腦たる品性の陶冶を忘れて學藝の注入を專にし、或は獨立獨行を奬勵して女子の天職を忘れ或は智識の重荷を負はしめて身體を犧牲に供し、或は教育の名を假りて營利の實を行ひ或は固陋頑迷に陷ゐり或は浮華輕薄に流るゝ等幾多の弊害の存するのみならず、世人の未だ注意を拂はざる一種の憂ふべき病患の伏在するものあればなり、何ぞや曰く盛に文學的教科を奬勵して理科を疎す

るの弊是なり是れ實に方今女子教育海の航路に横はれる暗礁なり請ふ聊か此暗礁の危險を指示して世の教育家及び父兄子弟の注意を促さんと欲す。

高等女學校又は之と類似の女學校を觀るに教うる者も學ぶ者も其多くは力を文學的教科に盡し理科に至ては殆と全く之を等閑に付するもの丶如し、是れ方今女子教育上の通弊にして其効果の未だ善美を盡さゞる一大原因たらずんばあらず、蓋し我邦從來の婦女子が神佛に祈願して疾病の平癒を求め彗星の現出を望で戰爭の前兆と爲し燐光を觀て横死者の怨靈と解し職業の盛衰身體の健否を以て家相方位に歸し歲月時日に於ける干支の配合如何を論じて、結婚出生死亡等に於ける人事の吉凶をトするが如きは其愚眞に憫笑するに堪へたりと雖も今日に於ても教育を受けたる婦女子にして猶は依然此迷信を懷き此陋習を脱せざること無學文盲の婦女子に譲らざるものあるは、何ぞや、豈に其所謂教育なるものは和歌和文の練習を重じ英語英文の暗誦を尊び刺繍造花茶の湯插花等を以て緊要なる科目と爲し理科の智識の養成に至ては其力を用うること最も少かりし過にあらずや、昔時に於ては神佛に祈願して疾病の平癒を求むる者あるも其害は其人の一身に止まり他人に迷惑を及ぼすの虞少かりしと雖も今や然らす、虎列剌「ペスト」赤痢「ヂフテリア」等の如き劇烈なる傳染病は間斷なく反覆襲來し其病毒は交通機關の整備と共に益々迅速に四方に傳播するの機會多きを以て一人の疾病に對する心掛の如何は忽ち全社會に影響するが故に苟も患者あれは必ず相當の治療を加へ豫防を施さしめさるべからす、復た昔時の如く該患者の愚を愚として傍觀の地位に立つことを得さるなり、是に於て乎吾輩は女子教育上理科を奬勵し將來の賢母良妻たるへきものをして近世文明の快味を喫せしむるは時勢の要求として實に已むへからさるを觀るなり。

理科智識の必要

若し女子教育の目的を以て文學者の養成に在りとせば今日の女子教育は其目的を達するの手段に於て殆と遺

憾なきに近しと謂ふべし見よ今日の所謂中學程度の教育を受けたる女子は花鳥風月に對すれは鬼神を感せしむるの妙詠立に成り人事の喜怒哀樂に遭へは筆を援て一篇の小說を搆成するを難しとせさるにあらすや、然れとも女子敎育の本來の目的は文學者の養成にあらす所謂賢母良妻を養成するに在りとせは理科の智識の養成は實に其重要の部分たるを否認すること能はさるへし家婦の職務の第一たる家事經濟の如きも之を執行して其空しきを得せしめんには飲食の調理にもせよ衣服の洗濯にもせよ香物の漬方にもせよ事々物々理科の智識の應用を要せざるものなし、殊に割烹は家事經濟上最も重要の位置を占め其巧拙は啻々口腹の利害に影響するのみならす家庭團欒の快樂も此中に在り家計の過不足も是より生す家婦たる者の職務中愼密周到の注意と理科の智識の應用とを要すること是より大なるものなし、然るに我邦現今の有樣を觀れは家婦たる者親しく割烹の勞に任せよ下婢をして之を代理せしむるのみならす味の良否價の高下滋養の多寡等に至るまて一に下婢の選定に放任して顧みさる者多きか如し、畢竟家婦か理科の智識に乏しく割烹の技能に通せさるの致す所たらすんはあらす女子をして理科の智識を有せしむるは家事經濟の整理上實に今日の急務なりと謂つへし。產業の如きも婦女子の理科の智識の應用に依賴すること尠しとせす若し農家の婦女子にして作物の肥料を吸收する作用溫熱の作物に及ぼす影響害蟲の發生する原因及び豫防驅除の方法等を知らば其農作物の成熟に善良の効果を與ふるや必せり商家の婦女子にして商品の性質効用貯藏若くは利用の方法を知らは其商品の賣捌上一層の利益を得るや疑ふべからす、工業に從事する婦女子をして原料の品質効用產地價格を知り機械の作用運轉の方法動力の性質等に關する原理を知らしめは其工業上に及ぼす直接又は間接の利益は理科の智識を有せさる婦女子を使用するに比し頗る大なるものあらん、吾輩は世の產業に從事する婦女子の現狀に徵するも亦女子敎育上理科を奬勵するの必要を感するものなり、而して產業進步の結果は之を利用する

者をして亦理科の智識の必要を生せしむ、彼の電氣の如き、晩近科學の進歩と共に其應用益々開け、電信、電話、電燈、電車、より兒童の玩具等に至るまで吾人日用の使用に供するもの指を屈するに遑あらす其狀宛も雷霆に鞭て人類の使役に服せしむるか如し、蒸氣及ひ瓦斯の如きも亦然り、此等使用の便利は昔人の知る能はさる所にして、今人の獨り擅にする所なり、然れとも其便利の大なると共に、危險も亦大なるものあるを知らさるへからす、若し使用其方法を誤らん乎瞬間にして人畜の生命を失ひ一朝にして巨萬の財産を烏有に歸せしむるの慘狀を演することなきにあらす、吾輩は世の婢僕若くは老幼等か誤て電燈若くは電車の電氣に觸れて其性命を失ひ蒸滊若くは瓦斯の爲に不測の災害に罹るものあるを見聞する毎に女子教育上理科を等閑に付したるの過を悔ひすんはあらす。

家庭に於ける理科の智識

家庭教育上より母たる者の理科の智識の必要を一言せん乎、凡そ兒童は其家に在ると野に遊ぶとを問はす物に觸れは則ち其名を問ひ事に接すれは則ち其理を質し一問既に終れは又一問を發す是れ其遭遇する凡百の事物を觀察して自己の知見を開かんとするの熱心に出つ兩親たるものは其機に乘し煩を厭はす勞を惜ます之に對して相當の說明を與へ以て兒童の知見を開發することを務めさるへからす、此場合に於て母たる者少しく理科の智識を有せん乎、直に適當の說明を與へて兒童の知見を開くことを得れとも若し此智識を有せさらん乎、已を得す荒唐無稽の傳說を語て一時を瞞着せさるを得す一場の問答と雖も兒童將來の利害の繫る所決して僅少にあらさるなり、且つ夫れ我邦現在の婦女子の體格を觀るに其多くは身幹矮少にして體量重からす擧止沈重にして快活ならす、顏面蒼白にして常に鬱悒の色あり、此弊や上流社會に昇るに從ひ益々甚しく觀者をして殆と病餘の人たるを疑はしむるもの尠からす蓋し上流社會の婦人は日夜深窓に坐し文學的嗜好を事とし益々心思を苦むるの外復た其身體の健康を

助くるものなければなり、若し彼等をして理科の智識を有し屋外に出て郊野に遊ひ天地自然の美を探くるの趣味を解せしめは、獨り文學的精神の需用を滿たすのみならす身體の健康を補益すること決して少からさるものあらん、然らは將來の母たる者をして理科の智識を得せしむるは獨り生兒の敎育上必要なるのみならす先つ其母體の健康を增進するに缺くへからさる一種の强壯劑なりと謂つへし、吾輩嘗て謂らく健兒を得んと欲せば先つ母體の健全を圖らさるへからす母體の健全を圖らんと欲せは先つ將來の母たるへき女子の體格の完全を圖らさるへからすと、又謂らく人生敎育の大半は襁褓中に於て之を卒業す而して母親は實に之か敎師なりと此を思ひ彼を思へは女子敎育上理科を奬勵するの必要は實に我帝國將來の國民の科學思想を養成せんか爲なり、身體の健全を圖らんか爲なり。豈に啻現在の婦女子の爲のみならんや。

理科の趣味

女子敎育上理科を奬勵するの必要なること此の如く緊切なるに拘はらす世の高等女學校又は之と類似の女學校に於て之か敎授を忽にするは吾輩の解せさる所なり豈に文學的敎科は古來より我邦に行はれ著書充棟、材料豐富、殊に女子の嗜好に適するを以て、敎うる者も學ぶ者も共に多くの便宜を有し、力を勞すること少くして効を見ること多きに由る邪、將た紫式部、淸少納言の亞流を汲むを以て女子敎育の本源と心得文學的敎科の外理科の重すべきを忘れたるに由る邪、抑も亦理科は其說く所乾燥無味に陷ゐり易く、其論する所高尙深遠にして常識の能く了解する能はさるに由る邪、蓋し理科は文學的敎科に比すれは敎授上幾多の困難なきにあらすと雖も、苟も敎員其人にして適當の注意を用ゐば文學的趣味を添ふること難からす况んや文學的敎科は理科の智識を加へて其趣味始て全く、理科は文學上の趣味を加へて始て造化自然の美を發揮するに於てをや、何ぞ必すしも其說の乾燥無味なるを憂へんや、又何そ其論の高尙深遠なるを憂へんや、世の高等女學

校、又は之と類似の女學校に於ては宜しく理科を奬勵し適當の教員をして之か教授を擔任せしめ以て女子をして格物致智の實を得せしむることを務めさるへからす是れ實に女子をして近世文明の進歩に貢献せしむる所以なり。

理科教授の方法

然れとも世人請ふ誤解する勿れ理科を奬勵するとは文學的教科を排斥するの謂にあらす、手工的教科を輕蔑するの謂にあらす、高尚の科學を教授せんとするにあらす、又科學の專門家を養成せんとするにあらす、只從來各女學校に於て等閑に付せられたる、理科の教授上自今一層奬勵の方針を取り普通一般の理科に關する智識を修得せしむるを以て目的とし文學的教科と其調和を保たしめんことを欲するのみ、之が爲には生徒の文學的教科に用うる力の幾分を節減して之を理科の學習に充つること最も必要ならん、否らされはさらぬだに學科の重きに苦しめる生徒をして更に一層の重荷を負はしむるに至らん、而して其教授を爲すに當りてや各教員は生徒をして專攻の學科の爲に其精力を盡さしむること勿れ、若し各教員各自生徒をして精を擔任學科の爲に勵まさしむることあらん乎、生徒は之が爲に過度の勉勵に陷ゐり識らず知らさるの間に於て身體の發達を妨害すること尠からされはなり、教科書を用うること勿れ、教科書を用うるときは教員生徒共に之に依頼するの心を生じて研究的精神を閑却するの弊あり加之理科の教科書を以て文學的教科書と同視し、徒に字句の講讀を事とし復た事理の如何を究めず以て理科の教授其法を得たりと爲すの弊を生せん生徒をして、筆記せしむること勿れ、筆記せしむるときは生徒の腦漿は專ら文字の筆記に注がれて事理を了解するの遑なく、恰も速記法を練習するに異ならざるの結果を生せん、故に教師は日常生徒の耳目に觸るゝ現象に就き循々然として口頭を以て之を説明し、説明を助くるに實驗を以てせよ生徒は手を拱して耳能く其説明を聽き眼能く其實驗を觀よ而して能く了解し得たる所あらば深

く之を腦裏に蓄して他日の活用に資せよ實驗の簡易なるものは成るべく、生徒の手をして親しく之を行はしめよ、庶幾くは多少其了解を確實ならしむることを得ん、斯の如くにして生徒各自の腦力に應じて了解する所あらば將來國民の科學思想を涵養するに於て善良の影響を及ぼすは吾輩の信じて疑はざる所なり。

夫れ科學は近世文明の源泉なり若し近世の文明より科學の進歩に屬する効果を除き單に文學的文明のみを取て今昔を比較せん乎、吾輩は前後數世紀の間に著大なる懸隔の存するを發見せず或る點に於ては寧ろ歳月の推移と共に漸次衰頽の傾あるを認めずんばあらず、近世の文明は實に科學進歩の賜なり、歐米諸國に於て其國民敎育上理科を重ずるは能く其根本を知ると謂ふべし、吾輩は我邦公私の女學校に於て科學進歩の成績に徴し歐米敎育の實例に鑑み女子敎育上自今一層理科を奬勵し將來國民の科學思想を開發するの原動力たらしめんことを希望するものなり。

回顧すれば今を去ること十五六年前朝野擧て歐化主義に心醉したるの際女學校の設立熱隨處に流行し其學科課程より敎育の主義方針に至るまで純然たる歐米風を採用したることありしが、未だ數年ならずして弊害百出し歐化主義の皷吹者も之が辯解の辭に窮するに及で大に世人の女子敎育に對する感想を冷却せしめ女子敎育上一大頓挫を來したることあり、爾來識者の盡力に依り年と共に漸次其歩を進め今や再び女子敎育熱の一般に高まるを觀るに至れりと雖も若し世の敎育の任に當る人々にして女子敎育の眞意を解せず、專ら文學者の養成等に其力を用うることあらん乎吾輩は異日再び之が反動を來し女子敎育上容易に挽回すべからざる蹉跌を生ぜんことを恐るゝものなり、是れ敢て本篇を草して女子敎育の任に當る者の猛省を求むる所以なり。

（完）



婦女雜觀

大町桂月

愛の三變

幼にしては、親に從ひ、長じては、夫に從ひ、老いては、子に從ふ。之を女子の三從といひしとかや。從と云へば從なれども、又之を一方より見れば、愛とも云ふべし。

幼にして、最も愛する所は、親也。我をかはいがつてくれて、何でもねだるものを買つてくれて、世に親ほどなつかしきものなし。かくて、年頃になれば、又一の愛生ず。「世の中に戀しきものは父母の外にあらじと思ひしものを」とは、よくこの情をうたへり。「父上樣は非業の死でも、お年の上、勘平さんは三十になるやならずに死ぬるのは、さぞ悲しからう、くやしからう」と云へるお輕の述懷も、この情を言ひあらはせるもの也。たしなみある女は、まさかこのやうなことは、口にせざるべけれども、心は誰もかくあるべき筈のもの也。死なば、一つ穴、二世も三世も女夫ぞと思ひしも、長く添うて見れば、さほどにもあらず。初婚の夜の心持はいつしか忘れて、女の横着なるに愛想つかす夫もあるべく、男の意氣地なきに愛想つかす妻もあるべし。今となりて、最も可愛きは、我子也。かたはの子は、なほ更かはいらしとかや。わが身の着るものをはいで、子に着せ、我食ふものを食はずして子に食はす。子が可愛さに、子の缺點は目に入らず、子のする事は何でもよき事なりと思ふ。世之を稱して、親馬鹿ちやんりんといふ。

以上の三愛は、人が動物としてもつて生れたる性情也。敎へずとも、自然に之を具ふる也。幼にして親を愛するとは、必ずしも親孝行の事に非ず。人は利己的動物なるが、幼にしては殊に甚し。而して、幼者をしてよくその利己の性欲を逞しうせしむるものは、親なれば、之を愛す。危い哉、これ動物自然の情なれども、

人として教育をうけたるものは、この際、利を以て親を愛するのみならず、よく親を敬し、親の恩愛に酬いむことをはからざるべからず。親の恩愛に酬ゆるとは必ずしも雪中に筍をほるを要せず、よく親の命を奉じ學義をはげみ、よき人にならむと勉むるの謂也。

妻となりて、何よりも夫を愛するは、さもあるべき事也。されど、夫に對しては、妻なれども、社會に對しては人也。姑を馬鹿にし、小姑を邪魔にし、生の親にさへつらく當るやうな女ならば、恐らくは、夫を愛する如きも、眞に夫その人を愛するにあらで、夫の富を愛するなるべし。恐しや〱。

三愛の中にても、親が子を愛する情ばかり純潔にして切實なるものはあらず。燒野のきゞす、夜の鶴、たとへ得て妙也。而して愛に溺れて、子をあやまるもの多し。親として戒むべきは、この點に存す。

人は動物也、神に非ず。萬事動物の域を脱すべくもあらねど、人に教育あるは、動物の域より一歩神の域に進ましむる所以也。虚儀虚禮、餘り人情をはなれて義理ばるも非なれども、餘りに動物的本能を暴露すべきに非ず、古の人が子を愛せよ、夫を愛せよと說かずして、親に孝なれ、貞節を守れと說きたるの意をくみわけざるべからざる也。

嫁と姑

姑と嫁とは、多く衝突す。衝突せずとも、互に心に隔ありて、生の親子の如くに親まざるが常也。

新夫婦別居するがよきか否かは、玆に之を說かず。たゞ姑も同居して、都合よきこと多し。年若き夫婦が、姑、小姑に氣兼することなく、水入らずのさしむかひ、杯を共有し、一片の肉を喰ひあふこと、世に氣樂のかぎりなるべけれど、世事になれぬ若き嫁は、よろづ氣がつかぬ事多く、ぬかりも多く、馬鹿な目にあふこと多し老練なる姑を顧問官とすれば、益をうること多かるべし。子生みたらむ場合には、姑あるが、殊に都合よし。ばあさん育ちは、賣つても三百、ねが安いと言るゝくら

ゐ、よく孫を可愛がるものにて、その餘弊もあれど、徹して子を育つる上には、手ぬかりなし。わけがわかつて居りて、粹をきかして、邪見なる處なき姑ならば同居してもらひたきもの也。姑たらむものは、嫁の教育家、監督者たる考を有せずして、顧問官たる考を有せざるべからず。一家の主權は嫁にいさぎよくわたして、眞に所謂御隱居様とならざるべからず。畢竟ずるに、上皇もしくは法皇となりて、なほ院政をきかむとするより、嫁と姑との内訌は起るなりけり。

傳記

女子もし安心立命を佛教に得れば、結構也。之を耶蘇教に得るも、結構也。下りて天理教、蓮門教に得るも、亦妨げず。されど、今の下らぬ宗教に安心を得るほどの迷信なくんば、退いて自から古今の女子の傳を讀め

群侶を好むは、動物の通性也。旅にも路づれあるがよし。學校に行くにも、路伴あるがよしとて、近所の子供同士は誘ひあひてゆく也。花も、芝居も、ひとりで見るよりも、氣に入つた人と共に見るが面白し。ひとり見るとも、歸り來りて之を話して見たくなるもの也。人にかゝる情あるは、これ人が社會的動物たる所以也。この情は、之を生きたる人に求めて得られずんば古人に求めむとす。是に於て傳記世に多く讀まる。

五百の羅漢の中には、我が思ふ亡者に似たるものありとて、人は羅漢寺に詣づとかや。文字を解する女子、せめて、五百人の女子の傳記をよみて、之を我心に融化すれば、爲めに奮勵せらるべく、慰籍せらるべく、教訓せらるべく、心中に絶えず話相手あるべく逆境にたちても、苦痛なかるべく、即ち安心立命が得らるべき也。

女子漫評

善惡ともに、古人は我身のかゞみとすべし。古人を

批評するは、今の世の人の徳行に資する所以なり。女子漫評を作る。

一　松浦佐用姫

夫の遠征をかなしみて、松浦潟頭の小山の上にたちて、夫の船を望みて、領巾を振りまはせりとぞ。今の世ならば、洋行する夫を横濱の埠頭に見送りて、香水のにほひぷんつく絹の手巾ふりまはす類なるべし。

支那の詩人の咏じけむ、憐れむべし、無定の川邊の白骨は、なほこれ春閨夢裡の人なり。佐用姫のひれ振りしさまは、詩的にして悲哀也。畫にすべく、詩にすべし。よその見る目も、もらひ泣きせざるを得ず。別後、夫の船をのぞみて、領巾ふりしとが傳はるくらゐなれば、別るゝきはには、雨になやむ姫百合の如く、泣きしをれ、夫の腕にまつはり、夫の脚にまつはりてかなしみしなるべし。されど、佐用姫、武將の妻ならば、一思せざるべからず。五六年消息なしとか、或は討死せしとかなら、領巾ふるても尤也。支那の望夫石の如く、石となるまでの熱情あらば、猶更詩的なれど夫が勇ましき軍の門出に、妄りに涙こぼし、夫をして後髪ひかるゝ思あらしむるは、今の軍人の妻としても不心得なる事なるべし。

冷かに窟屈云へば、かゝる心掛けあるべきなれども人は感情の動物也。身をたもち、家をたもち、子女をそだつるなどの點に於て、夫をして後顧の憂なからしむるを要す。別るゝ時には、人目をはゞからず、思ふ存分泣くもよし。とかく日本人は男も女も人目をはゞかりて感情を抑へすぎ、乾燥無味に陷れるが常也。横濱の埠頭にすがりつきて、泣きて夫を送る女もなければ雀躍して、歸る夫を迎ふる女もなきやう也。送る顔付も、迎ふる顔付も、さまでの差別なく、殆んど人形の如し。いき〳〵して居らぬ也。

二　百合子

頼山陽のものせる百合子傳は、絶世の名文也。余之を讀む毎に、百合子の心事を思ひやりて、覺えず涙を催さずんばあらず。

茶見世の女なれば、素性は賤しかるべし。されど、

心は頗る高尚也。故ありて京都に落魄せる幕府の士と契り、その貧窮なるをあはれみて、よろづ心つくして世話してやれり、圖らずも、士はその本家の跡をつぐ身となり、錦をまとひて、故郷にかへらむとす、普通の女ならば、氏なくして玉の輿にのるとは、この事なりとて、雀躍すべけれとも、百合子は共に行かむとせず。われ今日あるを得たるは、みな御身の恩也。御身をすてゝ、われひとり榮ゆるに忍びずと强ひてすゝめらるゝも、なほ從はず。われの如き素性賤しきものを妻とし給ふは、御身を辱しむるのみならず、御家を辱しめ、御祖先を辱しむる也。わが身は世に無きものと思ひあきらめ給へ。これを限りに、一生長く相わかれむとて、女の子一人つれて、京都にとゞまり、また嫁せざりき。かゝる心根をこそ、眞に人を愛するものとは云ふべけれ。情あるもの、誰かその心根に泣かざらむや、而してこれ今の世の金に嫁する女子に向つて語るべからず。

百合子の娘、年頃になれり　池大雅といふ貧乏畫師あり。人みな侮りしが、百合子みところある畫師なりとて、その娘を嫁せしむ。娘、夫の貧しきをいとはず夫と共に、紙を展べ、毫をねぶりて、藝術を苦しみ、琴瑟相和せり。而して百合子のめがねにたがはず、大雅は遂に海内第一流の畫師になれり。

嗚呼、百合子親子の如き、今の世に之ありや。否や、

三　狹穗姬

狹穗姬は垂仁天皇の皇后なりしが、その兄狹穗彦叛を圖り、姬に匕首をさづけて、天皇を弑しまつらしむ。姬その志の翻すべからざるを知りて諫めず、されど、夫を殺すに忍びず、覺えず涙おとしける事あらはれて、天兵その兄を城に圍む。夫に對して面目なし、兄に對してもすまずとて、姬、城に入りて、兄と共に燒死せり。

人の妻となりたる以上は、生家よりも夫の家が大事也。實兄よりも、實父實母よりも、夫が大事也、夫の目つまぬすみて、生家へみつぐは不心得也。まして、實兄もし夫を殺さむとせば、極力之に反抗せざるべか

らず後日兄と共に燒死せし命をこの時になげ出して、之を諫めざるべからず。姫は婦の道をあやまれり。その以後、姫のなしたるとは、閒然する所なし。殊勝にして、可憐也。千載の下、なほよく人をして泣かしむ。兄と共に燒死したるは、最もよし、姫は必ず死せざるべからざる也。

一家の憲法

私は日記といふものを書きませぬが、金錢の出納は一文も相違せぬ樣に極めて明細に記してありますから出納帳を見れば私が如何なる生活をして居たかゞ從つて又如何なる人物であッたかも大槪は推知せられます、夫に私は金錢の事は極めて嚴格で、縱令夫婦兄弟の間でも書付なしに一圓の貸借出入をした事はありませぬ、又友人に用立てるにも返濟の見込の十分なものでなければ決して承知しませぬ、其かはり、五十圓貸せと言ふた時には五圓位只でやりまして、夫を利子にして他で借るがよいと申します、それから金でも貸した禮に菓子箱などを持つて來ますが、夫は私は嫌ひで、其代を現金で利子として持つて來るがよいと申します、そこで他から或は守錢奴の拜金宗のと申しますが、決して其樣な譯ではなく、全く双方の便宜で、あるからです、私は二萬圓まで金を貯へる考です、夫れ以上は一文も必要はありません、以上の收益ある時は皆公共事業に拋つ積りです。

全躰今の者は大槪意志が薄弱でいかぬ、そこで僅かの金を持てば氣が大くなると申しますが金を持つて氣が太くなれば金の無い時は氣が小くなるので、夫では丸で金の爲めに左右されるので意志の强固でないから、そういふ事になるのです、從て浮薄虛飾といふことが流行する樣になります。

私は衣服など別に持ちませぬ、外出用の洋服が四着ある計りで、和服は外出する樣には揃つては居りませぬ、其代り食物には多少贅澤して居ます、先づ垣根よりは壁、壁よりは疊々よりは夜具、夜具、よりは食物、といふ風に佛教に所謂依報よりは正報外よりは內を重んずるのが私の家憲で、世間躰を繕ふてゆく人の仕方とは正反對です、夫で私の處の勝手內は何人が出入してもあまり恥かしくないのです、家內などが今日あの綱を買はれば肌衣の袖が出來たものにと、こぼすとなどがあります故其度每に酷く教訓を加へて居ります　（佐治實然氏談）

社交

貴婦人の嗜好

中村鈴子

山脇房子夫人

夫人は舊松江藩士小倉忠氏の長女にして慶應三年六月生なり明治二十六年月下氷人の勸めに隨ひ貴族院議員行政裁判所評定官山脇玄氏に嫁す人と爲り雅致靜婉貴婦人社會有數の交際家と稱せらる

赤阪の家並と山王の森を垣の遠景に見下ろして、庭先には葱で圍んだ大きい古雅な塗盆に澤瀉、葦などを青々と育たせ、床の間には桔梗を活けて、壁にも椽にも塵一ッない夫人の客間は、先づ夫人の趣味が整齊雅潔典麗の間に存するとを想望せしめました。さて交際社會に其人ありと聞えたゞ夫人は、濃く厚く艶かなる鬢髮を淡然灑然と夜會に卷かれ、白地に細かい御納戸竪縞の單衣に茶博多の帶を格好よく結び、白く光琳の浪を縫つた薄色鼠藤縮緬の襦袢の襟をキチンと合せて、しとやかに座に着かれました。

▲趣味

趣味は大切なもので、趣味によつて人々の品性が判ります。併し私は皆樣のやうに種々の嗜好も御座いませんし、又お話が下手で御坐いまして……。

▲服裝

明治二十年の頃は、洋服ばかりで御座いましたが、費用のかゝる割合に窮窟で、それに御交際向に都合のわるい場合が御坐いますから、此頃は和服ばかりに致しました。色合は餘り目立たない白とか黒とか鼠とか、藤色でも極薄いのが好きで御坐います。染方は隨分嚴しい方で、チョットした疵があつても氣になりまして、出入の紺屋(烏森町の紀伊國屋)が弱つて居りますよ、浴衣なぞに僅かの汚れがありましても、着て居られません。

▲配色

衣服の配色と云ふとは最も大切な事であらうと思ひます。顏色の黒い人が紺とか鐵色とか紫とか樺色とか申

す様なものを着け、襦袢の襟でも淺黄に茶の模様のある物を掛け、青みばしつた着物を着て金茶の帯でも締めては實に見苦しい。西洋では此配色と申すことに非常に重きを置いて、自身の皮膚の色との配合を考へ、此色が似合ふとか、彼色は似合ぬとか、撰擇取捨に意匠を凝すさうで、決して日本の様に藤色が流行るから誰も彼も藤色、紺色が流行るから誰でも紺色と申す様なことは無いさうです。畢竟それ程に裝飾と申すことが進歩して居る爲かと思はれます。色の白い方は濃色の少し大柄のものを召すと誠にクッキリとして見よく、色の黒い方は薄色の小柄のものが好く似合ふやうに思ひます、何程若い人でも小供でも、着衣に三色以上の配色あるものは、却て複雑して見惡う御坐います。されば色を撰ぶ時に、除



山脇房子夫人

り懸隔つた色を一所に着けぬやう、常に此配色と云ふことを先にして衣服の撰擇を致すのは、婦人の最も心得て居りたいものと考へます。

▲衣服改良會

衣服改良は隨分久しい問題で、定めし御承知でも御坐いませうが、明治三十二年頃、臺灣の庶務課長が臺灣貴婦人の纏足を戒める會を組織して、頻りに盡力致し或支那婦人に向つて、何卒纏足を止めて貰ひたいと說きましたところ、彼答へて、日本の婦人は廣い帶を背負ひ居るのみならず、歩く時に脛が露はれて見苦しいではありませんか、國の風俗習慣を嚴しく言はれては困るつて申したさうです。私共は此事を聞きましてから、一層改良の急務を感じまして、鳩山さん濱尾さん三輪田さん方と熱心に奬勵を始めたのですが、未だ大抵の袴は後の格好がわるう御坐いまして……、特に帶を高くして、其上へ袴腰を載せるのは、外國人が見ると佝僂の樣だと評しますし……、又日本服固有の美は襟の所と袂に在るのに一概に捨てるのも惜いやうです。實に六ケしいもので、內外の人が見て、好いと申すので無ければ折衷とは申されませんからネ。私も種々の會や自分の學校へ出ます時は必ず袴を穿きます。

▲衣服の制限

交際社會へ妻を出して見聞を廣めることは至極宜いけれども、好い着物を着たがつて着物の競爭をするので、迚も其費用に堪へられぬから先づ〱家內に閉居させて置きます、などと申すことを度々耳に致しますが、其都度實に情けない事と歎息して居ります。斯る泣言を道理と思ふ夫も夫ですけれども、其細君の定見のないには實に困つたものと思ひます。彼人が縮緬の着物を着て居るから自分も着なければ肩身が狹い、彼人が丸帶を締めて居るから自分も片合の帶では恥かしい、などと云ふやうな考を持て居る方が隨分御坐います。これが爲めに婦人會などへ出席する人の少ない所から、已むを得ず衣服に制限を立てゝ、綿服に限るとか申す樣なことを主張する方も往々御坐いますけれども、

衣服は實用ばかりでなく装飾にも必要な物ですから、餘裕のある着飾ることの出來る、又それの好きな人は對に應じて着飾つて宜からうと思ひます。どうせ着飾ることの好きな、所謂衣裳道樂な人は着る折がなくとも種々拵らへて簞笥の中に仕舞つて置く人さへ御坐いますのですから、前に申し上げました樣に着物に就て苦勞する人達は、其思想が幼稚で見識のないからの事で、自分は自分の身分相當の着物を着て何處へ出ても平氣で、此位の着物が自分の身分相當と濟して居るが宜しい、また或場合一家の都合では身分相當の着物を着ることの叶はぬ事も御坐いましやう。併し人は何と考へても評しても頓着なく、自分は自分の都合で斯る服装をして居ると、濟して居る位の見識は各々持て居りたいものと希望して居ります。其樣なれば、着物に費用のかゝる爲めに外出の出來ぬこともなく、着物の爲めに彼是いらぬ心配することもなく、安心して人中に出ることが出來ましやうと思ひます。さりとて餘り人並外れた風をして、目立つ樣でもなりません事は申すまでも無いことで御坐います。

▲束髪

一昨年と昨年娘の婚禮が續きました時、大禮だと存じて丸髷に結ひましたが、平常はモウこればかりで……、一躰束髪は極贊成で御坐います。併し前髪を大層ふくらしたり、二日も三日も持たせる樣な丁寧な事は致しません。毎朝必ずザッと結んで亂れない樣に致して置くばかりで御坐います。

▲衛生

私の父は女子に敎育が必要だと申し、母はこれが嫌ひで、兩親の意見が合ひませんでしたから、非常に困りました。それゆゑ私は十一の時に初めて小學校へ參りましたが、それまでは嚴しく敎へられたのは習字位で、其他は女今川とか百人一首の暗誦とか、ホントウの昔風に育てられたので御坐います。併し彼の時分は飛越すことが自由でしたから、十三で卒業致しました。小學時代に一番好きな學課は生理で御坐いまして、他日縁付くなら醫者にと存じました位、唯今以て衛生上

の注意だけは忽せに致しません故か、、餘り患ひました事は御坐いません。

▲食物

食物で御坐いますか、少しも構ひません。毎度親類の者たちに、面白い物も見ず、旨い物も食べずに居て何が樂みだらうと．申される程で、家中留守の折は下から拵えて出します物を何でも食いて居ります……。食物の御話は何となく賤しい様で、上品な話頭には餘り上りませぬのは昔からの習慣の様になつて居りますが、能く考へて見ると人生は衣食住と申して、食物は生活中の最も大切なものゝ一つで老幼共に美食を欲するは人情で御坐います。斯く食物は一家内の快樂を助けるものですから、家内中揃つて會食する夜會の時などは、出來るだけ心を用ゐて、一同の喜び樂んで賞味する樣にするのは、主婦の務むべき事と存じます。此頃は割烹の科目を各學校にも置き、又家々に於ても婦人方が教師を招で稽古をなさると申す事になりました。これは漸々衞生上、家内和樂上、食物の大切と云ふことを感じて來た爲であらうと存じます。當家なども、縱令總菜でも消化の惡い滋養にならぬ樣なものは成るべく用ゐない事にして、婢僕などの食物攝生にも能く注意して居ります爲ですか、皆當家に參りましてからは丈夫になつて、三年も四年も醫者を煩はす事は御坐いません、それで未だ出入り醫者も御坐いません。

▲小說

小說は好きませんが、西洋のか日本の歷史小說なら、隨分讀んで樂みます。併しドチラかと申せば、書見よりは實際に何か仕事を執る方が好きなので御坐います。

▲音樂

音樂も嫌ひの方ですけれども、小供などが能く土曜日の晩に參りまして、家族寄り合ひます時は餘り淋しいと存じて、出來ないオルガンを彈いて遊ばせます、賑かな事は嫌ひぢやァ御坐いません。

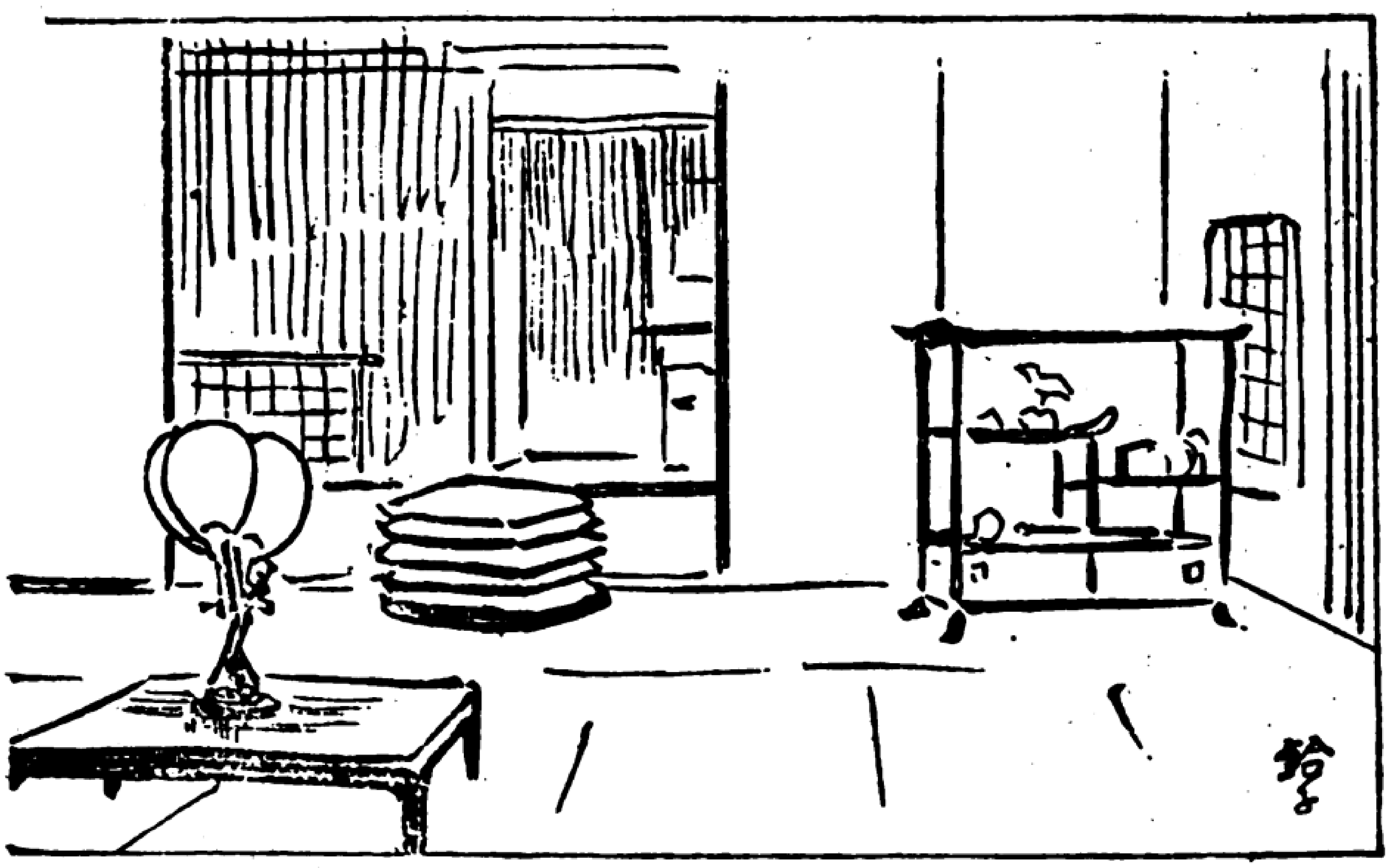
▲演劇

芝居はトンド好かない方で、御交際申す方々も私を別物にして居らつしやいます。唯彼のヒユースさんが御出の時、彼の方は大層芝居好きで、御一緒に見物致しました。

▲座敷

西洋間の方は仕方が御坐いませんから、種々陳べて置きますが、其他は唯わつさりと斯ういふ風に、取り片付て置くので御坐います。

此時夫人に願つて廊下を一つ隔てた廣間を拜見致しました。けれとも飾り付の法式を少しも辨へない記者の眼には、高尚優美と申すより外に何と申して宜しいか判りません。」が、夫人が斯道の奥義を極められたる事は、黒棚、置物の位置は申すも愚か、机上の團扇挿や積み重ねた座蒲團の据ゑ處まで、配合にソツの無いのでも判ると存じました、尚ほ奥の御茶室を拜見する時、左の通り記者の問に答へられました。



山脇家

▲茶と活花

茶道は私の祖父が大好で七歳から仕込で呉れましたから、薄茶の飲方ぐらゐは、何様か斯様か致したので御坐いますが、近來は用多の上に氣が忙しくなりまして、斯様な事はトント嫌ひになりました、ハイ御茶も花も石州で御坐いますが、活花と申しても種々に曲げるのは嫌ひで、天然の儘に挿して置くのが好きで御坐います。

▲行樂

娘達の居りました時分、日曜には能く家内中揃つて出掛けました。花も好きで櫻や藤なぞ見には行き

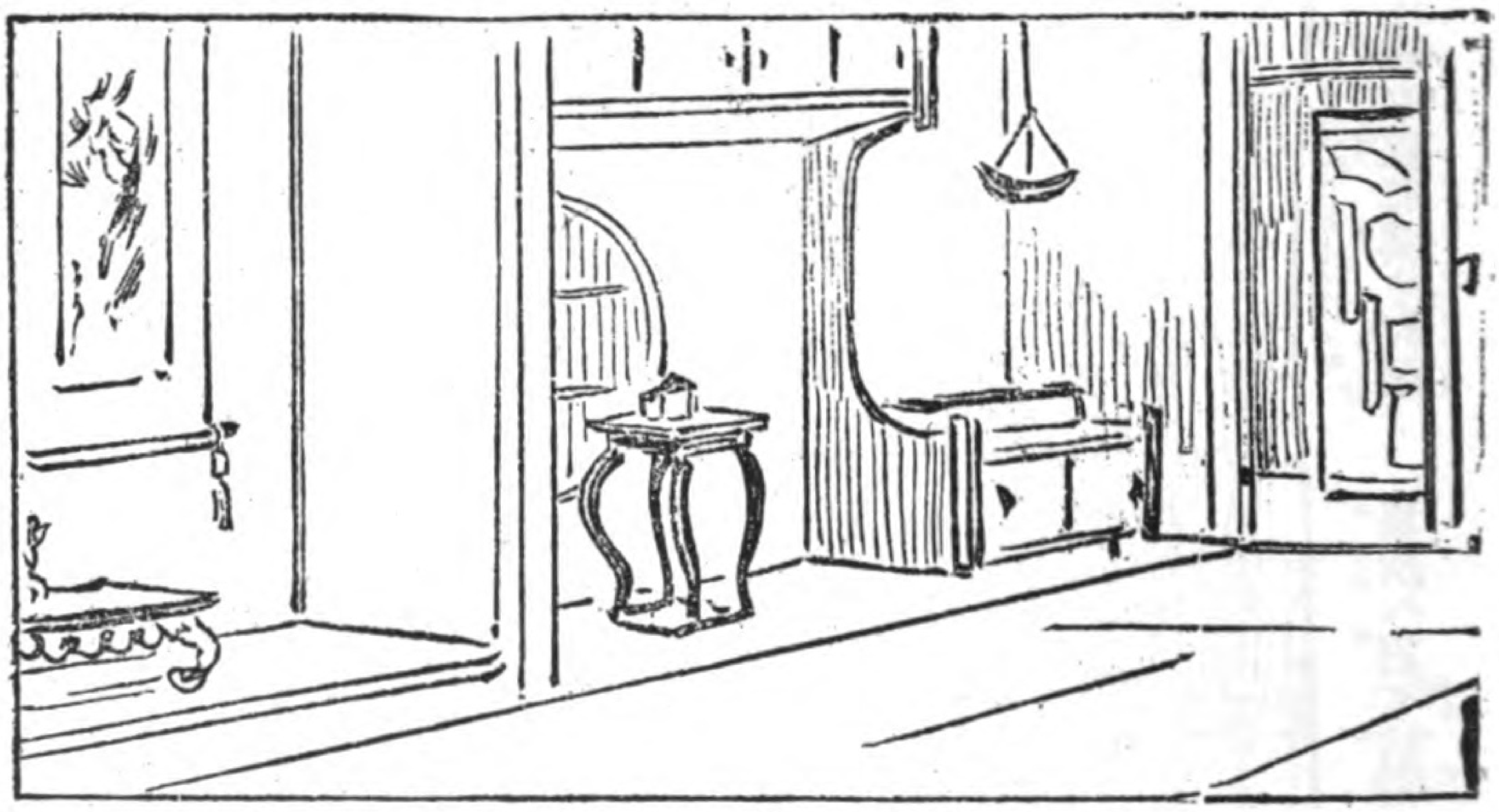
ますが、餘り人の出盛らない時分に參ります。塵埃を被りながら、醉漢共が惡戯しつゝ歩いてる傍を行くのは厭ですから……。

▲園藝

園藝と申す事は一切致しません。爪の間へ土が入るのが厭ですし、手先も荒れますので、絹物を扱ふ時と握手致す場合に不都合で御坐いますから……。斯うばかり申すとハイカラの樣ですが、天性土いぢりを好かないので御坐います。

▲編物

私の一番の嗜好と申しましたら、先づ編物で御坐いましやう、編物は人樣と御話致す間も止めずに致して居ります、編み貯めては慈善會へ出しますのが何より嬉し



の御座敷

くつて。……斯ういふ事は、若い時分親密に致しましたミセス、カークスさんが、始終他人の爲めに働いて居らつしやつたのを見て深く感心致し、如何か私も出來る位地になつたら彼樣いふ事がしたいと、そればかりは一日も忘れないので、何より又樂みなので御坐います。

▲召使

召使は皆長く居りまして、七八年になるのが御坐います。一人は今嫁入り先の心配を致して遣て居る所ですが、御承知の通り留守勝に致しますけれど、簞笥に錠などは下しませず。何も彼も其儘で出掛ますと、却て召使が責任を負つて大切に守つて呉れますから、紛失

物の致した例は一度もありません。小言など申すのは大嫌ひですが、皆善く働いて呉れて仕合で御坐います。

▲會話　婦人に會話の熟練がないと、男子に眞正の樂みを與ることが出來ないで、折角の教育も結婚してからチヨツトも役に立ず、遂には交際の席へ不都合な婦人が出て調子を合せると申す様な風に爲り、誠に殘念だと存じまして、今度教育會に校舎が立ちましたら、是非この練習を始めて見たいと考へて居ります。



家庭に於けろ山脇夫人

初は少し年を取つた奥さん方からが宜しからうと思ひます。毎度出る話で御坐いますが、英國が未だ進まない日本位の程度の時分に、或紳士の妻が夫に隱れて、交際の場所へ出て居りましたが、後に其紳士が病氣の時、妻

が傍で樣々な面白い話を爲て慰めたので、夫は大層喜んで、如何して其樣な話を覺えたかと尋ねましたら、實はこれ〳〵と打明けましたさうで、夫はそれから婦人交際の必要を感じ、何處の會へも妻を出して、成るべく有益な話を聽かせる樣に致しましたとか。日本でも何卒婦人が會話の熟練を得るやうにしたいものです。此婦人ならばと見込んで結婚しても、新婚旅行なぞに談話が無くつて困るさうです。例へば汽車の中で、彼の山は何、向ふの川は何、又此處は何樣な歷史のある處かと云ふ樣な事を男子が尋ねましても全然藁人形と同じで默つてばかり居りますから、男子が落膽するのですと。一概に左樣ばかりでも御坐いますまいが、何にしても折角受けた立派な敎育が活用しませんのは殘念な次第で御坐います。

夫人の御話は、一々興味深く感じられ、御暇申し上げて立出る時、御庭の風流な四阿を拜見して、月には嘸と存じました。

天野瀧子夫人

夫人は舊幕臣吉川學友氏の長女にして慶應二年に生れ明治十八年法學博士天野爲之氏に嫁す其和歌に長ぜるは一世に識認せらる

九段の燈明臺を横に見て、もちの木坂を廻つた處、石階十餘段を上つて法學博士天野爲之氏の御門あり、御玄關より伺ひ、河骨を活けられた眞正面の應接室の側から御二階に導かれました。此御二階は却々見晴しの好い御座敷で、飯田町通り一帶は眼下に眺め得べく、近くは小石川、神田、遠くは本郷、日本橋區の一部までが一目の中に集り、御欄干に頭を出して居る松の背後から砲兵工廠の煙がユツタリ直線に立ち騰るのが烽煙のやうで、限り無く壯快に感じました。西側の御床の間には紫檀の歌机を置かれ、肅親王の肉筆なる對幅、一つには「脫俗書成㆓一家法㆒」他の一つには「寫生卷有㆓四時春㆒」とあるを掛けられ、北側の壁には御能の面を掛けられてある外は、十疊の御座敷が淡雅淸潔に片付けられてありますが、丹色難波簾の熱鬧は靜中の動と感服しつゝある所へ、階下に優しい御聲で

「わの河骨をお棄てなさいよ」と命ぜられながら滑らかな段階子を上り來られ丁寧に記者を上座に推進められし夫人は、紺上布の帷子に御納戸色支那繻子と黒繻子の晝夜帯を結ばれ、前髪の細い根の落着いた丸髷に金無地の櫛笄を挿され、伏目勝の優形の御物腰は沈厚で眞面目で御遠慮勝のやうに見受けましたが、記者の唐突な質問を一々スラスラと淀みなく御答へ下され、御趣味の御發表に毫も垣を設かれず、痒い處に手の屆くやうに御話し成されたのは、記者が深く愉快に感じた所で御坐います。

▲和歌

中島歌子さんへ參りました時分は隨分凝りましたもので、チヨツト道端の石が轉がつても直に考へると云ふ樣で御坐いました、ですから見るもの聞くもの皆な歌の方へ引込んで居りましたが、此方へ參つてからは、斯樣な事ばかり考へて居つては家事を治めることが出來ないと存じて全然止めました。兩三年前からは子供も漸と成長致して少々暇も出來ましたのでポツ〳〵始めましたが、一度中絶しましたものは氣拔けが致したやうで少しも出來ません、一つは家事にかまける故で以前の通りの頭腦に參らないのでせう。旅行中などユツクリした折なぞは考へるのも樂みの一つですが、下手の横好で……却々實物を見て考へ付くと申すのは、餘程慣れた方で御坐いませんと六ケかしう御坐いますネ。それに私なぞは中島さんで題を戴いて稽古致したものですから、題に縋りませんでは當がない樣で何ですか……。左樣ですネ、歌筵などの時は題で仕込まれた方が便利で御坐いませう。中島さんでは餘り澤山の歌書は讀ませませんが、昔の名歌だけは暗誦する位に讀むが可いと申されました。

▲新聞雜誌

新聞は讀賣、報知、日本、時事、日々、萬朝など參りますが、大概毎日殘らず讀で居ります、論說でも小說でも悉皆一通りは見ますので、これは一日のうちの仕事の一つに致して御坐います。雜誌類は方々から戴きますが、これも成るたけ殘らず見るやうに心懸けて居

ります。重な物は太陽、太平洋、實業之日本、實業時論なぞで……ハイ何處も此處も讀みますが、專門家の講義と申すやうな種類の分には、數字が澤山で頭腦がゴチャ〳〵致しますから、覺えて居難う御坐います。讀で樂みなのは名士の論說とか、人物月旦とかで御坐いますネ。解りも致さない癖に生意氣のやうですが、何でも讀むのが好きでありますのに一つには主人も忙しい身躰で如何しても讀物の暇が少う御坐いますから、覺えて居つたら何かの參考にもならうかと存じて、一通りは役のやうに致して讀みますので……時として話相手になるのに都合が好い場合も御坐いますし、又子供達の質問に答へるのにチョイ〳〵便利の事も御坐います。



天野博士夫人

▲小說雜書

以前は隨分何と云ふとなしに澤山の本を讀んだもので御坐います。馬琴のは隨分宜しう御坐いますが、其中でも先づ八犬傳だの夢想兵衛なぞは面白いと存じました。八犬傳も終りの方になると、餘り錯雜して何ですか興が少くなりますが、發端の趣向は面白いもので、馬鹿々々しいとは存じながらも能くもマア斯樣なに引證したものだと感心して居つたのです。私の一番好なのは小說の中でも歷史物

で御座います。歴史物ならば日本のは申すまでもなく漢楚軍談、三國誌の種類でも西洋の飜譯物でも何でも極好なので御座います。近頃は用事も多いので小說類は見ませんし、此頃のー、やれた小說は餘り宅へ取寄せません。又昔の草雙紙的のは娘共に見せませんのです。御伽噺なぞは時々子供が取つて參りますが、其樣な物までチヨット讀んで見ますよ、ホントウに讀むことは好きで〳〵……、ハイ隨分多感な性質ですから、身が入るので御座いましやう。

▲演劇

子供に見せられませんから、十八年以來芝居を覗いたとも御座いません。先日築地まで病人の見舞に參つた時、歌舞伎座の前を通りまして初めて座の規模を見ましたと云ふので笑はれましたので御座います。以前は極芝居好で、代り目〳〵には殆ど缺さず新富へ參りました。私の芝居見物で最も深く記臆してゐる狂言は黑田騷動で御座いました、彼の時は菊五郎の紅葉上人、彥三郎の栗山大膳で、オヤ貴方も御覽でしたか、紅葉の間のタチで大膳が主水に意見致すところは實に好う御座いましたネ、それから助高屋が未だ訥升時分でお秀の方、黑田の殿樣がタシカ宗十郎だと存じましたが……ハア左樣〳〵左團次でしたつけか、彥三や仲鶴はホントウに名人で御座いましたネ。私は總て世話狂言より時代物が好きですが、一体に殘酷なところは嫌ひで御座います。見巧者な方は世話物がお好ですが、私は餘り面白く感じません、何ですか現在の儘を目の前で致す樣で……。

▲音樂

洋樂は結構で御座いますが、私は耳が御座いませんので……、琴は生田の方で山室に習ひました、山田は賑かで當節流行で御座いますが、未だ善く伺つたとが御座いません。併し大槪唄なぞは似て居る樣ですネ、琴は自分で致すのも好で御座いますが、三味線は致しません、唯だ上手の方がなさるのを伺ふのは大好で長唄の勸進帳なぞ實に宜しう御座います事、あの芝居の出語りで大薩摩を彈かれますと、氣が晴れ〳〵致しま

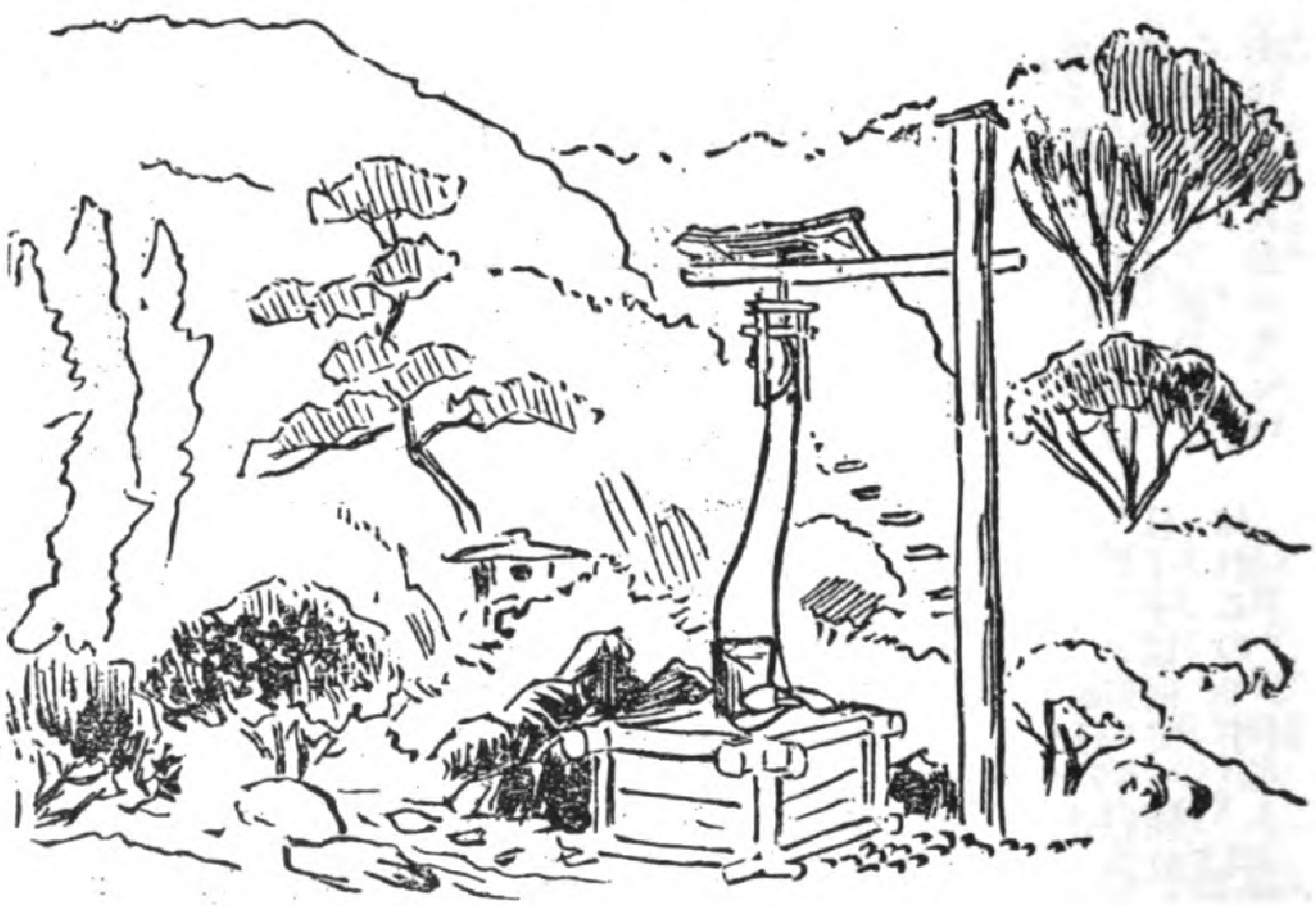
す。俗曲のうち一番好なのは義太夫で、調子を合せる音を聴いてもゾッと致すほど好いので御座います、但大嫌ひなのは新内で御座います、

▲謠曲

主人が能の方に熱心で寶生流を少し遣りますので、私も一層好きになりました、當節は御婦人の間にも大分行なはれて、隨分小皷など上手になさる方がわります。

▲書畫骨董

自分には出來ませんが、書畫共に拜見致すのは結構で御座います。畫は浮世繪も文人畫も好きですが、何流でも餘りコッテリとした極彩色物より



天野博士の築山

淡泊な墨畫が宜と存じます。骨董は主人が好きで財政さへ許せば深入り致したい方ですが、月謝が高う御座いますから如何もホヽヽ、私も博物館や美術展覽會の參考品なぞを見ますのが實に樂みなので御座います。

▲花

花は活けて樂んだり、庭の植木をいぢつたり眺めたり致すのが、一日の中の生命で御座います。餘り氣を揉んで、いぢり壞します……何の花が一番好かと御尋ねになりましても、何れが好いと申されませんチ、櫻は櫻で好し牡丹は牡丹で好し皆それ〴〵に風情を

備へて居りますから。一躰花と云ふものは時候に善く釣合つて咲き出るには感心致しますネ、寒い時分には梅の凛々しいのが似合ひますし、暖かく陽氣になつた頃に櫻が咲いて長閑な人心に適ひますし、夏は河骨や澤潟のやうな水物がアツサリと伸々して如何に涼しさを添へますでせう。それから萩桔梗などは丁度シンミリと優しい秋に釣り合ひますが、若し炎暑の最中に櫻のやうなコツテリした物が咲き亂れましたなら、如何に櫻でも名花とは稱へますまいと思ひます。其樣な加減が致して私は一番躑躅を好きません、彼花は少し暑くなつてから眞赤な花が咲く故で、くどい感じが致すのでせうか、花のない樹木類も總躰好で、庭木なぞ何れかと申せば、天然の儘が宜しう御座いますが、庭は又掃き清めたいので御座います。

▲動物

猫よりは犬が好きですし、蟲類の聲を聽くのも好きですが、總躰植物に較べると趣味が御座いません。

▲旅行

主人は鎌倉好きで毎年夏は參ります。私は海へ入つたことは御座いませんが、海の岸で眺めて居りますと終日でも飽きません、變り行く雲の色合や曳き上げてある漁船の形から漁夫の姿まで一々面白く感じまして。……日光へも一度參りまして、佳い處だとは存じましたが、産後まだ身躰の衰弱つて居る時に病人の世話旁々參つたので、鎌倉ほどに樂しく存じませんでした、風景と申すものは自分の身躰の加減の良否に因つて餘程違うものだと思ひますよ。花見には向島へは參りませんが、上野だの飛鳥山なぞへ出掛けます。旅行はホントウに樂みなもので畦道を農夫が鍬をかついて歩いて居る處なぞ見るとゾツとするほど愉快で御座います。其樣に好きでありながら、チヨツト踏み出すのがオツクウで。東京者の癖に東京を能く存じないのです。

▲江戸子

江戸子は何でも開放しで、一方から見れば馬鹿とも言はれるのですが、其代り竹を割つたやうな氣質で御座

いますぞ。過日も宅へ參つた書生が東京人はペテンがわつて怖いなんて申しますから、私は默つて居れなくなつて、それは東京へ來て居る地方人を東京者と看做すのであらう、純粹の東京者は表裏のないが特質です、私を東京者と知て言つたのなら聞捨てにはならない、と叱り申して遣りました。

◎令孃方の學校

十八歳になります長女は、當年の春お茶の水の高等女學校を卒業致しまして、それから當人の望みで津田さんの英學塾へ通つて居りますが、當人は大層先生をお慕ひ申して居ります。次のは取つて十三になりまして、これも本年から女子學院へ遣しました。矢島さんも津田さんも。家族的の教育をなさいまして、私の望み通りな御方針で御座いますから、如何に安心か知れません、如何致しても一つの宗教を基礎となさつた方が善と存じますよ。末のは十歳で未だ番町小學校へ通つて居ります、……イエ樂みと申すより心配で御座いますが、皆自分だけの身始末は私に世話を燒せません。私は娘達を一番に優れた者に致したいとは望みませんが、何卒一家を治め子を敎へるに差支ない樣に、縱令淺くとも汎く學ばせたいと願つて居りましたが、兩人とも善い學校へ任せて滿足致して居ります。



對話中の天野夫人

▲裁縫

必要上から毎日怠らず致して居りますが、好きか嫌ひかと仰せあれば、好きでない方で、本を讀む方が樂みは深う御座います。

▲衣服髪飾

サツパリ趣味の無い方で、昔しから間にさへ合つて居れば搆ひません、一躰流行を趁ふのが嫌ひなので御座います。髪も不器用で束髪に結べませんから、丸髷にばかり致して居りますが、ついぞ合せ鏡を致したとが御座いません。併し束髪でお美くしい方を見ると束髪も好いと思ひ、島田でお立派な方を見ると島田も好いと思ひ、一向定つた嗜好が無いので御座います。

▲料理

一躰は食物に搆はない方で、お芋でも牛蒡でも有合せ物で澤山でしたが、主人が少し食物に高尚な方で、私も料理に就て心配致します故か、大層進化致して、弦齋さんの御作ぢやありませんが食道樂になつたつて皆と笑ふのです。尤も主人は御酒も煙草も戴きませんし、お菓子でも一個の唐饅頭を半分位しか戴きません。それで濃い御茶でも一杯飲めば充分なので、極行儀の良い方ですが、但一日の快樂は晩餐の食膳に在ると申す位で、取り合せ物にいろ／＼考が入るので御座います。私も日々の料理方に困りますので、西洋料理も少しばかり稽古致して見ましたが、全く日本料理より經濟で時間も費りませんネ、畢竟原料は高いやうでも、附け味が入らないのでせう。西洋料理の附味は先ア鹽と胡椒位で、脂肪もラードを用ゐますと餘り費りません、可笑しいお話を致すやうですが、ラードは一罐三斤入が八十錢で、宅など四五人づゝの見當に致して一月一罐あれば充分で御座います。日本料理は少し氣取つて致すには、鰹節、味醂、砂糖などの類が、隨分入りますのに、時として二三ケ所位に火を起すので、炭が大層違ひます。それに西洋料理は貯へ置きが利きまして、スープなぞは拵へて時の經つたのを良いとしてありますが、日本の御吸物なぞは爾うは參りません、餘程拵へて出す時間の工合も六かしく、少し複雜た料

理の時は、四時(午後)頃から女共に準備を致させて、それから私が參つて調へますが、丁度六時の膳に上るやうな都合で御坐いまゝ。併し日本の方は料理致しながら、此鹽燒に何を添えやうか、此照燒に何を添えやうかと、衞生上からも躰裁上からも酸い物甘い物の工夫を凝らすのが、出來ない癖に又樂みで御坐います。一躰日本料理はツマが手際なのですネ、私が赤堀さんへ初めて稽古に出ました時、丁度其日は大獻立の時で、口取に鯉ごく、鯉の洗なぞでしたが、此あらひは大根を細く長く剝いて皿の上へ瀧の形に拵へ、鯉の身を處處に置いて瀧上りの趣に仕組んだのですが、私は其大根を拵へさせられて困り切りましたから、一日だけで止て了ひました。如何も先生の御手際の巧い事と申したら、櫻や牡丹の形を皆庖刀でお作りですが、實に造作なく見事に出來ますネ。私自身が料理で苦みますから、娘共には此頃會席の稽古を始めさせ、昨日(九月六日)も其稽古日で私も終日マゴ〜手傳ひましたが、日本人は食物に就て衞生上の理窟が判らない抔と申しますけれども、會席の料理など氣を付けて見ますと却々自然と法に適つたものだと思ひます。金柑、九年母などの酸味、よせ物などの甘味、薑、葵などの辛味、此うちの何れかを魚類に取合せるのは、消化にも滋養にも有効で、風味の調和配合が如何にも巧みなものですネ、昔から理窟は知らないでも、自ら理窟に適つて居るものだとツク〜感心致すので御坐います。

▲禪道

夫人は記者の住所を問かれて、

それでは靑松寺の御近邊でゐらつしやいますか、私は月に一度彼寺へ參つて元峰上人の禪談を聽きますが、普通の說敎のやうに地獄極樂なぞの話は御坐いませんネ。先達ての說敎は頓死幸福論で御坐いまして、私の豫ての希望と一致しましたから大層面白う御坐いました。私は平常爾う思つて居ます、人間は長病を致すと世話する人達に迷惑を掛けるばかりでなく、自づと僻みが起つて大切な覺悟が亂れますから、成るべくは働けるだけ働いて頓死致したいと。元峰上人は私の

希望通りを御說敎なさいましたのです。

・夫人の趣味は、天然、人事、料理、藝術、文學、宗敎其他に涉り、其眼孔玲瓏透徹、微を顯はし細を穿たれて居るので、記者は幾度か膝の進むを禁じ得ませんで御坐いました。記者が長坐を謝て坐を離れ御玄關へ出ました時、應接間の河骨が美事な巴蘭に活け變へられてありました。

正誤　前號二六頁「今息の日本海一周」は「旅行」の次へ入るべきもの、三〇頁「一家團欒の樂」は「座敷の飾付」より前に入るべきもの

女子と體育

▲體格は遺傳　體格の大小が遺傳に由るのは自然の則規であつて日本人は總じて體が小さいからそれに生れる小供もやはり小さい、米國人などは總じて體が大きいから生れる小供もやはり大きい、が其の上は食衣住の關係及び衞生上の關係が體育上に甚だ影響する、第一衣類に就て云へば西洋服を着た者が日本服を着ると體が不格になつたやうで體に締がないのみならず、川のない袂や大きな帶で肩が下り胸が迫つて肺に甚だ宜くない、で息を吸ふにも充分に空氣が肺に入らないので中が掃除されないから多く肺を傷ふ、また近頃ろ女學生は皆な袴を用ふるが袴の紐を息の出來ない程締めて居る、袴を着るは總ての方面から好い事であるが紐を堅く締るは誠に好くないからなるべく緩く締て頂きたい。

▲米國の子供　米國の小供の服は甚だ簡單で締る所などは何にもなく至極寛かで體の發育に甚だ適當である、且つ衣類は甚た粗末で十二三の娘なぞでも外出には教會に行く時の衣物が、一枚しかない、家で着るものは多くは木棉で幾度も洗濯が出來自由に運動されるやうになつて居る。

▲食物は好い　米國では食物には大變注意して上流も中流も畢竟一で、從つて日本に比較すれば衣類に要するよりは食物の方が多い、また小供が餘程健啖で十才の小供が自分等より遙か餘分に食する併し運動が十分で消化が好いから胃病杯は更にない、それが日本は全で反對で食物よりは衣物の方が遙かに贅澤で食物は極めて粗末のやうに思ふ尤とも食物の粗末なのは經濟上の關係もあるでせうが、一方衣類の方に大變贅澤であるから此の積弊も〳〵ある衣類の方を米國人のやうに外行は一枚か二枚に節減してそれを食物の方へ廻したら必ずしも出來ない事ではなからうと思ひます且つ生徒の辨當など極めて僅かなもので米國の小供なら五つ位やらなければ滿足しない、日本の處女なぞは大食すると下品になるとかいつて強いて小食させる、是は體育上甚だ好くないから何か女子は遠慮をやめて出來るだけ大食し消化さして健全な國民を作つて頂きたいものであります。

▲家屋に就て　それから家屋であるが西洋の家屋で一番快いのは下水及排泄物は宛も水道の如き機關に據て綺麗に取除かれて屋内には寸時止つて居ない、であるから排泄物から傳染する赤痢の如き自分の居る間一度も聞た事がない誠に羨むべきであるが日本今日の狀態では到底仕方がない、只成るべく衞生に氣を付て頂たいのであります。

人を遣ふ秘訣

翠香女史

昔より人を遣ふは苦をつかふ也と云へり、身体を勞せぬ人は心を勞すべし、心勞なき人は身を勞役に遣はるる是天則にして二をかす事なき理なり。もし心勞せずして思ひの儘に人を使役すれば必ず恨み、譏られて快よく遣はるゝ者あらず。何事かある時主の爲を思はず、私欲を専らとして背きはなるゝ也。惣じて雇人は常に家に在て日々の事を執るなれば、男女に拘はらず主公よりも主婦の方に關係多ければ、井戸端の會議にも先銘々に主婦の噂をおもにいふもの也、譬へは主公は癇亢くて氣六ヶ敷き人にても、主婦克これを取廻して雇人等が誤ちをも程よく彌縫ひ――慈悲を専らとして撫育に勤むれば下人克懐きて長く仕ふるもの也、雇人にとりては主婦の無情程つとめつらき物はあらず、されは雇人の居つかぬと季を重ぬるとは専ら主婦の如何にあり、雇人のしば〳〵出替りするは其家の不德を顯はし、主婦の耻辱となるなれは、常に克注意して、我身を抓りて他の痛さを思ひやり、雇人等が勤よき樣に考へて夏の炎天、冬の寒夜、又風雨の烈しき折等は萬止を得ざる急用の外、成べく使に出さず、屋外の用に遣はざる樣にし、朝例刻より早く起したる日は夜も又早く寢させ、不時の出來事ありて克働らきたる者には褒賞を與へ、平日萬事の手順を定めて物事急激にならぬ樣靜に爲さすれば、自ら誤ちすくなかるへし、少しの誤ちは恕して咎めず、瑣細の事はみぬふり聞かぬ貌して咎めずと雖、しかも其事をは克知りゐると其者の心つく樣に仕向くれは底氣味わるくて兎角いひ譯などするを能程に聞流して、深くは追窮せず、其うちに何か

よき事の有る時必それを賞めていつも斯せよ、先日の事は全く心得違せしならむなど和らかにいへば、其時强く叱るよりもこたへて、心に耻ぢて、わしき事も改むるもの也。寛大なる物から上下の行儀を正敷して、僕婢を友の如く狎しむべからず、惠むべき物は惜まず與へ、誡むべきは屹といひ聞かせて、恩威并び行はるれば家政よく整ひ治まるべし。

▲上手と下手とは少しの心遣ひにあり

○雇人にもさま〴〵あれど下婢となる者は大方は無教育者にして幼少の時一二年も小學校へ行きたる位が上の部也、されば概して物の理を知らず、甚敷は一字一點をも讀み得ぬ者さへあり、性質さかしきも上智に非ざれば惡き方へ發達し易ければ、なか〴〵に愚にても正直なる方ましなるべし、されば僕婢は愚なる者と先思はざるべからず、相撲といへる宮嬪の百人一首中の一人言にも、上つ方は無理のたまふ物と思へば、我に恨みなし、下つ方は愚なる者と知れは我に怒なしといへり、此意を忘れざれは腹たつ事なかるべし、何事を命ずるにも克わかる樣にいひ聞かせ、物事の爲易きやうに仕向くべき也、無學の者に小六ケ敷詞學校などにていひ馴るれぬとて、洋語などは殊更なり又土地違の方言等はすべて通じ難く、或は此事彼事混交にいひては紛はしく才智ある者にても時に聞違へ間違へる事あり、況や愚者に於てをや、予さへ爲にくゝ困る事を强て爲させ、又は一の事をなし居る處へ又他事をいひ掛け、急激に追廻すべからず。愚なる者には何れより爲てよきかを惑ひて、夫も是も共に事はてず、不都合となる物也。使にやるにも土地不案内ならば町所番地家名を書付て自己よめずは人に問ひても知れ易かるべく、又口上にては間違ひ或は忘るゝ事もあれば、手狀を遣すべく、買物ならば一點がきに品物と價の知れたるは其定價を價の知れぬは凡是程を買べしと思ふだけ書つけてやるべし。間違へて後叱るより始より間違はぬ樣にして遣はすが得策也。惣じて惡き事を叱るより惡事の出來ぬ樣にして遣ひ廻すが主婦の伎倆人遣ひの上手といふ者也。

◎下人は懐け易く叛き易し、慈悲恩恵も適度あり、過分にするは宜からず、恩に慣るれは附上りして却て猥褻の事にも不足を云ふ樣になり行くもの也、とかく新參の時に惡癖のつかぬ樣にする事肝要なり、先其とるべき勤務は是々と嚴重に命令して爲さしめ、傍より助手傳ひ等すべからず。行儀と詞づかひの放逸にならぬ樣懇にをしへ仕込むへし。世間を渡りあるきて奉公なれたる者は寛大なれば有難しと怡べとも、初奉公所謂這出者は少し厳しきをよしとす、寛大なれは奉公はコンナ物と思ひて少し多忙事あれは大造に辛勞がるものなれば、始にはきびしく習はせる方双方の爲に宜き也、いかなる我儘者にても新參の時には主の言をよく聞くものなれば、始に注意すれば風儀よくなり始をおろそかにして惡癖付ぬれは次第に増長して改まり難し。

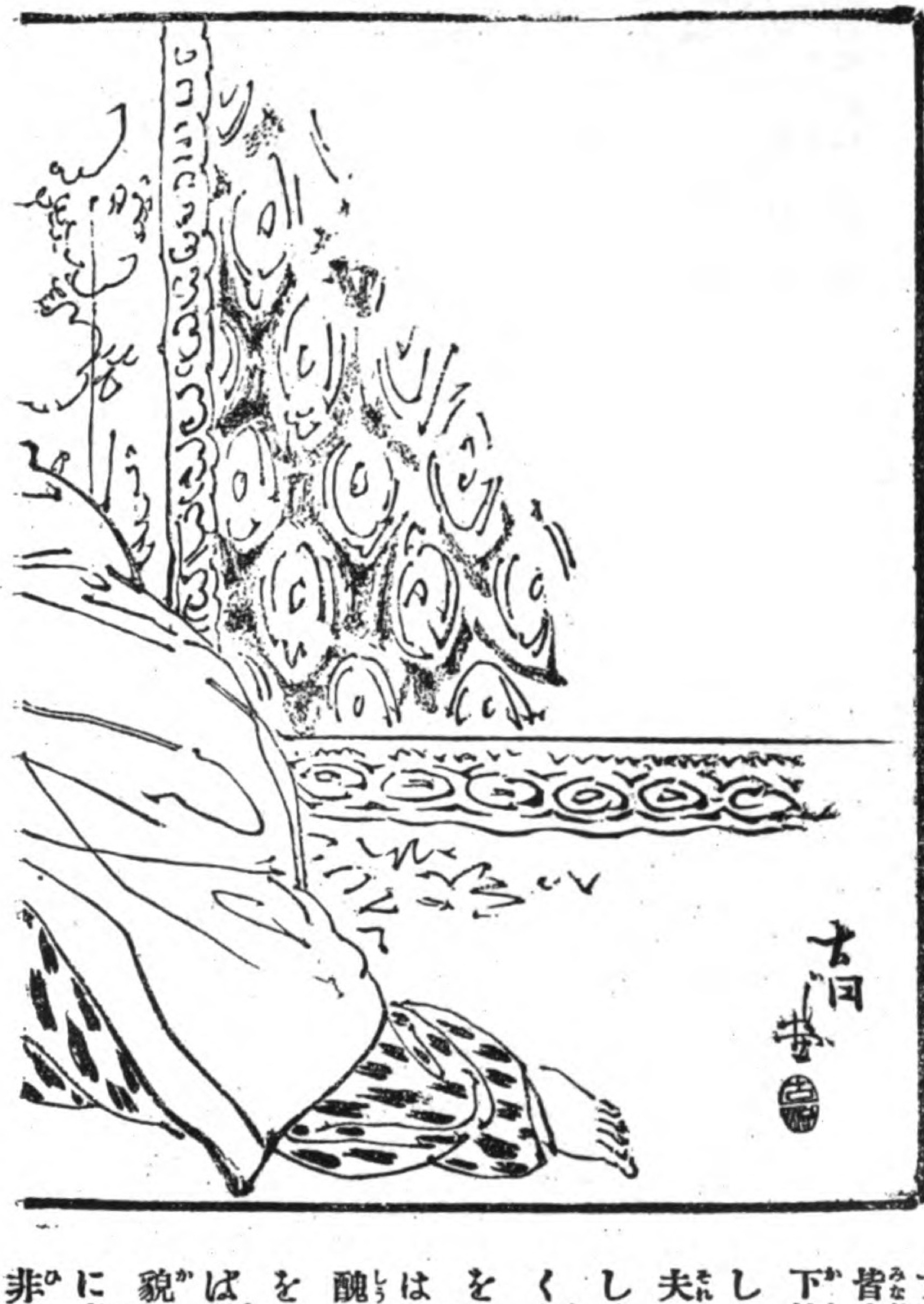
▲人を誡しむるには餘裕を置くべし

◎人を誡むるにひそかに云ふを宜とす我子なりとて少し年をとりたるは頭でなしに咬つけて聽く者にあらず況や義理ある中、姑の婦に於ける、主婦の雇人における、又た上役の屬僚に於ける總て同じ、先折を見計らひて他のなき處に呼よせて平日其者の能處を擧げて後扨彼の事は何故に爲しぞ、其許にも似合はぬ事よ、定めて何か思違へたるならむ抔と成べく言譯のできる樣に助け云ひて一通り謝罪したらば以後は愼むべしと言尠にいひ諭して濟すべし然るを人前にてはしたなく叱り罵りて恥をかゝすれば、我が誤ちとは知りながらも心中に恨み憤るは人情の常にて、却而悖らふ心を發し、其言を用ゐぬのみならず仇をさへなすに至る事昔今に例多かり恐るべく愼むべき事なり。

▲昔の御殿奉公と今の下婢

◎僕婢は總じて下等人種也、上流の微祿して不幸にも人に雇はるゝもなきには限らねど、そは稀にして概しては下等無教育の愚者多し、昔は智恵附け行儀見習ひなど、稱して富裕なる町家の女兒を大名今の華族の大奥へ年期を定めて奉公に出し、又地方の大地主の女兒も三都の豪家へ縁を求めて智恵つけ奉公に出し、給金など

は更に耳にもかけず却て里方より四季に產物を献じて主家の機嫌を窺がひ朋輩に物を贈りて女兒の爲に勤め願ら女兒が行儀を習ひ世上交際に馴て天晴の一婦人と成て歸るを俟つ事今の大學校卒業を俟に等し、是等の女兒家に歸れば忽ちに良緣ありて身修まり父母は安堵す是全く主家の御蔭也。生涯御恩を忘るべからずとて二季暑寒に信書を贈るなど其志の厚き事明治今日の人の絕て及ばぬ處、



元來裕福に育ちたる處女なれば其品性も卑からず何を敎ふるにも柔順にてよく家風に染まるが故に一兩年を經れば皆よき婦女と成たりし也、今の雇人は大に然らず富裕の女兒は皆女學校に登り下等の女子も少しく怜悧なるは夫々職業に從事し、只少しも多く金錢を得る事をのみ思ひ、或は耻をも顧みず醜業を爲ても金をだに多く得れば得々として誇貌なるあり、稀に事故ありて是非なく奉行する

も怜悧なるは却て一處に長く耐忍し居らず、主人も又遣ひにくく油斷のならぬ事などあり、寧愚直にして心の置けざるにしかず、されば方今の下婢は無敎育は勿論職業をもなし能はぬ程の不器用者は、下婢より外金錢を得る道なき者なりその者が奉公かせぎに出るなれば其目的は給料にありて他念なし、其心の卑き事元より也、愚鈍なるも其害なり、されば行儀等も餘りに強ていへば小六かしとて暇を乞ふ萬事を餘程まけて主婦の方より雇人の氣をとらざれば遣はるゝ者なし、盜心ある者は是非なけれどさる惡意なき限りはなるべく怨して遣ふべき也



▲三度の食事に就ての注意

◎三度の食をゆたかにして惜むべからず人の心は妙なる物にて澤山に宛がはるれば却て不斷より喰へず、喉〆をせらるれば一椀にても餘計に喰ひたくなる、食物の吝なるは何よりも人氣を損ず

るものにて、各々僻心を生じて隠喰をし、却て損失多くなるもの也。されば食物は家内上下同じきを最上とす、常は少々の差ありとも正月神祭大祝日等には一統に酒肴を呑喰せさせ、上下和合して歡を盡すべし、商家工場等多人數の處は殊に斯するを宜とす、扨平日麁末の番菜なりとも上下同じければ不足はいはれず、但し主人公老父母などの年來の習慣にて美味に非ざれば口腹に適はずとならば、それを家内一統にしては經濟の免さゝる處なれば是非なし、其人一人限り好みの魚肉を供して主婦及び兒等には決して相伴する事勿れ、其食時中は小兒を外へ遊びに出して美食を見せず、匂ひをも嗅しむべからず、たとひ老人の呼ばるゝとも事に托して小兒を傍へやるべからず、是眞に兒を愛する也、如何となれは辨へなき小兒に奢侈を敎へざらむが爲なり、一度にても相伴さすれば小兒は忽ちに味を〆て食時に他に出さんとしても否がり、食毎に相伴せむとて泣叨れば老人亦孫の愛におぼれて、却て母親を叱り抔していふ儘にわかち與ふれば、小兒は得たりと附上りて日毎食時を考へて第一番に馳至る、老人は如斯を怜悧としてます〳〵小兒と共に喰ずるを娯しむ、終には一人前の物二人前となる其入費は厭ふに足らずとするも、小兒は美味に習ひて番茶にてはたべられぬ悪癖つき、將來の爲甚宜からず、故に主公と老人は別として主婦は勿論他の家族は雇人同様の食とする時は誰も不足はいはれぬを、主人夫婦兒女等迄も食好みをしながら却て老父母及び家族雇人等に麁食せしむる如きは主婦たる者の尤愼むべき事なり。

▲人間萬事不如意を覺悟せよ

◎大家には必老女專女抔いふ役員ありて家政を司どり夫人は却而客人の如く主公の御機嫌を伺ひ來客の應接するの外は遊藝を翫びて家事は何がいかゝあるやも知らずよそ事の如くに光陰を送るあり結構といはゝ云ふべきも其老女專女なる者必しも忠實潔白の者のみに非ず、隨分私慾を逞しくする者多し、假令深しき悪意なき人にても、餘りに放任になる時は知らず〳〵の間に私心を生じて彼我共に爲にならず、されば夫

人たる者、役務は人になさしむとも決して心を弛す事なく、時々物事を調べ糺して放任する事なく、金銭の出納、衣類諸器物何にても其大元を取締り居て末をおぼらかに人に任せて取扱はしむべき也又家中の事大小となく克聴糺して勤るは賞し怠るを誡めて賞罰を明らかにすべし貴婦人たりとも女性はとかく量狹くて意に違へるを愛する甚敷、然らざるを憎むも又強く萬事依怙の沙汰となり易し、心を公平にもちて假令我心に適ひたりとも謂なきに物を與ふべからず、氣に逆らへばとて筋なき事を猥りに叱り疎むべからず、克思へ我身すら我心にも任せぬ事あり、況や他をや、一より十迄意の如く成べき筈はなきが世上の習ひなるぞや。

▲人の長短を知つて使ふ事

◎大家の婦人としては人を識るの明なくんば有べからず、人各々一得一失あり、其長を採りて短を恕すに非されば遣はるゝ者有べからず、譬は怜悧にして何をさせても氣轉の利く者は其心必狡猾にして油斷のならぬ者なり、然れば心を放さずして遣へば一廉の役に立つべし、頑固片意地なるも廉直律義にして出納を任すに安心なる者あり、懶惰浮薄の者人愛相よく接待掛りとなすに宜く、何にても一藝に秀たる者又遣ひ道あり、何をさせても不器用なれども無病壯健にして力あり、雜役に逐遣ふによき者あり、斯の如く何歟一ッの取得あらば其短をいはずして長ずる處に採用うれば役に立ずといふ者なし、駿馬の骨を買ひたる名醫泣男を扶持したる楠公も此理に外ならず、短をのみいふ時は幾何人置替ても心に適はず遣ふべき者終にある事なし。

▲詞遣を敎ふべき事

何方にても然れども殊に大家の僕婢の詞の歹きは其家の價値を貶すもの也、詞に三の別あり、主に向ひての詞、傍輩同士言、他家の人に向ひての詞是也、先主には敬ひて申上ぐべき事勿論也、同僚間にて主の事を旦那様奥様ドウ遊ばし、コウおつしやりなど云ふべく他家の人に向ひては大に同じからず、譬は使先又は玄關の取次、來客への挨拶には我が主の事にても必ず誰それと其名を呼捨にいふべき事を克をしへ置かざれば

常いひ馴たる儘に、私方の旦那様、奥様、坊ッチャン、孃様など他家の人には失敬とも何とも知らずに云ふもの也、使に行ての口上ならば誰がかやう申上ますと云ふべく、取次ならば今日は誰は不在、或は不快にて引籠り中失敬ながら御面談は御斷り、又は若御越わらば斯々申せと申つけ置かれました抔云ふべき也。又家主人の他家に在る時用事有てゆくには誰を一寸御呼出し下され度又は是を誰へ御渡し被下抔云ふべき也舊幕の頃武家にて弊藩寡君抔いひしも皆他に向ひて謙遜の言也、武家のみならず町家にても此詞遣ひの別正しく、今にても地方の大家には猶然る處多かるを、東京は近頃上流に成上り夫人の多き故にや召遣ひの詞迄心得たる人なしと見えて只尊大なるを貴人と思ふらむ召遣ひ迄虎の威を借る狐の如し、そこに至ては遉に舊華族方は今猶家憲亂れず婢僕迄も平民の我等の如きに向ひても失敬なる詞傲漫なる態度を爲す者なし然樣の事はとかく新華族出來星紳商に多し、主人は遉にそこ迄の立身する人とて何事も克辨へ居れと其夫人子女家族雇人等は威張ちらすをえらき事と心得たるが如し、使や取次の口の利ぶりにて其主人の御里大概推計らるゝ也。恥かしと思召さばチト御注意あれ、夫人たち。

◎中以下の細君としては下婢の外に小間遣ひの一人位在とも朝は第一番に起出でゝ手づから戸を開けて雇人を呼起すべし、自己は朝寢して雇人に早く起よといふとも起る者に非ず、買物は勿論自らし、掃除より庖厨の事又衣服の世話、洗濯、張物、其他一切の家事を擔任して自身先に立て夫々の差圖して爲さしめ、下婢は唯助手と思ひて水を汲ませ、物を運ぶ等の下働をなさしめ、何事にても餘り任すべからず、假令物の克出來る者にても雇人は替り易し、何時暇を乞も知れ難し我身平日携さはり居らざれは俄に物の勝手等違ひて困る事必わる也夕には干物張物等取入れさせ忘れて夜干すべからず、夜には其日の出納をしらべ、帳簿に記し置くを怠る勿れ、夜業に爲べき事有らば自己もして下婢にも爲させ、仕事のなき時は新聞雜誌中有益の事を撰みて讀聞かせ、或は講釋して物の道理をさとすべし

居睡りは雇人の常なれば用事なき時は見ゆるしおき、十時を人定の時といへば是限り寢につくを規則とし、又臨時に勞動多かりし日は例外として宵より寢るを許可すべし、而して主婦は最終に殘りて火の用心を注意し、戸〻りを改めて押入戸棚等の細目に隙ては無きか引窓を忘れてはなき歟、翌朝の準備は整へりやなと、家内一通見巡りて扨後枕につくべき也。是等の事を雇人に任せては不注意よりして種々の災ひ起るなれば、日夜に心を働かせて怠る勿れ、扨てこそ人を遣ふは苦を遣ふとは申なれ又主人他に出て歸りの遲き時は自己起居て、雇人は例刻に寢さすを宜とす、婢志ある者にて起居らむと云ふとも先は寢さす方よかるべし婢をてしおきて自己寢る如きは万々有べからさる事也。

▲電氣の洗濯女　各種の仕事に應用せられて世人に無上の便利を與へつゝある電氣は今や又洗濯にも應用せらるゝに至れり、匈牙利セエゲヤン市のジヨセフ、ナキイなる男は近頃電氣應用の洗濯機械を發明したりとのことなるが、此機械を用ゐて洗濯するときは電流其者が自然に石鹼の作用を起して汚點を掃除するが故に別に石鹼を使用するの必用なしと云ふ一時間に三百枚のナフキンを洗濯し得る價益ありとのことなり

家庭科學

理科應用家政二十四時

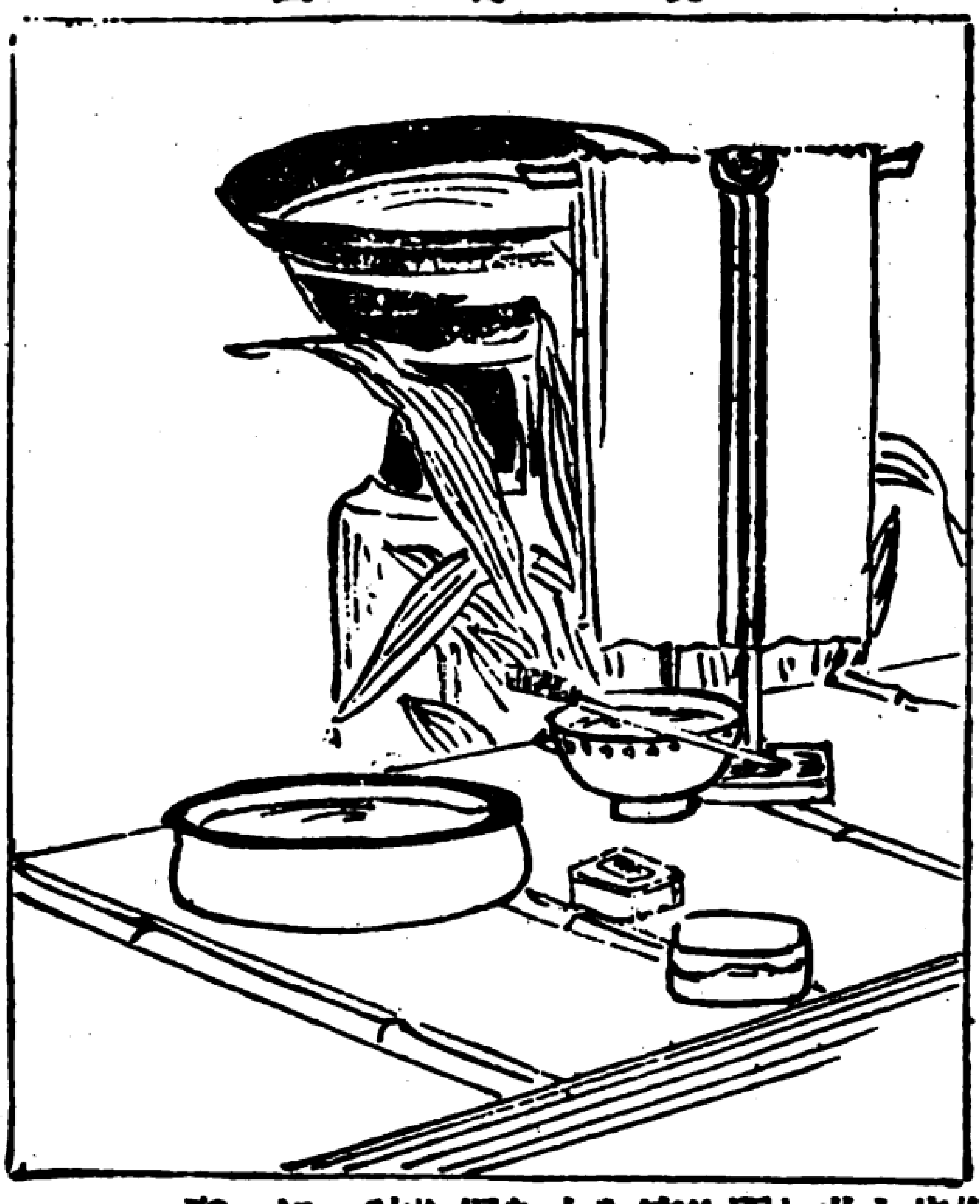
（午前五時より八時まで―其二）

河西天放

▲洗面―齒

御釜の下を焚き付けたら、楊子を取り上げる順序でございませう。一体齒といふものは食物を消化す機關の門戶で、食物は先づ齒で嚙み碎かれ、嚙む時其力ではぢき出される唾液を交せられ、御飯やパンの樣な澱粉質の物はその中にあるプチアリンといふ物の爲に幾分は消化れ易い甘味質の物に變り、それから胃腸へ入つて揉まれ、消化れるのですから、若し食物の嚙み碎きが不十分なら、唾液や胃腸の消化液の作用を滿足に受けることが出來ず、從つて血にも肉にもならずに、素通りしてしまふ分量ばかり多い、のはまだしも、胃腸

の中で饐え腐つて、病氣を起すことになるのは、皆様の十中八九は恐らくは既に親く御經驗のことゝ存じます。ですから、身体の健康を大切に思ふ人は、年寄になつても猶立派な揃つた歯でどんな煎豆でも、勝栗でも、ポリ〳〵やれるやう、若い時から歯の養生といふことを心掛くべきでございます。



洗面盤

齲歯の源因は色々ございます歯を釘抜や針金切りの代りに使つたり、御飯の中の砂を噛んだりする爲、歯の上被の琺瑯質を缺くこと、餘り熱い物餘り冷い物を食べて琺瑯質をひゞ割らせること（ランプの火を急に出したり、熱い火屋へ冷い水をかけたりして、火屋のひゞ割れると同じ道理。熱に對する物の延び縮みは琺瑯質とて同じことです）歯の内部の石灰質を溶すやうな酸い物を澤山食べること、それから、別けても腐り易い、醱酵さ易い、砂糖や、御飯粒や、肉の纖維などを、歯の間隙へ留めて置くこと、先づこれらが主なものです。そこで歯磨粉楊子を使ふ理由は第一此終りの源因を去つて、歯の質の腐れ込む心配を防ぐ爲、第二其時口中に生ずる臭氣を去る爲、第三歯を永く美しく保つ爲で、これらが胃の爲、肺の爲、禮儀の爲、容姿の爲に何れも至極大切と言はねばなりませぬ。

▲楊子歯磨粉

歯磨に使ふ楊子はあまり硬いのはいけませぬ、程よいのに、ザラ〳〵せない粉を付けて、内外から手柔かに、成るべく上下に擦るが宜しい。少しは歯齦に觸つても、決して心配にはなりませぬが、あまりひどく當ると、

歯齦を退却かせて、歯を大きく、歯の根を淺くする恐れがあるかも知れませぬ。歯磨粉のザラ〳〵するのは歯を傷めますから決して使つてはなりませぬ。普通の歯磨粉は、沈降炭酸石灰と言つて白土や白墨の粉の極細かいものが重な材料で、これに臙脂で色を付け、苦いキニーネや、食鹽や、樟脳、龍脳、薄荷、丁子油、菊花油などで味や、香氣を付けたものですから、御自身に譯もなく製作へられます。藥屋で原料を御買ひになつても安い物です。上等の白土を桶へ入れ、水を混せて粗い分を沈ませ、上の白水を他の桶へ移し、其の中の細かい粉を澱ませ、水を切つて乾し上げ、磨り砕けば直ぐに出來ます。御使用には此一品で十分です。香ひや味や色は無くとも差支は少しもありませぬ。

歯の養生



歯磨粉の原料に、片栗なり、馬鈴薯なり、久助なり、澱粉を三分一から半々位混せて結構です。練歯磨は極上等である石鹸に、石筆などに製へる滑石といふ石の粉、澱粉、炭酸石灰などを混せ、香や色や味を付けたものです。普通の歯磨粉は只器械的に不潔を擦り取るだけですが、練歯磨は石鹸の働きが入りますから、若し悪い質の物を使へば、口中を荒す恐れがあります。

歯を磨いて顔を御洗ひになる時、時間が許すなら、傳手に冷水で全身を拭くことは、健康上極めて望ましいことでございます。先づ肌を拔いで濡手拭で上半身を拭き、あとを乾いた西洋手拭で、ポカ〳〵する迄よく擦り、肩を入れて腰から下を同様

にする。此法を毎朝怠らずやれば、皮膚の彈力は增し加はり、臟腑、筋肉、血管の働きは強くなり、顔の色艶はよくなり、心清々しく、さつぱりして、年中風邪を引くことや、當節柄寢冷えなどの恐れは先づありますまい。尤も此法は寒くなつてから急に始めれば、却て風邪を引く恐れがありますから、暑い只今頃から始めるが宜しい。日一日皮膚が馴れて、寒中も平氣でやり通すことが出來ます。

▲石鹸

身体に使ふ石鹸は、買ひ求めの時氣を付けぬと、往々皮膚を荒す惡質物がございます。一体普通の堅石鹸は、動物や草木から取つた脂肪油類を、苛性ソーダといふ藥と煮て造へるもので、よく出來上つたものは、脂油でもなく、苛性ソーダでもない、全く別の石鹸といふ物になつて居ますから、脂油のネト〳〵もなく、苛性ソーダの灰汁ばくも無い譯ですが、製造の不十分な物は、此どちらか一方の分量が多過ぎるか、さもなくば其が不足で、兩方別々に入つて居ますから、ニチャ付かねば非常に苛い石鹸が脂垢を落す道理は、一つはこれの性質として、水に溶けて出來る粘り強い泡液が、器械的に脂垢を取つて行くのと、今一つは、これが水に溶ける時、そこに少しづゝ出來る苛性ソーダが、身体の脂垢と、更に一種の石鹸を造へて、身体から離れる、といふ次第ですから、石鹸の中に游離れて居る脂油があれば、垢を落すことが出來ぬのみか、却てそれが身体に粘り付いて不潔くなるし、石鹸の中に游離れて苛性ソーダが入つて居れば、垢はよく落ちるが、苛性ソーダは劇藥ですから、皮膚を損して、きめを荒すこと請合です。ですから石鹸を御買ひになる時は、此點に御注意が肝要です。それが爲に一番手輕な見分け方は、石鹸を一寸舌の先で嘗めて見

精頁齒磨粉



て、あまりピリヽと來ない、そして ネト〳〵しないのを擇ぶが宜しい。一つ三十錢五十錢出しても惡い質のがあり、一つ六七錢でも中々佳いのがありますから、此擇び方は至極大事です。原料の脂油と苛性ソーダはどんなによいのを使つても、石鹼一つ分で三錢とかゝる物ではなし、製造の入費とてもその通りで、高いのは、重に其中へ入れる香料の代價と、商人の儲けですから、垢を落す目的で石鹼を御買ひになるならば、成るべく質の佳い、成べく大きい、成るべく割安の物を擇ぶべきでございます若し良い香ひが欲しいならば別に薔薇油なり、ヴァイオレット油なり、御求めになるが御德用でございます。何でも價の高い程よいと思ふのは、折々馬鹿な損をする原由になります。



冷水摩擦

石鹼を造へる時、水を澤山含ませることが出來ます。そんなのは、いくら大くても柔軟で、乾し固めれば小く輕くなつてしまひます。貴い錢を拂つて水を買ふやうなことのないやう御注意申します。

以上化粧用の石鹼に就いて申上げましたが、洗濯用の石鹼とても同じ道理です。尤木綿布を洗ふ石鹼は、却て少しピリヽッと來る方が御德用かも知れませぬ。絹物に惡い石鹼は、炭酸ソーダ同樣大禁物でございますが、上等の石鹼なら、少しも差支ありませぬ。

▲御化粧

多くの若い御婦人方は、手水の時御化粧をなされませ

う。婦女の身嗜みといふことは、如何に竈の前に燻る方々にも勿論大切で、これによつて、婦人が特別に授つて居る美しい容姿に一段の美しさを加へ、自分の心に滿足を得、これによつて温かなる夫の愛情を増し、他人の敬愛を惹くのみならず、これが婦人の人に對する禮とも見られて居ります。只程よきといふことは何事にも大切ですから、此度を過して却つて反對の結果を見ないやうに注意が肝要でございます。

御化粧用の白粉は普通鉛で造へるもので、鉛は人の身体に毒になるものですから、あまり澤山白粉を使ふ人は、これが爲に中毒して、口が乾き、食道と胃が熱し、舌が荒れて、涎を垂らし、呼氣が臭く、吐氣があつて、頭痛がするといふやうな病氣をこしらへるのみならず、皮膚のきめが荒れて、生れ付きの美しい容姿を打壞すやうなことになるかも知れませぬ。ですから、若し澱粉質の害の無い白粉を手に入れることが出來ぬならば、平常の御化粧は薄化粧の、美しい膚の肉色を塗り潰さぬだけのところで置きたいものです。

石鹸の効用



鼻柱を特別に白くすれば、鼻の澤は割合黑く見えます。此黑いのは、高い鼻の陰影と見られますから、鼻を高く見せたければ、鼻柱を特に白く塗ります。白粉で顏の形を變へる道理は多くてゝにありますから、御化粧はよく自分の顏に敎はつてすべきです。

白粉に硫黃を燃した時の臭いガスや、卵の腐つて出來る臭いガスを當てれば、鉛は硫化鉛といふ黑い色のものに變ります。此道理によつて、白粉の顏に附木の硫

黄ガスを當てぬやう、硫黄質の温泉場へは、よく白粉を洗ひ落して行くやう御注意にならねばなりませぬ。白粉は鉛毒の恐れがありますが、紅は紅の花を灰汁水で採み出した色素ですから、毒にはなりませぬ。毒にはなりませぬがこれもあつさりの方が上品でございませう。特に寫眞でも採りに行かうといふ時に濃く付ければ、眞黒に寫つて醜うございます凡て物の色と寫眞の色とは、色の明るさが違ふもので、赤と黒は同じで、樺は少し明るく、黄、綠と明るさが増して青、紫は白と同じに寫りますですから、頬が赤ければ黒く焦げて寫り、白い衣裳に紫の帶は一面眞白の趣味の無い畫になり、青い襟は白襟に、赤い帶は黒繻子の地味に見えてしまひます。

御化粧



御嗜みが濟んで、髪に櫛を入れ、束髪なら一寸結ひ直し、これで人に見られても失禮のことも、品格を落すことも無いといふ段になつて、さて襷掛けで、手桶提げて、

▲水汲み

に出懸けるといふ順序になります。東京など水道工事の出來て居る都會では、此苦勞はありませぬが、一般には、重い釣瓶を上下せねばなりませぬので、これが御婦人方には丁度程よい運動で、時間に損するだけ、面倒苦勞をするだけ、手足の筋肉に肺心臟の彈力に得する勘定になると申すことが出來ませう。

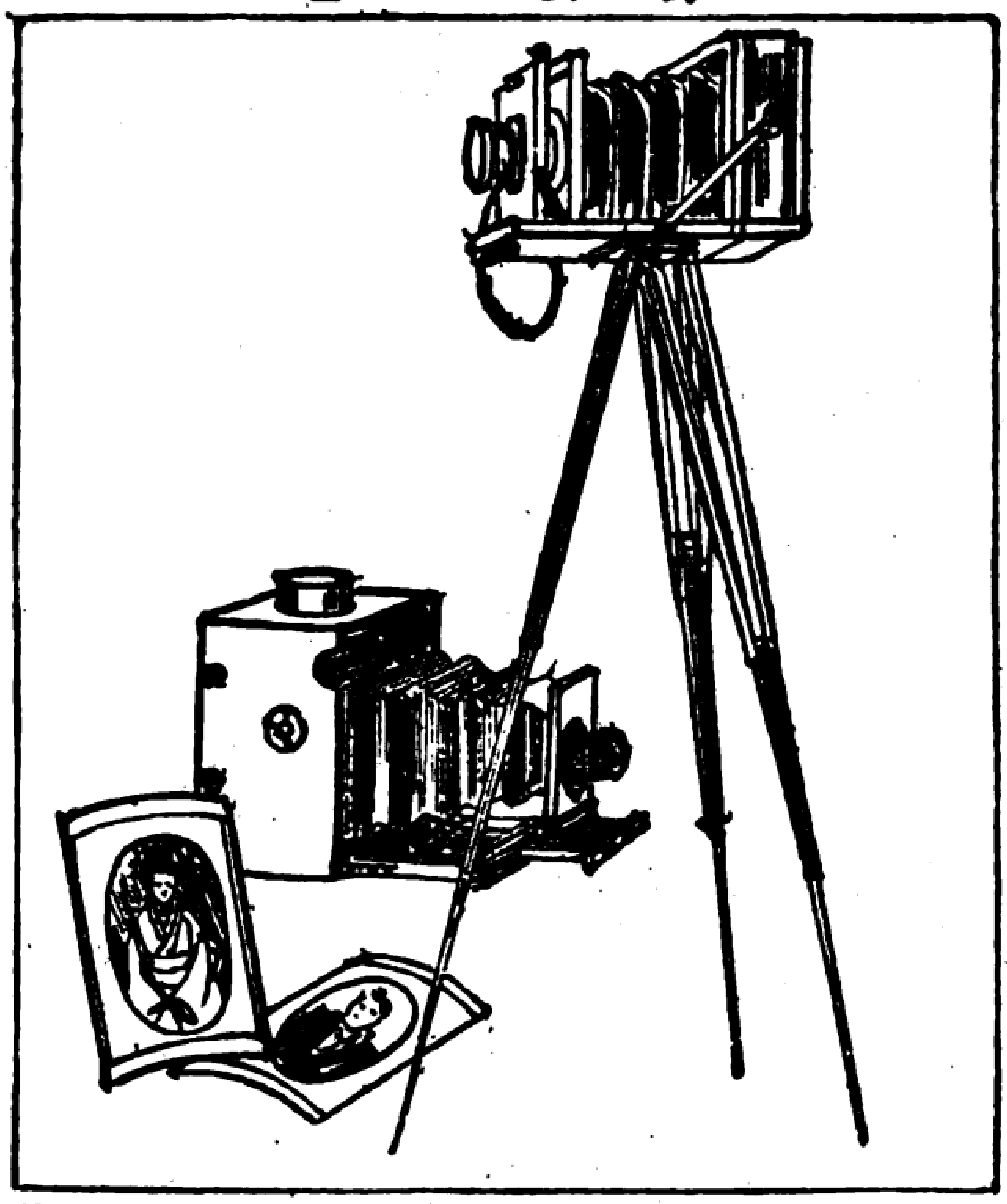
▲水の質

水について必ず注意すべきことは、水の質と分量でございます。水の質は、使ふ目的によつてそれ〴〵違ひませうが、先づ第一が飲用ですから、それに必要な條件を申述べて見ませう。

(イ)よく澄んで居て、生は勿論煮立てゝも匂ひの無いもの。若し匂ひがあるならば、多くは何か腐つた物が交つて居る證據で、用ふれば必ず身体に障ります。

(ロ)綺麗な白い皿へ少し汲み取つて、煮詰めて、殘つた滓を更に燒いて見て、黒く變るのは、水の中に動物質や植物質の不潔が交つて居る證據で、飲用には適しませぬ。便所や泥溜に近い井戸には、そこから色々の不潔物や病毒が浸み込む恐れが多うございますから、餘程氣を付けねばいけませぬ。

寫眞の器

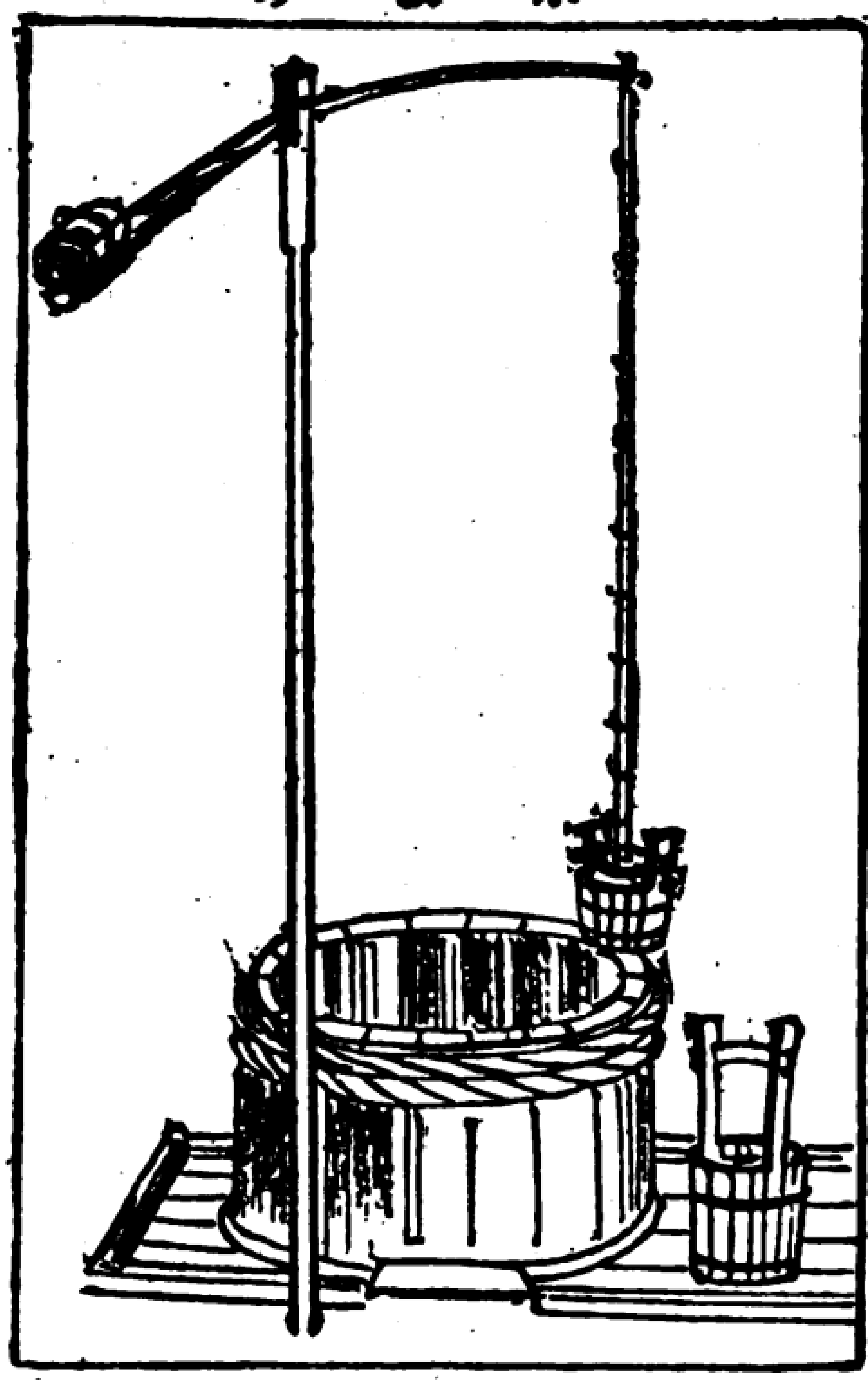


(ハ)餘り硬い水は身体に宜くありませぬ。水の硬いとは何の事か、水に重炭酸石灰石膏など、石灰質の物質を多く溶して持つて居るといふ意味で、水を煮立てれば、重炭酸石灰の方は、炭酸ガスと、炭酸石灰、即ち前に齒磨粉のところで言つた白土や石灰石と同じ物に分れ、ガスは出て、炭酸石灰は濁垢となつて沈澱みますが、石膏即ち硫酸石灰といふ物質の方は、煮立てれば猶よく溶けて沈澱みませぬから、煮たゞけでこれを去ることは出來ない井戸や河の水は、いづれも凡て此等や、食鹽や、鐵氣や、色々の物を溶して居る、故に、これが身体の爲に是非入用の物である、のみならず、あの冷てい水の味が、又溶けて居る此等の物質や、空氣、炭酸ガスなどの爲であるといふことは、人

の身体、特に骨には澤山の石灰質が要るといふでと、夾雜物の無い雪や、氷や、ランビキに懸けて取つた水は、腹に障るといふこと、煮冷した水は味が無いといふこと、炭酸水や、ラムネや、ビールの冷しい味は、全く其中に溶けて居るガスの爲であるといふことです、故に物を溶した水が飲料に適せぬといふ法はない。が、しかし物には凡て度といふことが大切で、白土や石膏を餘り多く持つて居る硬い水を久く用ひれば、つまり身体の害になるから、これは御注意あるべし。水の硬さは石鹸が利かぬ度合、湯垢の分量、皿へ取つて煮詰めて殘る殘滓の分量などを比べれば、大体は素人にも判斷が付きます。

(二)よい井戸水は年中大抵同じ温度でなければなりませぬ。それには井戸が十間以上、十五六間からの深さで、井戸側から浸水が無いやうにし無ければなりませぬ。俗に深い井戸水は夏は冷くなつて、冬は暖くなると言ひますが、それは間違ひで、淺い井戸水は夏冬の氣候に感じますが、凡十五六間からの井戸の水は、夏も冬も大抵四十六七度と定つて居て動きませぬ。四十六七度ですから、外の空氣が八十度以上になる夏は、比較上冷く感じませうし、外の空氣が三十度からに下る冬は、餘程暖く感じませう。それを疑ふ方は、寒暖計で試して御覧になれば、容易にわかります。此十五六間の深さは、日本などでは四季を通じて同じ温度の、恒温層といふ地層で、それより下層は、十間に一度程づゝ温くなるのですから、よし井戸の深さが三十間になつても、水は五十度とはなりませぬ。

水汲み



(ホ)河水を使ふ方は、上流に於いて、不潔のものや、病毒が入らないといふ、確かな信用がなければなりませぬ。これが河水の第一の條件です。赤痢、チブス、コレラなどの傳染病は、河に沿つて移り下るのが普通見る通り確かな事ですから、假令直接に此水を口に入れずとも、器の洗滌、其他にまで、細心い注意が必要です。凡そ此等の病毒は、目に見えぬ細かい生物が原因で、此等の生物は、水を煮立てれば死ぬるのが常ですから、仕方なしに疑ある河水を使はねばならぬ時は、必ず、一度煮立てゝ使ふことに定めるべきで、支那や臺灣の土人が、あの不潔な生活をして居ながら、傳染病にかゝらない一つの重な理由は、彼等は生水を口に入れないことに定めて居るからだと聞いて居ります。

水の目的が洗濯用なら、其條件は自然口に入れるのとは違ひます。洗濯に一番良いのは、先づ天水でせう。天水は自然の大ランビキで蒸し集めた純粹の水ですから、夾雜物が無く、從て石鹸の損がなく、布色を悪くする心配もありませぬ。大桶に天水を溜めて置いて、下のカランを捻つて分け取つて使ふやうになさるが宜しい。

天水の次に良いのは、永く池や沼へ溜つて居る、澄んだ腐水です。これはアンモニアのやうなアルカリ性の物質を澤山持つて居ますから、分けても絹や毛物には結構です。

井戸水よりは河水の方が軟かで洗濯に適します。それから、河水なり、井戸水なり、先づ煮て湯垢を澱ませ軟かにして使ふが宜しい。鐵氣のある水は布の色を悪くしますから、洗濯には向きませぬ。濁つた水は明礬を少し入れゝば澄みます。上澄を取つて御使ひなさい。洗濯に限らず、勝手に濁り水は、此法で澄して使ふがようございます。

親讓りの箸

有名なる米國の文豪ウエンデル、ホルムスが嘗て或る料理店に赴きたるとき傍の食卓に席を占め居る一少女が頻りに皿の中の食物を見詰め居るを見て親切に空腹なりやと問ひたるに少女は然りと答へたりさらば何故に其サンドウイツを食せざるやと重ねて問たるにフオークがなき故なりと云へり指はフオークより前にたれたるものにあらずやと云へば妾の指は然らずと答へたる由なり



季節總菜料理

手輕西洋料理

◎松茸めし

松茸は長さ一寸巾二三分程の薄さの短册に切り、之を汁のある樣に、醤油みりんと砂糖にて煮て、飯を通常の白飯に炊き、而してその飯を釜より飯櫃に移すときに、松茸と汁と共にかき交ぜるなり、之は飯に鹽氣なき故なり、又他の炊き方は、米を炊く時、水加減して醤油と味淋を注し鹽かげんして炊き而して前の如く松茸を鹽甘に煮たるものを、飯を移しながら交ぜるもよし。



◎松茸の芥子漬

笠を開かざる小さき松茸を擇りて、其土氣を去り能く洗ひて、其石突を切り捨て、鹽を加へて蒸煮になし、其鹽汁を冷して芥子をとき、之に松茸を漬ける事五六日、後松茸を取り出して、其芥子に麹を加へ、少しの醤油を和して能くかきまぜ、此中に再び松茸を漬け、蓋を密閉して空氣の流通よき所に置き、十四五日を經て後食すべし、但し置處よければ四五ヶ月間は貯ふることを得べし。

◎ぎせい豆腐

豆腐を布巾に入れて水氣を取り、それより鍋に入れてザツト沸立ちたる後又前の布巾に入れて湯氣を絞り、更に別鍋に移して煮出し醤油砂糖をほどよく混じ豆腐を掻きまぜながら汁を煮詰め鍋をおろし冷めたる時を見計らひ其中へ鷄卵を割りて攪交ぜ之を胡麻の油を敷きたる卵子燒鍋に入れ、ぬる火にて燒くなり。

◎煎鳥

牛蒡とこんにやくを適宜に切りよくゆでゝ笊にあげ、鷄肉を薄くきりて鍋に入れ味淋と酒を等分に割りてザツト煮立て器に取あげ、醤油を掛置き前の牛蒡と蒟蒻を鳥肉を煮たる汁の鍋に入れ、大略汁の煮つまりたる時更に鷄肉を浸したる醤油を入れ一しきり煮たるのち鳥肉をいれてかきまぜるなり。

◎琉球汁

雞又は牛肉を半斤許細かにきり、水一升位にて二時間許煮て、スープを作り、スープを煮る時同時に糸こんにやく、にんじん、椎茸、其他何品にても菜類二三品を細に刻みて煮るもよし、而して、白胡麻を煎り、擂鉢にてよく擂り、前のスープを少しづゝ入れてとかし、肉と野菜を共に入れ、大丼に入れ、紫蘇、蓼、唐辛等を刻み皿に盛り、各々食卓に出し、茶椀に飯を盛り、右の汁をかけ、藥味を添へかきまぜて食すべし暑には鰹のだし汁にて、はんぺんをさいの目にきりて入るゝもよし。

◎せるでの洗ひ

せゐごを三枚に卸して皮を去り薄く切りて、金くさき水にて洗ふ時はよくはぜるなり、その後眞水にて、箸にて攪廻しながら洗ふべし、但し魚は新鮮ならざればはぜる事なし。
之に、若芽を水に浸してよく洗ひ、程よく切りて附合とす、わさびはたわしにてよく洗ひ・葉のある方より卸せば辛味宜し、又わさび卸はよく乾かして後おろすべし、猪口の醤油は生の下地の中へすましたる鰹だしを入る、その割合は生醤油一合の中へ、煮だし五勺のこと。

◎ずいき合

芋茎の皮をむき水へ漬け細く切りあくを出して笊へあげ、鍋に酢を入れて湯出る(大ずいき一本の時は酢一合)此中へ他の物は入れぬなり、煮上りたらば笊へあげ手にて搾り用ゆ、是は水へ取る可からず、胡麻合へ白合へ又は煮染物などに用ゆる時も同様なり。

◎玉菜巻

先づ玉菜の外葉を去りて内部の白青色の葉を一枚づゝにかき、ざつと之をゆでゝ其軸を去り葉一片にて搗き肉(よく砕きて味淋少に生酒黄汁にて味をつけ)を一摑り位づゝ肉の見へ透かぬやうに包み巻になし、深き薄鍋に程合のスープを入れ其中に此巻肉を投じ程宜の胡椒末及び醤油、煮汁、食鹽にて味をつけ鍋にかたく蓋をして文火にて煮ること約一時間、既に熟すれば二個もしくは三個を皿に盛り其煮汁少こしをかけて温き中に膳に上すべし。

◎鰕松茸と煎玉子

小鰕の皮をむき、――大なるは皆な割て細に切るべし、――松茸も細よく切りて、共に湯煮して黄だしなどとり、鰕と松茸を篩に引上げ、薄味をつけ、皿に盛り、鶏卵をとかし、鹽と白砂糖にて味つけ煎玉子となし、鰕と松茸と盛分にすべし、又煮だし汁も醤油砂糖にて加減をなし、――物の汁より少しからき方よし、――水注子様の器具に入て、冷ぬやうに湯煎にして置き、暖き飯を茶椀に盛り、鰕と松茸と玉子などをのせて黄だし汁をかけて香味を添へ食すべし。

◎煎松茸

生のまゝ能程に切り、空鍋を焼きてざつと煎りつけ、汁を去て、醤油すこし柚子のしぼり汁を一處にさし入れ、能く攪拌して器へ盛り、胡椒をふりかけて出す、但し銅杓子にて攪廻す時は、銅氣うつる故木杓子にて攪まはすべし。

◎鰯のつみ入汁

鰯の皮をむき、骨をとり、水へ入れ能く洗ひ、布巾にて包み水を絞り擂鉢にて鹽を入れて擂り、砂糖、酒、玉子、を入れて能く交ぜて出し、おしつけて置き一時間ばかりたちて鍋に味噌汁を作り煮立、その中に庖丁にて前の擂身を切り込み煮る、汁はすましにてもよし。

◎肉ケンチン

豆腐を煎り豆腐のやうに作りおき別に牛肉、鳥肉にてもこま〲にたゝき。擂鉢へ入れ鹽少々を加へ、煮汁、煮きり醤油、鶏卵を加へて擂り、箸につけて少し焼いて鹽梅を見て前の豆腐を交せ、板の上に美濃紙なのせ、其上に紙海苔を敷きて肉を一寸位の丸さに巻き合せ目に玉子をぬり美濃紙へ包み蒸す。煮方は前のケンチン巻と同様、肉一斤の時は豆腐半丁位にて作る。

◎秋の揚物品々

豌豆の筋をとり、二つ位づゝ寄せて精進揚△紫蘇の實の莖の葉を殘し、一本づつ精進揚△鯒を細く切りて天麩羅△生姜の根を四つ割にし、莖を一寸程付けて精進揚△鰶の骨をぬき、身をたゝき、寄せて天ぷら。

◎鮎の魚田

先づ素焼して、後味噌を塗り付け、又一寸炙るなり、又其味噌を付けて焼たる上へ、一分角程の細かき、さいの目の生姜を、ふりかけて出すなり、味噌は砂糖を入て擂るなり、鮎並魚もぎよでんによし、鮎並魚は又た醤油に砂糖を入れて付焼したるは、煮たるにまさるなり。

◎栗めし

飯は初より鹽少し入れて炊き、栗は皮と澁を去り、水に浸して灰をぬき二つ割にして、初より米と交ぜで炊くなり、又栗は凡そ米の三分一を入るれば可なり、少くも四分の一は入るべし。

◎蓮根の胡桃和

蓮根の皮を剝き亂切にし、湯だてゝ笊に揚げ、水氣を去り、胡桃の皮を取り、擂鉢にて擂り、焼鹽と白砂糖を加へて和へる、蓮根は牛肉に等しき滋養分の有るものなり、和物は一家和合を形取りたるものにて芽出度きものなり。

◎栗のうま煮

栗の皮を厚く澁ともにむき、弱火にて湯で、三十分位にて水をとりかへ木綿針の通るまでゆで、水をこぼして、砂糖と水と等分に一ぱいづゝ入れ、醤油を入れて煮るべし、鍋はから金を良とす、又た鍋の身を程よく切り、味淋と砂糖醤油にて煮る、この汁に味淋、砂糖醤油を加へて蓮根を煮るべし、蓮根は穴の間を花の様に切り置き、鍋蓋をとりて生のまま煮たるのち、さまして切るなり、三品共に深皿に盛り柚子の皮を載す。

季節漬物新世帯

◎茄子粕漬

甘鹽にした茄子を、よく押の利いた時分に、一日天日で干し、よく冷した後で、鹽加減した粕に漬けて置き、そして押をかろくかけて、一年經つて粕をとりかへ、元のやうに漬直すので、三年位が丁度喰べころで

あります。

◎生薑味噌漬

秋の末頃實のよく入つた生姜の葉を切りて、莖を少しつけて置き、生姜一貫目に鹽五合計の割合で鹽押し、十分水の上つたのを見計ひ、天氣のよき時、一日天日に乾し、味噌に粕を一割まぜて、右の生姜を漬けるのです。大抵百日位で漬かるもので、餘り押は強くない方がよい。

◎種拔蕃椒日光漬

赤蕃椒と縮緬紫蘇の葉とを一緒に鹽押し、一日陰干にして、そして、蕃椒を竪に割り、種を拔きて細く切り、紫蘇の葉を延して之を卷き、それから少許りの鹽を振つて押をかけ、二十日ばかり漬けてから水を絞り、そして天日に乾してから、壷などに貯へて置くのです。

◎千枚漬

これは紫蘇の葉を一葉づゝ能く洗ひて、百枚二百枚と段々と重ね、麻糸で以て之を封じ付け、ざつと湯をくゞらせて、そして、板で挾んで水氣をよく去り、夫れから味噌桶の底へ並べる。さすれば日ならず、味噌のたまりで上品な味が付きます。

◎茄子鹽押

茄子を色よく漬けやうと思つたならば、鹽に川砂か、又明礬を少し入れゝばよい。そして、久しく之を貯へるには、鹽を餘計に押を強くすればよい。又澤庵の中へ漬け込む百一漬の茄子は、一度鹽押して、よく水の上つた時、其鹽水を捨て、一日天日に干して再び鹽をしたものがよい。

◎山葵粕漬

山葵を短冊にうちて鹽押し、翌日其水氣を取りて粕につけ、壷に詰めて目張をして蓄へるのです。これは即ち風に當れば其辛氣が直ぐ拔けるからであります。

◎薤三杯漬

薤一斗、鹽二升、生姜の葉大分入れて鹽押し、かるく押をかけ、水上つてから、日數の三十日も經つて其水を零し、暫らく水氣を乾して砂糖蜜に又三十日ばかり漬ける、右の酸味は薤持前のを利用するのですが若し酸味薄ければ酢を入れるのであります。

◎家多良漬

醬（麴に煮ねた鹽水を入れたもの）の鹽をからめに拵へて置き、其中へ瓜、茄子、唐辛或は澤庵の味の變つたのなど種々刻んで漬け込むのです、又紫蘇の實、生姜、其他瓜、茄子の甘鹽に押したのを、水を斷つて漬けるに殊更風味がよい、家多良漬とは即ちかうやたらに何でも構はずつけ込むからであります。

◎枝豆鹽漬

枝豆の莢青きものを選んで、一旦熱湯をくゞらせ、中鹽にして燒明礬を少し加へ、かろく押して蓄へるのです、即ち使ふ時は一夜鹽出し、そして茹でれば、色も青く全然で生の枝豆のやうで、風味もさ程變りませぬ。

◎刀豆粕漬

刀豆を暫く湯に浸しておき、甘鹽で十日餘も押し、一旦之を水で洗ひて半日ばかり天日で干し、それから粕につけるのであります。一年ほど經たれば漬かりませぬ。

◎鹽松茸

尋常の鹽松茸は鹽水で茹で、これを冷して其鹽水で以て樽詰にするから、匂もなく亦味もない、が、之を少し吟味せうと思へば、先づ松茸の笠の蕾ばかりを選んで蒸籠に入れ、青松葉を焚きて之を蒸し、そして能く冷し次に松露を細末にしたもの六十匁を鹽二升に混せた中へ松茸一貫目を漬ける、そして使ふ時は、矢張り常の通りにして玩味するに風味至つてよく匂も殆んど生に劣りませぬ。又初茸、松露なども斯樣にして漬ければ風味少しも變らぬものであります。

◎漬昆布

出場よき昆布を一夜水に浸して置き、よく砂や芥などを洗ひ落し、一日天日に乾して、それから溜り醬な味噌につけること粕の場合も同じやうにする、そして一旦之を出して其周縁を斷ち、正味の所ばかりを手比に料理し、重ねて味噌につけて置くのであります。

◎十六大角豆粕漬

大角豆の餘り實の入らぬのを取りて、生のまゝ粕に漬ける、殊に麻豆などは莢ばかりの内に漬け込む、で、水が上れば浸みとられねばなりませぬ。

◎天王寺蕪漬

蕪の莖一寸ばかり附いてゐるのを、甘鹽にして強く押をかけるのです、そして天氣のよき時を見て、一日天日に干し、夫れから味噌でも粕でも隨意なのに漬ける、何れにしても百日餘も經たれば漬かぬものでありま す。

◎柿粕漬

はちやといふ細長き柿なまだ青き時分にとり、直ぐに粕につける、自然と澁味もとれるが、さりとて甘くもならず至つて上品なものとなる。會席の香の物の附け合せなどに上乘です。

◎菜漬

漬け菜をよく洗ひて株を切り去り、庖刀目をいれてつけるのです。桶の大小、菜の多少に由て鹽加減を見計ひせねばならぬが、菜は餘り押が強き時は葉の色赤くなるから、其邊も注意せねばなりませぬ。

家庭衛生

一日醫者（其七）

糸左近

▲腸窒扶斯

〔原因〕窒扶斯バチルレンであつて、此のバチルレンを含んだ糞便或は飲料水或は牛乳或は空氣などから傳染するのである。精神感動又は不養生などがこれを誘ふこともある。年齢は十五歳から三十歳までの間に最も多くあるけれど、時として小兒老人も罹ることがある。流行は秋に最も多くあるから、此の際注意せねばなりませぬ、此の窒扶斯に觸るゝものは悉く傳染するかといふに、さうでは無くて、本病の初から終りまで看病してゐながら、更に健康を害せぬ者もあれば、一寸見舞つたばかりに、直ちに傳染つて尙一層重いのに罹る者もある。其の理由は詳しく說き難いが、要するに、深い心配のある人とか、勞働に過ぎた者とか、或は身体に感冒、胃病などの故障ある者などが罹り易いのである。明治以前の未開の世に在つては、多數の人は疫病神の祟りと信じてゐた、頑迷の輩は今も尙信じてゐるものがある。これは無論無智識からとは言ふものゝ、一つは、其の病狀が變であるからでもある。」

〔病狀〕其の病氣の性質にも依るけれど、其の普通一般のものを言へば、二週間程は潜んでゐるが、いざ發るといふ前二三日位から、何となく倦み疲れたやうになり、頭痛がしたり、耳が鳴つたり、胃腸病のやうにあつたり、或は睡眠が不安であつたり、或は鼻血が出たり、或は四肢が僂麻質斯にでもなつたので無いかと思つてゐる揚句に、惡寒がし、續いて三十八度位の熱が出る、斯うなると起きては居れぬ、卽ち牀に就かねばならぬ、これより一週間の中は、熱は日に日に一度乃至五分程宛上り、一週の終りには、四十度重きは四十一度にも達す。此の間は劇烈な頭痛がして顏が赤くなり、眼の球も少しく赤みを帯ぶ、さうして大いに

高き、舌は白い苔が生へ、脈は八十以上百にも及ぶ、便は大抵下痢す、併し稀れには却つて便秘するのもある。第二週間日は大凡四十度の熱が毅然として今日も明日もと續く、故に如何なる名醫の治療も、何の甲斐無きが如くに見ゆる。患者は舌の運動が甚だ困難となり、ビク〳〵震ふ。第一週に赤かつた顔は次第に蒼白くなり、精神が朦朧となり、喋々喃々と譫語を言ひ、稀れに狂氣にでもなつたかの如くに、喋がしい言語を放つて、看護人が茫然してゐると不意に起つて窓から飛んで出るやうなことがある。併し本病に罹るものは、悉く精神に異常を來すかといふに、さうでは無くて、中には確乎として平常に異ならぬもある。腹部は膨れて其の腹部の皮膚に數多の小さな薔薇狀の疹が出るものである。又時として氣管支加答兒を起すことあれども、日本に於ては甚だ稀である。第三週目は其の熱次第に下り、三週の終りには三十八度位に下り、精神も爽快となり、食慾を催し、薔薇疹も蒼白くなり、舌は濕ひを帯び、しかも清潔となり、腹部の膨れは凹み、大便は大抵秘結するものである。第四週目は尚其の熱下り、遂に平温に復し、其の他悉く全快の方に向ひ、食慾頻りに進み、健康時に好なかつた食物まで好むやうになる。併し其の重症のものは、三週目から四週目、或は五週目へかけて、熱は頑固に高きか、或は不規則になり、精神も矢張朦朧としてゐる。其の他の諸症も第二週を繼續し、全身大いに衰弱するものである。斯樣になつて色々の合併症を發すか、或は發さぬも性來薄弱の者は冥土に赴くのである。若し又五週六週の終りに至り、始めて無熱となり、心身快くなつても、其の衰弱疲勞の全く癒ゆるには、數ヶ月を費さねばならぬ。偖其の無熱になつた時の狀態を言へば、髪は拔け、筋肉は痩せて骸骨の如く、見るも憐れな姿になるものである。さうして此の時に當つて褥離れが早いとか、食事を愼まぬとか、或は心配事が出でなどすると、再び發熱して前諸症を繰り返すことがある。

〔治不治〕最も危いのは、四十一度以上の熱があつて、脈が百二十以上搏つのである。これは余程体格の强い

人で無れば助かる見込はない、殊に其の脈の搏ち方が小さくて、不規則なのは殆んど助からぬと斷言しても可い位である。又平生大酒を嗜む人や、姙婦及び老人は概して治り難いが、小兒は大抵治り易いものである。又他の症氣の合併するのは、其の性質にも依るけれど、死を招く媒介物である。又其の譫言を言ふと言はぬとに就いて論ずれば言はぬ方が成蹟の善いものである。我が國人のは、歐洲のに比ぶれば、一般に輕くて、死亡數は百人について十五人の割合である。

〔療法〕これも前號に述べた赤痢と同じく、經過の長い傳染病であるから、素人の方が、其の療法を知つておく必要は餘り無いが。今其の養生法と單なる藥品とを述ぶれば、大凡左の通りである。病室には斷えず新鮮なる空氣を入れ、病者の身体及び衣服を清潔にし、極めて消化のし易い流動性の食品即ち牛乳や鷄卵の類を與へ、頭上に氷をおくなとは、至極善いことである。されど裸體にして冷水をかけると云ふ水治法は歐洲人の様に、功が無い。歐洲人はこの水治法を以て、甚だ良いこと丶してゐるから、我が國人が外國で本病に罹ると、矢張この水治法を施さる丶から、大抵は異國の鬼になつて了ふのである。今より數年前猪子醫學博士が獨逸で本病に侵された時、彼の碧眼奴は矢張冷水療法を施すから、其の友人等は頻りに其の非を述べたけれとも、「未開人が何を小癪な」といふやうな調子で少も取りわげてくれぬ、退院させようにも旣に衰弱死に臨むの身、彼此慨いてゐる中に、あはれ有望の博士は、眞に歸らぬ旅路に赴いたのである、友人等は嗚呼我が國ならましかばと、同情の涙に咽んだか、これも何の甲斐なきことであつた。藥品としては、

稀鹽酸　一、〇　單舍　一〇、〇　水　二〇〇、〇（一合）

右一日數回に適宜に服まじむることは甚だ必要である。又

規尼涅　〇、五

右丸藥にして朝夕に與ふることも高熱者に向つては必要である。

衰弱の餘り甚だしい人には、葡萄酒の内服及び灌腸をせねばならぬこともある。

右にて普通の窒扶斯は述べ終つたが、その外變形のものがある、即ち(一)輕症窒扶斯(二)不熱窒扶斯(三)逍遙窒扶斯などといふのである。

(一)は其の病氣の間が短くて、速かに始まり、速かに止むものである。(二)は殆んど感冒のやうにあるが、唯流行時に來ると、其の他醫者の診斷學上區別せらるゝとのみである。(三)は假令ひ多少の熱があつても、患者一向意に介せず自由に外出などして歩くものをいふのである。

斯樣な譯であるから、醫者でさへも窒扶斯の診斷は甚だ困難である、況んや素人の方が容易に鑑定のつくものでは無い、故に右に述べたる療法も眞に一日だけ試みるより外は應用してはなりませぬ。

今二三病述ぶる筈でありますが、少しく頭痛を感じてゐますから次回にその埋合せをいたしませう。

滋養食品に就いて緊急の注意

西洋の文明が一たび輸入してからといふものは、滋養食品とさへ言へば必ず牛乳鷄卵或は鳥獸の肉を以て最上といたしますが、悉く間違つてゐます、牛乳鷄卵は病人には宜しいけれど、健康者には必要の無い物、鳥獸の肉は其の少量は食べる必要は無いでも無いけれど、日本人には最下等の食物であります、即ち日本人には米を以て第一とし、豆類根莖類魚類これに次ぐと心得ねばなりませぬ、さうで無くて西洋人の眞似ばかりしてゐますと、遂に胃腸病を惹き起すやうになります、其の理由其の證據に就いて、一大議論がありますが、次回に滔々と述ぶることにしませう。樂んで待つてゐて下されば、私も樂んで述べませう。

▲一日醫者に就て質疑の御方は本郷臺町五十一来氏へ宛御照會あれ

家事要訣

朝夕の心得

▲人間衛生の根本は水と空氣にあり、如何に滋養を食し、如何に美服を身にまとふも是の二物におろそかなれば眞成の健康は得がたきものなり。新鮮なる空氣と、清淨なる水とは百種の珍味、千種の滋養物にも增して珍たきものと知るべし。

▲新鮮なる空氣と、清淨なる日光は單に濕氣を除去し得るのみならず、又種々の病毒を撲滅するの力あるものなり。三日の雨天も一日の晴天に氣色淸々とし、十時間焚火して物をあぶるよりも、一時間日光に照らすの効能は大なるものと知るべし。

▲されば成可く物は日光に燥かすをよしとす、肌に着けたるものは常に日に晒らして其の濕氣を去るべし。

▲朝起き出づるや直ちに床を擧ぐるは宜しからず、夜中身體に觸接せる部分は多分の濕氣及び皮膚よりの排泄物を含み居るものなれば、雨天にあらざる限り每朝必らず日光に曝し、日の未だ高き間に取り入れ暫時冷まして後疊むべし、若し忘れて日沒後まで戸外に出し置く時は再び濕氣を呼び返して甚だ害あるものなり。且つ蒲團には必らず被布を用ゐ、成可く一週間每に洗ふべし。

▲蒲團の皮は絹よりは木綿こそ勝るべし。但し中の綿は彈力あるをよしとす。蒲團は冬期殊に溫かきを要すれとも決して重かるべからず、成可くは毛布の方衛生上に叶へとさりとて俄かに改め難ければ輕きものを重ねて用ふべし。

▲冬期は兎角に床の溫さを欲して炬燵など入るゝ習慣あるものなるが、老人は知らず壯健の者は斷じて宜しからず、尤も平素運動不足の人、又は專ら腦髓を働かす人々は充血の爲め足部冷却して眠ること能はざる時あるべし、この際には湯たんぽを用ふべし。斯くすれば腦の血ひき下りて快く眠らるゝものなり。

▲衛生の根本が水と空氣にある如く、人体攝生の眼目は運動と睡眠とにあり、人間は男女に限らず一日に一度は必ず汗をかくべきものなり。然らざれば人體組織の上に必要なる新陳代謝の用をなさゞるなり。運動の法は種々あれども、尤も單簡にして尤も効用あるは歩行に若くものなし、朝夕の食後一時間の歩行は極めて適當なる運動法なるべし。

▲十分の運動せざれば十分の睡眠は得がたし。快き睡眠は錦の褥に勝るといふ諺のある通り、如何に綾錦の蒲團に寝るも、快き眠なければ。石の床に居るよりも不快なるべし。

▲運動は一時に過激なる事をなすべからず、新鮮なる空氣中に出で丶徐々に行ふをよしとす、食事の後の運動は宜しけれど、箸を擲つて直ぐにするは惡るし、大概は散歩。なり。激烈なる動作並びに一時非常なる遠足、又重量の物を擧ぐるなどはよろしからず、又十分運動の後休息の際には、感冒に罹り易きものなれば注意すべし。

▲睡眠は腦髓を安んずる唯一の武器にして運動が新陳代謝に必要なるが如く、神經の疲勞を恢復せしむるには、睡眠を措いて他にあるべからず、睡眠の時間は常人にあつては八時間を適度とすれど、幼兒は多量の眠を要し、且つ學生の如き腦の働を主とするものは勞働者よりも猶多量の眠を取らざるべからず。

▲何人も睡眠の前に困難なる勉强を避くべし。又神經を刺激するやうなる事に凝るべからず。斯る時には翌朝眼覺めたる折身体に疲勞を覺ゆ。即ち熟眠せざりし證據にして過度に神經を勞したるが故なり。猶睡眠に就て一つ格言は決して夜を更かす可からず。夜は十時以前に眠る事攝生の要訣なりと知るべし。

計算表の効用

一家の内には必らず家計の收支を明記せる計算表なかるべからず、收入は兎もあれ、支出は必らず明細に項目を記るして月々の統計表をつくる事肝要なり。此は經濟上のみならず、これを見て一家の歴史を想見し、

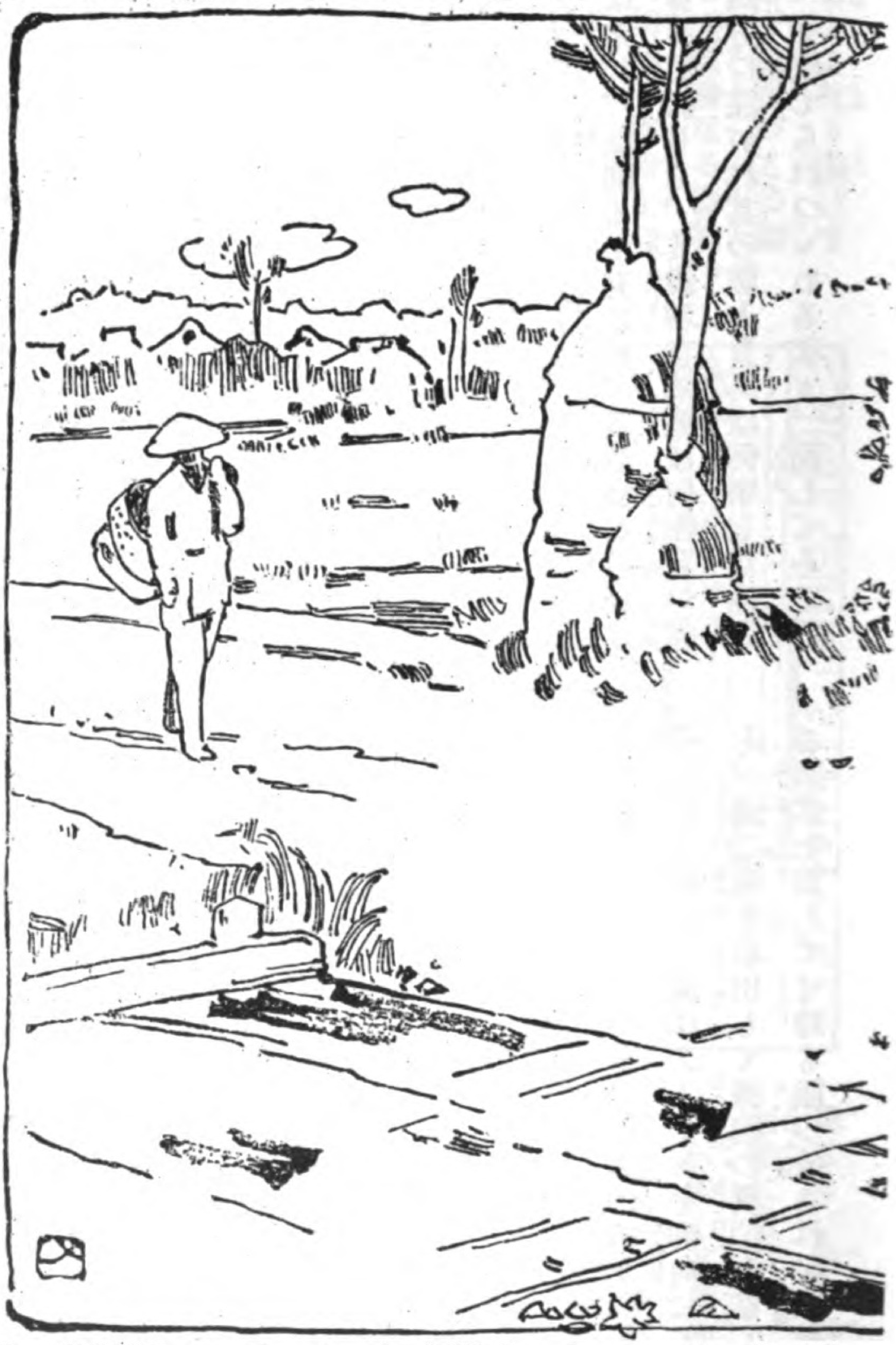
後年の參考となるべきものなり。

計算表は家計のメートルなり、又家道盛衰の測量器なり、月々、若しくは年々の計算表を見て我が家の家道が如何に進歩を爲し、又如何に發達し、又如何なる歴史を經過し來りたるかを知るべし。三年前の我が家の暮し方は如何なる狀況なりしか、五年前の我が家の經濟は如何なる狀況なりしか、當時の暮しと現在の活計とは如何に相違し居るか、或は以前は質素にして今日は贅澤にはなきか、又現今の物價と昔しの物價には如何なる相違あるや。家族の膨脹に伴ふて經濟向は如何に膨脹せしかなど仔細に知ることを得て將來の心得ともなるべきものなれば、船乘に羅針盤の必要なる如く、一家の家政者たる人は是非ともこの計算表を造りて經濟上の警戒を爲すべきものなり。



一家の收入は年々增殖して行くもその割合に貯蓄も出

来ず、又別段家道の饒かになりたる徴も見へざるは何かの原因あるべし、その原因を知るべき第一の手段は計算表を見るに惹くものなし。計算表の面には厘毛の詐りもなく金錢の行き所ろ一々判然して善惡是非立ところに明かなるべし。日々の賄ひに消へて行きし金、衣服身の廻りの費へとなりし金、遊樂交際上に費へし金、或は何、或は何と、些末な事柄に消へし金も月々年々に積りて見れば隨分驚ろくべき高となりて、一年の暮には吃くりするものなり。成程雜用といふものは馬鹿にならぬものと合點して始めて以後の注意を爲すに至る。これ實に計算表が敎へる敎訓にして。この表に依らざれば決して斯る敎訓は得られぬものなり。されば眞成に家を持つ人はまづ此の計算表を造り、表を見て以前の事を知り、表を見て將來の家計を案じ行くべし。



小兒の教養

◎好奇心に就て

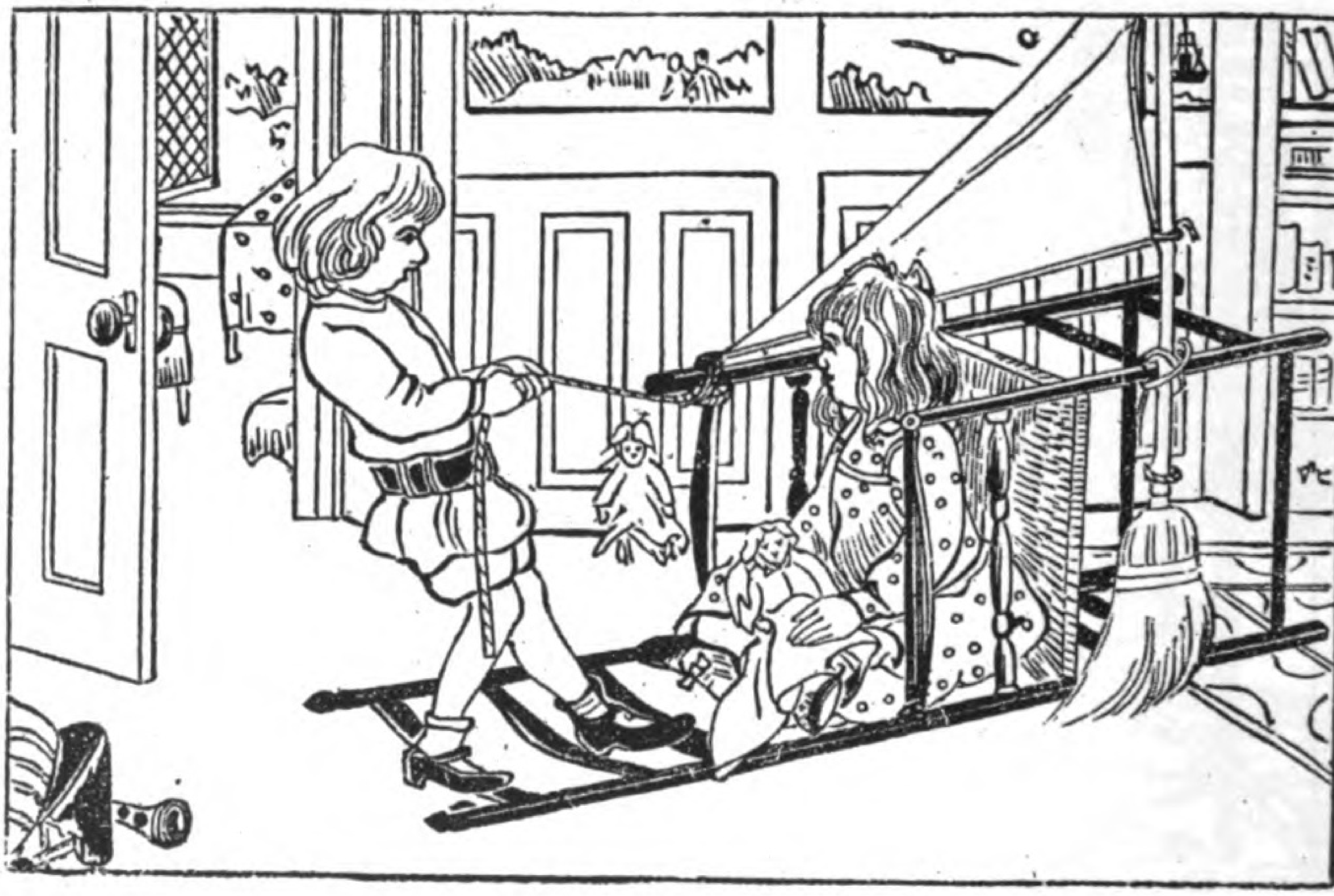
凡そ此の世の中に日常の事に關して大人と小兒との心には非常なる相違あり。たとへば大人の見る物はすべて陳腐なれども、小兒の眼には何事も目新らしき感ずるあり。大人は此の世界を別段新らしく感ぜざれども小兒の耳目には事々物々皆新らしく、皆嬉しく喜ばしく感ぜざるものなし。たとへば一足の新らしき駒下駄、若しくは一個の帽子の如きものにても、大人は是を買ふてさほど嬉しとも思はねど小兒の心には何ともいへぬ嬉しみありて、殆んど天にも登る心地のされざるものなり、すべて此の世界は小兒に取りて新世界にして見るもの聞くもの一として珍らからぬものはなし、其小さき胸は常に、疑問もて充され、其活溌なる腦は其答を求むるに忙はしく、其鋭利なる眼は何物をか探し出さんと四方に注がれ其の聰とき耳は何事をか聞きつけんと絶へず欹てられつゝあるなり、而してその好奇心は外界の事物より智識を得るの好き媒介となるものなれば、是れが母親たらんものは大に注意周到なるを要すべきなり。母親若しその子の利益幸福を希はゞ、小兒が其の何事をか學はんとする熱心なる機に應じて相當の助を與へ、それが爲にはよし多少の時間と勞力とを惜むこと勿れ、獨逸の大詩人ゲーテの母は世界に名高き此の詩人の母としてその子に對する注意の深りし事柄の一例として。小兒が種々なる疑問に對し忙がはしき仕事の時間をも省きて一々丁寧なる說明の勞を取りしといふ。世には小兒が好奇心強く多くの事を質問するを煩さしとて叱りつけ、かくして此の貴重なる天性を抑壓するもの多きがことし、誠に惜しむべき事なり。

◎小兒の活動力

小兒が家具などにつき、彼方の机を取り出し此所の椅子を持ち出し、或はテーブルを仰向にして汽車の形とし、或は箒を取出して鐵砲の眞似をなし、其他種々なる惡戯を爲して寸時も眼の放されぬ事あり。親々はい

づれも悪戯者よと叱り飛ばすが常なれども、彼等がこの如き行爲を爲して貴重なる器物を破壞し、大切なる書籍をこぼつ時其心は何物をか見出し何事をか學ばんことを願ふの念一ぱひにして敢て他を思ふの暇なければ、己れは他人の迷惑となる事を爲し居るなどゝは毫も氣付かざるなり。凡て小兒は大野心ある人、若しくは勤勉なる人と同じく常に何事をか爲しつゝあるにあらざれば愉快なるを得ざるものなれば其弄ぶべき品物をも與へずしては叶はざるなり、然るを彼自から探し出したるとき叱り飛ばして取上るは無

兒童研究の資料其一



理なり。彼の目に觸るゝ物は何物にもあれ、忽ち取りて之を破壞し其內面を見極めんとするなり、されば此際に當り若し片々に取こわし、再び搆造し得る品を與へて其搆造力を養ふことは最も肝要なり、彼の幼稚園にて立方躰、長方形など樣々の形を小兒に弄ばせ、思ひの儘なる形狀を組立てさするは其想像を滿足せしめて至つて有益なるものなり。

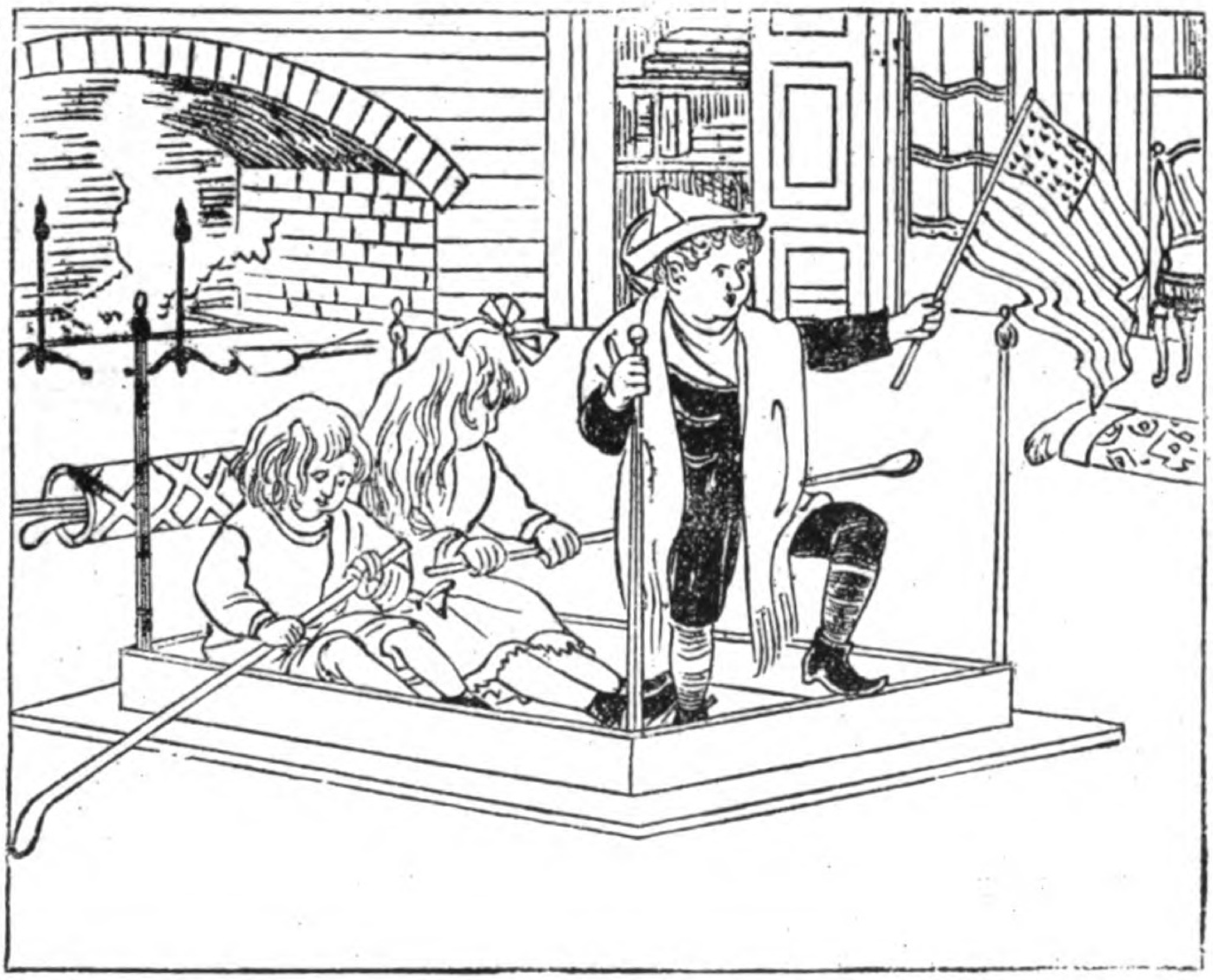
◎比較研究

すべて小兒は何事をか爲し居ることを好み常に何か遊ぶべき方略を考へつゝあるものなり、而して其の性質は教育上

大に便宜なるものにして彼等は大人と同じく一事を爲し、一物を動かしつゝ大に滿足に覺へ居る間に知らず〳〵多くの事柄を學び居るものなり。

小兒をして事物を精密に且つ正確に觀察せしむる樣助け導くは甚だ有益なるものなり、例へば彼等新たに一個の玩具を得たりとせんか、母親は其玩具の特性を指示し、其を現はす言語を敎ふるなり、即ち玩具は馬なりとせば、其毛は白くして丈高く、脊に鬣ありて尾は長く足は四本なりなどゝ

其の二



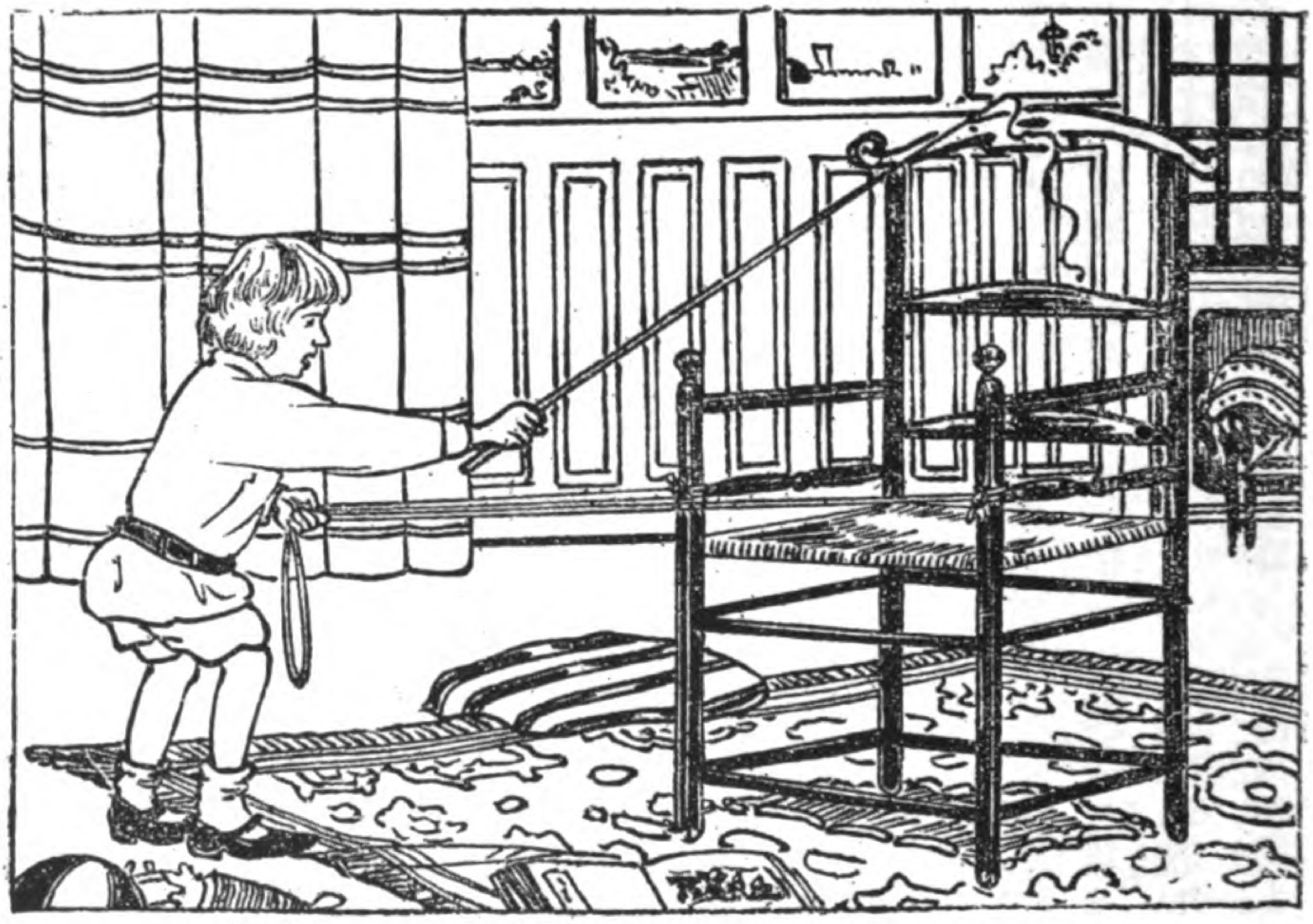
小兒に見出さしめ、次に相似たるも稍異つたる品と比較させ、而して同じ點と差違ある點とを示すべし、さすれば彼等は追〳〵自から一物を觀察し、他物と比較するを得るに至り、遂に其れが習慣となりて見る物毎に皆正確に觀察するに至るべし、斯くして物に分別を立て事に差別を爲すに至る是れ又幼智開發の一方法といふべし。

◎敎訓と實例

凡そ家庭の風儀が小兒の德性智性に影響を及ぼすことは恰も其食する食物

呼吸する空氣が人體に影響するが如く、家庭の風儀、周圍の感化力は、小兒が直接に受くる教訓よりもハルカに有力にして知らず識らずの間に彼等を教育し其品性をつくるものなれば尤も此の點に注意すべし、さればタトヘ母親はその子に向ひて誠實なるべし。柔和なるべし。行儀よくせよ、惡口をいふ勿など千萬遍くり返して說き聞かすも若しその家庭內に於て虛言を吐き癇癪を起し。夫婦喧嘩をなし、物事亂雜にして、諸事不誠實ならば、その教訓は何の効力もなかるべし、さるを實例は教訓に勝るとの諺を輕視する家

其の三



小兒の敎養

庭の多くあるは實に歎はしきことなり。

◎誘導の方法

小兒を教ふるにあまり嚴しきに過れば其の性質いじけて後來世に處するに當り最も肝要なる獨立心を失ふに至るべし、されば唯權勢もて盲從せしむるは是非正邪の辨別なき獸類を養ふには利益もあるべきなれど、苟くも人類てふ道理力を有する者を養育するには當を得たるものにあらず、故に小兒に爲す可からずと禁制することは彼等が理解し得る年齡に達せば、其の理由を語りきかすべし。されど小

兒に過失あるは多くは、その兩親より遺傳せしか或は其教育の宜しからざるに因るものなれば父母はその罪を小兒にのみ負はしむべからず、蓋し子女を教養するにその天性ならぬものは人爲もて造り出すことは難かるべけれど、その天賦の賜は、賢しこき方法と慈愛の力によりて益々完全に近らしむるを得べきものなりと知るべし。

◎睡眠は暗室に限るべし

子供は暗室に眠らしむる習慣をつくべし、然らざれば暗きを恐るゝやうになるべし。神經質の子供には猶更暗きに眠らすこと必要なり、然るに世間大抵は便宜のため行燈又はランプを枕もとに燈し置く、これは衞生上に宜しからざるのみならず（燈火のなきは空氣を汚さゞるなり）又小兒教養上にも宜しからず。されば暗きを怖がる子供は可成漸次にその習慣を改めしむる樣にすべし。西洋の育兒法を見るに日暮れて就寢の時來れば、小兒を否應なしに設けの床に伴ひ行き、暗らき所ろに置きて、その儘睡らしむるの習慣なれば、子はよくその習慣に從ひ、暗らき室を怪しむ事なく。その儘すや〳〵と眠に就くなり。然るに我國にては心なき子守など、やゝもすればおばけなどの話して子供に恐怖心を起さしむる事あり。怪しからぬ事といふべし。

家庭の規律

國家に憲法條規のあるが如く、家には規律あるべし。規律のある家庭と、規律のなき家庭とは、經濟上、衞生上、又体裁上に非常なる相違を生ずるものなり。さればその家をして生命あり、進歩あり、活動あらしめんと欲せば是非とも規律なかるべからざるなり。

世間によくある例なるが、終日忙はし氣に見へて齷齪と其の日を送ながら扨て何の纏りたることもなく。何の得る處もなきが多し、これその家に規律きなが故なり。同一の食物を二度も三度も煮かへす事あり。一手桶の水にて濟むべき洗ひ物も二手桶三手桶を費やして猶臺所の奇麗にならざる事あり。勞力を費やし、時間

を費やし、物を費やして得る處ろなし。傍眼には誠に勿体なしと思はるゝ事多し。これ第一に物に規律なきよりして生ずるその家の損害なりと知るべし。

規律なき家庭は兎角に亂雜不しだらにして不体裁いはん方なし。規律なき家庭は一事を誤ちて十事の手違ひとなること多し。朝起きの時間不規律の爲めお客に飛込まれて朝食を喰ひはづすことあれば、時間に後れて一度に搔き込むなど毎度の事にして爲めに胃を害すること稀ならず、主人一人の朝寢の爲めに家內一同仕事に手のつかぬは有勝の事にて朝仕舞後れし爲めに午前に爲すべき事も午後に跨り、遂には一日の事を二日に亘らせ。翌日雨天の爲めに又一日を空ふする事あり、是皆規律を守らさるより生ずる弊害にして一々擧ぐれば際限なし。されば家に規律ある習慣を作爲するの必要あること言ふまでもなきことなり、さて如何にせば規律ある習慣を作爲するを得べきかといふに、まづ第一家內一同朝起の時間と掃除、食事の時間とを一定し、嚴に之を守り、時間來れば主人と雖も決して之を破ることなく。各自に時間と仕事の責任を守り。長上より目下のものに至るまで互に相犯すことなく。規律に服從すること丶すべし。かくして能く之を實行するに至らば家庭は知らず識らずの間に自から規律的となるべし。

尤も規律といへば唯一遍の法律の如く誠に無味乾燥のものと思へと實際は決して然らず。家庭をして眞に家庭の樂みを解せしむるは規律正しきに若くものなし。彼の朝より晩までのべつ、だら〳〵と用事のつきまとふて一寸の暇なきが如きは何人も快きものにあらず。下婢下男の如きは猶更うるさしと思ふべし。是れ家の規律なきより生ずる弊風にして、家庭の病根なり。されば家人の仕事に對して日毎の分擔を定め同時に又大抵時間を定めて休息の餘裕を與へ働らくべき時は働らき休息すべき時は十分休息を與へるやうにすれば、働らくものも樂しみありて仕事は却て捗るべし。是れ實に規律を守るの賜なりと知るべし。

家人誘導の方法

總じて人を教へ導くの主意は、その人をして獨立自治の一人前の人間となすにあり、この獨立自治とは人の力みみを賴りとせず、獨りにて世に立ち自から身を治むることとなるが、さて獨立自治の人間とならしむるには、如何にせば宜しきやといふに、年若き頃より自から事を考へて分別し、自から事を成し遂ぐるの氣力を養ふこと肝腎なり、父母教師がその子女門生を導くに事々物々一々吩咐世話するのみにては決して良教訓にはあらず。この如くなれば凡ての事を長上の命令指示によるが故自から分別處置するの機會なくして自治の念を薄弱ならしむるものなり。

教育上の格言に、教へざるは大なる教育なりといふことあり。事物に就て一から十まで指示命令するは決して良き導き方とは言ひ難し。されば人には自から發明するの機會を與ふべし。眞にその子女をして獨立自治の人となさんと欲せば、それをして自から物事を思慮分別せしめ、以て父母長上に離るゝも差支なき樣になすべきなり。

家の子女稚くして東西を辨せざる頃ならば一々世話もして遣るべき事無論なるべしと雖も、旣に十二三歲にもなりて自から物事を考ふるやうにもならば「斯くせよ」「斯くすべからず」など、唯命令するのみにては不十分なり。物事によりては「如何にせばよきか」「其方の考は如何ならん」など、いふ風に相談を持ちかけ、以て自から思慮を練磨するやうに仕向くべし。

これは唯家の子女のみに限らず、若き嫁、弟妹は勿論、下婢下男等に對しても同樣なり。すべて何事も此方より相談する風にして自づと其の思慮、注意を置くやうにすべし。斯くすれば彼等その年の若きと智識の不十分なるに拘らず、自から思慮し、自から分別し、又その分別し、思慮したる事柄に對しては、唯命令されたる事柄よりも一段の注意を加へ、趣味を感じ、結局其事に對して自からの責任を守るの地位に達すべし。責任を守るは人間自治の第一段にして、始めて獨立を爲

し得るものといふべし。子女を導くに此の方法を以てすれば。年若うして早く自治の精神を發くべし。下婢を導くにこの方法を以てすれば、無智不學にして猶よく責任を守るべし。若し然らずして一より十まで乃至朝より晩までの事柄を一々に命令と指示を以てすれば三年立ちても同じ事を繰り返すに過ぎざるべし。されば人を導くはその人の考へを發かしむるの方法を第一とすべし。早く獨立させんと欲せば、早く自營せしむるに若くものなし。

しみぬき

貴重なる衣服、又は足袋などに泥のつきたる時、洗らつても落ちぬことあり、これ都會にては車輪の油、又は鐵氣などの土に混ずるが故なり。其時はしみの處ろに卵の黄味をつけてもみ、後清水にて洗へば見事に落つるものなり。油のつきたるは海綿に揮發油を浸して洗ふべし。

金物の錆タトエば釘錆などつきたる時は白粉をぬらしてしみの上につけ、指にてよくこすり、後清水に注ぐべし、若し古きしみならば硫化ポッタース液又はソーダを注ぎ、少し青白くなりたる時、鹽酸二三滴に水八滴位の割合にて洗ひ、後清水にて濯ぐべし。又ペンキのしみは油類と同樣の仕方にて落ちるものなり。

汗のひどくつきて水にて落ちざる時はアンモニヤにて洗ふべし。もし古きしみならば白粉をつくれば容易に落つるものなり。煤のつきたる時は其部分をつまみて揮發油にひたし、海綿にて輕くこすり、揮發油に卵の黄味を混じたる液に海綿をひたし、幾度かそのしみにぬり温むれば可なり、又鹽酸と水との極薄き混水にて洗ふもよし。

インキの付きたる時は速かにシャボンにて洗ひ、水にてよく注くべし。もし斑點の殘らば硫酸又は鹽酸一に水十五の割合の混水にて洗ふべし、橙、柚子、密柑など菓物の汁のつきたる時は稀硫酸十滴を一合の水に混じ。海綿にひたして摩り後清水にてよくそゝぐべし。

すべてしみを洗ふ時、水の爲めに却てしみの出來ることあり、これ水のつきたる所だけ糊おちたれば際立ちたるにて全躰の糊を落せば可なり。されば少しの斑點なれば平なる所にひろげ、四隅をピンの如きものにて止め、水にひたし、西洋紙をあて、ひのしにて乾かすべし。

小兒の大小便のしみは大抵水にて落れど、臭氣の殘るものなり、これにはアンモニヤにて洗ふべし。



家庭日記

大阪　日下ちゑ子

八月十三日　水曜日快晴五時起床す今日も亦朝より暑さきびし自分の室を掃除し花實の瓶に百合の花求めて床に挿す　十時半中飯の仕度に取かゝる茄子の田樂泥鰌汁など下女を相手に十一時半頃やう〳〵煮あぐ一同晝餉をすます汗の流るゝ事瀧の如しとやいはんあつしくも暑し祖母の君父上母上には晝休みせらる、我れは其の間に新聞の一覽すませて素麺ゆでゝ冷し置き師の君はじめ親しき友の許へ暑さの見舞狀九本認む門賣の茄子や呼びとめて五十個十五錢にて買ふ、内二十個直ちに漬け置く三時素麺を一同に分ちそれより琴をさらふ、暫らく出さゞりし故虫くひばかりにて一つも滿足のものなく「虫干しせよ」とて母上に笑はれし四時半夕餉の仕度す今夕は女學世界に記されし料理して見んとて鰻の酢のもの白瓜のフライをなしぬ、されど手なれぬ事とてフライは少し出來損じぬ夕飯後湯に入り夜は火の見に昇りて大川より打ち上ぐる花火を見ながら弟と共に唱歌の練習す弟は聲はり上げて川中島高繩などの詩間違ひながら吟ずるなどいとおかし、十一時日記つけて寐につく、本日の出金　茄子十五錢、酒二升一圓、鰻二尾十六錢、酢一合一錢五厘、生花七錢、計一圓三十九錢五厘也



八月十四日　金曜日本日も快晴暑さはきのふにまして嚴しく恰も釜中にあるが如し庭の棚に鉢植にせし朝がほ今朝は珍らしくも澤山に開きぬ數へ見しに總計　一十六輪又去年のより變様せしものゝ中にはよほど面白き形のものも咲きぬ水あたへて扨て例の通り己が室の掃除して朝の食を終へぬ本日は繪の稽古日なれば暑さを冒してゆく繪具の配合運筆の法など教へられ手本は柳に流水なるがゝる九時歸宅す總身汗みづくとなりぬ十時、　の仕度す折から氷やの來りければ貫一本求めて骨切にしさゝげをそへ外にわかなの渡しものなとす十一時半晝餉をすます皆々あつい〳〵を繰りかへす寒暖計を見しに暑さは道理ゝ九十七度迄昇り居ぬみな〳〵晝休みせらるわれは新聞を閲す其内ついうと〳〵とまどろみつ目をさませば時計は三時を報じぬ八ッ茶の時刻もおくれしゆへくづのまんぢう求めて茶うけとす其れより冬ぶとん三疊手傳ひあふてほどく四時過ぎより夕餐の仕度す、かまぼこおろし豆腐のすまし等風呂すませて後ば二階にて讀書す折から神戸より伯父上のおとづれ玉ふまゝ奥座敷にてビール差取りなどまゐらす十時歸らる十一時半日記かきつけて床に入る今宵はさぞや寐苦しからん

本日の出金　饅頭拾錢　かまぼこ拾錢　本月分電燈料壹圓卅錢　豆腐參錢　計壹圓五拾三錢也

滋賀　多喜たつ子

七日　晴天五時起床六時過ぎ朝飯終る下女やぶ入さす私

御飯焚の用意す其れより母上御召物裁縫にかゝる紋縫かさ高きため中々紋合にくゝ困りたり
拾壹時昼飯終る其後毎晩にて白玉作る折しも弟學校より歸る途中本屋にて雑誌店より女學世界拾壹號られき早く讀たきは山々なれど夜の樂しみに仕舞をきよう／＼六時過ぎ夕飯終り早速取出し第一に才媛圖畫に目くばり定めて投書たらんと見れば嬉しやよう／＼佳調の部に出し頂く誠うれしかりき
其れより貴婦人の嗜好讀む其外縁糸傑則幸屋拾貳首條買じく文才の君達の御投書拜見し成程と感心の餘り我が無學を悲しみ後筆先にたゝずと獨語せり又貢家の紹介及び母親の實務つい知ず知ず深く讀みゆけば時計は早や拾壹時を報ぜり驚き急ぎ日記し明日は定めて女學講義來るらんと樂しみつゝ床に付く
今日出金かしわ貳十錢　根ぎ三錢　夏瓜三錢　合計三十六錢也

朝　瓜當座漬　香の物
晝　玉子焼　鯛汁
夕　かしわ夏瓜ねぎのさつま煮　瓜もみ

熊本　兒島美代子

八月六日　晴五時起床朝食前庭園をそゞろあるきす吾が日頃土かいて愛せし朝顏今朝始めて咲、またち、白紫とりく／＼に咲きたるいとうれし食後下女と共に洗濯す夕の稽古に行き歸りに通町にて妹の帽子洋傘外二三の買物なし二圓五拾錢程支出す、妹の帽子のうれしとて家に歸りてもはなさずかぶり居て私は夜もかぶりてねるのよと皆々大笑ひす、父上の小袖ぬひ初むきびしき暑さにて針もつことも倦みたれば我書齋に入り家政學みる五時夕食の用意す夜は又夕なぎとて蒸暑さ云ん方なく様に出て月の光を友として絹糸にてしなりなどあみ日記を付け十時過ぎ床に入る今日の獻立

朝　とうふ味噌汁　納豆　香の者
晝　ぜんまい煮付　らつきよう
夕　あなごの付焼き　茄子里芋の煮付

七日　昨日にもましていみじき暑さなり都の友のもとより便の有りいとうれしく取る手もおそしと封おしきれば細々と都の有様學び屋の近狀しるしあり、二三日の中高輪迄るとあり又巾せまき「リボン」美しきが封じありいつもながら友の厚意いとうれし早速返書認む待ちに待ちにし女學世界も來る大町先生の婦女雑誌。貴婦人の嗜好等中々にうれしくて時の過ぐるも覺えず四時の打つに驚き、君子と共に盆栽に水やる君子文子打連れ近き川邊に凉みす、繁したる松の木陰に凉しき風を入れつゝ面白き烈女物語などして十時頃漸く家に歸り日記をつけ夢路に入りぬ

朝　わかめ味噌汁　玉子やき香の物
晝　煮豆茄子ごまあへ　うり味漬
夕　ゆば椎茸澄汁　ビステーキ　馬鈴薯につけ

岡山縣　小山松枝

八月十八日　昨夜夜業までに、やう／＼裁縫も終へたれ



ば、朝より大掃除なさばやと思ひしに、きのふ興家より頼みこし、小女の衣服を既にさし迫りて、家事のいそがしければと斷りしを、小女來りて泣く、げに、いく日前より樂しみて、せつかくたらちれに新調してもらひながら、明日の祭禮に着ること能はざるは、いかに殘念なるらむ、あまりのいとほしさに、掃除のことは母上にゆづりて、仕立やることになしぬ、喜ぶこと限りなし。けふは初秋風通ひ來りて、日中もいと心地よし、なき祖父君の命日なれば、御さかな野菜物菓子など備へ、墓參をなす。夕されば、母君とともに茄子葱芋等に水を注ぎ、後湯に入りて、晩食をなす。母君は所用ありて高塚へ赴きたまふ、わらはゝ祖母君の御腰を少しもみて、十時床につく。

十九日　例の男水汲に來る、祭禮にて一般水の使用多き故ならん、井水少なく漸く汲來りぬといふ。兄君御旅行のため到着せざりし女學世界來る、既に避暑地より御歸り遊ばされしか、東京よりなり。目次と口繪のみ見て、掃除に取りかゝれば、理髮人來り、久々にて結髮す。八百屋魚屋も來る。祖母君の御足のなやみ、けふ此頃おこたりしは何よりもうれし。神を祭り、十二時例の鮨其外二三種とゝのへて、晝飯をなす。それより花をさしかへ、少し暇を得て、けさの雜誌をひもとく、精力の不經濟、女子と休育の有益に、細君の處世法面白かりき。はや御社は賑はしく、近隣の小兒は行きつ戻りつなしてよろこぶ。夜、すゞみかてら行けば、花席あり、美しき草木のかずく〳〵二十瓶はかりありて、見るさへ心も淸々しぬ。御社を下れば、種々なる飮食店小間物其他所せきまで並べたてたるに、參詣の人は次第に多く、げに立錐の地なしとかいひけむ樣にて、足の運びも自由ならず、暑さはあつし、堪へかたくて歸りぬ。かへりても聞ゆる大鉦鐘大鼓の音、さわかしとも騷し、やがて十時前、かう〳〵しき大鼓のなりひゞくは、御田植の初るならん、人々はそを拜せんとて、遠方より態々詣づるなりけり。



松山君子

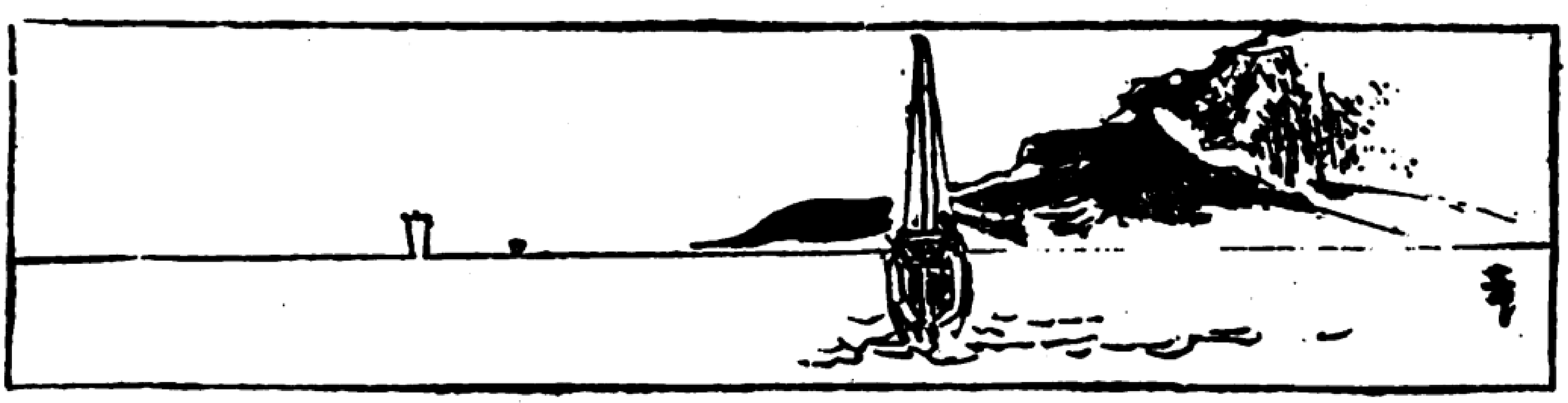
東の空やう〳〵白むと覺ゆる頃、ふと夢さめぬ、今暫しとは思ふものから、家内の起き出る迄に朝餉の用意調ひたる日の心地よきを思ひ返しては、何となう樂しくて、急ぎ床を出づ。茶の間の掃除果てし頃、珍しくも淸の起き出たり、實に今朝咲べき朝顏の、昨夕五つ計りつぼみを、もち居たればなりけり。空はよく晴れたり、明後日よりは學校の業も始まるに、さすがに休暇中目もくれざりし、教科書を取り出でゝ、見るに物理等習ひしや、否や、それだに、記臆せず、今更恐しけれどせんなし、さはれ家内の冬着も手一つにて縫ひ終へたり、布團の洗濯も手傳ひたれば、炎熱燒くが如き夏の日も、我はよく働きたるなり、これよりこそ、學業に務め勵むなれ等、心密かに、自重して止みぬ。午後暑さいみじければ「すいてん」を作る、淸響をたてんとすれば再三辷り落つるに、

いとじれて「こいつはすべり半美だ」と云ふいとおかし。夕食後家にありて敵攻めにあふも能なければ、清の誘ふまゝに停車場近傍を散歩す、知らず何虫ならんか、清は數多捕へて歸りぬ、疲れし後まで垣根のほとり哀れ啼きしきりぬ。

朝　白粥　小鯛の薑味汁　冷し豆腐
晝　玉子の牛蒡　にいも茄子の煮〳〵　夕　香のもの
梅ぼし

大阪　池田英子

九月四日晴　五時起床例の如く庭に立ち出で池の緋鯉に餌をあたへつゝ打ながむる折から、下女出で來り「只今これが參りました」と片手に持ちし本を我手にわたし母家の方へかけ入りぬ、嬉しき事かな何處よりかと見れば箱根におはするなつかしの君より女鑑二部送り參られ、取る手もおそしと先づ口繪記事裂目を拜見せしに誠に面白くくわしくは後に拜見せんと手文庫へおさめ置きぬ、朝飯後直に讀書をしたゝめ投函しぬ、母上の仰にて兄上の單物を縫ひ始め午後四時頃仕上り、早速母上にお目に懸けしに「こは早やき事かな」とほめ給ふ誠にうれしく思ひぬ、父上今に京都へ御越し相成との事夕飯の用意に取かゝり六時半の列車にて上京し給ぬ、用事も終り部屋にて女鑑を讀み始じむ和歌短歌いづれも我か力のおよばぬところ我が我ながら恥しく成りぬ、井口あぐり子の米國



女學生の生活など餘念も無く讀み居る内早九時を打ちければ時のうつるをうらみながらも寐に就く

九月五日晴　定刻に起床、朝飯後下女の裁縫を手傳ひつゝ互に己が好む事己が好まざる事など言ひ合ひつゝ、十時頃となり下女は午飯の用意とて母家の方へ行きぬ、後は一人箏歌口づさみつゝ裁縫なし居る内十一時登く終りし午飯を食す午後神戸伯母樣より御手紙いたゞく別にかはりし事なけれどもいつもながらの御やさしき御言葉身にしみうれしく思ふ直に返書さし出す今夕は母上の御友達が久々にて御越しとの仰せ故床の插花をさしかへる、待ちに待ちたる女學世界は來れり、讀み始めんと思ふ折から母上が御うわさし給ひし御友達御越し夕飯の川意もいそがはし八時頃夕飯終りぬ母上箏一曲御客人に御聞せ申せと仰られ耻しながらも松竹梅一曲たんじしに御客人殊の外御氣にかない非常にほめ給ふ心ひそかに打よろこひぬ今夜は御一泊との事十時客人と共に寐に就きぬ

美濃　馬淵婦美子

八日　五時半に起き出でゝ例の如く面清め後髮を英吉利卷に結び早より目覺め居りし稚子貴衣服を著へ下女に托しなき母上曾の君と共に朝食をなし後茶を出し進め樂しく物語りなしゐる折しも下女の牛乳來ませりと告ぐるにより取り來りて煮其より湯を使ひて化粧し稚子を連れ來て牛乳を飲ましめしにまたやす〳〵と眠りければ與の風

通りよき室に伏させ女學世界をんな女學講義などとり／＼讀みぬ三時間計り經し頃兒の目さめければ乳與へ小兒車に乘せ庭前を散歩す暫時鉄縫なし居ると早村々の寺の晩鐘ひゞきければいそぎ道具かた附け兒を入浴せしめ床に付かせ皆々打揃ひ夕食を終り入浴をなし箏曲を温習し冷し置きし梨子瓜を食し、十一時頃床に就きぬ今日の料理。朝茄子味噌汁蜜がらと新芋の煮物、香のもの、晝、蛤潮員、しゞみ貝味噌汁。夕食、生卵子。鯖の味噌汁。香の物

静岡　竹内きん子

八月廿七日　五時起床、今日も相變らず好天氣なり、父上が朝夕ごたんせいにて、蟲頭を盛りと咲ける、朝がほ今朝は一番多く咲きたり、皆さん早く起きてご覽なさいと云ふに、弟妹もとびおきかほを洗ひて朝がほを見に來る、どうも美しいまあきれいねー、と口々にほめ立てぬ今朝はじめて咲ける獅々咲きの紅白しぼり中々美しとて皆々感心したり其他八十種計り蕊葉の間に咲きみだれ中々立派なり、父上はほゝ笑まれつゝ札紙と硯を持ち來られよきものは種をとるため札をつけなどし玉ふ半時計りあれよこれと朝かほの品さだめしつゝ朝風に心もすが／＼しうなりぬ、食事終りて弟妹學校へ出しやり妾は浴衣を二枚洗ひて昨日縫ひ始めし母上の明石をぬひ出しぬ折から東京の姉上より舟状來る急ぎ開封なせば姉上は御無事のよし安心しぬ又いつも御親切にいろ／＼御教訓心にしみ忘れまじ四時半頃早物やう／＼出來上り母上のよく出來しと仰せられ何よりもうれし五時より母上のお手つだいして夕飯の仕度なし一同入浴なしさて打つどひて樂しき夕食の膳に向ひぬ下女の手傳して臺所をかたづけなどすお向ふの花子さんも來られければ皆々涼臺へ出でしに

八日月のいと清くも涼しげに西山にかたむけるねもいはれぬ、ながめなり妾手風琴ひけば花子さんも弟妹も、「むかしーむかし浦島は」と聲を合せて歌ひぬいろ／＼の軍歌唱歌をうたひ居るまに月は山に入りければ我等も家に入りぬ花子さんも歸られた弟妹はいねたれど妾は姉上へ返書したゝめて後日記をつけて十時半れむりに就く今日の

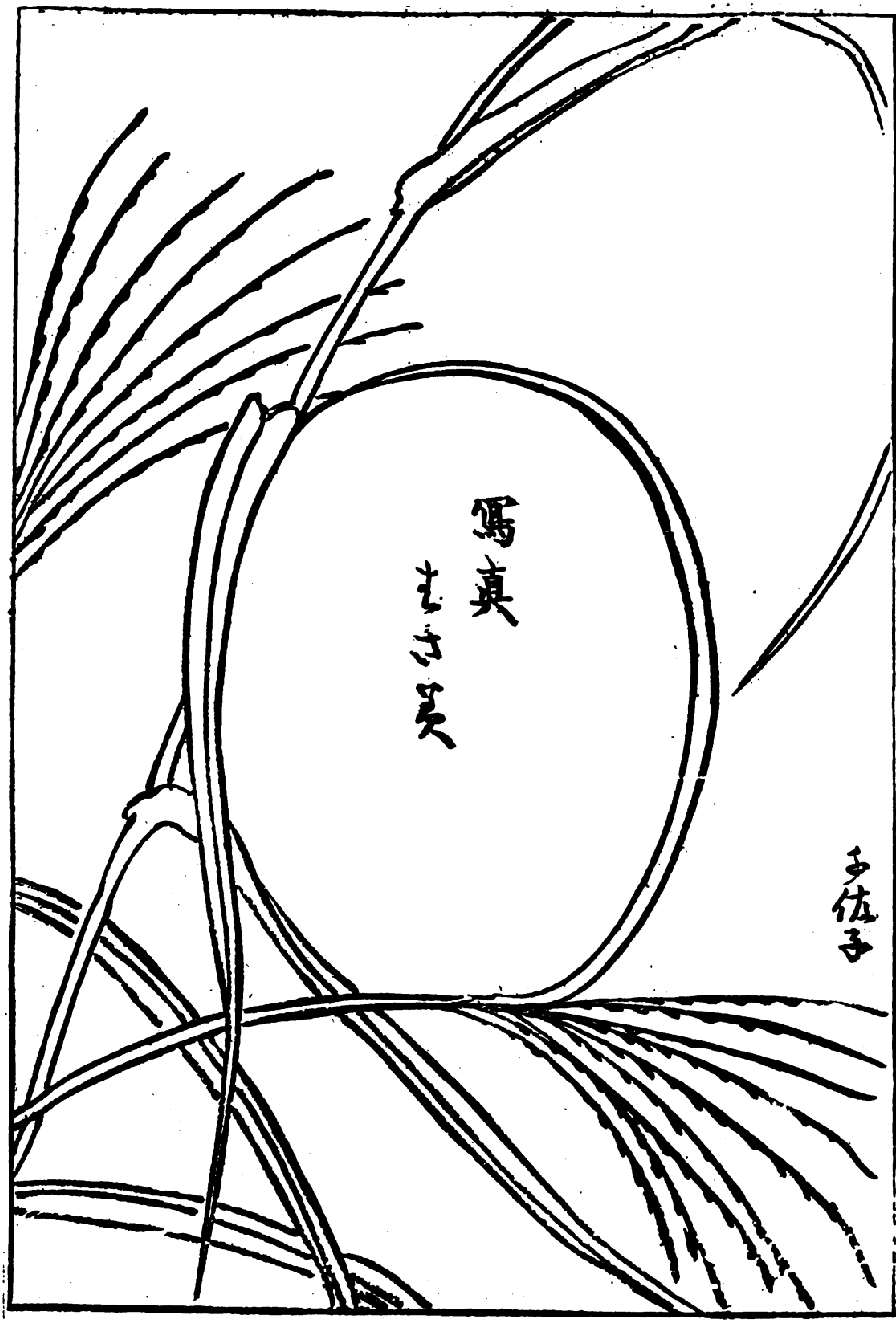
料理は

朝	つまみ菜味噌汁	生玉子	香のもの
晝	新里芋甘煮	茄子いんげん	しいたけの汁
晩	鯵のしほ燒	鮎の甘露煮	菜のひたし物



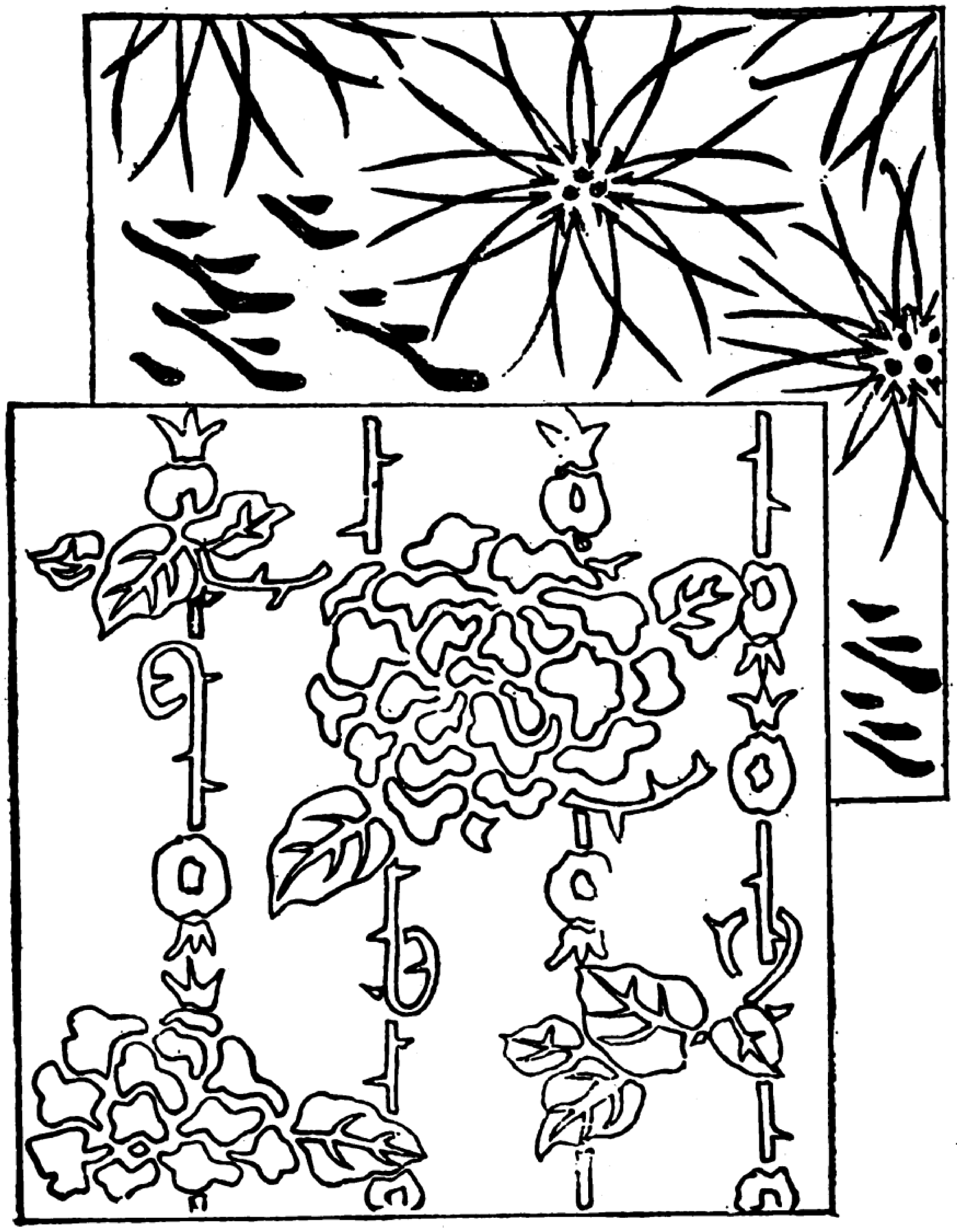
岡山　古本純子

九月四日　五時半離床、明日は舊暦の盆のことゝて母上兄上の其準備いそがはしきに引かへ明日は盆だと言つて踊りつこして喜ぶ子供の無邪氣なことよ、妾は母上の盆着を縫ひ給て十時頃弟引きつれ程遠からぬ琉球池に蓮採りにと出で行きぬ蓮は今を盛りと花をひらきつ葉にたゞへたる水は恰も銀塊のやう、涼しく吹き渡る風にゆられて左に右にころがるさまの美しさ野口小蘋先生の畫帝そ


寫眞
まさ子
多佐子

模樣

不老長春



耕霞女史畫

のまゝなり妾は汀に生ひたる蓮二三枝手折りて歸り佛壇を淸めてそを供へき、今日は生花の稽古日なれど色々忙しければ休みぬ。午後母上の手傳して障子繕ひ燈籠など張りかへぬ後前栽の菊に水そゝぐ。大方用事もすみし故離坐敷なる妾の書齋に入りて今日の新聞女學世界などひもとく大町先生の婦女觀中村女史の貴婦人の嗜好など面白くよまれぬ、又先號の岡山孤兒院を讀み妾は石井氏の慈悲ぶかきに感じ思はず涙の睫毛を傳うて出するをハンカチもて拭へば傍の弟「姉さん何んで泣くの！」と云ふも愛らし。

名優の遠逝

演劇界の明星として藝術界の偉人として、其の名を海外にまで馳せたる古今獨歩の名優市川團十郎は去月十三日六十六歳の高齡を以て松風蕭瑟たる茅ヶ崎の別莊に眠るが如く逝けり、誠に此の人の死は演藝界に光明を失ひたるもの、斯界の人の痛惜はもとよりのこと、局外者たる吾人亦た涙なき能はず、葬儀は去る二十日青山墓地に於て霖雨蕭條の裡に催されたるが、式場、伊藤侯、櫻痴居士、左團次等の吊詞ありて、斯の偉人の死を吊ふ懇切なりき櫻痴居士の弔詞は即ち左の如し

かなし團洲の君、君はなどかう遽に浮世の舞臺を去らせ玉ひけるぞ此秋狂言の中幕にとて歌舞伎座重役諸君の依囑に應じおのれ小楠公の脚本をものし去し八月二十九日といふに君を茅ヶ崎の別莊に訪ひ朗讀に及びしに君は之を終り終りて天晴の名作かな此脚本を得つるからは我又十分に之を演ずべしと打悅ばれ衣裝は兎に角道具はかうにと凡その打合せを爲し玉ひ來月上旬には早く歸京して演習に取り掛り候ふべしとありてければ余も悅び暇申して東京へ歸りしが是ぞ永き世の訣別にてありける抑君は劇界に於る未曾有の神技ある名優世界に幾名と數へらるゝ大偉人にておはせし事は皆人の知る所なれば余が贅言もて之を讚美せんは畏し却りて君の名譽を瀆すの恐れあり言はで止みなんには如かじ但し君と余とは四十餘年來の舊交にして殊には歌舞技座の舞臺に與とり初めてより申し合する事も益深かりき演劇の立案に關しては互に意氣の投合せるよりして此十餘年が間新劇を作りしこと幾十篇たま〳〵成功ならぬもありしかども櫻痴が作は顯はれて團十郎の新劇となり團十郎の妙技は櫻痴の筆に出でゝ普く世上に取沙汰せられ凡は戰國の劇界に一種の新面目を出現し以て其進運を促したること公衆の知れる處にして其功績は專ら君の力にて候ひけるぞや此狀にて今五六年を推行きなば幾分の改良を一般の劇界に及ぼして長く貢獻する所もありぬべしと互ひに語り合ひけるにそれも今は徒爲とはなりぬ孤掌は嗚らず隻箭は力無しと申しつるやうに此後余は誰が爲にか筆を執らん但し古人の知音の友を失ひて琴の絃を絕ちたる如き例は余が今の境界にては成り難くなんあれば此後とても依囑あれば脚本をも稿すべきがそれも覺束なき限りにこそあれ熟ら今の劇界を見るに舞臺の古兵に聞へある老驥名優も倘世に存し有望の後進もあまた多ければ劇界は世運と共に發途の歩を進め妙技絕藝の人も袖を列ねて各地の舞臺に現はれんは疑ひもなき所たりされば余が拙き立案も或は是等諸優の技倆によりて非常の成功を奏することありぬべしされば其作の精神を十分に斟酌して之を言語動作に發表し作意と演藝と相合し些少の齟齬なしといふに至りては君去りて後容易く其人ありとも覺ゆ候はぬなりこれをおもへば古籠に貯へたる舊稿も小机におきける草案も今は君の紀念にてこそ候へ歌舞技座にては此春既に梅幸君失ひしさへあるに今また君に去られ參らせ宛然雙の柱を奪はれたる心地して重役の諸子も途方にくれぬる思の爲し悲歡の程も限り知られずなんある悲しい哉秋の花の雨に打たれて萎めるを見るにつけ初雁の空を渡りて鳴けるをきくにつけ先だつものは涙にぞあるさはあれども君の名響は千載の不朽なり余は拙き著作もそれと倶に永く傳はりて候ふべしせめての心慰めなり且は歌舞技座を代表し且は余一人の悲を表し吊ひなる詞も前後分よぬばかりなり

明治三十六年九月二十日と申す日に

櫻痴考拜　　福地源一郎

源氏物語梗概（三）

文學士　尾上柴舟

帚木に次いて、空蟬の卷來る。この卷は、直ちに前の卷を承けて、猶、紀伊守の繼母の事を說く。而して、其繼女軒端の荻を點出して、源氏と、こゝに、一場の滑稽を演せしむ。源氏年僅かに十七歲、而して此事あり。以て、平安朝時代の早熟の弊を見るべし。

空　蟬（光源氏、十七歲なること前の帚木におなじ。卷の名歌より取る。）

源氏、中川の家より歸る……小君に導かれて更に中川の家に赴く……源氏誤つて軒端の荻に逢ふ。

源氏は空蟬（伊豫介の室）に逢はで、其弟小君を傍にして「今夜、始めて、世を憂しと思ひ知りたり」など宣ひて、まだ夜深きに、出で給へり。されど、猶思し懲りず。小君に、「さるべき折を見て、對面させさせよ」など宣ひけり。小君仰を受けて、機會を待つに、その中紀伊守任國に下りて、女どものみ家に殘りたれば、ある夕暮、わが車に源氏を乘せて導きたり。さて、人の見ざる方より引き入れて車より下し奉りて。東の妻戶の脇に立たせ、我のみ、格子より中に入りぬ。此時中には、伊豫介の娘（空蟬の繼女軒端の荻）來て、空蟬と碁を打ちて居り。源氏、小君に、この事を聞きて、「兩人相對ひたるを見ばや」と思ひて、簾の狹間に入り給ひぬ。小君の入りたる格子は、未だ閉さず、屛風も、几帳も、暑ければ打ち疊みたれば、目を遮ぎるものなし。中には、火近う點したり。母屋の中柱の邊なるが、思ふ空蟬なり。濃き綾の單重を着たり。頭つき小さく、手つきも瘠々としたり。娘の方は、東向なれば、殘りなく見えたり。白き羅の單重、二藍の小袿を着て、

胸もわらはに、しだらなき風なり。色いと白く、よく肥えて、目許も、口つきも、愛敬滿ちたり。兩人は今や、碁を打ち果てゝ、娘「此度は負けたり。隅の處は幾何ぞ。」とて指を屈めて、十、二十、三十、四十など數ふるさま品すこしく下れり。源氏は、今まで打ち解けたる人のさまは見たることなければ、久しう見むと思すに、小君の出で來る樣子なれば、そと、出で給へり。小君より來て、「今宵は、例ならぬ人侍れば、まだ姉の側へも、え寄り侍らず。」など云ふ。その中、中には、碁いよ〳〵果てたるなるべし。人々別るゝ樣子なり。小君は、源氏の側にて、猶物がたりしてありしが此度は、妻戸を叩きて、中に入りぬ。人は、皆寢ね靜まりたり。小君、「まろは、此障子口に寢む。」と云ひて疊をひろげて臥したり。さて、しばし空寢して、火の明き方に屛風をひろげて、陰となし、そと、源氏を入れ奉る。空蟬は、源氏の、我を忘れ給ふを嬉しと思へど、猶、萬一の事もあらむか、と思ひければ、心解けても寢ねざりけるに、ふと、衣の香りのいと高ければ、顏を揚げて見るに、几帳の透間に立ちたまへる影暗けれどもいと著し。あさましく覺えて、何事も思ひ別れず、そと、起き出でゝ、生絹の單重、只一つを着たるまゝにて、逃れ出でたり。源氏は、入りて見給ふに、女は、只一人伏したり。衣を押し遣りて、より給ふに、身躰も肥えふとりて、空蟬にはあらぬやうなりよく見れば、こはこれ、娘の軒端の荻なり。されど、今更に、人違へと思はれむも耻かしく、空蟬の爲めにも、氣の毒なれば、「度々の方違も、たゞ、御身に逢はむ爲めなり。」など云ひなし給ふ。さるにても、空蟬は何處に隱れて、我をかたくなしと思ふらむ。かゝる、しぶとき人は、またとあらじと、思ひ給へど、猶、軒端の荻に「相思ひ給へ、忘れで待ち給へ。小君を以て消息せむ。」など契りて、空蟬の脫ぎ棄てたりと見ゆる薄衣を取りて出で給ひぬ。さて、小君と同車して、二條院に歸りたまひしが、空蟬の心の怨めしさに、寢ねられ給はず。御硯召して、疊紙に、手習のやうに、「空蟬の身をかへてける木の下に猶人から（人品／人殺）のなつか

しきかな」（我を厭ひて、逃げ隠れたるは恨めしけれど、猶、空蟬の人品は、なつかしとの意。空蟬は、殻によせていふ。殻は、かの小袿をいふ。卷の名、女の名、これより來る。）と書き給へり。小君、取りて懐にして、中川の家に行きぬ。空蟬待ち受けて、いみじく叱るに、小君いと苦しく思へど、かの御歌とり出でて見す。軒端の荻は、物恥しければ、我方に歸りたり。小君は來れど、源氏の消息も齎さねば、物あはれなる心地すべし。空蟬も、さすがに、深き御心に忍び兼ねて、御疊紙の端に、「空蟬の羽におく露の木がくれてしのび〳〵にぬるゝ袖かな」（空蟬の羽におく露の如くにひそかに我宿世の口惜しきを思ひて、涙に袖を濡すとの意）と書きつけたり。（空蟬終）

夕顔は空蟬に次ぐ。卷頭、まづ、六條御息所の事を叙し、以て、後段怪異の地をなす。而して、源氏の陋巷美人を得るを細叙し、而して、敗院々裡、幽鬼の襲ふところとなるを描きて、鬼氣滿幅、讀むものまた魂飛び、魄驚かむとす。而して、所々、軒端の荻、空蟬の事を陳べ、前卷と連絡せしむるところ、妙甚だし。

夕顔（源氏十七歳の夏の事、前の帚木空蟬の卷々におなじ。卷名、歌より取る）

源氏、大貳乳母の病を訪ふ……夕顔の宿を見る……伊豫守上洛す……源氏、密かに、夕顔の宿に通ふ……八月十五夜夕顔と某院に宿る……夕顔の頓死及法要……伊豫介空蟬を伴ひて國に下る

光源氏は、空蟬にかゝつらひ給ふとき、猶、先の皇太子の妃、六條の御息所に通ひたまへり。内裏より六條に行く途中、我乳母の大貳の久しく煩ひたるを訪はむとて、その五條の家に立ちより給へり。車入るべき門は閉ぢたれば、惟光（大貳乳母の子、源氏の臣。）を召して、開けしめたまふ。この家の傍に、檜垣新しく、簾なども、白く涼しげなる家ありて、愛らしき額つきの女ども、數多さし覗きたるが見ゆ。如何なる人の住居にや、と思して見たまふに、「きりかけ」（竪の木に、板を打ちつけたる垣やうのもの。）らしきものに、青き蔓の這ひ纏はりて、白き花うるはしく咲けり、「何といふ花ぞ、」と獨言ち給ふに、御隨身、「かれは、夕顔と申す花にて侍り、」と申す。「一房折りて參れ」と宣へば、入りて折るに、遣戸口に、女童出でゝ、白

き扇の、焼物の香に焦したるを出して、「これに置きて奉り給へ、と云ふ。時、恰も、惟光門を開けて出で来れば、請け取りて奉る。さて中に入り給へば、惟光の兄の阿闍利、乳母の婿の三河守、娘など来り居りて、御出を喜べは、尼も（病によりて、乳母は尼となり居れるなり）また涙を流して喜びけり。「幼なかりし程、数多ある人の中にも、御身をば、こよなく思ひき成人の後は、朝夕に逢ひ難ければ、心細く覚ゆるにつけても、永き別れの無くもがなと思ふ、」など、細かに語らひて出で給はむとて、前の扇を御覧ずれば、移香いと深く、懐かしきに、歌あり。「心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花（異本花の夕顔）（白露に、光をそへたる夕顔の花の如き君は、蓋し、光源氏ならむかと見るといふなり。心あては、おしあてなれば、源氏をさす。巻の名、女の名、これより来る。）いとをかしと思して、惟光に問ひ給ふに、「まだ知り侍らず」と申せば更に、下男に問はせたまふに、「揚名介（只名のみにて真の介の如く、国務を見ぬもの、乃ち、有名無実の役人。）なる人の家なり。今、主人は田舎に下りて、女のみあり。只、宮仕へ人、時々来り侍る、」と云ふ。さては「その宮仕人の仕業なり」とて御畳紙に「よりてこそ夫れかとも見め黄昏にほの〲見ゆる夕顔の花」（夕暮にほのかに見ゆる夕顔を、それと定めたるは、いかに近よりて、よく見るべきにの意）と書きて、前の御随身をして遣はし給ふ。かくて、忍びて、此處を出でゝ、六條におはしぬ。御息所は、元来、用意深く、け高く打ち解けぬ御有様なれば、夕顔の事も思ひ出でず。さて、明くれば、出でゝ、また昨夜の家の前を通り給ふに、いよ〳〵目とまり給ひけりさるほどに、惟光参れり。「かの家には、五月の頃より来りし人あれど、誰れとも知らず。人々かしづく様子にて顔もいとよく侍り。」と申せば、源氏「猶、注意せよ。知らでは、物足らぬ心地すべし」と宣ふ。かの雨の夜、下の下と人の云ひし住居なれど、此中に、思ひの外なる女あらば、をかしからむ、と思すなりけり。」源氏は猶、空蝉の無情を怨みて、軒端の荻にも、消息もしたまはぬほどに、空蝉の夫伊豫介上京したり。先づ、参りて、任國の事など申すと聞き給ふに、空蝉の事あれば、いと恥かしく思す。猶、伊豫介は、此度、娘は、人に預けて、空蝉は國へ將て下らむと云へば、

源氏は心悩しくて、今一度逢はむ、と小君を談ひ給へど、効なし。されど、空蟬は、さすがに、折々の御答などは、懐かしく聞えたり。」さて、秋になりぬ。葵上の方には、源氏の斷間がちなるを怨み給へり。六條御息所も、物を深く思す御性質なれば、源氏よりは、遙に、年齢も多く、(源氏十七御息所二十四)かく、夜離れゐるにつけても、思し萎るゝ事、様々なり。かくてゐる程に、惟光参りて、彼の家の事を申す。「かの人は、よく人に忍ぶるけしきなるが、一日、頭中將(帚木に出づ)の車の通りける時、すは、中將殿よとて、皆々、打ちさわぎて、出でゝ見侍りき」と云へば、源氏は、中將のかの雨夜に聞えし女(行衛も知らずなりし女)にやと思ひ當りたまふ。惟光、猶、「某も、彼の家の女に通ひそめて、案内は、よく知り侍り」など云ひて、遂に、源氏をも通はせ奉りぬ。さて、源氏は、夕顔に如何なる人ぞとも尋ねず。われも亦、名告りもし給はず。いたう窶したまへば、女もいと怪しと思へり。されど、源氏は、心留むべき程の女にもあらねど、深く、思ひ染みたまひて、いかで、かゝらむとまで思したれど、猶、人に知られむが口惜しくて、夜深く、人の靜まりたる頃、窶れたる狩衣にて、顔をも見せず、出入したまへば、昔談りの變化の様なり。若し、かくして、此人の逃げ隠れたらば、いかにしてか尋ね當てむ、と思せば、とく、二條院に迎へ取らむか、とも思したり。八月十五夜の月、隙多き板屋に漏り來て曉近くなりしなるべし。隣の賤ども皆起き出でゝ、さわめきたり。さかしだちたる人ならば、我住處を恥ぢて、消えも入るべきに、夕顔は、いと、大とかなる本性なれば、何とも思ひたらぬが、却て、罪なくみえたり。鳴神の如く踏み轟かす臼の音も白妙の衣うつ砧の音も、彼方此方に聞えて空飛ぶ雁が音、耳近き蟋蟀の聲、とり集めて哀深し。二人諸共に外の方を見出して、「いざ、此近き邊に行きて宿らむ、」とて隨身して、御車を引き入れさせたまふ。曉近うなれど、鷄の聲はなくて、御嶽精進(大峯詣りの行者)の行なふが聞ゆるも、様かはりたり。急ぎ出でゝ、輕らかに、夕顔を車に乗せ給へば、侍女の右近も同乘し

たり。其邊の、某の院に行き着きぬ。門に忍草茂りて荒れわたりたるに、霧も深く、露も繁ければ、袖も甚じく濡れぬ。夕顔は、いと恐しう凄しげに思ひたり。西の對に御座設けさせて下り給へり。、さてしばし打ち臥して日闌る頃、起き出でゝ、格子上げて見給ふに、いと荒れ果ゝ木立も繁り、庭も野となり、池も、水草に埋れたるなど、いと氣踈し。惟光參りて、御果物なと參らす。かくて、夕にもなれば、夕顔と共に端近う出でゝいと靜なる空を打ち詠め給ふに女はつと御側によりていと恐ろしと思ひたるさまなり。闇うなれば疾く格子下して、燈火參らせて、少しづゝ、物語りし給ふ。さて、宵過ぐる頃、少し寢入り給へるに、御枕上に、つと美しき女居て、「我をば尋ねも思さで、かゝる人を率ておはして、寵愛し給ふは、心外なり」とて夕顔をかき起さむとす、と見て驚き給へは、燈火も消えにけり。怪しと思せば、大刀を引き拔き置きて、右近を起し給へば、これも恐ろし、と思ひたる樣なり。「人召して、燭もて參れと云へ、」と宣へと、恐れて、え行かず。打ち笑ひて、手を叩き給へば、山彦のみ答へたり。夕顔は、戰き迷ひて、汗もしとゞなり。西の妻戸に出でゝ、戸を押し開け給へば、渡殿の火も消え果てたり。人召せば、院の預りの子、一人起きたり。「燭もて參れ。隨身にも、弓弦打ち鳴して、聲作れと云へと宣ひて、歸り入りて探りて見給ふに、夕顔は、息もせず。引き動かし給へと、嫋々として、生体なし。鬼に魘はれたるならむと、せん方なき心地し給ふ。とかくする程に、燭もて參りたれば、近う寄せて見給ふに女の枕上に、夢に見えたる女の形はのかに見えて、ふと、消え失せぬ。怪しく堪へ難けれと、つと寄りて、起し給ふに、はや、只、冷えに冷えて、息は、とく絶え果てたり。右近は、恐ろしき心地皆醒めて、たゞ泣き惑ふ。せん方なくて、預りの子を召して、「疾く、惟光を呼べ。猶、兄の阿闍梨わらば、來よと云へ。」と命じて出し給ふ。松の嵐木深く聞えて、風荒かなり。夜中も過ぎたらむ。梟の聲、いと恐ろしげなり。燈火はのかに瞬きて、屛風の上、此處、彼處の隈々、氣味惡

きに、物の足音、ひし〳〵として、後より鬼の寄り來るやうなり。とく明けよかし、と思せば、千世を過す心地し給ふ。辛うじて、鷄の聲遙に聞ゆる程、惟光も參れり。源氏は胸塞りて、ふと、物も言はれ給はず。しばしありて、「此處に、怪しき事あれば、阿闍梨に願立てさせ、誦經などもせさせむとて呼びしが、いかに」と宣へば、惟光「昨日、山(叡山)に歸り上り侍り」と申す。あまりの淺ましさに、君も泣き給へば、惟光も泣きぬ。孰れも若き同士なれば、せんすべも知らず。されど、「人の聞えも憚りあれば、君には、先づ、此處を出で、歸らせ給へ。」と惟光の云へば、源氏は、明け放るゝ程、御馬にて、二條院に歸り給ひぬ。惟光は、「東山の邊りに、知りたる尼あれば、其處にもて行かむ」とて、夕顏の死骸を上席に押し包みて、右近と共に、車に乘せ、己は、徒歩にて、從ひ行きけり。」さて源氏は、歸り着きて、御帳の中に入り給ふに、胸も痛み、頭も苦しく、身も熱ある心地すれば、我も空しくなるならむ、と思したり。日闌る頃、宮中より御使ありて、昨日より覓むるよし宣ふ。源氏、乳母なる者の病を見舞はむとて行きたるに、俄かに、失せたれば憚りて參らぬよし、申し給ふ。大殿にも、亦かく告げ給へり。日暮れて、惟光參りたり。「いかにしつるぞ、」と問ひ給へば、「明日は、日柄よければ、葬式せむ、と定め侍り、」と申す。「此事、尼(乳母)にも、妹にも聞かすな、」と口堅めて、猶、今一度、死骸を見ざらむは、口惜しかるべし。とて、狩の御裝束召して、馬にて、出で給ふ。道遠き心地するに、十七日の月さし出でたり。鴨の河原過ぐる程前驅の火もほのかなるに、鳥部山など見えたるが、物凄きも、今宵は何とも覺え給はず。おはしまし着けば、堂の中より、燈火の影透きて見え、女一人泣く聲す。外の方には、法師二三人、わざと聲立てず念佛をぞしたる。入りて、死骸の手を取りて、「今一度、聲をだに聞かせよ」と聲を惜まず泣き給へば、座に在る法師達皆、涙を墮しけり。右近に「いざ、二條院に來よ、」とて、樣々に云ひ慰め給ふほとに、惟光「夜は、明方になり侍り。疾く、歸りおは

しませ、」と申せば、辛うじて、歸り給へり。さて、二三日、甚う苦しがりて、弱り行き給へば、帝も、打ち嘆き給ひて、御祈禱などせさせ給ふ。殿の内の人は、云ふも更なり。大殿にも、驚き騷ぎ給へり。かくて、九月廿日の頃、やうやう、平癒し給ひけり。右近を召し寄せて、ある夕暮、物語りし給ふに、右近云ふやう「彼の君(夕顔)の父君は、三位中將なりしが、早う失せ給ひき。頭中將の、まだ、少將なりし時、見染め給ひて、三年許通ひ給ひしに、去年の秋、右大臣殿より、恐ろしき事云ひおこせ給ひければ、(頭中將の北方夕顔を威せしこと帚木に在り。)西の京の乳母の家に隱れ給ひしが、いと、見苦しかりければ、五條には、移り給ひき。」と語る。源氏頭中將の物語りに思ひ合せて、「少さき人(後に玉鬘と云ふ)ありと聞きしが如何にかせし。形見として我育くまばや」と宣へば、右近「そは嬉しく侍り。西の京にて、生ひ出で給はむは心苦しなど申す。」「年は、幾歳なりしか、」と問ひ給へば、「十九になり給ひけむ、」など答ふ。空打ち曇りて、風冷やかなるに、甚う眺めて、「見し人の煙を雲と眺むれば夕の空も睦じきかな」(見し人は夕顔煙は火葬の煙、夕顔の火葬の煙を、あの雲ぞと思へば、夕の空は、親まるゝとの意。)と口誦み給ふ。」さて空蟬は、源氏に強面かりしが、さすがに御心の程を忘れ兼ねて、御惱を問ひ奉れり。軒端の荻は、藏人の少將を通はすと聞き給ひて、小君を使として、「ほのかにも軒端の荻を結ばずば露のかごとを何にかけまし」(假りにも、契を結ばざりせば、少の恨みも、何につけて云はむと、少將と通ずるを恨みたる意。女の名これに因りてつく。)と宣へば、女も、御返事したり。」夕顔の四十九日は、密かに、比叡の法華堂にてせさせ給ふ。誦經、經佛の飾りも愚かならず。願文も、甚じく書かせ給へり。惟光の兄の阿闍梨、よく勤めたり。五條の家にては、夕顔の出でゝより音信無ければ、怪しと思ひて、歎きけり此家の女主人は、西の京の乳母の女なり、子三人あり右近は、別人なれば、知らせぬにや、とも恨みけり。」伊豫介は、神無月の上旬に、任國に下る。空蟬も、共々なれば、源氏は、種々の餞せさせ給ふ。彼の小袿も、還し遣はして、「逢ふ迄の形見ばかりと見し程にひたすら袖の朽ちにけるかな」(逢ふ事もや、と思ひて、それまでの形見にと、めし衣の袖

も朽つるまで成れりとの意。）女小君して、御返事せさせたり。冬立つ日なれば、時雨降り來て、空の氣色も哀れなれば、「過ぎにしも今日別るゝも二道に行く方知らぬ秋の暮かなし」（過ぎにしは夕顔、別るゝは空蟬。共に行方を知らずと、秋の暮れ行くにつけて云ふ。）と眺め給へり。（夕顔終）

化粧の秘傳

▲長き顔に化粧せんと思はゞ、首筋より耳までを中白粉になし、咽喉より腮までは厚くし、頰は薄くし、額の生へ下がりは低くつくり、耳の生へ下がりは、みじかに剃り上げて、顔の通りに薄く白粉をつけ、髮は鬢を張りて、髷は低くすべし、但し顔と耳に白粉の濃いと薄いが出來ぬやう注意すべし。

▲之に反して、丸顔は、耳のうしろより首筋を中白粉とし、頰は厚くし、額の生へ下がりは長く、耳ゝ前の生へ下がりは、長くするをよしとす、もし生へ下がり短かきものは、耳のたぶらまで、生へ下がりのある如くに、地を遺けて白粉をつけるべし。

▲鼻の高き女は、先づ額の口元の周圍ばかりに油を塗り、白粉を厚くし、鼻は至つて薄くすべし。

▲鼻の低き女は、眉の間より、鼻筋ばかりに髮つけを煉りこみ、鼻の兩方へ薄紅を引きて、暫くしてより白粉をつけるべし。

▲目の大きなる女は、上瞼と下瞼とに、よく白粉をつけ、眉を少し剃り上げ、そこへ紅をさすべし、目尻へ針ほど細く紅をさせば脇氣に見ねて釣合よし。

▲やぶにらみの女は、上瞼の處へ下紅をさし、目尻へ鬢つけを少しばかり塗り置きて、白粉をつければ、一寸目だゝぬなり。

▲低れ目の女は、下瞼より目尻まで、薄色に紅をさし、上瞼には少しの紅をさすべし。

▲唇の厚き女は、下唇ばかりに、よく紅をさし、髮つけをよく煉りて口の周圍にすりこみ、上唇にも、少し紅をさし、唇の内へかけて、白粉を濃くするがよし。

史傳

立志美談　二宮尊徳翁（二）

報徳生

▲父親の遠逝（獨立心の基礎）

翁が自助自立の人に成るべき萠芽は、父が病の床に横はつて居る間に著しく長進した。即ち其一は、寛政十一年翁が年十三の二月二日に、錢二百文を以て松苗二百本を買ひ、之を酒匂川の堤へ植えたと云ふことである。

而して其翌年即ち年十四の時は、翁が家へ一大不幸が見舞つた。と云ふのは、三年前から病の床に横はつて居た彼の父利右衞門が、妻子の眞心を籠めた看護も甲斐がなくつて、涼秋九月廿六日に四十六歳の壯齡を以て終に永世不覺の眠に落ちたことである。是の時の母子が悲歎と云へば、其れは實に非常なもので、弔ひに來た近隣のものは何れも覺えず貰ひ泣きをした程であつた。

其れから兎に角野邊送りだけはしたもの丶、其跡の慘狀は實に目も當てられない。たゞさへ貧困を極めて居る所に、主人が三年の間全く病床に在つて死つたのであるから、今は殆と其日の烟さへ立て兼ねると云ふ有様である。か弱い女の手で、漸く十四歳に成る彼を相手に、二人の稚い子供を養はなければ成らない。然し此は殆と能くし難い事であつた。底でよし女は、考へに考へた上、『三人の子供を殘らず養はうとすれば、殘らず飢えるより外はない。其れよりは一人を餘所へ遣つて、二人だけも無事に育てた方が可い。』と決心し末の富次郎を或る縁者の所へ抱いて往つて、哀求をして養つて貰ふことにした。所が、幸に縁者の某も之を承諾したので、彼女は喜んで家に歸り、二人の子供に

『是からは足手にまつはるものがないから、何んな事でもして二人を養はうから。』と話をし、其儘寢に就いた。然し流石は乳呑子を餘所へ置いて來たのであるから、心配に成つて〳〵とう〳〵其夜は一睡もしない。其次の夜も其次の夜も、又其次の夜も、殆ど同樣で、涙が枕を沾ほして居た。

或夜も同く寢に就いたが、母は頻りに涕泣をするので彼金次郎は問ふた、「母樣は何故毎夜御睡りなさらないのです。」母は言つた「末の子を緣家へ遣つてから乳房が張つて苦しくつて睡られない。だが、是は五六日も立てば直るのじやから別に心配しなくも可いよ。」と。然し彼女の言葉が終らない中に涙は早くも流れて居た其れを見て敏明な金次郎は言ふまでもなく母の心を讀んだ「赤子の一人位家へ置いたつて何程の事もありますまい。明日から私が山へ往つて薪を伐り、富次郎を養ふだけの入費は働きますから、何卒富次郎を家へ取戻して下さい。」と願つた。所が、よし女も大層喜んで「お前が其れ程までに言ふて與れるなら、私は是から往つて富次郎を連て來るから。」と曰ひながら起きた。『然し母樣今夜はもう夜半にも成ります。明日は私が夜明次第に連れて來ますから、明日まで待つて下さい。』と止めたが、母は『いや〳〵、お前が若年でさへ弟を養はうと云ふのであるから、母が夜半に往つて來る位は何の事でもない。』と曰つて、彼女は夜半に隣村の緣家まで往き、事情を話して末子を連歸り、母子四人が限りなく喜んだ。

▲貧困骨に徹す（貧乏は立志の母）

而して是からと云ふものは、彼金次郎は、朝は一番鷄が鳴くと起きて、遠い山へ往つて、柴を刈つたり、薪を拾つたりして之を賣り、夜は夜深けるまで繩なひをしたり、草鞋作りをしたりして、若年ながらも力のあらん限り働いた。そうして二弟を養育することやら、母の心を慰めることやらにあらゆる力を盡した。彼が自助的働きは、已に著しく發揮されることに成つたのである。

のみならず、彼は此の通りの劇しい勞働をして居ながらも、傍ら自ら敎育することをさへした。是より先父の存生中に多少文字を敎へられたことはあつたであらうが、彼は是の時山へ往復の途中で、「大學」一冊を懐にして、朗々と讀みながら歩いた。彼が修身齊家から治國平天下に至ると云ふ例の政治的道德的觀念は、少なからず是の時に涵養されたものと見える。又彼は是歲の十月に隣村飯泉村の觀音堂へ參詣をしたが、丁度其時一人の行脚僧が來て居て、觀音經を訓讀した。彼は其れを聽いて大に悟り、錢二百を與へて再び之を誦讀させ、是から遂に救世の大願を發するに至つたのじやと傳へてある。中江藤樹（近江聖人）が少さい時、「大學」の「天子より、庶人に至るまで一に身を修めるのを本にする。」と云ふ一語に感じて、志を立てたと云ふのと、はゞ同一の美談である。

此くの如く彼は、自ら働いたり自ら敎育をしたりして出來得る限りの力を盡したが、猶其窮乏がちであつたことは言ふまでもない。現に其翌享和元年々十五の正月の如きは、大神樂が來たが、之に與へる二十文の錢がなくつて、俄に不在のまねをしてやつとのことで免かれたと云ふ奇談もある。

▲第二の不幸（決心の臍を固む）

其れから斯くまで難義に難義を重ね、悲慘に悲慘を極めた彼が家は、何處まで執念く禍の神にまつらはれて居たもの歟、其翌享和二年即ち彼が年十六の時、第二の大不幸は卒然と其家を見舞つた。彼が母の川久保氏よし女は、是歲假初の病の床に臥して、十餘日の後四月四日に、僅か三十六歲の若さで歿して仕舞つた。是の時彼は天に祈り、地に禱り、晝夜帶をも解かずに看病をしたが、天定の命數は奈何ともすることが出來なくつて、終に母を喪ひ、最早天地間に恃むべきもののない孤の身に成つた。のみならず、財產にも全く見棄てられて、家財もないし、田地もない、たゞわばら屋が一棟殘つて、其中に三人の兄弟が泣いて居る計りであつた。とう〳〵親族が其を見兼ねて、稚ない三

郎右衛門と富次郎との二人は、母の里の川久保多兵衛が連れて往くことにし、總領の金次郎は父の實家である二宮萬兵衛が引取ることにした。一家は終に離散するまでに至つたのである。天下の悲慘も極まれりと謂はなければ成らない。

山上憶良の歌に「短きものを端切る」と云ふ言葉があるが、彼が家は其れにも似た不幸に遭つた。其は是の歳の六月晦に、酒匂川が又々大洪水で、利右衛門の借債を起して開墾をした田圃は再び殘らず流失して仕舞ひ、また舊の河原に成つたことである。橫虐存亡は嚴酷な敎課であるとすれば、是は餘りに嚴酷に過ぎた敎課であるのである。

然しながら眼のあたりに家の衰亡を熟視した彼は、少年ながらも是非父祖傳來の家を再興し樣と云ふ大決心を懷いた。のみならず、世間も人も我に辛いので、我と同じい世の不幸不運の人に深く同情を表し、不圖したことから觀音經に啓發されて、幸に家道再興の志が達したら、其餘力を以て民を救はうと云ふ大覺悟をさへ、朧氣ながらも起した。從つて彼は如何に嚴酷に過ぎる世渡りの敎課に逢つても、甘じて之を學ばうと云ふ勇氣に充ち〳〵て居た。

果して彼は嚴酷な敎課に、猶幾回も出逢つて居る。彼は一旦父の實家へ引取られてから、是の後は、毎日毎日朝早くから夕晩くまで父の實家である二宮萬兵衛の爲に勞働をし、唯夜に成り、人が寢る時に寢ずして夜學をした。然るに此の萬兵衛なるものは、頗る吝嗇無慈悲なもので、彼が夜學をするのを見て、痛く怒罵し、「貴樣を養つて置くには大分の費用がかゝるが、貴樣の働きだけでは何處へも引合はない。其れに夜學の爲め燈油を費すなど〻は、何たる恩知らずじや。全体貴樣は、家もなく田圃もなくつて、他人の扶持で漸つと命を繋いで居る身分で、學問をして何にする。」と叱り飛ばした。何たる無慈悲な事であらう。諺に言ふ、『倒れゝば踏まれる。』とは、此事である。

然し彼は毫も萬兵衛に逆らひ得べき身分でない、如何に無理でも非道でも平身低頭して其命を奉するより外

はない。底で彼は平伏して泣いて『悪う御座いました。』と曰つて、萬兵衛に詫びた。が、彼が志は猶決して奪はるゝとはなかつた。彼は天を仰いで洪歎して『自分は不幸にも若年で父母に別れ、人の家に養はれて居る身分である。然しながら筆道文學を心懸けなければ、一生文盲で迚も家を再興することは覺束ないから、是非學問をしなければ成らない。他人の世話に成りながら其燈油を費して學問をするとあつては成程濟まないが、若し自分の燈油で自分に學問をしたならば別に悪い事はあるまい。』と謂つて、今度は川縁の荒地を起し、其處へ油菜を蒔いて、七八升の實が取れ、大喜びで、之を隣村の油屋嘉右衛門の所へ持つて行つて種一升を油二合づゝに代え、そうして其れで夜學をした。是れだけは流石の萬兵衛も叱りはすまいと思ひの外、萬兵衛は又もや大に罵つて、『自分の燈油で夜學をすれば、己等の雜費には關係しない樣なもの丶、晝の働きだけで養つて置く入費を補ふに足りない貴樣じや役にも立たない學問をする暇があつたら、家の繩でもなふが可い。』と命じた。

▲家政の恢復（始めて運命を開く）

さてもしつこい無慈悲さではあるが、矢張り萬兵衛へ逆らうことの出來ぬ自分であるから、彼は、唯々諾々と命を奉じた。底で彼は夜に成ると、繩をなつたり筵を織つたりして、夜が更けて人が寢るまで働き、さて其後窃に燈火を點けて着物を覆ぶせ、光りが何處へも漏れない樣にして、そうして書物を讀んだり、字を書いたり、算盤をしたりして、鷄が鳴くのを聞いて始めて止めるのを常とした。是から彼は此くの如くにして艱難と奮闘したのである。

而して晝は、耕作をしたり、柴薪を採つたり、其間には酒匂川の堤普請に夫役を勤めて働き、得た賃銀は殘らず庄屋殿に預けて置いて、一貫文に成ると、其を殘らず村内の困窮者へ預けて呉れた。自身が非常な辛酸を嘗めて居るだけに、貧乏人へ對して厚い同情を有つて居たのである。

面して彼は、一方に一家再興の目的の爲には、此の通りの間でも矢張り出來得るだけの力を盡した。其手始は、享和二年彼が年十七年の春から、彼は休日毎に所有の荒地を開墾して、他人の捨苗を拾ひ、そうして之を植ゑた。所が其秋始めて自分の米一俵を得た。して此の一俵は實に彼が獨立自治の直接な基礎に成つたのである。

其れから彼は此の一俵を種子にして、漸々開墾をした田地へ植ゑ付け、三年目の文化二年彼が年十九のときには、遂に五俵餘の收穫を見るに至つた。底で其翌文化三年、彼は愈々年二十に成つたので、萬兵衛へ多年の間養育をして異れた恩を謝し、家へ歸つて幾年も空屋で、荒れに荒れた家を自身に手入れし、そうして獨りで住んで居て、日夜家業を勵んだ。之が結果は直に顯はれた所から、其の三月には亡父の質入をした下々田九畝十歩を三兩二分で請戻した。アヽ彼が自助の力は、とう〳〵彼をしてあらゆる困難を征伏して、一家の獨立を成させるまでに至つたのである。天は果して自ら助けるものを助けたのである。

其れから彼は、次第に家勢を恢復して、文化五年々廿二の時は、非常な苦心を以て得た田畑若干を渡し、以て母の實家たる川久保多兵衛の困窮を助け、其翌文化三年は二宮の總本家伊右衛門の跡を立てる爲に若干金を準備した。彼が私人としての生涯は、最早此通り成功を見たのである。

▲公生涯の始

二宮金次郎尊徳は、其双腕の外一の資本をも有たずして自治自立の人に成り、私生涯に於ては既に立派に成功の實績を示した所から、世間は彼を公生涯の人に轉じさせて、其成功の秘訣を廣く社會へ傳授させ樣と要求した。して其過渡に成つたのは、實に彼が自家の經驗を他人の上へ應用して、亦掌を運らす如くに成功の實績を示したことであつた。文化十年彼が年廿八の時から文政元年年卅二の時まで五年の間、服部十郎兵衛と云ふものゝ爲に家政の改革をしたのが其である。

元來此の服部と云ふのは、小田原藩の大夫で、一千三百石を領して居た人であるが、家計か不如意に成り、一千餘金の借債が出來て、之を返濟することが出來す止むを得す其職を辭さう歟と云ふ場合に成つた。所か柏山村の金次郎か其家を復興したと云ふ話を聞いて深く感心し、人の勸めに從つて彼に家道恢復の依賴をしたのである。が、彼は輕々しく之を承諾することは敢てしなかつた。と云ふは、輕諾は信を重ずる所以ではなくつて、眞に其依賴されたことを仕遂げて、依賴甲斐のある樣にし樣とするには、十分に其を仕遂げるだけの見込が立たなければ、引請けることが出來ないからである。

然し服部が誠意を以て之を依賴したので、彼は漸く之を承諾して、先づ服部に内外の事を擧げて彼に一任し一言も自分の意見を加へないと云ふことを誓はせ、僕婢には彼か指揮に從ふと云ふことを誓はせ、其れから五年で負債を償還することの出來る豫算を定め、服部自身には、食は飯汁に限る事、衣は綿衣に限る事、無用の事を好ではならぬ事と云ふ三箇條を守らせ、さうして自身に服部の家に居て豫算を勵行した。すると五年目には一千金の負債が殘らず消却されて三百兩の剩餘金が出來たと云ふことである。底で、彼は其内の百兩を不時の入用に應ずる爲めに別物として貯蓄させ百兩は妻君の艱苦を忍んだ賞に與へさせ、百兩は服部から彼へ贈つたのを、彼は受けて、殘らす之を僕婢へ分與し、又服部家の爲には、千石を以て生計を立て、三百石をば貯蓄すると云ふ方法を定めて、家へ歸つた。

是は彼が私生涯から公生涯へ轉ずるの過渡で、彼か一家で成功した方法を他人の家へ應用したのであつた。而して此の兩度の成功から、彼か方法は更に之を社會へ應用して見たいと云ふ要求が、社會から起つたのである。

▲興國安民法の施行

彼は服部家から家へ歸つて、文政元年年卅二の時に、

領主加賀守大久保忠眞から農業出精の賞詞を受け、文政三年年卅四の時に、四月二日飯泉村岡田某の娘歌女を娶り、領主から人民の爲に成ることを何なりと申立てろと云ふ布告があつたので、斗升改正の言上をして採用され、其賞に所持田一年の租米を免せられ、文政四年々卅五の時に、伊勢參宮をしたり、名主格に取立られて三人扶持を給せられたり、九月廿五日に長男彌太郎尊行を擧げたりして、二三年を過ごして居たが、文政五年々卅六の時から全く公生涯に轉じた。即ち彼が年卅六から安政三年々七十で歿するに至つた三十六年と云ふものは、全く公生涯を其生涯にした時代で、此の間に彼か獨得の立身致富術は弘く社會へ應用されて、興國安民法と成つたのである。

而して彼が所謂興國安民法を施行し、若くは施行に着手した重な箇所は、小田原家の分家宇津氏の采邑たる野州芳賀郡櫻町三村、旗下の士川副勝三郎の采邑たる常州眞壁郡青木村、細川長門守の領地たる常州筑波郡谷田部四十二村野州芳賀郡茂木三十七村、小田原藩大久保侯領邑、烏山藩大久保侯領邑、中村藩相馬侯領邑、常州下館藩石川近江守領邑、旗下の士小宮山小左衛門の采邑たる常州眞壁郡五所宮村、同く齋藤鍬太の采邑たる常州眞壁郡門井村、日光領野州今市等であるが、其中半途で廢めに成つたものもあり、未だ十分着手に至らなかつたものもあつた。が、最も先に着手した宇津氏采邑の復興と後繼者に其人があつた奥州中村領の仕法とは、實に見事に成功した。（未完）

屋舍の輸送

米國の西部諸州は尚は未だ渾沌として何れに大市街の端緒を見るべきや殆ど豫測すべからざるものあり之が爲一時諸種の事情を考究して此地點こそ有望なれと大に他日に期する所あり其住居又は店舗を築造したるものも忽ち其誤れるを覺りて他に移轉を思はしむるに至ること少からず是れにより自然其屋舍を全形の儘にて他の地點に輸送するの方法講ぜられ今や盛に之を行ふものありと云ふ家屋は鐵道二十哩、一時間十哩の速力に依り首尾よく之を輸送したり其屋舍は即ち法廷に供用されたるものにして高四十呎、間口三十六呎、奥行四十八呎、總重量七十噸あり四輛の貨車に搭載し前後に數輛の石炭を連結し之に毎輛六萬斤の石炭を滿載し之に鋼索を以て其屋舍を結び付け以て其目的を全くしたるものなりと尚ほカンサス州に於ては三層建の諸館鐵道に依ることなく平地の上を五輛の蒸汽車に曳かせて四十哩の間その移轉を行ひたる例ありカリフォルニアに於ては二十室を有する保養館な三百呎の崖上より引き卸し海灣の一岸より其對岸へ十哩の間曳船に依り輸送したることありといふ。

婦人と言葉遣ひ

今日の言葉遣ひは、非常に亂れて來た、是れは下等社會の喰へない者が、師範學校に入學して教員になる、この教へる先生が言葉遣ひを知らない、甚しきに至つては　陛下がかういつた、天子がかういてたなどゝいつて居る、ソコへ行くと内藤恥叟（今は故人となつた）などゝいふ人は、隨分古い人だが言葉遣ひには實に感服する、一昨年でしたが上野の社務所で關ヶ原軍記を二時間ばかり講つた、水も呑まなければ、草稿も見ないで、チャンと暗誦して居て、秀吉の話をする時には、家康の方の人を皆呼び捨てにする、家康とか本多とか、それから又家康方に就ての話は、主客を立てゝ秀吉方を呼び捨てにする、重野（安繹）さんなどの講義も正しひ、一体講談で言葉遣ひを教へるのが餘程宜からうと思ふ、私の娘は女學校を卒業して今では可なりの生活をして居るが、ドーモ言葉が違ひ、或時ドコへか行く時に、娘も行き姉も行く、私も行くのですが、私は前夜寢なかつたので、一寸假寢をして居つた、スルと娘などは先へ出て行く、車夫が旦那さまと聞くと、「旦那さまは寢て居らつしやる」といふ、いらつしやるは宜いけれども、寢てといふ言葉はいかにも卑しい、又自分の友達の事を亭主に向つて、「誰々さんが貴君によろしくと申しました」といふ、自分の友達の事を誰々さんがといつては不可ない、誰々がといはなければならぬ、「大層よろこんでいらつしやいます」といふ、ソレは不可ん、よろこんで居ましたでなければならぬ、或時火鉢を買ふ場合に、松本といふ叔父がある、私の叔父で娘には大叔父さんである、私に對しては叔父さんといはなければならぬ、しかし亭主に向つて叔父さんは不可ない、叔父といはなければならぬ、ソレで火鉢を買ふのを少しお待ちなすつた方が宜いとかういふ、亭主は何故かと聞くと、松本の叔父か「火鉢を呉れるといひました、といふ、ソンな穢ない言葉を遣ふものぢやないと戒めると、ソレでも自分の身内ながら丁寧に下さるといつては可笑しいから、呉れるといつたのですといふ、ソー言葉が違へなくては困る、「叔父が上げたい樣に申して居つた」といはなければならぬと言ひ聞かせたかういふ風に言葉の遣ひ方を私共の娘でさへ知らない、今では平常聞く言葉だが「かう〳〵して頂戴」などゝいふ、頂戴は結構だが、してはぞんざいな言葉で、前後が合はぬ、又能く手紙などに母上とか父上とかいふ事を書くがある、他人に對しては母で宜い、父で宜い、然るに其者に聞くと學校では一般にコー書くといふ、わからない話ではないか、ソレだから私共の目から見ると堪まらない文章がある、又今の女子の文字の下手なと、私共の母は今年八十七歳ですが、實に字を見ると二十代の人が書いた樣に上手に書く、又物の言ひ樣も、昔の人は切り口上でなく節をつけず、穩かで、實に聞きよいが、今では皆亂暴です。（江原素六氏）

科學

秋の野山

佐藤禮介

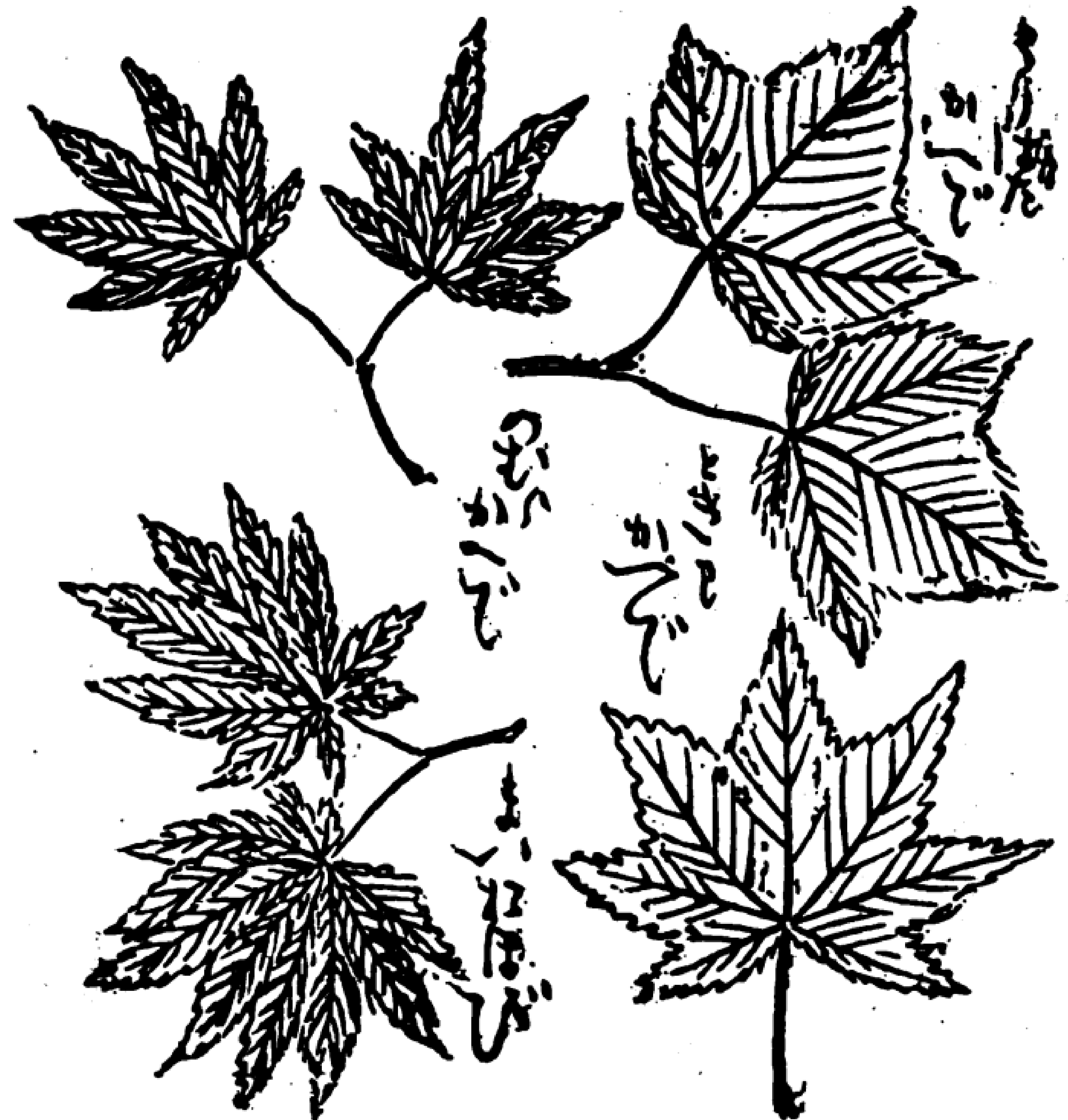
今は秋の最中でありますヽ風そよぐ雨の日には隨分肌寒く覺え重ね着の必要を感せしむることもありますがヽ晴天には所謂俗に小春とも名づけられる程で、空も澄み天氣も晴れ渡つて近き山、遠き峯などあり〱と見える有樣は一年中又となき好時節と思はれるのでありますヽ野山の景色も昨日とは稍趣を異にしまして萩、尾花、葛、瞿麥を始め女郎花、藤袴、桔梗なども、大抵末枯れとなり、稀に殘つて居る花も時々吹かれる寒風に色も褪め形も縮んで見る影もない憐れなものになつて居ります。暖國では今月になつても、猶二三種の蟬や螽蟖、蟋蟀などの哀な鳴音を聞くことが出來ますが東北の寒國では最早是等の虫の音も聞くことが出來ません。併し一方では色褪せたる七種の花もあれば一方には錦を裝ふ紅葉があります。秋の野に哀れを添ゆる虫の音も絶え果てる頃には又梢の上に小春を喜ぶ小鳥の音も聞れる、燕去れば雁來り、風は熟せる稻穗をして黄色な浪を打たしめ、霜は梢頭の柿の實をして紅彩を裝はしめます。よく考へて見ると秋の山野も中々に面白い趣があります。其れ故茲では秋の山野で目に付く種々の自然物についてお話を致しましやう。

（一）紅葉

春の山野に咲き揃ふ千種の花に比べて劣り優りのない程に美しいのは秋の紅葉であります、葉の紅くなる植物は槭樹ばかりではありませぬ其の外野葛、櫨、どうだんつゝじなども赤紅色となります、槭樹にも種々な種類がありましてのむらかへで、うりはだかへで、とき

はかへでなど數十種あります。又紅葉と單に云へば皆紅色になるかの樣に思はれますが秋のもみぢの内には濃い紅色なのもあれば淡色なのもあり樺色なのもあれば黄色なのもあります、斯樣にもみぢには色の種類や樹の種類が樣々あるので、是が枝に綴られ山に飾られた時には丁度錦を織りなした樣に見えるのであります。

然らば、どういふ譯で夏に緑葉であつたものが變色するのであるかといふに、一体草木の葉の緑色に見えるのは葉の組織の内に葉緑素といふ物を含んで。此の物質が緑色に見えるのであります、さて秋になつて季候がだん〳〵寒くなり霜又は寒冷なる露を受ける時には葉緑素が性質を變じまして緑色を失つてしまい、是と同時に葉の組立の内に紅色の液又は黄色の液を生ずるので、其の葉が或は紅くなり或は黄色になるのである。



（二）　秋の果物

草木の果物には夏に熟するものもありますが秋に成熟するものが最も多くあります、米の如き最も有用なものより梨、柿、の如き最も美味なるものに至るまで其の類甚だ多くあります、俗に秋を收穫の季節と云ふも亦尤のことであります、廣い意味で云へば稲の籾も果物の一であります、野外に散歩でもなさる人は稲籾の一粒を手に採りて御覧なさい、一番外にある堅いザラ〳〵した皮は籾殻であります、殻の先きに芒と名づくる硬い毛があります、殻の中には褐色な一

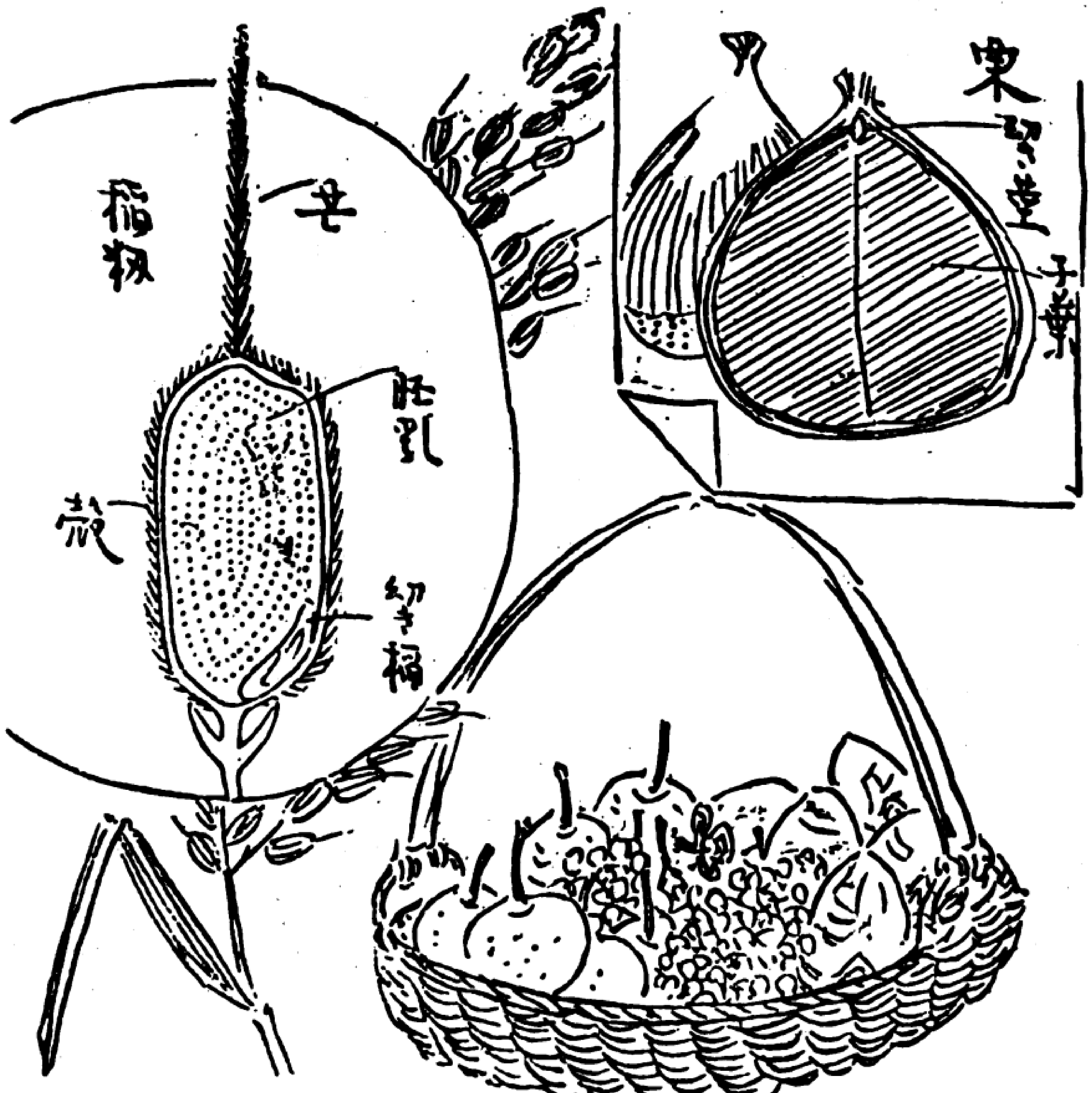
塊があります是即ち玄米なので玄米の褐色な皮は果物の皮なのであります、其の皮の内は大抵白い物で即ち胚乳でありまして其の一方の端には芽の様な小さな躰即ち若い稲があります、胚乳は其の幼い稲が翌年發生した時に吸はれる爲の滋養物なのであります。胚乳は重に澱粉を含んで居りまして吾々の常食とする白米は此の胚乳であります、人は玄米を磨臼に入れ、搗きて其皮と若い稲とを磨りつぶして胚乳だけを殘し白米となし是を炊いで食用とするのであります。米は其の親なる植物即ち稲が子の植物即ち若い稲に與へた滋養物であります、吾々人類は其の子なる若い稲を磨臼で磨り潰し其の若稲の生命を絶ちて吾等の命を繋ぐ爲の食物とするので、取りも直さず稲の子を殺して吾等の生命を保つのであります。古人が身を殺して仁を爲すと云つたのは稲籾の事に能く當つて居るといつても過言ではありますまい。

秋の果物多くある中で最も重なるものは柿、葡萄、梨、林檎、栗などであります。

▲柿——柿の實は味ひ甘美なるを以て賞せらるゝもので、果物の外面には果皮があつて其の内に水分の多い果肉があります、一箇の柿に種子の最も多くあるのは八箇でありますが誰も種子の多いのを嫌ひますので、だん〳〵變化せしめた結果、今では全く種子のないのもあります。柿の種子には外面に茶色な皮があります之を小刀で縦に割つて見ますると中は大抵鼠色な固い物で充たされて居りまして其の眞中に細長く白い物があります其の鼠色の物は胚乳と申すもので稲籾にあつたものと同じく子の植物の滋養物であります、又其の白い物は若い柿の木でありまして之を胚と名づけます。つまり種子が萠出さない前から既に柿の木が出來て居るのであります、言ひ換へれば柿の種子の中に小さい柿の木があるのであります、なぜ、此の白い物を若い柿の木と云ふかは能く之を檢めて見ると直に分ります、胚即ち若い柿の木には二枚の若葉がある、之を子葉と云ひます、細長い棒は若い莖で其の莖の下の端は若い根であります、斯樣に葉と莖と根とを備へて居

るのですから一つの柹の實に八つの種子があれば八本の柹の木がある譯です。今若し一本の柹の大木に千箇の柹の實が熟して一箇毎に八つゞゝの種子があると假定すれば此の柹の大木は八千本の若い柹の木を脊負つて居る譯です、柹の樹に大なる繁殖力があることゝ造化の仕掛けの巧みなこととは驚くべきものでありませんか。

柹の實の一方に俗にへたと稱する物があつて綠色で四片あります、是は花の時の蕚でありまして果物の熟するまで附いて居るのであります。



柹には種類が多くありますが中にも五所柹、蜂屋柹などは最も著名なものであります、五所柹は實の形太く扁くして稍々四角の形をなし大和國五所村の産有名であります、實の綠色なときは澁くて食はれませぬが熟して紅くなると味甘くして柹類にも比類ない程であります、蜂屋柹は美濃國蜂屋村に産するもの最も著しいものでありまして實の形や、長く末尖つて甚だ大きく重さ九十八匁許のものがあります此の柹は紅く熟して澁味あつて生で食べるには適しませぬから醂柹としたり又は皮を

剝き乾かして白柹としたり或は霜降りたる後に摘み採つて熟柹として食用にします、蜂屋の熟柹は實に甚だ甘味でありまして丁度蜜を舐るの感があります、

▲葡萄——葡萄にして秋の山野にある普通のものは山葡萄であります、庭園に栽える葡萄と比べると葉の形は似て居りますが山葡萄の葉の裏面には赤茶色の毛が密生して居り、庭園に植ゑて在る葡萄には左様の毛が澤山ありませぬことが違つて居ります。

葡萄の果實は房の様に澤山集つて居りまして熟した時には果物の皮の表面に白い粉が付きます、此の粉は林檎や李の實に付く粉と同じもので、蠟質であります、是は果物が風雨に晒されても其の種子の熟せぬ前に果肉の腐るやうなことのない様に果物を保護する効があるものであります、葡萄は生で食用にする許でなく或は葡萄酒に造つたり或は乾葡萄として菓子に用ひます、果實には紫黒色なものと青白色なものとの二種あります、我が國では甲斐國甲府の近傍で栽ゑて居る葡萄の種類が最も美味な果物を生じます。

▲梨——梨は野原に自然に生じたものは實が小さく木には刺が澤山に生じ、實の味も甘くなく液汁も少くて食ふに堪えぬものが多くあります、そこで人は種々に手入を致し培養をして美味なる大きい果物を結ばしめる様に改良しました、併し奇妙なことには改良した種類でも野原の瘠せた土地に植ゑると刺を多く生じますが之を庭に移して植ゑますると同じ刺から芽を出して其の刺が枝と變るのであります、刺は何の爲に生ずるかと云ふに野に自生して居る時には牛馬などの爲に其の枝葉を嚙み食はれるを防ぐ武器となるので、取も直さず自衛の機關であらうと思ひます、然るに庭園に植ゑられ、肥えた土地に栽ゑられ、人の保護を受くることゝなれば刺の如き自衛の機關が不用となるので、其の刺を變化して養分を消化する機關に換へるのであらうと思はれます。

梨には種類多くありまして實の大なるものは周圍一尺四五寸のものがあります是に落ちらるれば犬も即死する程だといふので俗に之を犬殺しと云ひます此の梨は

陸奥羽後の如き東北地方に産します、又丹後の國には一升梨といふ種類があります、是は一箇の實の内に水一升を含んで居る程だといふので極めて多汁な種類であります、又陸中、盛岡の近傍には核無し又種無しといふ種類があります、是は普通の梨の様に核肉の酸味な部分もなければ種子もありません、皮さへ剝けば果實の全部を食べることが出來ます、併し惜しいことには實が小さくて直徑二寸を出ぬ位でありますが味は隨分宜しくあります。

▲變種――種子の全く無い柿、及び梨はどうして繁殖するでありましやうか、蒔かぬ種子は生へぬは勿論、無い種子は蒔かれぬも亦無論のことで、つまり斯様な種類は挿木か接木などの方法で殖やす外、仕方がないのであります、太古人類が未だ梨や柿を植ゑることを知らなかつた時には決して種子のない種類がある筈がない、若しも在つたならば殖えることが出來ずに枯れて仕舞ふ譯です、然るに人類が梨、柿を山野から庭園に移し植ゑ培養する様になつてから多くの中に變種が出來ることがある、變種は、つまり其の類の不具物であります、植物に不具物のあることは丁度、犬、猫又は雞に不具者あると同様であります。梨、柿に若し種子のない不具物が生じた場合には大に人類の御意に適つたといふので之を絶さぬ様に或は挿木をしたり、接木をしたり、種々な方法で以て繁殖を計ります。是は變種の出來る一例でありますが猶此の外果物や野菜の類や、花菖蒲、牽牛花、山吹、櫻などの様な、美花を生ずる類には人間の意向に依つて變種を生じたものが澤山あります。

▲林檎――吾が國に昔から在つた林檎は實が小さく肉薄くて美果と名づけることが出來ませぬが西洋林檎は之に反し實の形も大きく多肉であつて甚だ美味な果物であります、樹の性質は寒地に適しまして北海道、奥羽、信濃、等の如き土地に多く栽培せられてあります。

林檎は果物として中々貴重なるもので、早きは其の年の夏から遲きは翌年の春まで殆んと一年間絶えず食用

とすることが出來ます、果物は生で食用にする許でなく果肉を磨り潰して林檎酒を醸すことが出來、是を乾して年中食用に供することが出來ます。

▲栗――栗は以上述べた果物と異つて多汁の實ではなく澱粉を多く含んで居る故、味も大に特別であります、栗のいが|は果物の若い間には堅く閉ぢて、用心深く內部の果實を保護して居ります是れは同類の繁殖する上に大切なことでありまして若し果物の若い間に他の動物に食はるれば種類が絕えて仕舞ふのでいが|で以て之を保護して居りますが旣に熟して果物の皮が丈夫になつてからはいが|が割れて口を開き果實を撒き散すもので、つまりいが|は果實の若い時の保護機關であります。

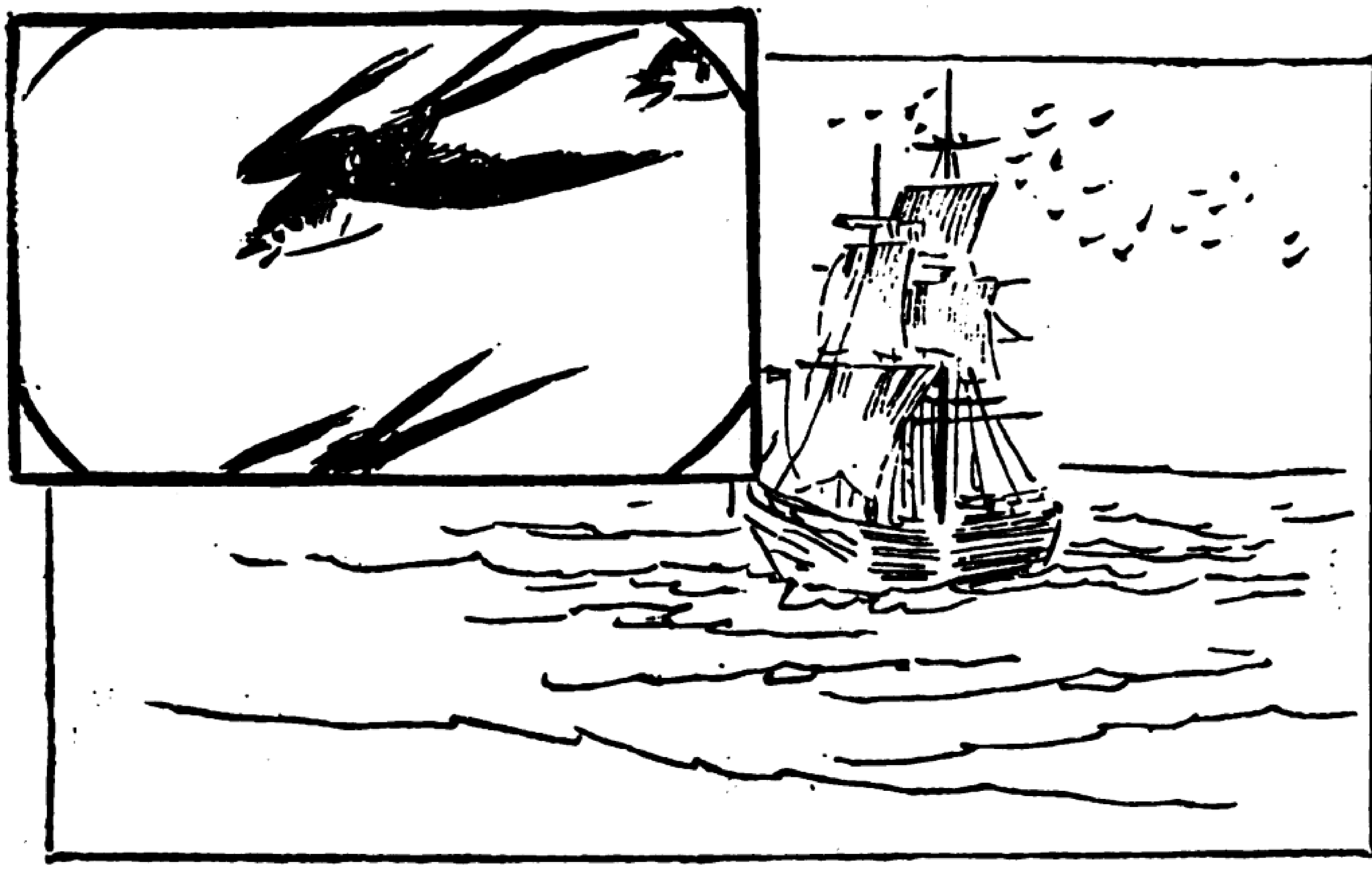
吾々の食用にする所は栗の實のとういふ部分でありましやうか、今一つの栗の實を採つて吟味する爲に、茶色な果物の皮と其の內にある柔かな澁皮とを取り除いて見ると、內には白い塊があります是は若い栗の木であります其の內、毬を半分に割つた樣な白色のもの二つあります是は栗の若葉で即ち子葉であります、子葉には澱粉や砂糖などを含んで居りまして吾々の食用にするのも、この部分であります、つまり吾々は栗の實の嫩葉を食べるので山に居る栗毛虫が栗の葉を食べるのと似て居るではありませんか、子葉の上部の尖つた部分には栗粒を連ねた樣な小さな體があります、是は若き莖でありまして其の莖の一端が若い根であります。

（三）　燕の行方

春季、梅、櫻の花過ぎる頃から或は麥畑や、稻の田面や、水の邊、柳の間などに扁々と飛び舞ひたる燕、或は電信線の上に疲れた翼を休めつゝ巧みな囀りをなした燕、年内の暖かな期節に吾等の四周に飛び廻つて蚊類や田畑の害虫を啄み食した所の燕は此の月の中に忽然其姿を隱しました、彼は何處に行いたであらうか。彼は此の國の氣候がだん〳〵寒くなり、食ふべき虫類も少くなるに心細く感じてか、毎年の例として遠く此の土地を見棄てゝ西南の方に旅立ちしたのでありま

す、燕をして人間の如く物言はしめたならば次の如く話すことでありましやう。

燕曰はく私が此の日本國に參りましたのは四月の中頃で、旅の道連れは澤山ありましたが九州で一群、中國で一群。京畿で一群といふ樣にだん〳〵連れの燕が巣を作る爲に別れ別れて少くなり關東に參つてからは餘程少くなりました、此の村に着いてから何所に巣を作らうかと其所、此所を搜した結果、遂に此の家に誰が巣か知れぬ古巣があるので私共雌雄で巣を構ひ始めたのであります、巣が出來てから春に六羽、夏に四羽の雛を育て其の間は朝から日暮まで飛び廻つて蚊、虻、蜻蛉の類を捕



り一方には農家の爲、害虫を除くことに力を盡し一方には巣にある雛を餓えしめぬ樣に骨折りました。幸にも春の雛も夏の雛も充分丈夫に生ひ立ちましたから是から旅立ちしても餘り疲れて倒れるものも少からうと思はれます。

十月の半頃になれば食物とすべき虫も少くなるにより遂に我が一家族十二羽の燕は棲み馴れた巣を跡にして西南の方に向つて旅立ちます。人間の方々は吾等の春に來る時には益鳥だとて迎へられるが秋に出立した後には來年まで、どんな境遇を經るのであるか一向同情を寄せて下さる人が少ないやうですが。此の國の平和な居所を去つて後は隨分悲慘な經歷をなすので

す、此の地を出で丶後毎日五十里若くは百里づ丶飛び行きますが旅の間にも餌にすべき虫を捕らねばならず、又雛燕は未だ旅馴れぬ所から、や丶もすると羽虫を追かけ餘り長く追ひすがりて往々家族の道連れと離れることがあるので、是を率ゐる親燕どもは中々容易の心配ではありません。

東海道、京畿を經て中國、九州に渡るまでは僅かの日數で參りますが九州の西海岸から支那の東部に渡る爲に支那海を横ぎる時は、其の困難苦痛、實に言葉に盡し難い程であります、陸を旅する時は疲れると、直に何處にでも降りて休むことが出來るのですが海上では幾ら疲れても水面に休まれず幸にも破船の舟板とか通航の船とか、小島とかに出逢へば大喜で休むことを得るのです、萬一、是等の休み場所も得ず其の中に日が暮れ丶ば最早生命の終りとあきらめる外ないのです、又晝間でも休み場所がないのに暴風にでも出逢へば全家族殘らず海面に吹き落され魚類の餌となることもあります、且つ數日間數十百里の海上を食物すら充分に攝らずに飛び翔けるのですから夏羽の大半は海面に疲れ落つるのであります。

幸にも斯樣な難關を無事に通過しても、さて行く先は支那の南方、印度の地方ですから又々難儀に出逢ふのです、彼の地の冬は温暖で食すべき虫類も多く生活は容易ですが何分熱帶に近い地方ですから猛鳥が甚だ多く、晝は鷹類に追ひ廻され夜は梟、角鴟の類につけ狙はれ其の餌食となるもの頗る多くあります、其れ故、日本の國から今十二羽の一家族が一群となつて暖地に渡つても、或は海上で死に。或は鷹、梟に捕られるので來年再び此の國に歸り來るのは矢張二羽位です、此の豊かな國では澤山殖えても旅で死ぬ數が多いので十年百年經ても全体の數は格別增しませぬ、今の旅立は多くの燕にとりては丁度死出の旅路の如きものですと。

涙流さん許りに親燕の嘆息して物語るを聞くであらうと思ひます。何故に斯く難儀を冒しても轉地するかは只彼等の天性である、古來よりの習性であるといふよ

り外わりませぬ。（完）

電氣の話

武田鶯塘

電氣の應用範圍

十九世紀末から二十世紀へかけて、電氣應用の範圍は著しく擴がりました、それは云ふまでもなく、X光線や無線電信の實驗を見ても解りますが、實際今の鐵道が、尚不格好な蒸氣汽罐の力を假りて居るのが不思議な位であります。

此電氣應用と云ふ事については近日一寸面白い逸話がある、尤もこれは實業の日本と云ふ雜誌にも出て居たやうに思ひますが、日本の魯敏遜と稱されて居る峯岸繁太郎氏が、米國へ行つて暫らく滯在して居ますると郵便事務が頗る鈍い、今日出した郵便が明日でなければ着かないと云ふ有樣であるから、氏は大に憤慨して早速某郵便局へやつて行き、其處の局長に面會して、郵便事務が極めて鈍いと云ふことを詰り、さて、「日本の郵便などは中々こんな遲鈍なものではない、貴國の如き郵便に在つては到底商業上其他一切の緊急を要する事項は信賴して委囑する事は出來ぬ、」と萬丈の氣焔を吐きました、すると局長は反つて意外の顏つきで、「貴國ではまだその樣な緊急な事項を郵便に托して居るのですか、我米國では既に貴命の如き事項は凡て電話電信の力を假つて居ますから、郵便事務はさまで機敏を要しないのです、」と云はれましたので、有繫の峯岸氏も再び口を開き得なかつたと云ひます、電氣應用の通信に比べたら、奈何に機敏な郵便事務でも緩漫極つたもので、此點に於て日本は米國に一籌を讓らねばならぬのであります。

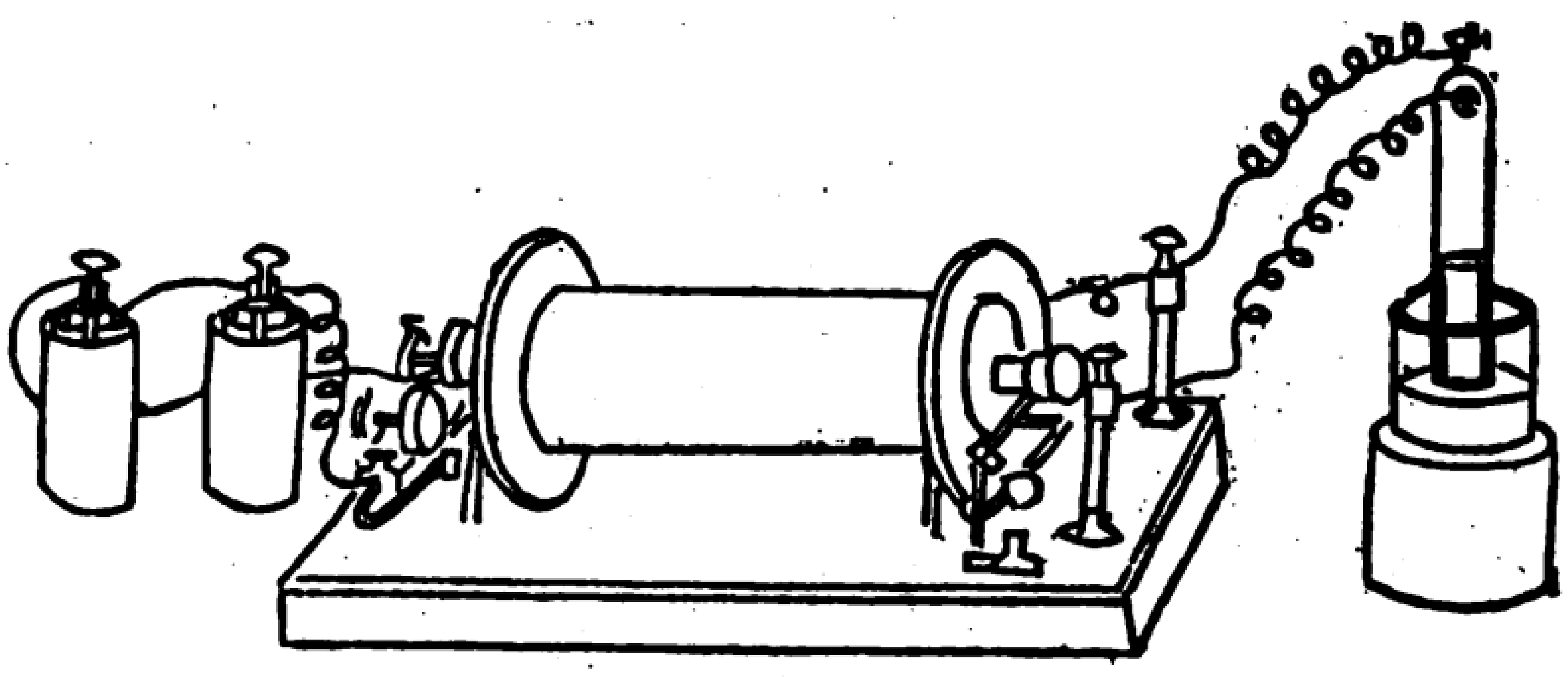
有望なる電氣事業

文明的交通機關として單に不細工な鐵道馬車を有して居た東京市は、二十世紀になつて、始めて電氣鐵道を見るの運に會しました、これで稍市の格好をなしたの

でありまするが、これと同時に無線電信も着々成功の途に就きつゝあるので、聞く所によれば長崎から臺灣へ通ずる無線電信の設備も大方は其緒に就いたやうです、兎にも角にも電氣の應用と云ふ事は著しく擴大して、此先き未だ十年や二十年は電氣の世界であらうと思ふと、此研究もまた忽にすべきでありません。

電氣の傳導

其處で先づ電氣の應用を試みる前に、電氣の發動と其傳導との學理を明かにせねばなりませぬが、電氣の發動と云へば、既に性狀を異にする物體が互に相觸れる時には、必らず電氣の發動を見るので、琥珀の電氣が紙片や藁を引寄せる中和力を見ても解りますが、其傳導は極めて不秩序で、物體の何物に於ても通ずると云ふ譯にはいかぬ、電氣が其電動力に依つて、物體の内部を通過するのは、恰も熱に於けると同一で、金屬には良く導かれるが、非金屬の多くには導かれぬ、殊に陶器とか、玻璃とか、蠟とか、護謨とか云ふものには全然通ずる事がない、即ち此處に、導體、半導體、不導體に別れるので、良導體には、金、銀、銅、亞鉛、白金、鐵、錫、鉛、蒼鉛、水銀、木炭、鹽類溶液、酸類溶液、水、海水等があり、半導體には、肉體、綿、木材、大理石、紙等があり、不導體として、陶器、油、毛、絹、封蠟、硫黄樹脂、護謨、ラック、エボナイト、ガタベルチャ玻璃等があると云ふ事が解るのです。



感應と波動

今假りに陽電體のものを取つて、之を直ぐに一の導體に近づけると其導體の内に中和する、陰陽兩性の電氣は、此陽電氣の作用を享けて、陰電氣は此陽電氣に曳つけられ、導體中の陽電氣は反撥されるものですから、導體内の兩性電氣は此處に別を告げて、陰極は陽電體に集り、陽極は反對の方面に奔

るのでありますが若し陽電體の代りに、陰電體を以てすれば、之と反對の現象を呈します、これが即ち電氣の感應と云ふのであつて、其導體を感應體、此電氣を感應電氣と云ふので、電體の電氣を强むれば强むる程感應も强く、電體と導體とが近かい所には、必らずまた强力なる異性の電氣が相對するから、こゝに始めて强い電動力を起すのであります。

さて電氣の波動と云ふ事でありますが、一體電氣には電流の外に波動と云ふ一種の勢力があります、それは丁度水の流れと等しいので、水も滔々として流れるばかりではない、波と云ふものがあつて、其波動を四邊の岸に漂はして居る通り、電氣の波動もまた、波紋をなして、空中を漲り渡るものであります、此電氣波なるものは、水の波紋の通り肉眼に見る事は出來ないが一秒時間に八萬餘里の速度を以て、一直線に進行し、反射、屈曲も自由に爲し得ると云ふ事は事實であります、それで水の波動は奈何なる物體に拘はらず、或障碍に遇へば、屈折するか、反射するのが常であるが、電氣の波動は、若し途中金屬乃至良導體があれば直ぐに之が爲めに遮斷せられるが、不導體即ち絶緣體があれば、決して遮斷せられる事はなく平氣で通過して行つてしまふのです、であるから電氣の波動と云ふ點に於て、良導躰は電氣の障碍を爲し、不導躰即ち絶緣躰は些の障碍を與へぬ事になるので、傳導と波動とは反比例の現象を呈するものであります、で、波動が實驗に必要なる一例は既に無線電信の發明を見ても明かであるし、X光線もまた此波動の力を借りて出來て居るのであります。

電磁氣と電氣熱

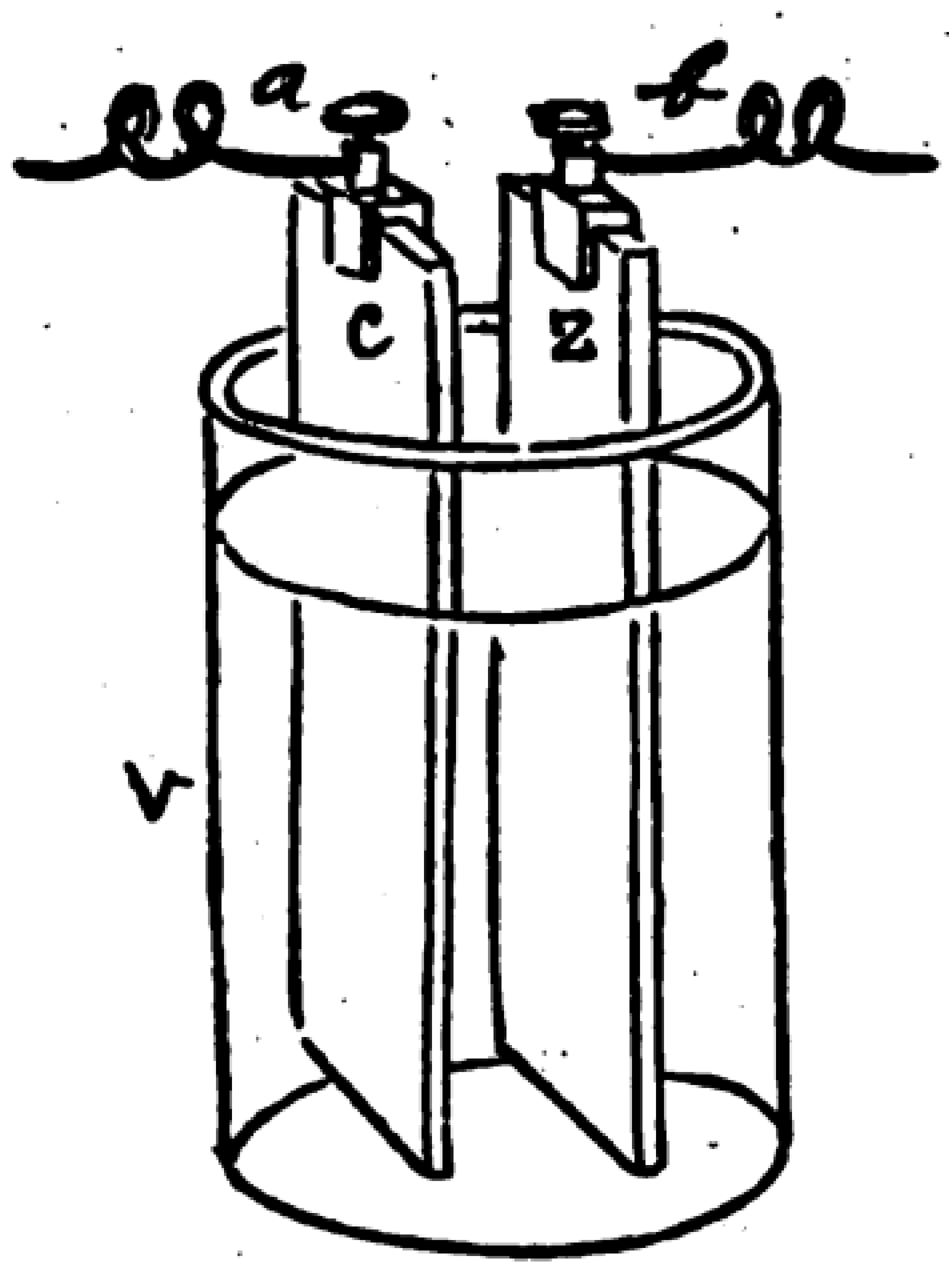
假令今陰陽兩極の電氣が中和するとした所でこれは單に火花を散らすか、異性の物体が相吸引反撥する等の作用に過ぎぬので、之をして直ちに機械力を生ぜしむる事は出來ませぬ、それには電磁氣と云ふものゝ力があつて、初めて電力を機械力に應用し得るのであります、そんならこの電磁氣とはどんなものであらうと云ふに、先づ磁石の理から說明する必要があります、一

體磁石と云ふものは、鐵、ニツケル、コバルトの三金屬に限つて、之を己れに引寄せる性質をもつて居るので、自個にはまた必らず、南極と北極とがあり、南極と南極との磁力は反撥し、南極と北極との磁力は相引繋し、北極と北極との磁力はまた相反撥するものですが、此電磁氣もまた天然の磁石と同様の反應を呈するので、磁石と電流とが互に相引斥する力を利用して、機械に應用し得るもので、此電磁石の構造を云ふと、軟鐵の棒を取つて絶緣導線を巻きつけ、この導線に電流を通ずると、鐵は直ちに磁氣を帶びるので、今現に各電氣工場に使用するダイナモと稱する機械や感應「こいる」と云ふ器械もまた此理を應用した發電器で、小さな電動力を膨大ならしめん爲の道具であります。そこで電氣と熱との關係であるが、此兩者の間の關係は頗る密接で、摩擦と化學的變化の力とを問はず、熱の力で電氣を發生することが出來まするし、又物體と物體との間に起る温度に不平均があると、冷熱兩所の間には必らず電壓の差を現はすもので、ヒスマス、コバルト、金、銀、錫、鉛、亞鉛、錻、銅等は、異性相摩する時には、必らず其熱から電氣を生ずるものであります。

電池の種類

さて此電力を生せしむべき機械、即ち電池には、水液電池と乾電池との別があつて、(摩擦機械を除く)、水液電池にはまた種々の構造があります、今其尤も簡便なもの二三を擧げて見ませう。

ぼるた電池——稀硫酸電池、電池中の簡便なるものはこれであります、稀硫酸、$(10H_2O+1H_2SO_4)$ に、銅と亞鉛とを浸したものでありますが、此電池は、電氣の起るに隨つて、水素瓦斯が熾に發生し、其泡沫がまた銅板面に附着するので勢發電を

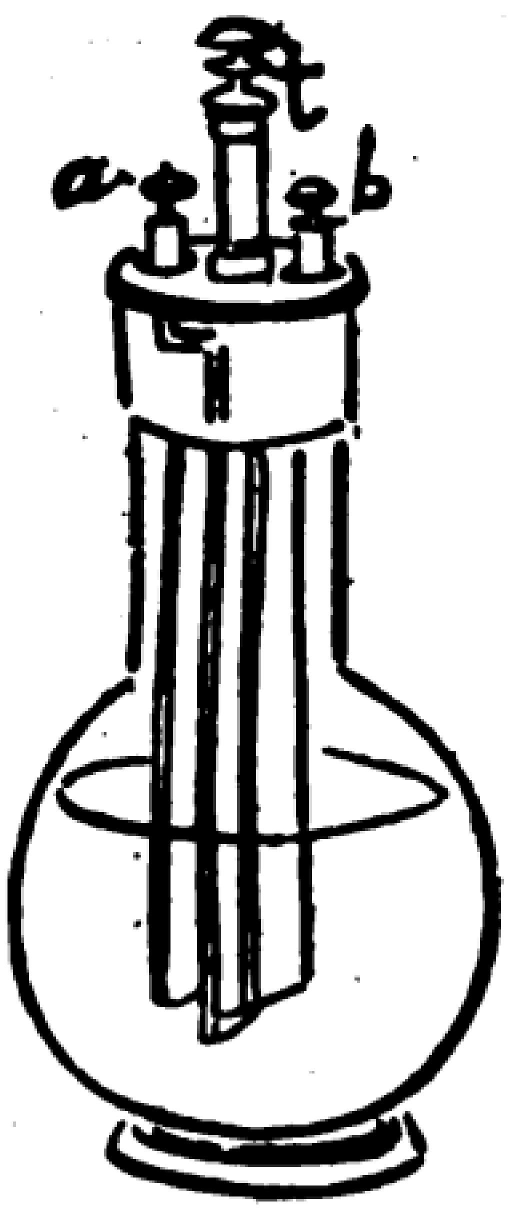


妨げますから、實用には無論ならぬのであります。

(圖中Cは銅Zは亞鉛Vは電池)

ぶんせん電池——ぶんせん氏の發明したもので、稀硫酸か、食鹽の溶液に炭棒と亞鉛とを浸したもので、白金を使用するぐろうぶ電池を改善したものに過ぎぬ、否高價なる白金を廉價なる炭棒に代へたに過ぎぬ電池でありますが、電動力は頗る強い方であります。

だにえる電池——だにえる氏の發明したもので、金屬には銅と亞鉛とを用ひ、水液には硫酸銅の飽和溶液乃至は稀硫酸を用ひるのであるが、電動力は大抵一〇乃至一、一であります。



重くろむ酸電池——一個の硝子罎に「れとるとかわばん」(瓦斯製造中れとると中に生ずるもの)と亞鉛とを置き、水液には重くろむ酸加里二と硫酸一と水二〇とを混和したものを用ひるので、「ぼるた」電池の如き分極作用を起して。水素瓦斯の發電を妨げることが尠ない、「ぼつげんどるふ」氏の發明にかゝるので、簡單な實驗を行ふには此電池に限ります、此他にも未だ五六の電池があるが、以上のものに比べて裝置も面倒であるし、藥品にも注文が多いから、電池はこの位にとゞめて置きませう、(圖中aｂはかわぼんｔは亞鉛版です)次は

乾電池及び蓄電池

でありますが、これは水液電池に比すると、携帶に便利で、又使用にも簡單である所から、懷中電燈や、電鈴などに使はれるので、所謂「れくらんしえい」電池を改造したものに過ぎぬ、即ち「れくらんしえい」電池は、鹽化安母紐謨か食鹽の溶液に、二酸化まんがんと炭素の粉末とを浸すものでありますが、乾電池は此理を應用して鹽化安母紐謨液體の煉物を亞鉛の箱中に詰め、中央に炭棒を挾み、煉物の上を更に鹽化安母紐謨の溶液を石膏に含ませたものを詰めて造るので、この電流を傳導體へ通すると、炭棒は陽極となり、周圍の亞鉛箱は陰極となるのであります。

又蓄電氣と云ふのは、一反摩擦乃至化學的作用から起

づた電氣を一器に蓄へて、需用に應じ通ずる裝置で、謂はゞ電氣の取次に過ぎぬのでありますが、この器に蓄へた電氣は、別に面倒な裝置を要せず、任意使用される便利があるので、電燈會社等では必要缺くべからざる道具になつて居る、何故と云へば電燈は夜のものでありますし、それに隨分需用の個所が多いから、夜に入つて幾十臺のダイナモを回轉して、其需用を盈すよりも、晝の間に三四臺のダイナモを回轉して、市内各所の蓄電所へ電流を送り置けば、蓄電所の蓄電器は直ぐに此電流を蓄積し、夜になるとそれ〳〵需用の個所へ送り得る便利があるので、要するに蓄電池の効用は、其電流のえねるぎいを化學的えねるぎいと變し、更に放電するに當つて、再び電流のえねるぎいに變ずるのであります。

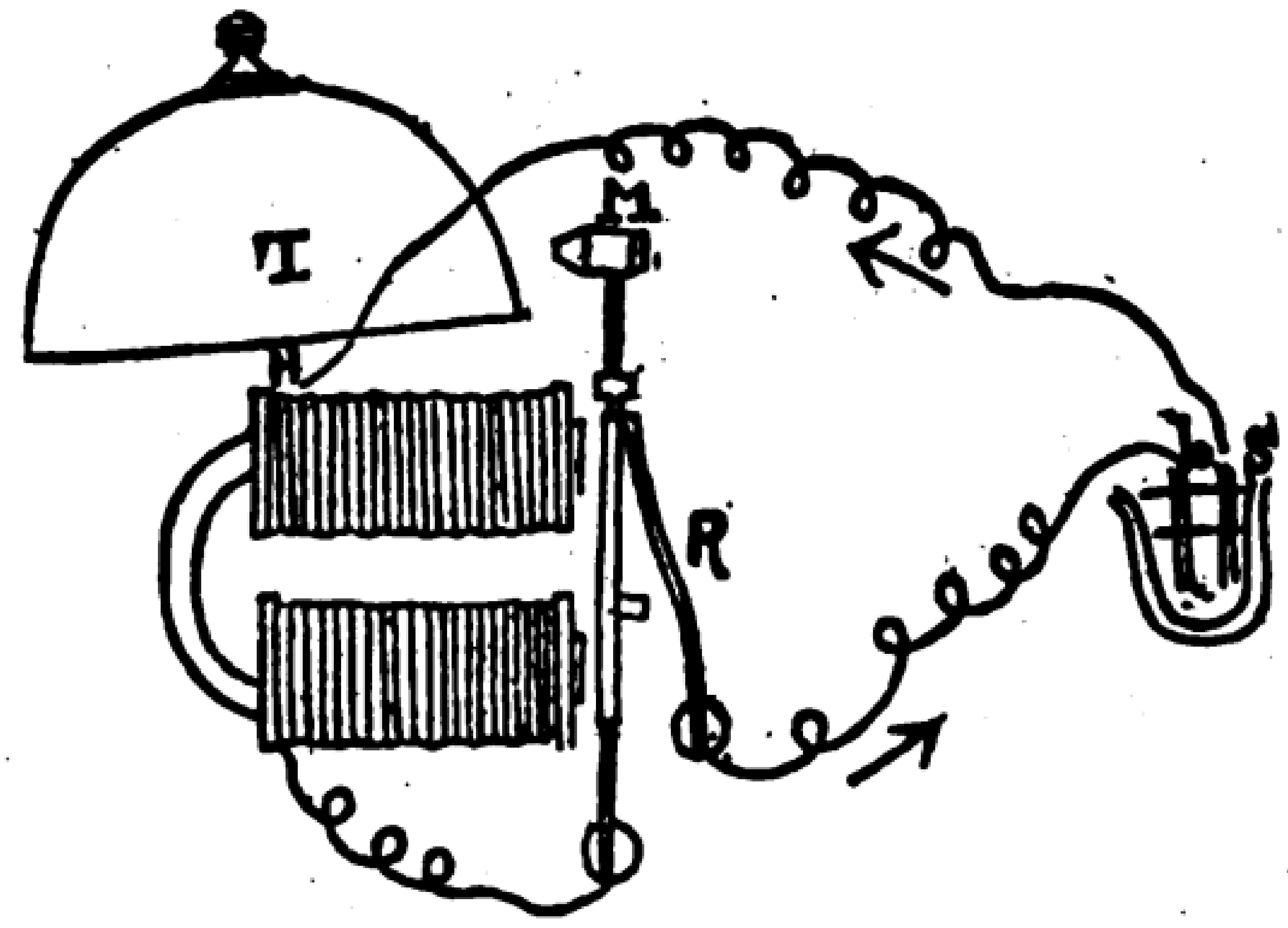
此蓄電作用を研究しやうと思へば、先づ一個の玻璃器に稀硫酸を盛り、是に二個の鉛板を挿み、其各一端に電池か乃至電磁器から來る電氣を通ずる時には、A板から液を通じてB板に流れる電流は、直ちにB板に水素を發生せしめ、其大部分は泡沫となつて空氣中に逸散するが、A板に集つた酸素は、之が爲に散逸する事なく、其板面と化合して二酸化鉛を搆成する、此場合に發生する酸素は陰極性の「いそん」瓦斯で、此作用を長く續けて居ると、酸素は遂に鉛板を化合する事が出來ぬやうになり、空中へ飛散する、この域に達すれば鉛板に充分の電氣が蓄積されたのであります。

實驗上の成功及び失敗

自分は以上の理によつて、惡戲半分電氣を研究する氣になりました、それは夏の暑い最中に、團扇片手の讀書や、蚊に刺されながら筆を執るのも氣の利かぬ藝でありまするし、さうかと云つて夜の散歩も健康上餘り好もしい事でないから、再び少年の時代にかへつて、電氣を弄ぶ事にしましたので、先づ初めに「重くろむ酸電池」三個を購ひました、それは小形の「もうとる」や、磁石電動機は電池一「せる」でも回轉し得るが小電燈其他は稍强力の電氣を要する場合に、二「せる」以上の電氣がなければならぬので、先づ三個を注

文したのであります。

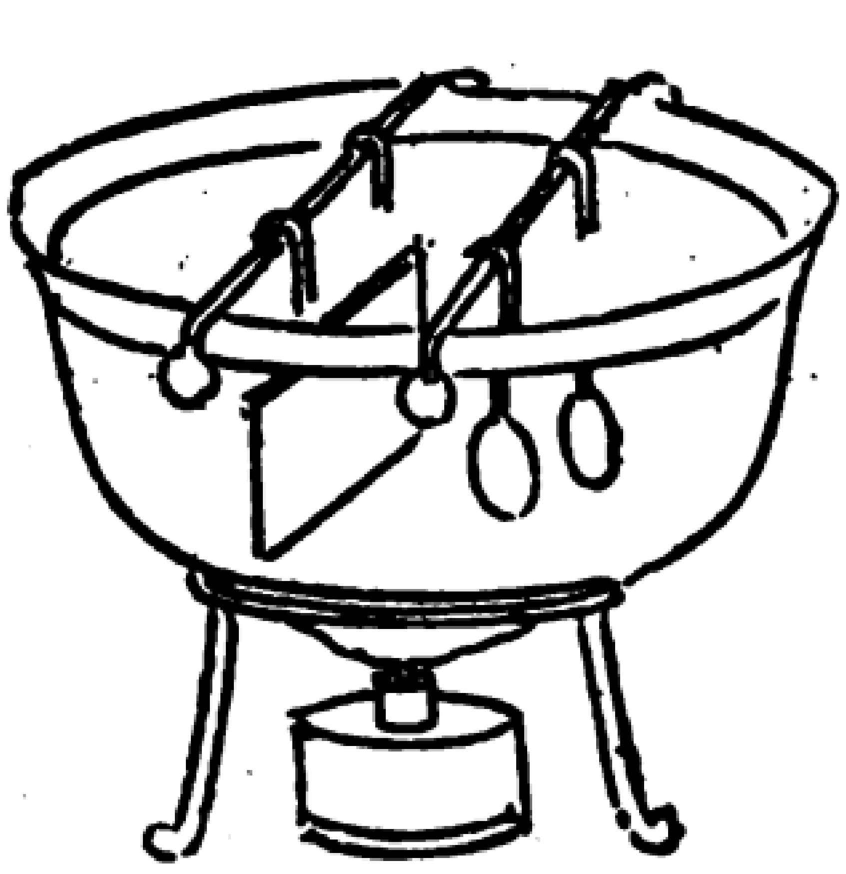
で、重格魯母酸加里の五ぐらゐを二十倍の水に溶解しさて銅線を陰陽兩極へ續いで、兼て要意してあつた電鈴へ通じて見ましたが、一向に鳴らぬ、電氣は充分に起つて居る筈であるに、電鈴が鳴らぬとはいかにも不思議である、これは電鈴の「ばね」に故障があるに相違ないと思ひましたから、



上覆を撥ねて、「ばね」を直すと、忽ち非常の力を以て鳴り出しました、これは先ず成功でありました、今度は三個の各兩端に電線を續いで小電燈に接續したが、これは直ちに强力の光りを放つたかと思ふと、凡そ二秒ばかりにして、忽ち消滅し、幾度銅線の接ぎを直しても僅かに散彈の如き光を洩すのみで、一向要領を得ぬてとになつてしまひました、これは要するに、液が極めて新しいので一、「せる」でも隨分强い電氣を起す所へ「二せる」で充分に發光する小電燈を、三個に續いだから、硝子空球中の炭素線が燃え切れたので、先づ第一の失敗であつたのです。(圖中Sは電池Rは白金板Lは鈴であります)

電氣銅版の實驗

自分は此二つの實驗で、檢電機こそないが、此電池三個に起る電力が大抵何位なものであらうと云ふことが譯つたので、一歩進んで電氣銅版の試驗をやつて見る事にしました、其處で先づ硫酸銅を要意して、水に溶解し、一個の玻璃皿に盛つて、

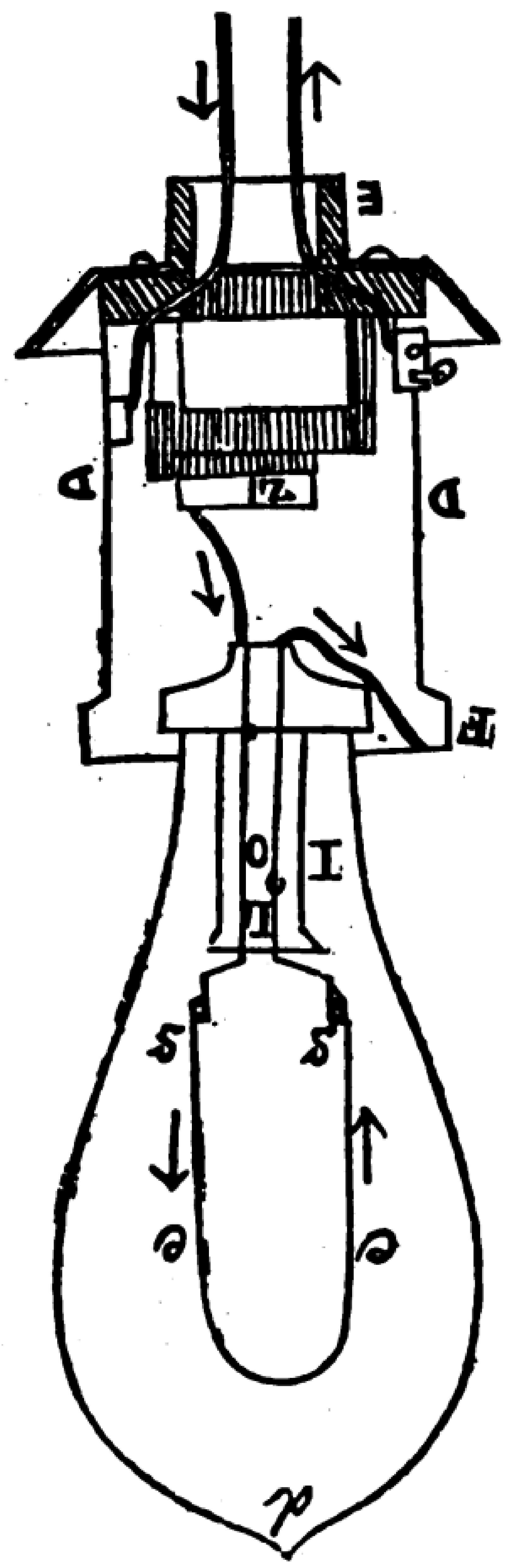


二本の銅線を渡し、其中間に、豫め「あるこほる」燈で溶解して置いたあんちもにと鉛との合金(これには石膏を塗抹しなければならぬのですが、有合せに鉛筆の心を削つて塗抹したもの)と、一錢銅貨とを釣

し、いよ〳〵電流を通ずる事にしました。ところが其電流は絶えず液を繞つて、硫酸銅溶液中の銅を遊離して、鉛板に附着するやうであるが、到底鉛版の全面を覆ふ程の力がない、只少し鉛板の上部が赭色を帯びたばかりでありますから、更に其遊離を助ける爲めに、「わるてぼる」燈を利用し、其液を熱して見ると、分解作用は激烈になり、凡そ十五分間ばかりして、鉛版に厚く銅は附着するやうになりました。電氣銅版の製法は専門の事業に屬するので、こんな装置で到底眞物の銅版は出來ませぬが、硫酸銅の溶液中に電流を通すれば、銅は直ちに遊離して、鉛版に附着すると云ふ理だけは了解する事が出來るのです。

電燈と電話

電燈の事は前にも鳥渡述べましたが、あれはほんの概



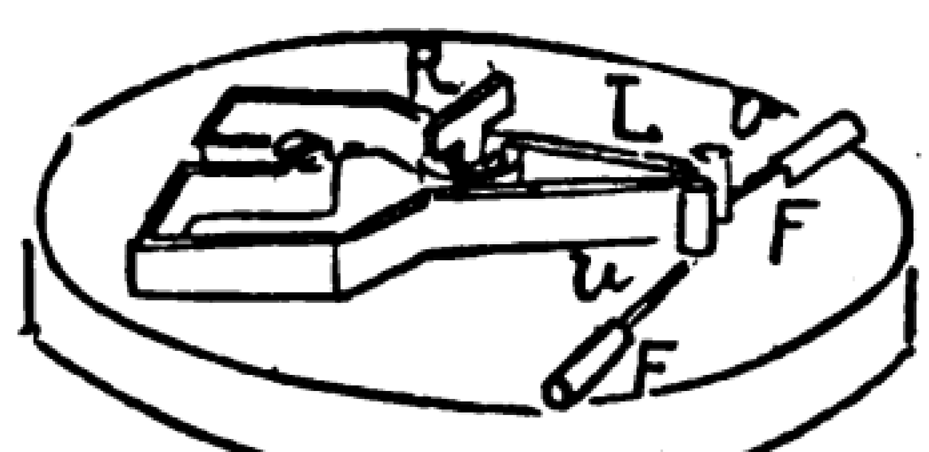
具に過ぎぬので、實用の電燈になると、中々あんな手輕な装置で發光するものでありませぬ、假令十燭の電燈でも、ダイナモの力を假りるか、乃至多くの電池を要しなければならぬのです、其處で電燈會社では、大きなダイナモを晝夜廻轉して發電せしめ、或は直接に或は蓄電所から、各戸の需要を充たして居るのです、で、其發電機から發電した強力の電氣は、銅線を傳ふて、各戸内に釣してある電球内に發光するのであるがこの電燈内は空氣が稀薄にしてあつて、白金の尖へ竹の片を高熱して炭化したものが挿んであるので、陰陽兩端の高壓電氣は、此炭素線に發光するのであります、又街頭に立つて居る弧形燈、これは二千燭光に上るので、其色も白熾の室内燈とは異り、月の光と同樣であります。

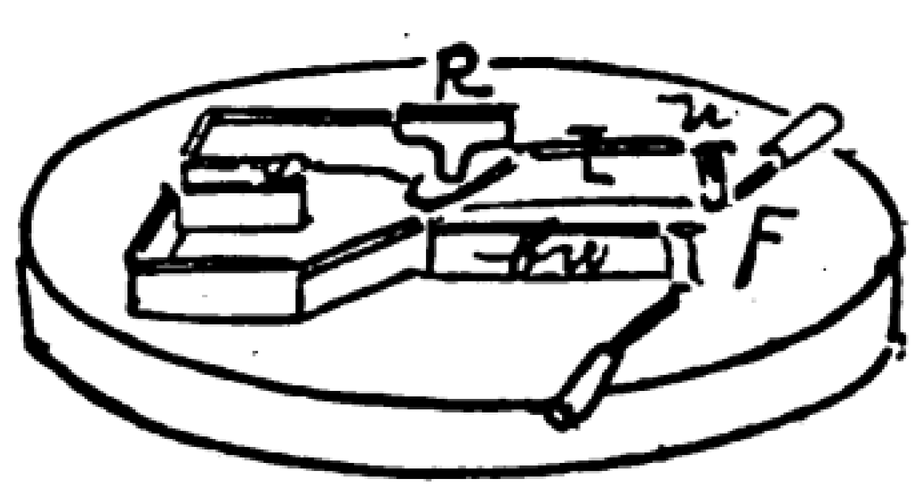
此弧形燈と云ふのはアークライトと稱するので

これは別に電球内で發光するのではなく、僅に空氣中で發光するのであります、圓い摺硝子のホヤと見えるのは、其光輝を融和する爲めで、又風や雨を防ぐ爲めで、其内部は、二個の炭素棒が互に相接した其空間に發光するのです。

そこで高壓の電流を、此二個の炭棒へ通じますと、炭棒と炭棒との間に火花を散します、が、其炭棒が互に電流を享けた場合には、必ず非常な熱を發して燃えるものですから、漸次其空間が遠かつて、發光せぬやうになるものです、これを禦ぐには調節器と云ふものを備へて置けば好いので、燒燼する度に從つて漸次に兩端が近いて、空間が始終同じ度を保つやうな装置になつて居るのですが、此二個の炭棒が燒燼する度を比較して見ますと、陽極の電流を享ける炭棒は、陰極の電流をうける炭棒の二倍だけ多く燒燼するのです。

さて電話と云ふものは、御承知の通り遠い所へ話や響を送る道具で、この發明は千八百六十年に獨逸のフヰリップ、ライスと云ふ人に始められて居るのであります、これは元來電信と同じやうに發信機と受信機の二部から成立つて居るのであつて、受信機は木とかエボナイトで拵へた枠の中へ、磁石が挿込まれ、其周圍はまた感應コイルが取つけられ、其端は陰陽の絶縁線に接續して居るので、發信機の中にはヒユース氏の微音機と云つて、炭棒を縱横に列べたものが取つけてありこれに列んでまた小さな感應コイルが入れてあるので炭棒の一端は直ぐに下の電池に通じ、他の一端は感應コイルを通じて、電池に流れて居るのであるが、もし人が發信口へ會話を吹込むと其會話は炭棒へ觸れて、一種の振動を與へ、電線を奔つて、受信機に傳はり、受信機中の磁石とコイルとの吸引排斥力によつて、始めて曩の會話が再生する装置であります。





以上は只僅かに電氣利用の理窟を簡單に述べたに過ぎませぬが、餘り詳しく書けば反つて復雜な理論になり又僅々十頁内外の誌上では到底説盡す事が出來ません此他に未だ電氣鐵道や、X光線や、無線電信や、電氣應用も隨分廣く、又述べて新らしいお話もありますがこれはまた折を見て他日お話する事に致しませう！（完）

英語實習

麻生貞子

通俗書翰文慣用句集

皆々様へ宜敷御傳言被下度候

With the best compliments to your family.

何卒…………様へもよろしく御傳へ被下度候

Pray give my best remembrances to miss…………

又は please present to Miss. …………… my most sincere wishes for health and happiness.

家内一同より宜敷申出候

With our united kind regards.

又は With best wishes to you from mine all.

（注意） 以上の句法多くあれとも、皆おほかた大同小異なり。すべて手紙の文の結尾に附するものなり。

御親切に御尋被下ありがたく存申候。

Thank you for your kind inquiries after my health.

御返事使の者へ御傳へ被下度候

Please let me know by the bearer.

明朝何卒御光來被下度候

May I ask of you a favour to call on me to-morrow morning.

御差支無之候はゝ、本日夕刻御來駕の程願上候

If it is not inconvenient to you, I beg you to come this evening.

至急御返事被下候はゝ大慶の至に存候。

I need not say how glad I shall be to hear from you at your earliest convenience.

又は A speedy reply will much oblige.

熟語用法練習

At large

(1) The murderer who escaped from the ship is still *at large.*

船から逃亡しました殺害者は、まだ捕縛されずです。

(2) He will begin the work for the benefit of people *at large.*

あの人は一般の人々の公益のため、其事業を起しますでしやう。

The country *at large* was very much excited.

國中一般大に激しました。

at large＝(1) 自由に。束縛を受けずに。

(2) 全体にわたりて。一般の。なべての。

At once

(1) The door was opened almost *at once* by the maid-servant.

下女が殆ひとすぐに其戸を開きました。

(2) The flower is *at once* the most beautiful and the most poisonous.

其花は最も美しくて又同時に最も有毒なものです。

at once＝(1) すぐに。

(2) 共にまた。同時にまた。

at one

I regret that she and I are not always *at one* as to that question.

殘念なことには、あのかたと私とは常も其問題に關しては、意見が合ひません。

at one＝一致したる。意見投合したる。

英和對譯

（原文は津田梅子女史校）

Beauty and the Beast.

美人とけもの

II.

When the month was past, the father begged her, with tears in his eyes, to stay a little longer, and to please him, she did. But she often thought of the Beast and wished she could see him again, and one night she dreamed that she saw him stretched upon the ground, weak and dying.

The dream seemed so real that she *said good-bye* the very next day to her sister, and under her father's escort hurried back to the castle. There, in the garden, she found the poor Beast lying, his eyes closed and gasping for breath.

Beauty ran to the fountain and brought some water and took his great ugly head in her lap and said:

"Beast, don't you know me? Speak to me." Then at last he opened his eyes and said:

"I am dying, Beauty, because you have broken your promise."

"Oh do not die. Can't I do something to save you?" she cried.

"Will you stay here always with your poor ugly Beast?"

"Always, dear Beast, if only you will not die."

其月も過ぎ去りまして、父は、娘に、もう少し逗留して、自分を喜ばして呉れよと、眼中に涙を浮べて賴みました時、女は(其通に)致しました。併し屢々けものゝ事を想ひ、今一度彼に遇ひたいと願ひました。そして或る夜のこと、夢に、獸が弱はり果て死にかけて、地上に横になつて居るのを見ました。

其夢は非常に眞實らしく見へましたから、その次の日に姉ともに"告別を致しました、" そして其父の護衛のもとに城へと急ぎ歸りました。園内にて、憫れむ可きけものは身を横たへ、目を閉ぢ、息するためハッハいふて居るのを見ました。

美人は泉へ走り行き、そして水を持ち來り、其大きな醜い頭を前垂のうちに入れ、さて申しましたには:

"けものや、私を知らないの？物をお言ひよ。" それから遂に彼は其まなこを見開きて申しましたには:

"今死にます、なぜなら、あなたは約束を破つたのですもの"

"やァ死ぬんじやないのよ、お前さんを助けて上げるため、どうか仕様がないの？" と女は叫びました。

"この憫れな醜い獸といつも一緒に、あなた爰に居て下さるでしやうか？"

"コレけものや、お前さへ死んでくれなければ、常ゞも(こゝに居やう)。"

和文英譯（會話）

花子　ナー私共の夏休みも過ぎました、	Hana. Well, our vacation is over now!
咲子　ソーチー又强勉を始めなければなりません、	Saki. Yes we must begin our stady again.
花子　此のお休み中はおもしろくおすごしになりましたか、	H. Did you have a good time during this vacation?
咲子　エー箱根でたのしくあそびました、	S. Yes I had a pleasant time at Hakone.
花子　マーあなたはおしあわせでした事、私は母が家で病氣で居つたもんですから御休み中看護婦を致しました、	H. O, you were very fortunate, I could not go any where because my mother was sick at home, and I was her nurse all the vacation.
咲子　マーあなたは信實に義務をおつくしになりましたからキツト其むくいがまいりますよ、	S. Well, you have done your duty so faithfully and I am sure the reward will came on you.

英文和譯（會話）

Teacher. Now, spell school!	先生　サースクールと云ふ語をつゞりなさい
Student. S. c. h. o. o. l. School.	生徒　エス、シー、エチ、ヲー、ヲー、エル、スクール、
T. What is school?	先生　スクールとは何の事ですか、
S. It is the place to learn lessons.	生徒　其れは學課を學ぶ所です、
T. Next, spell book?	先生　次の方、ブツクを、つゞりなさい、
S. B. o. o. k. book.	生徒　ビー、ヲー、ヲー、ケー、ブツク、
T. What is book?	先生　ブツクとは何ですか、
S. It is the thing to read.	生徒　其れはよむ物です、
T. What book are you reading.	先生　あなたは何の本をよんでいますか、
S. I am reading now New National reader.	生徒　私はナショナルの讀本を今よんで居ります、

言語遊戯

巖谷小波

(一) 尻取問答

遊戯者は圓く坐つて、その中の一人が手巾を丸め、それを誰にでも投げ渡しながら、何なりとも物の名を云ふのである。その時渡されたる者は、直ちにその物の名に他の語を附加えて、矢張り一つの物名を云はねばならぬ。例之ば初めに『本』と云はれて手巾を渡されたら、今度は『箱』と云つて、『本箱』にするのである。其他『猫』と來たら、『猫眼石』と受け、『犬』と出たら、『犬張子』と答へる類、つまり頓才のある者が勝だ。

(二) 其の二

前のと全じやうで、少し變つた仕方である。これは『本』と云はれたら、それに附屬した物の名を云ふので『表紙』とか又は『活字』とか云へばいゝ。又は之に對した物の名、例へば『櫛』と云へば『笄』と答へ、『楊枝』——『歯磨粉』などでもいゝのである。

(三) 語呂問答

遊戯の方法は前と全じことで、たゞ物の名とか、人の名とかを云はれた場合に、それと語呂の合つた名で答へるのである。ちよつと近い例が、

『小僧』——『土藏』　『名主』——『蝮蛇』

『伊勢は津でもつ』——『章魚は酢でもつ』

等である。

猶豫して答が遲くなるとか、又は出來ない時には、罰として何か藝をしなければならぬ。

(四) 新聞種

これも一人が手巾を投げながら、その人に、

『何か新聞に面白いことがありますか』

と尋ねる。すると尋ねられた人は、

『あります』

と云つて即坐に短い落し談をするのだ。

若し出來なかつたり、又は人が一遍その席でした談をすると、罰金を出すのである。これは一寸六づかしい遊戯だが、出來るとほんとに面白い。

（五）何を船に積んで來た？

これも仕方は仝じて、手巾を投げて尋ねる人が、

「何を船に積んで來た」

と云ふと、手巾を受けとつた者は、直ぐに何んでも船に積める物を云つて、而して又次の者に手巾を渡すのである。併し次の者は先に云つた物の名の頭字と、仝じ頭字の付く者を云はなければならない。それから以下みんな左様するのである。例之は

「船に何を積んで來た？」

「大根！」

と云つたなら、その次の人は「だ」の字が頭につく名を云ふ。

「ダイヤモンド！」

その次の人は、

「橙！」と云ふやうに答へるのである。但し仝じ頭字でも、「達摩」とか「團子」とか云ふ、船に積めないものを云ふと、直ぐに罰の藝をさせられる。

（六）三元素

この遊戯は既に我國で行はれてゐるが。仕方は矢張り前のとほりで、手巾を投げる時に、水とか陸とか空氣とか云ふので。陸と云へば地にゐる動物の名、熊でも犬でも蟻でもい丶、その一つを云ふのである。水なれば魚の名、又空氣と云へば空を飛ぶものの、蜻蛉でも鳥でもい丶のだが、なまじ雞と答へるより、蝶と云つた方がよい。

（七）私は機嫌が惡いのです。

これも仕方は仝じで、手巾を投げる者が、

「私は機嫌が惡いのです！、何故でしやう？」

と云ふと投げられた者は、

「それは私が貴君の心をとつたから」とか、「貴方の頭に角が生へたから。」

など丶滑稽たことを直ぐに云ひかへし、その間に少しも手間取つては成らない。

（八）　鉢廻し。

遊戯者はあまり接近せぬ樣に環をつくり、眞中の一人が木製の鉢を廻はしてゐる。尤も各遊戯者には、豫て花又は動物の名をつけておく。例之ば、誰は百合、誰は菫、又は熊、馬、獅子などの名をつけておき、中にゐる者が鉢をグル〳〵廻はしながら、勝手にその名を呼ぶのである。すると呼ばれた者はそこへ行つて、その鉢を押えるのだが若し自分の名を忘れたり、他人の呼ばれた時に出たり、又は鉢を押へ損じた者は罰をうける。

（九）　文學者の名廻し

この遊戯も仕方は前と仝じであるが、たゞ文學の嗜好ある人



の寄つた時でなければ出來ないで。まづ鉢を廻はす人が、遊戯者に花や動物の名をつける代りに、極有名な文學者、詩人、俳諧師の名を付けておく。例之ば其角とか文屋康秀とか云ふ者が居ると、中でその人達の歌とか發句とかを云ふ。その時その歌發句の主が、中へ行つて鉢を押へるのである。

（十）　火廻し

遊戯者は圓く坐つてゐて、紙撚り又は「マッチ」に火をつけ、それを順々に廻すのである。それの當つた人は、

『「ペーテル」がまだ燃えてゐる』とか

『小さい人がまだ生てゐる』と

か

「狐が死んだら、皮を取る。長く生ると、年を取る」

など云ふ言を、はや口に云つて、次の人にその火をまはすのである。持つてゐる中に火が消えたら、その人は罰をうけるのである。

(十一) 惡い數字

遊戯者は圓くでも何うでも順に坐つて、一から百までの數をかぞへるのであるが、その數の中には、云つて惡い數字を豫め極めておいて、その數に當つた者は、「プルッ」と云つて其數を云はない樣にする。例之ば、三と云ふ數字を惡い數とすれば、

一、二、「プルッ」、四、五、「プルッ」、七、八、「プルッ」十、十一、「プルッ」、「プルッ」、と云ふやうに單位でも十位でも、三と云ふ字の付く數、若くは三で除り得る數、六、九、十二、十五、二十七、などの數も皆云ふ事は出來ないのである。

(十二) 「ハイ」、「イヽエ」、「白い」、「黒い」

遊戯者は圓をつくつて坐わり一人はその中を歩行きながら、任意の人を捉へて談を仕かける。そして其談は「ハイ」とか「イヽエ」とか、又は「白い」とか「黒い」とか云ふ返答を禁じてそくのであるが、それで尋ねる人は、成るべく誤つて返事をしさうに、うまく問を出すのである、例之は、

「貴方は昨日舞蹈へ入つしやいましたか?」

と云ふと、その答には、「ハイ」と云はずに、

「私はまゐりました」

「その時のお召の色は何んでしたつ?」

と來れば、

「それは分明した色です。」

「それでは白いのですね。」

と、かういふ風に釣り出すのだ。尤も問がだん〳〵早くなると、つひ引きこまれて、禁制の返事をする樣になる。さうしたら直ぐに罰。

(十三) 畑の鳩

遊戯者は各自に、穀類又は野菜類で、鳩の好きさうなもの丶名を撰んで、自分につけておくのである。例

之ば、麥、豆、空豆等とつけて、それをよく覺えておき、それから一人が、
『鳩が逃げた、麥へ止まつた。』
と云ふと、麥にあたつてる人は直に、
『いゝエ、麥には來ません、空豆へ飛びました。』
と云ふ。そこで今度は、空豆の人は又直ぐに、何んとか云つて次へまはす、尤も直ぐ以前の者へ戻してもいゝ。只つひ茫然して。ゐると、鳩が止まつてしまふから、その人は罰に會ふ。

(十四) 數字遊び、

遊戯者は零から十までの數を、自分達につけておいて、一人が出て一寸した談をするのだが、その談の中には必ず數字を入れるので、その云はれた數字の者は、直ぐ立ち上るのである。例令は、
『お婆さんがあつて、その年は六十四でありました。』
と云ふと、六と四との人は、直ぐ立たねば成らぬので、五十と云へば、五と零の人と云ふ事に成る間違つたり又はうつかりしてゐる者は罰。



(十五) 早口遊び、

この遊戯は吾國にもある通り、云ひ惡い言を三度乃至六度位、間違はないやうに早く云ふのだ。日本語の例を云へば。
『神田鍛冶町の角の乾物屋の覺兵衛さんの勝栗は堅つて嚙めない』
『客一人に柿一つ、客二人に柿二つ、客三人に柿三つ』と客十人柿十までを算へる。

「ちよつと四五萬貫目」なぞであるが、今獨乙のを一つ二つわけて見ると、

一、シユナルレ、シユテル、デー、シユナルレン、アン、デー、シユーヘ

(譯)靴の〆金を早くお〆め！

二、カイン、クラインキンド、カン、カイン、クライン、キルシユケルン、タナツケン

(譯)小さい兒には櫻の種は碎けない。

三、フ井ツシエルス、フリッツ、フ井ツシユテー、フリツシエー、フ井ツシエー、フリツシエー、フ井ツシエー、フ井ツシユテー、フ井ツシエルス、フリッツ

(譯)漁師のフリツツが新しい魚を取つた。新しい魚が漁師のフリツツを取つた。

(十六)　郵便遊び

はじめの人が、「トン〳〵」と云ふと、次の者が、「何誰です。」

「ハイ、郵便！」

「何方から？」と答へる。こゝの答には、豫てイロハの文字を極めておき、その頭字の着いた地名を答へなければ成らん。まづイの字できめたとすれば、

「市ケ谷から！」

「何方へ？」

「飯田町へ！」

「何を持つて來たの？」

「糸と糸巻を」と云ふやうに、凡てイの字の頭についたものを、直ぐに答へるのである。

奇妙な馳走

亞弗利加に女兵を以て有名なるダホメーと稱する野蠻人あり、彼等は珍客に對する御馳走として、客至れば盛に家人に踊らしむ、かくて飲食を饗應を爲し、主人は客と共に更に舞蹈をはじむ、而して其饗應の最後の御馳走として、かねて養ひおきたる捕虜を引き出し客の面前において其首を斬る、之を以つて最大の御馳走と爲す由にて、大なる宴會の如きものには一時に數十人の捕虜を斬るといふ、而して此捕虜は彼等が奴隷として使役せんが爲めに養ひおくものに非ずして、全く此の如き宴會又は儀式等に首をはれんが爲めに養ひおくものなりと、又其首をはれる役は何人にても爲し得ず、若し客に對する饗應ならば主人の方の最も重なるものが其役目を演ずるなりと驚くべき事ならずや。


棕櫚

シユロは暖地に産し幹は直にして枝なく羽はうちはに似て梢に叢生す幹に毛を纏りたるものかさなりつけりとりて繩をつくる


鉄蕉

ソテツは暖氣に產す所に鱗甲あり葉は梢に叢生す形鳳凰に似たり


楓

モミヂとは秋の末霜にあひて赤く色つきたる葉をいふ


南燭

ナンテンは灌木にして人家の鉢前などにうへてその綠葉紅實を賞す一根に數莖を叢生す冬季に至るも枯るることなし


辛夷

コブシはもくれんの類也山中に自生す幹高く秋、冬の間に葉は落つ花は六瓣にして色白し


枸杞

クコはむくげに似て小き枝に刺多し夏秋の頃赤く紫ばみたる花を開くなつめに似たる實を結ぶ


松

マツは針葉類の喬木にして暖寒の兩帶に産し殊に日本海沿岸の各地に多くその種類極めて多し


杉

スギは針葉樹にして幹は眞直に生長し大なるは五六丈に至る葉は冬に至るも落じることなく夏にいたりて新葉と交代す材は木理美にして柱などに用ゆ皮は屋根を葺くべし


檜

ヒノキは幹高く聳へて大木となる葉は厚くして表は綠に背は白く材堅く美くしくして香あり建築用の材なり



シマドリ一名鵜といふ形烏に似て色黑く嘴の先少く曲る性食を貪り能く水を潛りて魚を捕ふ



ガンは水鳥色は淡褐色にして斑點あり秋の半寒地より來りて春の半にかへる



シギは形ひなに似て嘴長く全身青ばみ秋の頃より澤田、野原などに居て鳴く



ヒクヒドリ駝鳥の一種にして濠洲東印度に產す形白鳥に似丈五六尺羽黑くして細し



ホウワウは支那にて想像の鳥なり體の前部は鵠に似て後部はきりんの如く嘴は鷄に似て頭は蛇の如し鳥類中の最も靈なるものといふ



オシドリは雌雄井ひ泳ぎて相はなれず鴨に似て小く雄は頭に長尾ありて美なり



セキレイ燕に似て色は灰色を帶び尾は長く腹白く頸の下に黑き筋あり



アヒルは水鳥なり形カモに似て大きく足にひろみづかきあり雄はあをくびの如く雌は黃色の斑あり案鴨といふ



サギは水鳥なり足と嘴とは黑く脊腹共に白し首は長き毛あり

倫敦淑女の化粧（二）

夕飈生

▲衣服裝飾の定義

衣服は婦人が第二の生命とも謂ふ可く、從て其種類千差萬別、一々其詳細を盡すべからずと雖も、大体に就きて謂へば、先づ流行の衣裳及審美的衣裳の二つに區別すべし謂ふ迄もなく流行の衣裳の惡しかろう筈はなけれど、是れ單に流行の間丈好きにて廢れては一向に價値なきものなれば、寧ろ審美的衣裳の常住好くて流行無き代りに廢ることなきには若かざるべし、故に特に婦人們をして流行物より審美的のを撰ばんことを勸告せん。

流行物敢て惡しきにあらず、然ども如何に流行物なればとて人の目に立つ如き奇樣を爲すは甚だ不可なり。裁縫師とは鋏と針とを以て最も巧に衣服を仕立つるものなるが、衣裳の色合格好縫方が其の人に似付くか似付かぬかは敢て彼の關する處にあらざるを以て、裁縫師には單に其仕立だけ之を任せ、其他は宜しく自己の撰擇に待たざる可らずとは英國の通語なり茲に於て、婦人們には即ち美術的趣味及鑑識の必要起る、實際衣裳の工合に依つて醜も美となり美も醜となり、時としては衣裳は顏よりも大切なることあれば、宜しく婦人們は美術的思想を涵養して審美の眼光を啓發せざる可らず。

凡そ人の妻たるものは自己の衣服容貌を美にして夫の心に愉快を感ぜしめ、又美術的に身を飾るは婦人が社會に對する義務にして、彼の西班牙の諺に、「兎でさへも其影を有す」と言へるが如く、婦人が社會上の地位

は例へば野姫拙婦にせよ苟も女たるものは多少美にして他に愉快を與へ、社會を調和せざる可らざるが故に、衣服の如き、出來得る限り着飾るを以て其本分と心得可きなり、然く云はゞ勞働者の細君の如き「吾々下等貧人にして何として身を着飾るの贅澤を爲し得ん、又吾々の身分にしては甚だ面倒にしてとても身を構ふ可き遑あらず」とて身を垢塵に塞まれ襤褸を纏して平然たるものあらんも、之れ大なる量見違ひにして、女なるものは家庭幸福の中心和樂の源泉とも云ふ可く、則ち修飾したる細君の一家にあるは恰も家庭に美の神の天降りしと均しく、その家の品格を添ゆるものなり、殊に美術も無く音樂もなき貧人の家庭には女は又美術音樂にも代りて夫を始め一家の愉快を期せざる可らず、則ち貴族の家庭に繪畫を飾り音樂を弄ぶは美術的の觀念を起して高尚なる家庭の和樂を期するにあるを以て、貧家の細君は殊に其任の輕らざるを自省し決して修飾を忽にす可からざるものなり。さればとて身分不相應なる修飾をなして家庭の和樂を破り反て其目的に反するが如きはよろしからず宜しく身分相當なる修飾を爲すを宜しとす、一体衣服を美にすると云ふこととは綺羅を飾るにあらず、特に金を要することにあらざれば、世の賢母たるものは夫を苦しめ子供の教育費を節減せざる限りに於て衣裳を美にするものと知るべし。

▲流行服の弊

若し婦人が華美な色を好み而して之を高尚に着得るあらば、則ち圓滿なる美術心を有するものにして、恰も畫家が巧に各種の繪具を調合すると同樣なり、然らば衣服を着ると云ふことと自己を飾ると云ふことは重要なる婦人の一學科とも謂ふ可し。

爰に婦人の注意すべきは若き時華美な衣裳を用ゐ、年を取るに從ひジミな衣裳に移ることなり、又流行に先んぜんより寧ろ流行に後るゝを宜しとす。

服裝に就きての金言は「極端を避けよ」との一句に盡きたり、則ちあまり人目を眩惑するがごときことは愼まざる可らず。

流行の衣裳を着ることは誰も欲する處なれど、流行必しも、萬人に似合ふ譯にはわらず、故に例へ流行物たりとも自己に似合はざるものは斷じて用ゆること勿れ、似合ふか似合はぬかを鑑別するは婦人の最も大切なる事にして、彼の自己の資質に適せざる事業を爲し失敗して他人の嘲笑を買ふと均しく、柄にもなき流行をひけらかすものは反て其美を抹殺するものと知るべし。

若き婦人の華美なる衣裳を着たるは美なり、殊に美人のぱつとしたる華美粧飾は愈々美なり、然し廿五歳以上の婦人並に容色十人並の婦人は可成高尚に衣服を飾るが宜し、又資産に乏しき家の婦人は自己の服裝を巧に配合すること一層必要にして、彼の流行を追ふが如きことは必ず避けざる可らず、如何となれば流行は時々廢りあり、從て度々取かへざる可らず、これ既に資産に乏しきものゝ經濟が許さぬ處なり。



頭髮の粧飾

又衣裳は何よりも仕立が大切にして、仕立代には決して金を惜む可らず、彼の三等四等の仕立屋に行きて裁縫を依賴することは恰も病

者が藪醫者の許に行きて治療を乞と同然、折角の衣裳を臺無しにして了ふ可し。

▲服裝の配合

朝の服裝は可成あつさりしたるが宜し、殊に夏向には若い娘又は嫁は眞白いものか淡泊な色合のものを着る可し、然らば洗ひやすくして宜し、又リボン、カフス、カラ等皆洗立てを好しとす、資産家貴族等の細君にして年を取りしものは黒色衣裳を着る可し、然して朝は一切粉飾を施すこと勿れ、寶石等を以て飾立てたるは甚だ惡し。

散歩の時は淡泊にして高尚



少女の服裝

なる服裝を好しとす、盛裝したるは衆人の眼をひきて宜しからず、然し馬車に乘りたる時は如何に盛裝するとも差支無し。

四十歳以上の婦人は何時も金のかゝりし華美なる衣服を着たる方反て宜し、其中にても背高きは小奇麗な衣服が似合ひ、好く肥太りりしものは黒か灰色かの高尚なる衣服が似合ふものなり。

一般に衣裳の色合は自己の顔色と體の格好とに似合はしきものを用ゐよ、例へば黒みがゝつた衣裳は黒い顔色或は頭の髪の黒いものに

適し、華手な色合は體の小柄な色白美人に適するが如し。

▲舞踏服

舞踏會には華手なる衣裳、殊に地の薄いものを好しとす、然し絹衣は不可なり、適當の色は海老茶色、菫色、左なくば寧そ白色、忌中には勿論婦人たるもの舞踏會に出入す可らず、喪服を着て席に列するは衆人の歡樂を損ずるものなればなり。

▲宴會服

晩餐會殊に立派な宴會には大に盛裝して行くを宜しとす、而して會に赴くときは必ず胸に生花を挿しはさみ



貴女の式服

行かざる可らず、然し舞踏會には紙製の花を用ゆるものなり、如何となれば舞踏する時生花は散亂するの虞あり、且つ室熱なれば生花は直に萎縮するが故に特に造花を用ゆ。

▲寶石類（飾物）

寶石類の飾物は年若き婦人に於ては何時にても無闇に之を用ゆ可らず、其之を用ゆるは着服法と同じく甚だむつかしきものなり。

金剛石、眞珠、紅石其他透明體の寶石類は必ず午後（晩）着服すべき衣裳に飾る可し、朝は決して用ゐざるものなり、朝ならば只金の

胸飾り、即ち金鎖りか時計位に止むるを良しとす又朝は指環の如きも成可く飾なき質素のものを用ゐよ。
自己の高尚なる趣味は徒に其品の高價に依つて表はる可きものにあらざれば、貴重なる寶石、立派な彫物、天下の珍品等を以て毫も人に誇るに足らざるなり、若し高價なる品を身に飾り以て上品とすべくば富者は何時も上品なる可き筈ならむ。
猫眼石は寶石の中にても甚だ立派にして之を用ゐるものは高尚なる美術心あるものに多し。

▲手袋、長靴

手袋は馬車上にありては可成華手なるものを穿ち、散歩の時には可成じみにして高尚なるものを用ゐよ、如何に美衣を纏ひたりとて手袋と似付かはざるものは大に見惛きものなり。
靴は新調のならざる迄も、流行品ならざる迄も、足の形に適したる好格好きものを常に努めて奇麗に研き上げ、他人の家を訪ふても見苦しからざるやう心掛く可きなり。

▲宮中の服裝、粧飾

宮中の服裝は一等高價なる絹衣を以て之を調製するものなり。
下着は他の薄き絹物なるべし。
老若の別なく其衣裳にはツレーンと唱へる長い裾物を曳するものなり、長七ヤールド巾之に準ず、縁は花形の縫、裏は白絹。
又胸當を爲す、之れは衣裳に相當したるもの。
時としては下着は上着よりも高價なるものを用ゆることあり。
昔下着は大槪繻珍錦類を用ゐたるも、今は殆ど廢れたり、而して近來は下衣も亦多く白きを用ゆるに至れり。
頭の飾の羽毛は眞珠金剛石を以て飾ることあり、寶石は腕と首の圍を飾る可し。
靴は白い繻珍を可しとす、又流行の形を撰べよ。
婦人はいづれも奇麗なる飾扇を携帶するものなり。

附

香氷は朝使用せずして夕刻用ふるものなるを知る可し
婦人の化粧心得は大抵以上に於て盡きたれば、是より
嗜好及び美術的鑑識に就き些しく説く所ある可し。(完)

羅馬尼の風俗

茅原蘭雪

羅馬尼國といふは歐羅巴南部の一國で以前は土耳古の屬國であつたが今は立派な獨立國となつてゐます、而て此國の皇后エリサベタ陛下といふは、よく日本の事情に通せられて「お早」の言葉さへ操らせ給ふ御仁で羅馬尼國民も、又わが國に對して、深き同情を有する國民でありますから。少しくその事情を述べませう。

羅馬尼は、伯林會議によつて土耳古から、獨立した人民の新建國で、開國以來僅かに五十年、人口も又五百九十萬餘に過ぎない小國です、北露亞西に接し、西北は匈牙利、西南はセルビヤ國、南は土耳古に隣して、毎に强隣の抑壓に苦み、臥薪嘗膽の念、常も胸臆に存するので、彼等は自から其新進國たると、强露に接するとの點から、多少わが邦と趣を同ふするものと考へて、わが邦に對して斯くも深き同情を表するのだらうです。

同國の首府はブカレストと聞つて、一望限りなき羅馬尼大平原の中央に位する繁華の大都會です、何しろ建國このかた年歯淺いので、家屋の構造などは左して觀るべきものはないが、市内に在つても、我邦の如く住居内に廣い庭園があるので、住み心地の好さゝうな都です、王宮は市内に在つて、普通の二階造り、建築も誠に質素で、軒を民家と並べて、毫も莊嚴を裝はぬ處、儉素の風が見えて、悦ばしい國柄です。

國教は希臘教で、言語風俗は、伊太利に似た所もあるが、今では專ら範を佛國に取つて、諸事之れに倣つて居るので、多く佛語を操るのですが、英語も又頗る流行して、貴女社會では、概して英語を操らるゝが、殊に皇后陛下は、玲瓏自在に渡らせらるゝさうで、近年英語女學校の設立を見るに至つたとのとです。序に

氣候を記せば寒暑共に強くして冬時は積雪八九尺に及ぶとのことです。

去る明治廿九年、歐洲官遊の途次、同國に立寄られた田健次郎氏が、折からシナイアの離宮に避暑遊ばされて居られた（本號口繪の寫眞は田氏が國王陛下から、謁見を賜はつた時、手づから下し賜はつた御肖像と、並にシナイアの離宮の寫眞です）同國が、我邦に同情するの深きことは、氏を國賓として取扱ひ、手厚き待遇をされた一事に徴しても知れることですが、なほ宮中には、日本の美術を置かれて、頻りに其精巧を稱揚せられて居る、又氏を招かれた時に、正餐後の茶席には、日本服にて出席し呉れとの御諚があつたとのことである、而して皇后陛下がよく、日本の事情に通せられて、且つ「お早」の言葉まで操らせ給ふは、つねに我邦人の往いて謁見を賜ふことの數次なるが故なるかといふに、我邦人の同國に赴きしは、氏と前後して朝比奈知泉氏等の往來したのが殆んと初めて位であつて、全く陛下の賢明にして博覽に渉らせられ、夙に書籍に因つて通曉遊ばされたものと承るので、殊更ら御淑德の程が仰がれるのである。

左に記すは、田氏が紀行中の一節です、特に乞ふてこゝに掲ぐることにしました。

シナイアは海面上二千四百尺我が國では比叡山以上の高地に在り、ルーマニヤ太平原の北端、山脈起伏の間に位し、四山周繞溪水其間を流れ樹林蒼々として繁茂し、後山の最高峯は崔嵬として危岩絶壁を聳へたり、谷朗にして水清く、大氣清涼にして秋草地に滿ち、恰も花毛氈を敷くが如し、其間、樓閣參差點在するもの數百戸、概ねホテル亦は紳士の別業なり、その遊步道は樹林蔭を為して、夏中午時といへども暑を感ぜず、花卉噴泉樂堂舞室等相點綴して趣を為し、全邑滿山擧て一大庭園といふも強て浮言にあらず眞に避暑遊樂の僊境といふべし。

皇后の離宮は民家の所在地より七八町の山奧に在り、寂靜にして樹老ひ、水流潺湲時に瀑となり又淵となる、而かも方面開濶にして毫も幽鬱の感を生ぜしめず其の宮殿過半は瑞西式の木造にして構造雅致を極む太子の宮は尚ほ三四町の奧に在りて獵家風の建築なり、唯恠む可きは離宮の入口衞兵の屯する所と離宮の檐下に數門の大砲を備へ彈丸其傍に累積するの一事なり、蓋し歐洲各國割據の形勢は今も猶殆んど春秋戰國の時の如くなるを以

て、斯る離宮すら尚ほ斯く武備を解かざるの必要あるに依る可し。國王陛下は此離宮を愛せらるゝこと極めて篤く、毎年春期より秋末に到る迄茲に駐輦せらるゝと云ふ、但し冬時は寒氣強くして住居に堪ねず、住民すらも尚ほ家を擧げて退居すといふ。

午後一時、我等は燕尾服に勳章本綬を帶び、離宮に參殿す、殿前に儀衛兵一隊あり、正裝して守備せり玄關に入り俟つこと一二分時ならずして、侍從武官出で來り我等を導て國王の居室に入らしむ坐に當國通信局長キルー氏あり、導かれて入るや、國王は直に机邊の椅子を離れ、我等一行を迎られ懇篤なる禮を賜はる予は國語にて謁見の榮を得て光榮限りなき旨を述べるや陛下は直ちに外國語を話し得るや否やを問はる、予答ふるに少く英語を操る旨を以てす國王曰く朕も亦少しく英語を解す、然れども充分なる能はざるは遺憾なりと、かくて種々の御物語あり、その中先年某地に於て一人の日本海軍士官に遭遇したるに、その士官は恰も職工の如く熱心に水雷艇の組立に從事し居たるを觀て、大に感服せりなど種々の談話あり扨て日本と我邦と和親の條約を締結し、互に交際の途を開かば兩國の幸福なる可し等の御詞もありたり。

やがて陛下は紀念の爲めにとて側なる簞笥の抽斗より四個の小箱を取出し給ひ、手から我等三人及キルー氏に授け玉へり、恭しく受けて開き觀ればシナイヤ離宮建設紀念の爲め特に製造せられたる銅牌なり、圓徑凡二寸三分許にして、表裏に兩陛下の肖像及離宮の寫眞を打出したる美麗なるものなりし我等は深くその好誼を謝して御前を退きぬ。

退いて客室に至れば、室には此國の總理大臣兼外務大臣スタルザ氏、及び其夫人其他將官、宮内官等十餘人在り、總理大臣は午前參朝の歸途其旅館を訪問せんとして途中に邂逅し、亦其夫人は昨日同車して來りし爲め皆相識となれり俟つこと數分時にして國王陛下、皇后陛下、幷に太子、太子の妃兩殿下相伴ふて出御あり、皇后及太子の妃は共に英國女皇の近親に係るを以て、英語を操らるゝこと最も巧なりし、太子も亦少く英語を解せらる何れも一々御挨拶の上種々御談話あり、暫くにして食堂に案内せらる、室甚だ廣からずと雖も其構造雅致を極め西洋の風として四窻暗黑、晝間尚ほ許多の電燈を點ぜり。

予は總理大臣スタルザ氏夫人の隣席に坐を占めたりしかば同夫人は英語を以て宴席に在るの間予と國王陛下との中間に在て終始日本の風俗、慣習、飲食、音樂等社會百般の事を問ひ、之を陛下に傳奏せられたり、されば食事の間は時間の經過を覺へざりし、蓋し同夫人は頗る日本の事物を識り、讀書に依て得る所極めて多しと云へり其嫻雅にして清楚なる風姿は、洵に欽す可きものありき食了りて再び客室に入る、裝飾品中適々日本製の七寶大花瓶數個、及青銅の大水瓶あるを觀之を鑒賞し居たるに皇后陛下はマプロセン夫人を隨へ入り來られ日本語にて「御早」と挨拶せら

れ予をして一驚を喫せしめたまへり續て陛下は花瓶を指し、頻りに日本美術の精巧を稱揚せられしかば予はこれに答へまつらんさせし際適々皇后陛下の裳に黄虻の留まり居るを瞥見せしかば御免陛下と云ひつゝ之を拂落したるに、皇后は多謝を云はれぬ見るに其虻は羽弱くして未だ飛揚する能はざるの幼蟲なりき依て予は可憐なる小蟲よと口唱みければ陛下は然なりとのたまはせつ扇を以て助け揚げつこれを窓外に放ちたまひぬ。

暫くして坐を離宮の中庭に移さる皇后亦曰く君等は日本より珍らしき畫を携へ來れりと聞く、眞なるやとの御尋ありし時偶々式部官之を携へ來りぬ初め皇后予輩を招かるゝに當り、正餐後茶席に於て日本服にて出席あり度しとの御好なりし由なりしも、予等はブダペスト出發の際輕裝して來り、携帶の和服は他の荷物と共に直に維也納に送り返したるが故に、御求に應じて日本固有の優美なる服裝を賞覽に供する能はざるを以て、責てもの事と考へ、携ふる所の畫帖、石版畫、錦畫等數本をキルー氏に托して內覽に供せしなり畫本既に來る、皇后其他の夫人爭ひ來て、賞鑑せらる、予同伴者と交も之を說明するの際、太子殿下亦來て、威海衞戰爭の寫眞帖を取り熱心に之を熟閱せられ、第一に大將山縣は何れに在るやを問はる、予答ふるに山縣大將は第一軍に將たり此寫眞は第二軍に屬するが故に之に載する將官は大山大將、山地中將及伏見宮殿下等にして山縣大將は在らずと答へぬ蓋し太子は露國皇帝戴冠式に臨み、モスコーに在て山縣大將に面會せられし爲め特に意を注がれしならん。

既にして雨降り來る、則ち廊下に入り袂別を告ぐ、國王陛下以下皆握手して別れたまへり皇后陛下に對しては特に敬意を表する爲め當國邊の禮に從ひ御手に接吻して別れたりブダペストに於ても屢々之を目擊したれども普通の貴婦人に對し之を行ふこと何となく氣耻かしき樣に思はれ、敢て之を行はざりしも、今皇后陛下優遇の待遇に對し、之を行ふことは相當の場合なりと思考し、初めて接吻の禮を行ひたりき。

抑も羅馬尼國王陛下は今年御歲五十六歲に渡らせられ、太子は御齡二十六歲、共に陸軍の正裝を爲し、帶劍して許多の勳章を着らる又皇后陛下御齡五十三、太子妃二十獨逸亦は英國より入嫁せらる、兩陛下兩殿下の我々に對せらる溫容和顏其打解けて談話せらるゝや殆んど朋友に殊ならざりし。

以上の記事に徴しても、その眞情を知るに足るではありませんか、口繪の中の少女はシナイアの豪家の令娘で、又婦人は上流社會の貴婦人です服裝はいづれも精巧なる編物であつて、之れがこの國の國服ださうです一体羅馬尼は、美人の多い國で婦人の性情も極めて優さしくしとやかださうです、又同國民が夙に我邦に

同情を表するしるしとして同國の婦人に日本の服装をさせて同じく日本の髪飾りで日本踊りをした事があります嗚呼天下知己なきを憂へず、小國と雖も我れを知ると斯の如く深きは、誠によろこばしいとでございます。（因にいふ同國皇后陛下は文筆に長思想又深く有名なる三日夫婦と題する著述あり）



雜組

盲聾才媛 ケラー孃

今や文明の進歩に因て敎育の機關具に備はれりと云へども、仍且眼明千人眼暗千人の誹謗を免れざるの時に當り、眞の盲目にして而も聾を兼たる世にも不自由なる身を以て、高等女學校を卒業し、五官具備の人すらも尚且つ難しとする大學の業をさへ卒へて、行々は筆を文壇に揮はんと志しつゝある、古今稀有の驚くべき婦人こそ顯はれたれ、そを誰かといふに米國アラバマ州の人ケラー孃即ち其の人なり、孃は千八百八十年六月今より凡二十四年前を以てアラバマ州タスカムビヤに生る、父は南北戰爭の當時南軍の將校として勳功あり、殊にタスカムビヤにて發行する一新聞の持主として名を知られたるの紳士なり。孃は生れながらの不具者にてはなかりしも、生後十八ヶ月を經る頃、ふと激性の疳を患ひたるが、源にて、耳も眼も共に其の官能を失ひ產れも付かぬ不具となりて口利く術を敎ふべくもあらずなりしかば、兩親の悲嘆と落膽とは譬ふるに物なき程なりしとぞ。加之も孃の性質は不具者の常として執拗我慢俗にいふえてこぢなりければ、之が爲に兩親の苦しむ事も數々なりしと、されど親は不具の子ほど可愛きはなく、我が子の生先を案じては夜の眼も寢れず、切ては少しなりと物の道理を辨ふるやうさせたしとて、孃が六才の折、南ボストンの訓盲院よりサリヴアンと云ふ一人の女敎師を聘して、我が子の敎育を依賴することゝ爲たり、此のサリヴアンと云ふ婦人は不具者の敎育に經驗を有する人なりければ、いかでか依托の任を果さんものと、晝夜孃の傍に付添ふて孃の敎育に心を碎くこと七週日にして、遂に指頭の手指文とカードの凹字と同一物名を表示するものなることを理解するに至りしかば、こゝに初めて智識の萠芽を認めたるサリヴアンの喜は、暗夜に燈火の譬も愚かや、其よりは一葉又た一葉を生じ、知識の田甫は日に日に

開け、學問の興味漸く深くなるまゝに、いつしか頑なりし孃の性質は、變じて、溫順克己の少女となり、數週の後には手指字を知る者との間に指頭を以て談話を交るに至り、一年ならずして書簡を認むるまでに進めり、之を見たる兩親は我が子の進步の著しきに驚嘆し、さるにてもサリヴァン女史の苦心一方ならざるべきを察し、厚く感謝を致したり、かくて孃は再生の恩師ともいふべきサリヴァン女史に伴はれてケンブリッヂ女學校に入學し、茲に螢雪の功を積む身となりぬ、其の時は千八百九十六年の九月孃が十八歲の秋なりけり。

孃は翌年六月の試驗に於て見事の好成績を得、殊に語學は其の得意とする所なれば、英語獨逸語の二科に最優等の榮譽を博したり、それより千八百九十九年に至りて同校の全科を卒業し、次いでラドクリフ大學に入り、目的の業を卒へたりといふ、孃が官能の不備なる身にも拘はらず克く此の成業を得たる其の英才恐るべしとは、孃を知る者の等しく言ふ所なるが、孃をして此の成功をなさしめたるサリヴァン女史の盡力をも亦認めざるべからず、孃が學校に通ふの間、サリヴァン女史は添人として、日々孃に伴ふて登校し、教室に在て教師の教授する所を悉く孃に通辯し、孃家に歸れば女史亦歸り、孃の質問に應じては一々之が說明をなし、獨逸語、佛蘭西語、シーザーの語錄等の諸學科は女史先づ之が下調をなして、孃の教授に差支なからしめたりといふ、女史の誘導も力めたりといふべきなり、今左に孃の勉學と人物を知る便りにもと、數年前孃を訪ひたる某靑年雜誌の投書家が、孃に就て語りし所を掲出すべし。

予がボストンなるニウベリ街の邸宅にケレー孃を訪ひし時は、孃がラドクリフ大學の試驗準備に忙しき折なりき、孃は大陽の射込む大なる窓の下に動搖椅子を据えて之に倚り、地味なる黑の上衣に桃色の袴を穿ち、黃金色の髮、廣くして白き額、櫻色なせる頰、すべて優美なる其の姿は今尙目に在る心地せり、孃は此の時膝の上に小さき褥樣の物を載せ、其上に銅線もて幾何學の圖を描き、頻に其の解釋を試み居た

りしが、サツヴアン女史が其の指頭に手を觸るゝや直ちに手にする銅線を捨て、その手を差し延べながら余の名を呼べり、初はその意味を解し兼ねたるも、余は直ちに其の聲音に馴れて明かに聽取ることを得たるが、サツヴアン女史は二人の間に立つて始終通辯の勞を執られたり。

(客)大學卒業の後は何をなさる御思召なるか。

(孃)余は兒童文學に筆を染めんと欲す。併し創作は已めて重に希臘語より翻譯する積り、思ふに兒童文學としては希臘に勝るものなからん、キングスレーやアライスなども色々兒童の讀物を書くといへども到底希臘のものには及ばざるなり。

(客)貴孃の好む學科は何なりや。

(孃)そは希臘語と羅甸語なり余は今ヴアーヂルの牧人歌、シセロの演說集、ホーマーのイリヤット、オヂイセイ等を讀み居れり。

(客)貴孃は衣服に就て如何なる意見を持ち玉ふや。

(孃)さなり、花さへも美しき色を有つものなれば、女子は服裝に意を用ゐざる可からず、されど若し鳥の如く羽根や翼がありたらば、衣服の面倒もなく思ふ所に行かれて嘸ぞ愉快なるべし。

(客)さうなれば、貴孃は第一に希臘に飛び行き玉ふべきや。

(孃)否、(と微笑みながら)余は自分の愛する人々に遇ひに先第一に故山へ飛び行くべし。

(客)貴孃は成功に必要なるものは何物と思ひ玉ふや。

(孃)忍耐、剛毅、誠實の三なるべし

(客)世界の中にて貴孃の欲しと思ふものは何ぞ。

(孃)そは友達なり。

(客)敎育と富と、何れを取るや、

(孃)無論敎育なり、敎育は富を得る階段たるなり、されど余は富を欲せず(此時古語を引いて)「我に貧も富も與ふるな唯だ滿足を與へよ」と云ふが、余の理想なり。

嗚呼滿足!!、何たる高潔の理想ぞ、讀み去り讀來つて

茲に至れば孃の人爲が髣髴として紙上に躍るを覺ゆるなり、ア、誰か孃を盲且聾の不具者とは言ふ、孃の肉眼は堅く鎖して天地の光明を見る能はずといへども、其の心眼はよく宇宙の眞理を洞察し、孃の肉耳は深く閉ぢて物質の音響を聞くを得ずといへども、其の心耳はよく良心の聲を聽取するにあらずや。孃や芳紀二十有四、春秋に富めりといふべし、前途の發達亦た測り知る可からざるなり。昔時塙保己一は盲目の身にして國典の薀奥を極め、然も浩瀚なる群書類從を著して、眼明きも及ばぬ功績を我が文學界に殘したり、今や亦た米國に此の人あり、五官滿足の人恥づるなきを得るか、吾人大に奮勵せざる可からず。

二葉幼稚園

◎幼稚園の目的は、學齡前の幼兒を集めて、將來受くべき教育の下地を拵へるので在て、誠に結構な所なのですけれど、普通幼稚園といへば、餘裕ある中產以上の子女でなければ、保育して貰へぬといふ樣な傾があつて、ドウモ未だ低い階級に生活する人達にまでは、此の恩澤が至つて居なかつたのである。ソコで此の不幸なる子供達の爲に特別の幼稚園を起さうといふ考で多年華族女學校に實地の經驗を積まれた齋藤峰子、野口幽香子の二女史が、去る卅三年一月の頃、卒先して貧民幼稚園を開かれた、麴町區下六番町にある二葉幼稚園といふのが即ち是であります。

◎恁ういふ主意で出來た幼稚園ですから、その組織は極く簡易でございますが、目的は何處までも普通幼稚園に這入る事の出來ない者を預つて、智識の種を播くのであります、毎日五時間づゝ遊戲と唱歌、談話と恩物、此の四科目を課してソレデ其の保育料は一日金一錢といふ最低額でありますから、親達は容易に子供を托されるし、是が爲にいろ〳〵の手數を省き、延いては活計を營む上に餘裕が出來る樣に成て、何れ程便宜を受ける事か知れないのであります。

◎現在入園してゐる幼兒の數は四十名――男二十五名

女十九名──以上もありますが、此の内に何ういふ種類の者があるかといふに、車夫を職業とする者の子が其の半數を占め、母親には卷煙草を内職とする者が多いのです、之を外にしては羅苧屋もあり、魚賣もあり、土方もあり、職人もあり、小使もある、又た阿母が髪結をするのもあり、洗張を内職として居る者もある、父親が死亡して母親の手一で養はれて居る者もある、之に據て見ても幼兒が家庭に於ける境遇の程が想像さるれのであります。

◎保姆長には平野某といふ特志の婦人が在て、創立當時より久しく幼兒の保育を擔任して居られたが、去り難き事情により辭任されたので、今は其の後任者たる松浦しな子氏と補助の安部よし子嬢との二人が献身的に子供達の世話をして居る。何しろ世話の焼ける年頃の子供の事であるから、手數の懸ること夥しく、保姆の心勞思ひ遣らるゝのである。ソレニ設立者たる齋藤、野口の二人は外に職務があるので、懸り切りといふ譯にゆかないので、此の二人が重に園の事務を擔當してゐる、保育に就て野口幽香嬢の語られるには、幼兒には毎日一度づゝ顔を洗はせます、大きい子供は自分で洗ひますし、小さいのは大きなのが世話をして洗はせてやります、此間も手拭が大分穢くなりましたので、大きな子供に洗はせました、小さな手をして洗濯板へシヤボンを附て、仲々奇麗に洗ひました、それから自分のお辨當の袋とか、前掛は、先生の注意で自分で洗つて來る樣になりました。よい習慣が付いたものと思ひます、月に一度位づゝ全躰の爪取を致します、それから耳の垢取り、之は或る子供が耳が聞えなくつて困ると申しますから、耳をあけて見ますと、垢が一杯たまつて玉のやうに成て居ます、是ではと驚いて皆の耳をあけて見ますと、どれもこれも御話にならない樣にたまつて居ます。それから先生は毎日〱皆の耳ほり、一週間から費つたさうです、新築でもしましたら、湯殿を拵へて、時々皆に湯を遣はしてやりたいと思ひますと。

◎園では又た幼兒の保育上、貯蓄心を養成し置くの必

要を認めたので、毎日壹錢づゝ持つて來る保育料の內を、五厘丈貯金させる事にしてゐる。其の法は郵便切手貯金法によつて居るので、毎日子供に手技の一として、五厘切手を手際よく臺紙に貼付ることを練習させてゐる。其から園と家庭の連絡を計る手段として、時々子供の母親を集めて母の會を催し、年中齷齪たる人々の勞力を慰むる爲め、興味ある音樂を聞かしめ、可憐なる子供の生先話などを語り聞かせるので、子供の親達はこゝをエデンの樂園と思ひ、心から感謝を致すのであります。

○園の經濟は、元より慈善的の事業であるから、有志の寄附によつて維持されてゐるのであるが、近來は世人が此の園の仕事に注目して來て、月に五十錢づゝの定期義捐者の外に、寫眞や、繪本や菓子や、子供の喜ぶ玩具や、人形や、色紙や、扨ては着物や、簪や、御伽噺や、新聞雜誌の寄附を申出る者多く、殊に三井一家の如きは、大なる同情を寄せて同園の事業を助けて居るのである、我が女學世界の讀者もこの美しき仕事に金品の寄附を吝むことなく、可憐なる同胞の生育に力を假されんことを願ふのであります。

吃音者の矯正

吃音者は聲帶の緊縮より來る一種の不具にして、是が爲め發音の自由を缺き、社交上に幾多の不便を感ずるは、如何にも氣の毒の事なり、教育界の元老伊澤修二氏玆に見るあり、獨力を以て樂石社なるものを建設し、吃音者の矯正に從事しつゝあるは已に人の知る所なるが、今同社の消息を聞くに、當初以來入社して吃音矯正の傳習を受けたる者、前後合せて八十八人の多きに達し、中には中途退社したる者もある由なれど、總じて根氣よく練習を續けたるものは何れも成績良好なりと、殊に多少教育ある者は無教育者よりも矯正容易にして、先頃特別傳習を施したりし三十三人の學生の如きは頗る結果よく、豫定の二十日間を經ずして、早くも全部を矯正し終りたりと、以て其の効果の著大なる

知るべきなり、此の特別傳習には學生三十三人を限りて入社せしめたるものなるが、中には四國、九州、北越、北海道等の地方より遙る〴〵來社するものあり、外にも陸續希望者ありて、到底全部を收容し能はざるより、已むなく入社を謝絶する程なりしと、氏は此の特別傳習生三十三名を三組に分ち、甲組には聲帶緊縮の度輕きもの六人を置き、乙組には稍ゝ重きもの十六人、丙組には其の度の最も强きもの十一人を組入れ、夫々の狀態に據て矯正を行ひたる由なるが、其の法たるや聲帶の緊縮を解くにあるを以て、先づハヘホの練習より始め、次で吃音者一般に難しとするカ行の發音タ行の發聲に及び、傍ら其人特有の癖を矯正するに在りと、是迄入社して氏の傳習を受けたる吃音者の中には軍人あり、軍醫あり、僧侶あり、商人あり、其他種種雜多の人物ありしが、就中最も甚しかりしは、熊本縣人淺香某といふ三十四歲の人なりし、此の人は生來の吃音にて何の音も發する能はず、到底治療の見込なきものと當人自身も諦め居たるに、本年七月伊澤氏の樂石社に入りて、氏の矯正を請ふことゝなりしより、さしも頑固の吃音も、僅か二十回の練習にて、發音を自由にする樣になりしかば、當人の喜悅はたとふるに物なく、厚く氏に謝して退社したりといふ、氏は此の經驗により何程强度の吃音にても二十回の練習を經れば必ず矯正し得らるゝものなりと斷言し居れり、氏は又た小兒の吃音に對しては、小兒は大人の如く傳習する能はざれば、高等小學を卒業する頃までは放擲し置くも差支なしといふ意見なり、尙ほ婦人の吃音に就て、氏の語る所を聞けば、婦人は男子に比して吃音者少く、尤も語り出せば意の如く發音し能ふといへども、其の語出の一句が支へて容易に口頭を轉び出でざるが如き例は婦人に多くあるが如しと、曾て渡邊某といふ婦人に傳習して進步の速かなるを認めたる氏は、更に進んで婦人吃音者の爲めに、特別の時間を定め、婦人組の傳習を始むる計畫をなすといへば、妙齡の女子にして吃音を患ひつゝある者は、宜しく速に氏に請ふて傳習を受け、圓轉滑脫の談話を試みらるゝ樣に致すべきな



り、氏は又た啞者の治療に就ても頗る黒人なるが、先頃人に語つて曰く、既往一兩名に施したる經驗に依ると、啞者をして發音せしむるは容易なれども、對手の談話を聽取せしむるは、困難なり、現に豊橋盲啞學校長たる吉川欣造は小西盲啞學校長の紹介にて先年治療を試み成績宜しく、現今にては自由に話もし、演説もする由なり、併し同人の演説は外國人が日本語を使ふやうにて、一種の感化力を有し聽衆を感動せしむるものありと、故に吉川の演説を聞けば金を寄附せずには居られずと許さるゝ程なれども、哀しい哉言ふ事丈にて、聽く事の能力は依然缺き居るなり、外國語なれば發音の際脣の振動を見て直ちに對手の談話を了解し得れども日本語にては此點がドウモ不完全なり、要するに啞に物言はしむるは容易なるも聽かしむる段に至ては疑問なり、故に此の一半の解決を試みざるべからずと云々。

流行

秋のよそほひ

飄風子

二十歳前後の令嬢向の袷――其の年頃の長襦袢――同じく帯――縞物の袷――紋御召――縞御召――祝着の趣想――三枚襲――男兒五歳着

天高く、氣清らなる秋日和、颯々たる金風に長なる袂をひるがへし、裳の紛れ毛すラ〳〵と動きてすポンひらめき、木の葉の二つ三つハラ〳〵と落ちて、其の上に宿る玉露の色もいと凝たりや、叢にすだく草虫の音凄たる聲も漸く身に泌みて、人は裏める衣に肌を包むの時期とはなりぬ、されば此時、秋草の綾なす錦繍々として綺に美める世の姿に靡じて流行の粧を新調せんと欲する人の爲にもと、今茲に白木屋呉服店にて意匠を凝らせる秋袷を揭げて、其が説明をなせんに、先づ

▲二十歳前後の令嬢向の袷

としては、第一圖に示す如く、縮緬又は絹縮にて、地色は葡萄鼠の地紗綾、――素鼠にするも好し――模様には眞葛に流水をあしらひ、濃淡を着けたる圖取にて、葉の模様は總て泥畵にてあらばし、水は地紗綾の白裳、花も地紗綾にて紅氣を用ゐず、裾は無論江戸褄模様にて、至極高尚の新柄、秋野の寂びたる景を顯はして瀟洒の趣を備ふ、紋は此頃稍々小紋になりて、鯨尺の八分五厘といふが一般の好みなるが如し、此の下着は對の胴拔にて、裏は紅絹か縹色を可とす、此の二枚襲仕立上りは五十二三圓位なり。

△其年頃の長襦袢

前段の二枚襲に相應すべき長襦袢は、地質紋羽二重にて、地白の地紗綾染め、裾の周圍は蔦の影にて染め拔き、所々日向にて出し、間に匹田をあしらひたるもの、其の染め方は蔦の葉の影は總て紅を用ゐ、葉は草色と栗[illegible]の匹田入にて、全面総模様なるが、頗る優美にて意匠なか〳〵に高雅なり、此仕立上り二十二三圓なりとぞ。

△同じく帯

帯は地質朱珍の丸帯にして、此の地色は焦茶、本金遣にて、深平格子に菊の模様、意匠圖案は古今集にある「うへしうへ秋なき時ぞ咲かざらめ花こそ散らめ根こそ枯れめや」といふ和歌の意を表したるものゝ由にて、地色焦茶の所に菊を白拔にし、葉を天然色にし、格子も白拔と金遣の交りにし、蕊には金を振りかけたれば、色の配合も美しく圖案の出來も高尚にて、頗る引立よき品なり、此の仕立上代價五十五六圓。

▲縞物の袷

扨又縞物に就ては如何なるものが最も流行しつゝあるかといふに、平生用の物にては糸織、秩父銘仙の二種が普く行はれ居るが、少しく上等

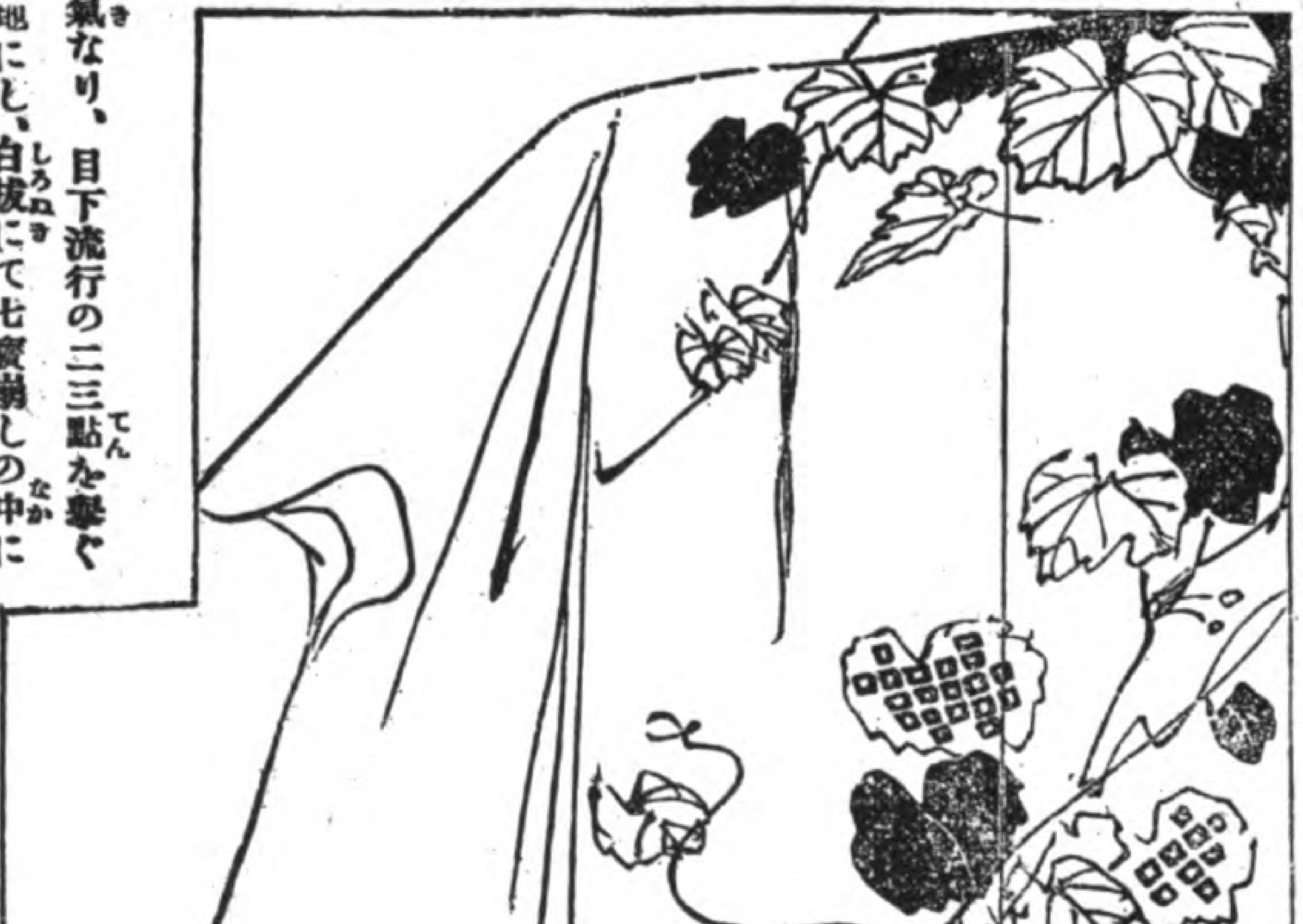
にすれば、先づ、

△縞御召

なるべし、色は栗鼠、濃縹色、葡萄鼠、御納戸、壁鼠等目下の時好に適ひ、柄は小持筋、矢筈絣、朝鮮絣、横立縞などが最も流行を極めつゝあるもの〻如し、此の代價十一圓より十三圓どまり、次に

△紋織御召

となれば、縞物の上乘にて、着心の宜しき丈一般に好人氣なり、目下流行の二三點を擧ぐれば(一)地色を紺鐵地にし、白拔にて七寶崩しの中に雨絣を浮かしてあしらひたるもの、こは柄行に顯る面白味ありて、十八九より二十歳位までの妙齡女子に適す、代價十八圓。(二)地色を焦茶地にし、琴糸に紅葉をあしらひたる中柄の物、柄行は最も高尚なれば品善き令孃方の御召衣として恰好なるべし、此代價十七圓半。(三)薄葡萄鼠の地に矢竹の縞を織出し、それに術の井桁絣を散したるもの、こは極く蕭灑とした柄行にて、人柄の模樣なれば、華車なる婦人には殊に似合しかるべし、代價十七圓内外。(四)紋織御召の吉野織、紫紺の地色へ友色にて彩の浮織模樣を出し、そこへ金糸をもて吉野格子を置いた物、派手好の向に評判高し。

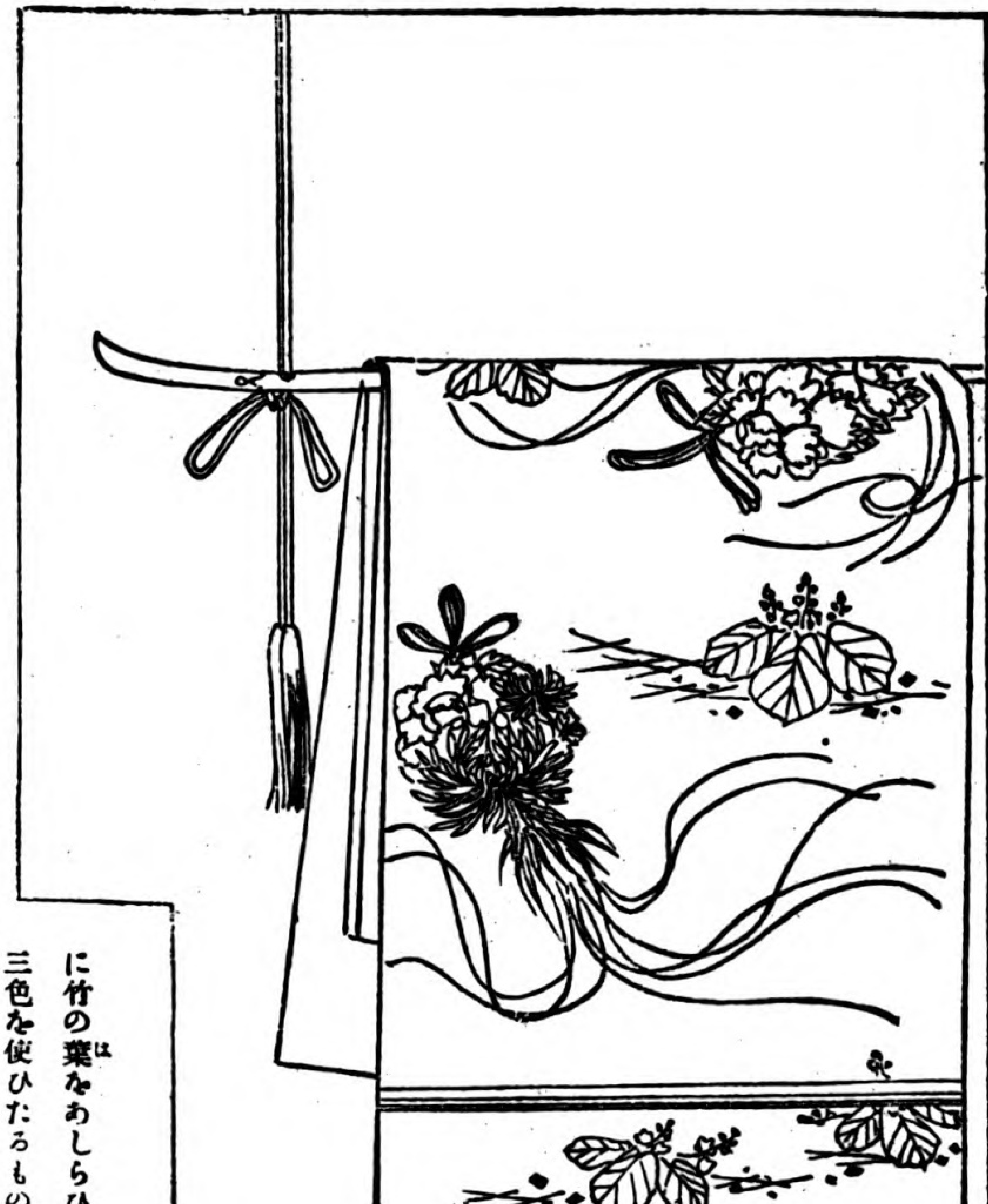


姫蔦の図長襦袢

▲祝着の豫想

毎年十一月十五日は七五三の祝日とて、七歳の女兒、五歳の男兒、三歳の女兒を持つ親達は我劣らじものと競ふて其子に美き綺羅を着飾らせ、日枝神社や神田明神の社頭に可憐なる子の手柏を引くが年々の吉例にぞありける、從つて世の親達が此日の衣裝に意を用ふることも多ければ、將に來るべき本年十一月の祝着に就て豫想したる所を記さんに、色合に於ては去年は古代紫、梅鼠、黒地の類多く流行したるに反し、本年は栗梅が一般に愛好さるゝ傾勢あり、模様も高尚なるものに注文多き見込なりと、先頃白木屋にて第一着に注文を受けたる三枚襲は七才の祝着として、最も恰當の物と思へば、之を今讀者に紹介することゝせん、即ち其の

七才女兒之帯



△三枚がされを見るに、地質は幽禪縮緬にて、地の色栗梅、模様は松竹梅の應用にして、コポシ松葉の瀨切に白茶の鼠濃、白梅に紅梅を散らし、雲輪に竹の葉をあしらひ、雪輪の色は御納戸と薄鼠と小豆の三色を使ひたるもの（第三圖參照）。下着は緋の紋縮緬の無垢比翼付二枚、此仕立上り上着共三枚襲にて七拾五圓の約束なりと。

△帯。帯は朱珍地にて赤地に楠玉、彩色入の金箔などよかろべし、代價三十圓内外（第四圖參照）○扱は淡紅色、鶸色、萠黄、鬱金何れも美しく、品は紋縮緬か紋羽二重の内なるべし、此直段凡そ四圓前後。

△男兒五歳着

男兒の方は女兒の如く華美を競はず手數もかゝらず、黒羽二重又は黒斜子の紋附羽織に仙臺平も襠高袴といふ好みが昔より變らぬ見立なるが、近來は水夫服に海軍帽といふ活潑なる打扮が流行し初めたり、これは可愛らしくてよきものなり。



裾模様萩と葛

髪飾品々

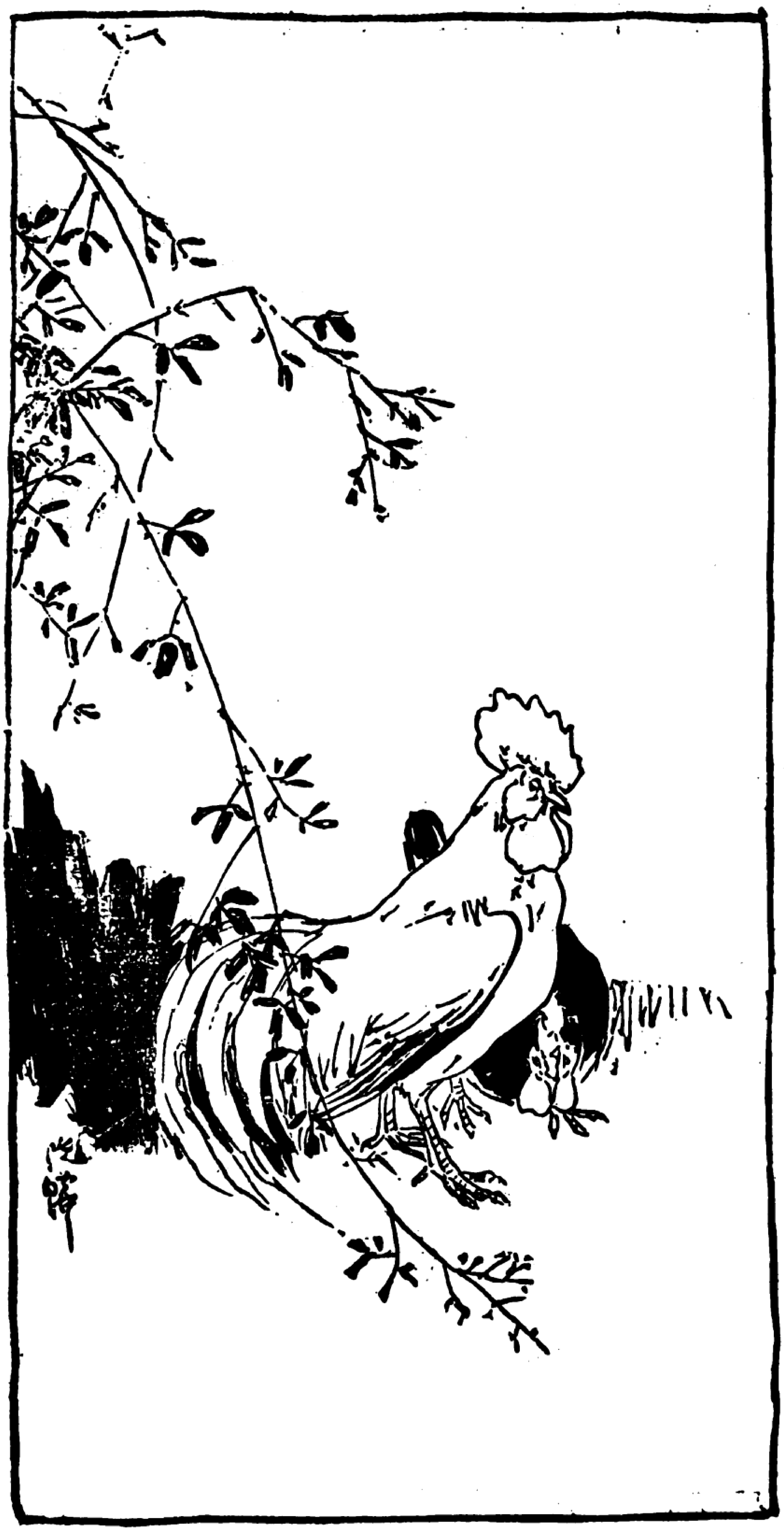
秋に入りておいおい新らしき流行品の紹介すべきもの多しまづ髪飾道具に就て見るに奥様向きの櫛、笄は純銀鍍消の地に、象嵌片切で、朱舟、流に笠、蟲籠に撫子、黄菊白菊、萩桔梗などの透し入り、形は操形、一組の値段十五六圓位、次が鼈甲地に蝶貝、青貝、又は金銀のあしらひで、右の模様を彫刻したもの、一組の値段六圓以上十三圓位、根掛けは、翡翠か孔雀石の三分五厘丸から、四分位の入粒種のものが最も多い、値段は一掛け五圓から廿圓まで位。次が純銀艶消しの地に、三つ折の

簪根掛へ、濱に千鳥、秋草、片輪車などを片切彫りにしたものが流行、値段は二圓から四圓まで、簪は、白銀製白上り地の五分か六分位の平打に、古代濱、楓に流木、亂菊、松葉巴などの透し彫とか、又は銀松葉足へ珠母貝の透し彫で、古代鏡、濱に千鳥源氏車などの玉付で、一本の値段、二圓から五圓位まで、上等ものは、二十金製に白金を象嵌したもので、十八金の肌色へ、墨繪の象嵌の平打杯とす一本十五圓以上五十圓位オツパール玉の根掛は、黄紅淺黄、その外いろ〳〵の光澤があるので、何品であるか、一寸判斷の出來ぬ珍品であるから、上流には至極適當して、面白い品である、値段は一掛け五十圓以上する、簪の玉で一個が十圓以上もする、寫眞蒔繪の櫛笄は、珍らしい趣向で、値段も至極安い、銀地へ各名所の風景を現したるものなどで、何人にも向く品であるが、一組が四五圓位のもの束髪用の道具は、黒鼈甲か、金銀製の透し彫で、百合菊、酸漿、秋草などの模樣をつけたもので、二三圓の處であるが、銀製白上りへ、色石をちりばめ、月に星、唐花、又は同し品の製、平戸製で、種々の七草中へ、寶石を嵌め込ませたものが、殊の外に流行する、値段は、一本五六圓で、上等物といへば、純金製に、ル



祝着女兒の模樣松竹梅應用

ピー、眞珠などを嵌めこんだもので、一本が廿圓内外とのことである、根留は、六分丸、青貝地へ漆繪にて、前にいつたやうの秋草を描きて、足を純銀製にしたものが一本二圓前後である、小供向きのリボンは結んだものに、別段變つたこともなく、大に流行して居るが、西洋草花を摸造した花束が最も盛に流行して居る、値段は一個が十錢以上五十錢位である。（完）



家庭 幸福十二箇條

▲其十一▼

大阪 日下千惠子

1、國家に事變なきこと
（國に事あれば一家幸福なりともせんなし、

2、家内皆健全なること
（一家内皆健全なれば眞の樂み之より生ず、

3、夫婦和合すること
（夫婦は家の基なりされば其の和不和はその家の盛衰に關係す

4、老たる父母の長壽なること
（年老て子孫の榮ゆるを見るはいかに樂しからん

5、善良なる子女を有すること
（世俗にも子は寶といへばよき子女の澤山あるほど幸福なるはなし

6、家内親類の睦じき事
（一家族親類の圓滿は實に樂しきものなり

7、主人名望家にて人に信用あること
（人に信用せられてこそ社會に活動も出來るなり

8、家業の繁昌なること
（家業の隆盛におもむくは實に嬉しきものなり

9、衣食住不足なきこと
（ありあまるほどでなくとも不足なく幾餘分にあらば人にも惠み得るも

10、惡事災難なきこと
（家内幸福も望ましけれど惡事を致されまた不慮に天災などのなきことを望む

11、家内に娛樂あること
（家族相共に旅行するとかまた害のなき娛樂ありたきこと

12、豐年なること
（豐作なれば自づから人氣も立つものなり

▲其十二▼

長野 くに子

（第一）幼き時こそ むづかざれ長ずるに隨ひ歴史地理等に於て我國體のおごそかなるを知り 諸外國の國柄さては支那印度等の現在過去を思ひめぐらせばなかなかに君恩のかたじけなき殊に二十世紀に 生れあひたる吾等は誠に幸多き身なるよ

（第二）世には早く父母の去られそのみ顔すら定かにおぼえぬ 人ありかかる人樂しき時かなしき 時いかにし思ひ出多かるよ捧げまつる香花にもおつる涙の種そばく子養はんと欲すれども 親いまさずの嘆あはれならずや吾は父君母君の 温顔に接し兄弟打そろひ樂しき日を送る誰かこれを幸といはざらん

（第三）健心は健身にやどるとか 身體の健なるばかり幸福なるはあらじ月雪花に對するとも 身弱くてはいかでかく樂しかるべきまして健なると否とは事業の成功に及す勢力の大なるを

（第四）學びの海のはてしなければ科學的に學理の深蘊を極めずとも 普通教育を受け 日常の文通にも事かゝず傍訓なき文章もよみたどたどしからぬこそ逆境に立ちて 心ならずも文の林に分け入られぬ君たちに思ひくらふればまづは世の幸にもれざるなり

（第五）殊に我は美貌を衒ふものにあらずされども 四肢五體の完全せる並人の幸を父母に受けゐたるなり

（第六）我はある山里にゆきしに 幼子等の母にむかひ汽車とはいかなるものか楽隊とはいかに見せてよ〳〵とせまるを 聞きぬ我はあながちに花の都ならずともこの 里に生れさのみ文明に後れざるを幸とす

（第七）人として誰か富貴なるを願はざらんさり ながら金殿玉樓に錦衣をまとひ美味を食むも 其家庭にして亂れあるは家の不和ならんにはいかで誠の幸なるべきよしや登る煙の 細くして重ぬる衣はうすくも互にたすけ一家團欒せんこそ誠の幸なれや

（第八）よしや財産あまりある身なりとも 夫あるは子に先き立れ老を養ふすべもなくよろこびうれひを 分つ者もなく遂にはかなくなりぬる後にも靈まつる法の 灯火もたえ〴〵なるあはれならずや誠まされる寶子にしかめや老ひて子なき是世の幸にもれたるなり

（第九）人の母となり妻となりて其本分をつくし 理想の家庭を造り一家だんらん何不自由なく社會の文明に後れざる又幸ならずや

（第十）學資もおのが 才能も共に豐富にして心ゆく限り學理を究めやがては第二の國民たるべき撫子の教育者となり 御國のためはた社會のため身を犠牲に供し教へ子の將來を樂しむこれ又幸ならずや

（第十一）満足てふ事を知らざる人はいかにおのれは 幸福なる位置に立ち人に羨まるゝ身なるも足る事を知らざれば 幸を幸とも思はず上のみまれび不足をのみ言ふされとも足るを 知る人は百難の中にも一道の幸の光を得て心やすく送るを得べし是自ら幸福を造る人なり

（第十二）安心立命なき人はさもなき事にも 腹立しく常に齷々として楽しき日とてはなし又悲業の最後など遂ぐる人は多くかゝる 人にありまこと淺ましからずやされはある 宗教に歸依し因果應報を悟り心安く世を終るは誠幸福なる人にしてすべての幸はこれより起るものなり

▲其十三▼

大阪　栩野幸子

（一）良人に満身の愛を受くる
　自分は献身的満身の愛を捧ぐるに對して良人も不倫不品行をなさず其満腔の眞情を以て自分を愛されなば婦女子として之れに過ぐるの幸福はあるまじ但し自分の職務に不熱心な遊惰な人では幾ら愛して貰つてもダメデス

（二）家庭の圓満なる
　和氣靄々として些の不満なく一家團欒克く親しみ克く楽む

（三）安心立命
　凡楽観的思想を以て天命を楽む

（四）無事平安
　家内親戚知己皆無事其正業に就て何等の心痛無く胸中一點の曇るなき

（五）足る事を知る
　何事にも不満を懐かず及ばざる慾望に汲々煩悩する事無く只分を知て己の位地境遇に安じ得る事

（六）兩親の健存
　蝶よ花よと育て賜わりし父母の笑顔を以て何迄時も慈しみ賜はるはいとうれし

（七）血統の正しき
　人々の厭ふべき遺傳病又は先祖に罪悪等のなき

（八）健康
　満足なる身體に生れ無病息災なる

▲其十四▼

二葉

1、日々太陽の光を受け居ること
2、平和なる國に生れ逢ひしこと
3、身体健康なるべきこと

4、活潑なる心意を有すること
5、教育あること
6、禮儀あること
7、活性的動物たること
8、家庭の和樂せること
9、我が愛する人と一生を送ること
10、子あること
11、獨立心に富みて鋭氣あること
12、社會的生活をなし居ること

▲其十五▼　名古屋　若き軍人の妻

1、良夫に配遇（享）
2、家庭の和樂（享）
3、正しき血統（享）
4、健康（享）
5、子供あること（未享）
6、良人の名譽を樂しむ境遇（未享前途有望）
7、良妻賢母の實に協ひ得し時（未享）
8、己れの理想を行ひ得る家庭（享）
9、一族皆有爲の人物のみなる事（享自信）
10、富貴（不享）
11、技藝才能（不享）
12、容貌美しき事（不享）

▲其十六▼　四谷　鈴木千維子

1、健康なる事
2、父母の揃へる事
3、多くの兄弟姉妹を有する事
4、物事に滿足する事
5、趣味の高尚なること
6、學問、才智を備ふる者
7、目的を果すこと
8、深切なる親族を有する事
9、相當の財産、身分を有すること

▲其十七▼　ひつの白菊

一、相愛する善良なる人と結婚したる事
二、良人に家庭精神のある事
三、己が理想をなし遂げ得べき家庭に嫁ぎたる事
四、家族に教育ありて然も美術的精神に富める家に嫁ぎたる事
五、健康にして愛らしき容貌を備へたる子ある事

六、家族に育兒の心得ある事
七、家庭圓滿にして宗教の心ある事
八、善良なる實父母存在せる事
九、朋友數多非ずとも最も信義あるもの一人ある事
十、平易に家計を營み得べき財産ある事
十一、社會より信任せらるべき力ある事
十二、美親健康にして獨立をなし得べき學術技藝に長達せる事

▲其十八▼

逢 子

一、身体並びに精神の健全
二、高尙にして和氣靄々たる家庭
三、夫妻の好配偶
四、身の境遇によらず常に己が希望を捨てざる
五、自然の妙味をさとりてこれと親み得るもの
六、何事にも不滿を抱かざる
七、文學の趣味を有する
八、良き親兄弟及び友を有する
九、神を信ずるもの
十、愛の心の滿ちたるもの
十一、徒に名譽利達の念にかられざるもの
十二、長者には愛せられ從者には敬せらるゝもの

▲其十九

中等商家の娘

(一)父母の健康なる事
(二)心の豐裕なる事を欲す
(三)終生讀書の餘暇を得る事
(四)才學人に勝れたる兄弟を有する事
(五)家族の平和なる事
(六)社會貴賤の別の甚だしからざる事
(七)家內の淸潔なる事
(八)自力にて貯金ある事
(九)多少によらず慈善し得るもの
(十)富貴なる事

▲其二十▼

前田 秀 子

第一自由を得たる國の人民たる事
第二世界の最上級に位する國に產れたる事
第三女子にも金の自由を與へらるゝ國に產れたる事
第四階級なき國の人民たる事
第五兩親が高德才智をもつて世界に冠たる事
第六兄弟姉妹八人以上有る事

第七一家族こと／＼く健全にして皆思ふがまゝに社會に活動して他人より道德上一點も非を打れず人爵にあらずして天爵を得たる事

第八品性立派なる進歩的の女友界に向つて活動する樣なる女友を得たる事

第九學問を深くし研究の出來得る事

第十心に信仰を得たる事

第十一海にも遠からず山にも遠からずといふ片田舍にありて日本風の家を立て、最愛なる我友と終生住ひ得らるゝ事

第十二孫の顏見て死ぬる事。





才媛詞藻

佐々木信綱撰

（天）燈　横濱　長谷川さく子

罪なくて島へやらるゝわが影のむしろにさむし船のともし火

評　複雑せる想を巧にいひこなしたり

（地）虫　長崎　米田園子

襖繪の花野夢よりほのかにて更けしか虫の近うなりくる

評　神韻の體詩趣深し

（人）秋雨　芝　田村さく子

やけあとは草のみ生ひて筒井筒汲む人なしに秋の雨ふる

評　眼前の景平淡にいひ得てよし

秀逸

秋雨　麹町　紳谷よし子

施餓鬼果てゝ人はかへれる古寺のやぶれ芭蕉に秋の雨ふる

秋雨　栃木　鈴木そめ子

朝顏の枯れてまつはるませ垣にこほろぎなきて秋の雨ふる

秋雨　周防　大木くに子

故郷の母やみますの夢さめて枕にさびし秋雨の音

秋雨　麹町　淺井清子

夕暮を思ひあまりて野にいづればまたも降りきぬ秋の村雨

虫　本郷　菊地諦子

思ひあまり月すむのべをさまよへば夜風つめたしたゞ虫の聲

秋雨　伊勢　石井峯子

ふるさとを戀ひつゝ窓をあけ見れば初雁なきて秋の雨ふる

美濃　高木庭子

母君と社に詣で行末の幸を祈りて燈火奉る

群馬　佐藤けん子

はせを葉に雨の音する秋の夜に亡きつまこひてたゞ獨泣く

まどゐして文よみたりし其かみのそゞろ戀しきともし火のもと
● 下　總　濵下ちか子

亡き父の愛にてし庭の萩かれて虫の音さむく秋暮んとす
● 豐　後　志村かれ子

凪ひわび窓の戸あけて眺むればゆふべの空に秋雨のふる
● 横　濱　小泉はる子

きりの葉のひとは落ちまたふたは落ちて垣根のむしも鳴きいでにけり
● 四ツ谷　内山とよ子

月ふけて凪もおとせぬこの夜中を今ぞ我世とむしやなくらん
● 神奈川　ゆ　づ　る

おほかたは畑となりたる城址の古井のほとりきり〴〵すなく
● 岩　代　齋藤とま子

風凄く芥子の花ひら地に落ちて虫の音やみぬ黄昏の庭
● 靜　岡　大高紅子

ほそりゆく閨の燈火かきたてゝ病む姉君に藥すゝむる
● 石　見　宮内とみ子

細う見ゆる杜の燈凪にゆれて秋の夜寒く星流れけり
● 愛　知　宮本學子

おもひ出の涙ながらに伏しながむ父の奥都城虫の音繁き
● 信　濃　錦織孝子

虫なきて秋風寒き砂山のふもとの小野に日影うするゝ
● 長　崎　宮永てる子

よみかけし書さしおきてつく〴〵と獨物おもふともし火のもと
● 加　賀　松寺綠子

● 美　作　太田加女乃

書讀に學よまな子に遣るべくともしのもとに衣つゞる母
● 兵　庫　秋野末子

文机のちりをはらひてともし火のかげにしたしむきのふけふかな
● 越　後　和歌田雪子

からころもうつ音やみて賤がやのさびしき軒にはた織のなく
● 熊　本　安田文子

燈臺の光はるかに見ねそめて凪ふ港に船ぞ近づく
● 和歌山　桑原園子

君が家は秋霧にいづこ夕たけて野路の萩原雨となりにけり
● 京　都　三の宮露子

こどもなく冠日はすぎて秋の田の穗なみしづかに雨ふり出でぬ
● 仙　臺　菅とみ子

破れ衣繕る嫗の面やせて凪にゆらめく燈の影
● 伊　勢　岡島榮子

日記書くと取り出でたりし旅硯旅の宿りのともし小暗き
● 加　賀　松寺綠子

山川の水音遠くかすかにて千重杉村に秋の雨ふる
● 神　戸　う　た　女

山里は櫨の紅葉ば晝のあめ賤謠ふ磨臼のおと
● 門　司　熊谷ふき子

音たかき波のひゞきに夜は更けてともしびもるゝ島守が窗
● 芝　瀬なはな

たちそめし家ゐのかずをよむばかりともし火見ゆる新墾のむら
● 大　阪　匡　子

釣にいでし父まつ門に日は暮れてまたひとしきり秋の雨ふる

暮を経へてしばしかたらふ山寺の白萩月夜虫の聲する　陸前　鈴木いれ子

佳調

題（秋雨、虫、燈）　香川　扇家芳子

たそがれに寺院の空の霽はれて月清き野に只むしの聲　小石川　大村てふ子

鐘の音も次第〳〵に遠くなりて燈ほそく波にきらめく　神戸　中村菊子

奥殿の軒の燈火ほのかにて小萩こぼるゝあけぼのゝ庭　弘前　成田ひろ子

わが背子のかたみの襲の肩きぬる秋のゆふべに虫なきしきる　神戸　黄里

さなきだに秋はかなしきものなるに雨にくれゆく旅の宿はも　神田　藤井鷹子

亡父君が昔語りのなつかしさに小雨ふる夜もさびしくもあらず　伊勢　松野しげ子

うたゝねのさめて淋しき秋の夜にあはれをそふる虫のこゑ〳〵　名古屋　馬島たまゑ

知り人をとはんと急ぐゐなか道ちらほら見ゆる燈のかげ　鳥取　上山千重子

小鳥鳴くやまふところの一つ家の戸ざした洩るゝ燈の影　備前　山下伊馬子

友訪ひてかへさを急ぐ夕ぐれに森の木がくれ燈の見ゆ　駿河　菊池武子

病ませる母の枕頭に物おもふ夜中さびしくも秋の雨降る　千葉　嵯峨野萩枝

病みませる父が枕邊さしよればこぼれし壁にこほろぎのなく　三重　山本蘭子

亡き母の墓詣でする歸るさにあはれかなしき虫のこゑ〳〵　神戸　岩松まさ子

母君の病は癒ゑず今日も亦村雨ふりて日はくれにけり　仙臺　石田せん子

亡き母のおくつき訪へばいたづらに草のみのびてひるも虫なく　信州　帯刀きさへ

葬式の送ひとしきり行きすぎて秋の花野に小雨そぼふる　石見　宮内登美子

庭草になきしきりる虫の音のにはかにたえぬ背子や來ませる　静岡　加藤とら

去年君と語りし岡の草叢にあはれさびしく虫の聲する　相州　鈴木つた

宿りの心の夢を驚せとや窓のべ近く虫のなくなる　岐阜　松本れい子

道問はん里の家も見ねなくに廣野ら三里たゞ虫の聲　茨城　榊はる子

百舌鳥の鳴く片山そひの山畑の蕎麥の畑に秋の雨ふる　山崎ゑい子

さねわたる月は窓よりさし入りていとほのくらき燈の影　岩代　才東すが子

日は入りてはたへ寂しき夜は來ぬ沖にいさりのともしびを見る

折々は交よむこゑの洩出て燈火し村長のいへ　千葉

●　信濃　竹鼻はる子

ほゝゑめる我子の寐顔うちまもりつゝれるすなり燈火のもと

●　京都　武月英子

小机につらつゑつきてもの思ふ窓のほとりに蟲なく

●　武藏　深堀千代子

うきことを思ひます窓のいとすゝき亂れ啼くなる虫の音哀れ

●　因幡　原田久子

ふる里の便も絶ねて此頃は一と雨毎に秋の淋しき

●　豐町　經靜枝

住みわび草葉の影に終夜なきくづれたる虫の聲かな

●　下野　松野千代子

つゆしげき秋の野分けて亡き姉の墓吊へば虫の聲する

●　東京　友野蓉子

なく虫のこゑもとだえて秋雨の芭蕉を叩く音しづかなり

●　本郷　信子

すゞ風のはや立ちぬとてこほろぎのつゞれなるせといましむらこゑ

●　豐前　松田みれ子

うつくしく漁火みねて天草の月の海原淋しづかなり

●　岡山　盛子

鐘樓にわかき僧一人撞木とりつく手たゆたふ秋の夕雨

●　熊本　露子

むれのもだね得たへぬ夜中をおばしまにひとり立ち居て秋の雨きく

●　栃木　きい子

木々の葉をもみぢにそむと天つ神のそゝぎましつるあきの雨かも

●　栃木　春江

來ぬ人をうらむが如くまつ虫の聲ふりたてゝよたゞなくなり

●　仙臺　山中芳子

竹椽に月傾きて露光りにはの草むら虫なきしきる

●　陸中　澤藤綾子

母君の病をとへばきねかゝる灯を指しませり此如くとて

●　下谷　多喜子

鐘の音は低くしめりてきこゆ哉秋の不忍夕ぐれの雨

●　越後　白百合

ゆかしくも七草香ふ秋の野に所せきまで虫なきしきる

●　熊本　鹽木友子

小夜更けて鳴くれ淋しききりぎりす微にやみて秋雨ぞふる

●　上田　成澤貴子

山門にぬれたるからすやすらひて稲刈る少女畔路急ぎゆく

●　熊本　野尻房子

秋深き夜寒の露になく虫の枯々殘る聲のかなしも

●　肥後　つゆ子

よみさしのふみをたゝみてそこはかと孤燈のもとに物おもふかな

●　大森　森波雅子

なくむしをおとろかさしとおりたてはあたきりのはの二つ三つちこ

●　福岡　中村俊子

幾度もねさめて聞けと聞こえけり夜すから虫のなきあかすらむ

●　東京　多賀子

御法するこゑも消ね行く山寺のともしひくらし秋の夜の雨

●　東京　友野春子

旅人の往来もたえし宮城野に露をまつむし月になくらむ
●　静岡　あきさ女

旅人のやまひのしらせよむ宿の芭蕉にさびし秋の村雨
●　伊勢　木多ひろ子

古寺の読経の聲もたえはてゝにはの草むらこほろぎのなく
●　美濃　馬淵婦美

賤の女はいそき家路に歸りゆきて一里稲田秋雨のふる
●　東京　大久保静子

三年ぶり友とかたらふ丸窓に燈くらく月すみ渡る
●　山城　大久保よそ子

秋雨のそほふる夜こそ淋しけれましらなく音に目をさましつゝ
●　滋賀　多喜たつ子

月影は松の上高く上りけり今はと歌へ庭のまつ虫
●　大阪　せん子

草茂き秋の山路を分け行けば露の奥に佛燈の影
●　静岡　栗田芳子

好みましゝ鈴虫の聲きけばゆきにし君の戀しくもあるかな
●　岐阜　白つゆ

みやまちにしくれのあめやふりにけむもすそぬらして賤の女かへる
●　石狩　松井とみね

闇の夜になく子なだむる歌たえて燈火くらし野路の一つ家
●　駿河　戸澤はな子

鬼馬野の其名もゆかし道辺に馴追ひ虫の夜たゞ鳴つゝ
●　静岡　飯田すみれ

朝な夕な通ふ野路の草むらにこほろぎ鳴て秋ともなりぬ
●　熊本　野尻房子

秋深み桐の葉落つる夕ぐれの時雨降るなり垣根さびしく
●　大阪　岡崎かつ子

消えがての燈火細くかきたてゝ又もながむる君がうつしゑ
●　大阪　露草

終日のつかれ休めて賤の夫がたのしく語る燈のもと
●　岐阜　三輪はる子

月落ちて木かけ小暗き暁方に一きはさむく虫なきしきる
●　駿河　川ふみ子

訪ふ人もなきわが宿の庭あれて鳴音佗しき秋の虫かな
●　岩代　菅重和子

けふもまたいかなる人の手向けけんともし火ほそし神の廣前
●　岩代　菅野和子

去年の秋やけし那路野となりて草村ことに虫の聲する
●　岩代　菅野和子

ふる毎に木々の木の葉の散おちて村雨さびし秋の夕暮
●　佐久間　ゆりか

昨日しも訪ひ來し友のおもかげをまた思ひ出す秋の夜の雨
●　上總　市原まつ子

きえしかと思へは見えて濱の岡にかけさたまらぬ海士のともし火
●　加賀　芳子

文をよむ聲のきこえてうれしきは君が窓もるともし火のかげ
●　横濱　長谷川さく子

寺々の鐘にいたみのひゞきあり秋雨さむき奈良のふる里

● 島根　白藤子

月あかく白露しげき秋の野の草葉のかげに虫なきしきる

● 下總　白ゆり

何にかも思ひみだれてきりぎりすわれと共音によもすがらなく

● 靜岡　山家梅

あれはてゝ訪ふ人もなき賤が家にたれまつむしの夜たゞなくらむ

● 和歌山　郭文子

秋の夜に落葉をたきて病む母の側にて居れば雨ふりいでぬ

● 和歌山　桑原園子

鐘の音のさむく聞ゆる夕ぐれを老木の松に秋の雨ふる

● 京都　笑浦ふも

鳴く虫の聲もしめりて更る夜のあたりさびしき秋雨のふる

● 長門　今藤欽子

飢ゑに泣く稚子をいだきて夜毎日毎亡き妻しのぶ秋雨の頃

● 遠江　寺」「田靜子

父母のみ墓詣での歸るさに日は暮れはてゝ虫のこゑする

● 上總　山崎妙子

やみたりと思へは又も一としきり淋さめさびしく秋の雨ふる

● 神戸　高井きくみ

つくづくと友こふまとに音信れて心ありけの秋の村雨

● 岐阜　湯淺美子

澄む月にすゞろ音の君忍びなればなだむる如き虫の聲哉

● 岡山　野崎もと子

秋雨のふる度ごとに色づきてみるもうれしき稻田の面哉

● 麴町　淺井清子

みのりよむ聲もとだえて大寺の墓場しづかに虫なきしきる

● 高知　兒島てい子

月すみて吹くかぜ寒き野中路におのがさまざまなくむしの聲

● 名古屋　久田とく子

さらでだに悲しき夜中の秋雨に亡き子抱きし夢さめにけり

● 神戸　中村菊子

あかつきの風に誘はれ野路ふめば月影淡く虫のこゑする

● 播磨　三保千代子

さよふけて燈くらし暮るゝ秋降り來る雨に虫の音しめる

● 秋田　佐藤千代能子

ねざめしてつくづくきけばあまたある虫のなかにも鈴むしのこゑ

● 靜岡　梅子

むらむらと露は出できて淋しくも尾花がそでをぬらす雨かな

● 高田　小林靜枝子

母もなき獨り住居の夕ぐれになつかし人をまつむしの聲

● 四坂島　渡邊勝子

さらぬだにわびしきものをこの夕哀を添て秋の雨ふる

● 長野　和代子

賤の夫がかりたるいねをぬらさじといそぎてはこぶ秋の夕ぐれ

● 福岡　鬼口つの子

夜もすがらつゞれさせとて鳴虫は衣手うすき我や知りつる

● 大和　森本かめの子

病人の枕べくらきともし火にみまかふばかりおもやつれして

● 大和　細川しづ子

露おもみ落て玉散る梧桐の葉のかげにかくれて鈴虫のなく

● 信濃　本邑綾子
秋きぬと桐の一葉のつげしより虫の聲さへものあはれなり

● 茨城　大槻夏子
はせを葉の破れたる下にたゝずみて物おもひをれば秋のあめふる

● 本郷　中村八千子
月高う秋の野原の小夜ふけて人影もなく只虫の聲

● 名古屋　みち子
松風のかよひし聲の夢たねて庭のともし火かげあはくてる

● 靜岡　佐藤かつ子
やむ母を一人のこして旅に行くあしたにさむく秋の雨降る

● 下野　田村きい
世をよそにかくれし家もおとづれて蟲の音のみはところ撰ばぬ

● 小樽　村上きよう子
一雨は一雨ごとにうつくしくきのふにかはる山の色哉

● 兵庫　京枝
旅まくらむすぶたびれのゆめさめてきくもさびしき秋雨の音

● 丹波　かきつばた
歌留多とりし友はかへりてさびしさをにはかに繁ふるむしの聲々

● 駿河　菊地たけ
たへかれし暑さは去りていつしかと蓬生が庭にすゞ虫の鳴く

● 神奈川　保田ゆづる
只ひとり文よむ軒の芭蕉葉にふる雨さむし秋のゆふ暮

● 大阪　平川貞子
小柩を野寺におくる夕まぐれ吹風さむく秋雨のふる

● 和歌山　上田かほる
露おひて夕野をかへるかり人の肩にさびしく秋の雨ふる

● 芝　若狭雪子
あみすきていも背孫ふかげ見ねて苫の内あかしとししびの影

● 大阪　ますみ
稚兒に明日の祭日に着せむとて衣縫ひいそぐ燈火のもと

● 下總　さくち子
やぶれたるばせを葉叩く村雨の音もさびしき秋の夜中哉

● 土佐　梅子
虫の音のさだめするまに月落ちて友とまどひぬ歸る野路を

● 眞岡　もゝ清
若き尼が色紙とる手にかをりくるにはの千草に秋の雨ふる

● 長門　原田糸子
なく虫を月なき宵に獨りきけば身にしむ許りかなしかりけり

● 下野　光江
月は照り千草さけども鳴く虫のこゑし聞かれば秋ともなし

● 駿河　菊地武子
こほろぎの聲もほそりて此頃は吹風さむく秋くれむとす

● 神戸　荒川みい
氏神のまつりのたいこ音たねてのきばしづけき夜中の秋雨

● 岡山　在本まき子
嫁し妹に妹を送りて歸りくるあしたしづかに秋の雨ふる

● 岡山　北村幸子
ふけぬるか睦か來くる音たねてわら屋のめぐり鈴虫のなく

● 駿河　林すぎ子
芭蕉葉にむら雨そゝぐ音のして今夜はいとゞさびしくもあるか

● 信濃　竹森はる子

夕餉たくくりやの窓にほの見ゆる螢火あはし木がくれのやど

● 赤坂　香月貞子

母君のみはかのあたり月すみてみにしむばかりこふろぎの鳴く

● 前橋　田中井孤月

山路よりとりきて植し秋萩も今宵の雨にちりやはてなん

● 秋田　みち子

つれ〴〵に一人もの思ふ我がやどは虫より外に聞くものもなし

● 下野　やなぎ子

友が家にかたりくらしてかへるさの月の萩原鈴虫のなく

● 北海道　小林なこと

めぐり合て淋しさかたる湯の宿の秋の夜更て雨となりぬる

● 下總　栗宮鉦子

虫籠に啼き細るむしの聲もしてあきはさひしき蓬生の宿

● 信濃　小岩井しげ子

今さらにたれまつ虫の聲すらむうき世へだてし我が庵に來て

● 芝　獅なはな

かへり來てひとり聞くこそかなしけれむくらか庭の虫のこゑ〳〵

● 越後　樺子

小山田のくろゆく稲見ゐずなりて萩にひそ〳〵秋の雨ふる

● 芝　川井きく子

山の端に月かげ落ちて城あとのかや原一里只虫の聲

● 岩代　齋藤吉子

ほろ〳〵とさゝ栗おちて山かげの庵しづかに秋の雨ふる

● 日本橋　松野

草むらにわれまつ虫と鳴ひきやなつかしと寄る音はとだねて

● 備中　山川まさ子

香りつる大臣の屋敷あれはてゝ古き井筒に秋の雨ふる

● 松山　野文子

古郷にやみます母をしのびつゝながむる庭に秋雨のふる

● 甲斐　細田澄子

籠を手に茸とる子の笠の上にもみぢ葉落ちて秋雨の降る

● 上總　市原ふみ子

さすがにも都の夜はよるならすくまなくてらす軒のともし火

● 下谷　みき子

さらでだにさびしきものをさよふけて軒端をつたふ秋のむら雨

● 下野　福田武子

賤の女かくたまく音もさよふけてよさむをわぶるはたおりの聲

● 上總　齋賀うめ子

月清みたれをまつ虫よもすから野守か庵の軒になくらん

● 岡山　谷入重子

よもすがら窓打雨をつく〴〵と聞くも物うき秋の夜半哉

● 佐賀　蔵香ゑみ子

なき友を草ふみわけてとむらへば落葉がくれに虫のなくなり

● 岡山　北村幸子

稲束をはこぶひな歌聞ゐ來て行手にうすき村の燈火

● 大阪　寺西ひつ

我園の萩の盛りをむなく昨日も今日もそゝぐ雨哉

● 駿河　菊地武子

夕げたく烟りなびきて軒つゞき街樹の梢に秋の雨降る

秋の日の雨はあつさを奪ふらんふるたびごとに涼しまさる　神奈川　中山綾子

●

つくづくと我が上おもふ夕ぐれを泣くかごの虫はなちやるかな　東京　白ぎく

●

しくしくとなきの音して森かげにともし火あはし燈が一つ家　神戸　山下とめ

●

ともしびのかげもあはれに病む夫のねがほをまもる秋の夜半かな　駿州　岡田すて

●

逝きませる母をかこみて夜もすがら言の葉もなし燈火の前　三重　吉村靜枝

●

糸車紡ぐ響のたえはてし靜けき夜半にこほろぎのなく　奥州　さくら

●

萩まげて窓に覗づる孤児のたもとをぬらす秋の雨かな　常陸　石井けん子

●

草むらのはたおり虫はあはれなり野べのにしきをなきて織るらん　紀伊　まき子

●

なれもまた降る秋雨をいとひてか桐の一葉に雨かへるなく　長門　紀まき子

●

去年の秋み草ならしありし野に聲いさましく鈴虫なく　伊勢　亀井秀登子

●

秋雨に虫の音しめる夕ぐれをたらちね如何眺めますらん　奥州　江木せつ

●

京都　古川かつ

八千草の今を盛りと咲く野邊に降るも靜けき秋の雨かな

●

越前　宮川清子

ふきすさぶ風はしめりて萩の葉に音さびしくもふる小雨かな　周防　大木くに子

●

呻く聲くるしむ聲も靜まりて燈火寒し病院の窓　三重　高橋華子

●

音にもあきぬ聲にもあきぬ友も來すむしの音しめる雨のゆふぐれ　播磨　細川あき子

●

ひとりしてきぬぬひをればつや露のはなさくあたりなくみゝすかな　下總　石渡つれ子

●

なき友のみはかはいたく荒はてゝ人をまつ虫聲たえすなく　栃木　瀬下千勝子

●

月冴えて虫のね消しいざさらば君がかたみの箏やかなでん　岐阜　三輪はる子

●

軒近く雁なきわたる夕まぐれ背戸の芭蕉に秋の雨降る　名古屋　靜子

●

背の君のかへりおそしと待ちわびて夜は更けにけり燈のもと　駿河　林すぎ子

●

只一人雨きく夜半はことさらにわかれし友のなつかしきかな　波さみ　馬場きな

●

月かげもこぼるゝ野邊の細道に人まつ虫のこゑぞゆかしき　熊本　柳田文子

●

さよふかく旅寝めてきけば窓近きはせをにそゝぐ秋のむらさめ　京都　三の宮露子

●

燈火のかげに毛胸を露はしてまたゝきもせず讀みかく書　熊本　豊子

●

山莊に暮るるけしはゆめなれや衣手さむくこほろぎのなく

● 信濃　竹林はる子

汽車すぎしあとをみむくる富士の嶺のすそ野三里は只虫の聲

● 岩代　齋藤吉子

行燈の灯かげうすれて裏庭の小萩がくれに鈴虫のなく

● 岡山　鷹子

御殿のうたげ終りて唯一つ襖にうつる燈火のかげ

● 丹波　植村樺子

ふる里の草葉かくれに鈴むしのふりすてがたき聲ぞ聞ゆる

● 神戸　若松まる子

あれはてし庭にすだく虫哀れ音をかたる聲ときかれて

● 大阪　野村かめ

遠山の灯あやうくゆらめきて夕さびしく秋の雨降る

● 讃岐　丸山匡子

十年ぶり母の御墓の塵はらひをろがむ袖に秋の雨ふる

● 熊本　吉川千代子

小雨晴れて白萩そよぐ秋の夕ひとりさびしき歌筆とりぬ

● 前橋　黒崎錦子

星遠きみ山の奥に日はくれて燈一ッかげ哀れなり

● 神田　近野艶子

燈の影ほの見ねてしづかやに樂しく語る親子はらから

● 朽木　清水澄江

初たひに故郷戀ひつゝ明かす夜の枕にさびし秋雨の音

● 北海道　吉田みか子

ほのくらき燈火かげに親子三人向ふ夕餉の味あまきかな

● 埼玉　三上静子

栗の實のおともまじりてふる雨に淋さましぬ山住の庵

● 麹町　安藤よし枝

目じろしの白菊枯れて鈴虫の墳墓さむく小雨そぼふる

● 長門　梅田染子

いたつきの枕にちかく聞こゆなり秋くれがたの松虫の聲

● 長州　今藤欽子

あまたゝびまたゝく火影袖におほひ母の玉章くりかへし見る

● 千葉　田中むつ

桑の戸にそゝぐ音さへふけゆきてきくも詫しき秋の雨かな

● 京都　太田妙子

たらちねの母にきせんとふくるまで衣ぬひをればきり〳〵すなく

● 四谷　内山とよ子

垣根なる白萩いたくみだれたりとふひともなき庵のゆふくれ

● 相州　白つゆ子

かごに入れて都の姉に送りてん庭の葉かげに鈴虫のなく

● 廣島　和知廣子

亡き人のうつしゑもちてたゝずみぬ秋雨ほそき夕暮の窓

● 大和　滑川さね子

白き御ぞ一重かゝれる金屛のかげにまばやき燈火の影

● 仙臺　ちどり

友のせし馬の小鈴のしづかにて朝の野路秋の雨ふる

● 岡山　稲垣廷子

かなしさの身にしみわたる秋の夜に軒端をめぐるあまだれの音

● 加賀　はるの子

柿の實も色つきそめしこの夕ふみよむまどに秋雨ぞふる

● 兵庫　秋野米子

かさぬべき衣ももたぬかろしさは雨ふる夜半にいとゞまされる

● 富山　岡本乙女

草高きあれ野に立てる古寺の軒かたむきてきり〴〵すなく

● 常陸　露花女史

はらからと共にむつびし燈を旅寢の宿に慕ふ夜半哉

● 下總　栄つるゐ子

かり入れし豆ほす日だもなかりけり雨ふりそゝぐ秋の此頃

● 小石川　渡邊すみ子

さらはとて立ち別れなむ故郷の一むらすゝき雨しづかなり

● 山梨　細田靜子

賤の女がくるおだまきの音を絶ゑて一きはしるし虫のこゑ〳〵

● 芝　川井きく子

水上は霧たちこめて苫船の火影さびしき利根の川つら

● 信濃　藤塚のぶ子

つれ〴〵に友を待つ間の雫の音もしめりがちなり秋雨のころ

● 長野　太田富士子

草むらにすだく虫の音きゝつゝも野中の小道われ一人ゆく

● 大阪　ますみ

花つきし桐の落葉のしげきかな横にしふきの秋の村雨

● 横濱　秋田ひん子

八重しける葎のやどの淋しさにたゑ〳〵見ゆるともし火のかけ

● 前橋　直井潮子

ともしびのかげもうすれて賤か家に折々もるゝち子のなく聲

● 玉舟女史

露しげき野道をしたひてよもすがらあかつきまでに鈴虫のなく

● 熊本　安田文子

はた寒き秋のとまやのかたひさし獨さびしく雨そゝぐなり

● 熊本　安田文子

月清き野道の露をや慕ふらんむし籠の虫の聲哀れなり

● 和歌山　青葉子

虫の音もいとゞあはれに聞えけり今宵かぎりの秋と思へば

● 伊豫　高橋寅子

まつ人はまたかへり來す我一人みとりする夜に秋雨ぞふる

● 名古屋　白菊

秋風の身にしむ夜半はなく虫もつれよりしげし淺茅生ふやと

● 靜岡　とも子

尼寺の木魚の音も打たゑてせまき御堂の月かげうすし

● 博多　太田こう子

ふな人があかつきつぐるうたさゝゑてまとのともし火かげかすかなり

● 長門　杉山きくの子

夕間暮門の青桐一葉ちり二葉こほれて秋の雨ふる

● 前橋　田部井清子

山深き道に日くれて遠方に月かげをみたる時の嬉しさ

● 下總　梅の家都子

ものおもふ夕の袖にあはれさを又ふりそふる秋の雨かな

● 越後　坪井わか子

栗の實の折々落る音もして雨に更けゆく山かげの庵

● 京橋　佐々木千代

宵やみの闇の木立に月見ゑてはなれ小座敷燈火くらし

● 香草女

柿の實の折々落る音はして夕へ淋しき秋の村雨

● 芝 若狭ひで子

月さゑて露美しき花畑ひとり徘徊に虫のなくなり

● 土佐 ます枝

築土のくづれのあとに草のびてむしの音細しあけがたの月

● 伊勢 眞野常子

たへずなく睦がのきばの虫の音にあはれも深き秋の夜半哉

● 土佐 ます枝

荒れはてしふるきそのふを訪ひくれば尾花が袖に秋の雨ふる

● 伊勢 池上姐

さらぬだに寂しき秋の夕くれに哀をそふる村雨のふる

● 本所 酒井すゞ

世にあらぬ母と語りし夢さめて枕淋し燈火のかげ

● 伊勢 一花

燈のあかき心の友とちと袖つくるまで語り盡せり

● 岩代 齋藤苔子

[illegible]の御霊はてたる吹上の御苑にさびし燈火の影

● 兵庫 糸枝

わびてすむ野づらのいほに月さしてゆふべさびしくこほろぎのなく

● 小川麗春

時雨るれば森の下草末かれてぬるゝもかなしこほろぎの聲

● 神田 藤井隆子

うるはしき玉とも見ゑて萩の葉にそゝぎては散る秋の雨かな

● 千葉 鶴江子

となりにはまどのともし火またあかし小夜ふくる迄文や見るらし

● 越後 小坂伴葉子

きり〳〵すかれ〳〵に鳴く秋の夜のねざめさびしくふる小雨哉

● 和歌田霽子

亡き兄のかたみに植ゑし柿の木にさびしくそゝぐ秋の雨哉

● 茨城 菊池みれ子

なく鹿のなれても夜半の淋しさをいつふり出でし小雨なるらん

● 北豊島 麗春

やれ衣にすきもる風をわび居れば火笠うごきてこほろぎの鳴く

● 和歌山 郡文子

小夜しぐれともしび一つまたゝきぬ宮城野三里たゞ虫の聲

● 伊豫 井戸つれ

寂しきて麦わら打つ燈邊に細語れり山の一つ家

● 安藝 松叡幸子

白髪ぬく鏡の裡にかけ見ゑて桐の葉まじり秋の雨ふる

● 京都 中村きぬ

加茂川のきよき流れに燈のうつれる影の數ぞ知られぬ

● 石川 大平かれ子

もろく散る軒端の桐に音たてゝ淋くもさびし秋のむら雨

● 靜岡 米子

打そよぐ竹の葉こしに螢かとみへて涼しきともしびの影

● 越後 美濃子

園の外の虫籠の虫の聲さゑて月おもしろき秋の夜半哉

● 越前 渡邊しげ子

うちつゞく大根畠そばばたけ虫のれしけしよもぎふの宿

● 四谷 濱野槇子
わけ入りてふみまよひたる夕くれに見ゆるもうれしともしびの影

● 岐阜 白つゆ
小夜ふけていとゞあはれもまさりけれれやの燈かけ淡くして

● あしぶれ女史
篝火にやけし片町草生ひて夕べさびしく秋の雨ふる

● 岩手 三宮まつ
枯れ易き秋の草葉に置く露を命と頼む蟲のはかなさ

● 京都 田村まつゑ
おしなべて虫の命はみじかきを歎ひしものか失せし弟

● 和歌郡 こてふ
今はとて友にわかれしふる里の板橋くちて秋の雨ふる

● 羽前 金子とく子
秋の夜のふくるにつれてなく露もしげくなりゆく虫の聲々

● 神戸 中村菊子
旅宿のしばしやすらふ小窓さき秋海棠に小雨そぼふる

● 小石川 渡邊すみ子
吹く風に法のともし火かけきえてむしの音しげし古寺の庭

● 奈良 とし子
鹿鳴て軒の燈かげさむみ淋しさふけて秋風ぞふく

● 美濃 庄加ふじ子
つむぎしつゝ母を看とりの夜もすがら籬のほとりこほろぎのなく

● 門司 伊舞見ふさ子
銀砂子まきし星かげ八千草の葉末〳〵にこもる虫のね

● 下野 瀬戸近子
ふるさとの野山の空や如何ならむ小雨淋しき秋の夕ぐれ

● 上野 矢島たけ子
鳴きわたる虫の音たえてはせをはにきくもわびしく雨そゝぎきぬ

● 群馬 堀口みな子
古への書讀む窓のともし火に人の心もてらし見る哉

● 仙臺 山中芳子
紙燭して萩をいたはる雨上り垣根淋しくこほろぎの鳴く

● 京都 加藤英子
秋雨のふるやの軒にたずみし夫の旅路の空をしぞ思ふ

● 備前 駒井友子
さひしさはきくにたへぬよ一葉ちる梧桐にそゝぐ秋の夕雨

● 越後 高橋雅子
夕されは庭の萩むら淺ぢ原情しり顔にすゞ虫のなく

● 弘前 久頁波志子
鳴路草に宿をばかりてきりぎりす露をいのちになきあかすかな

● 鳥取 大野悦子
綿上と若菜つみにし野はかれてすゝきのかげに松虫のなく

● 岡山 木村なみ子
友去りてあとに殘りし歌反古をくりかへす窓に秋の雨降る

● 神奈川 川井あさ子
燈籠になきよる虫の夢ほそく萩ちる庭に秋の雨ふる

● 駿東 栗田よし子
ふけし庭にねむる燈火かき立てこひしき友の玉章を見ん

● 仙臺 萬子
露さへも重さに見ゆる糸すきの花につれなく村雨のふる

● 名古屋 鈴木禮子
わがおもふつまにわかれてひとりねの枕にかなし秋の夜の雨

● 神戸　今村竹子
母君の病重れる夕ぐれに聲もかなしくこほろぎのなく

● 埼玉　小林恒子
奥の間にいたづく母の枕邊にまたなきよりぬ夜半のこほろぎ

● 東京　佐々木富江子
眼とち病をかこつ病院の窓のとぼそに秋の雨ふる

● 神戸　今村竹子
諸共に病哀れむ病院の窓にさびしく秋の雨降る

● 三重　龜井露登子
とつ國にやめる兄君思ふ夕べ木の葉さそひて秋のあめふる

● 佐賀　木下きみ子
外國に病み臥す兄を偲びつゝ寐られぬ月に松虫のなく

● 愛媛　片山季子
病ませる兄を護りて明す夜のうすき火かげにきり〳〵すなく

● 愛媛　片山季子
病ませる兄を護りて明す夜の燈あはくきり〳〵すなく

● 長門　登世子
病む母の背さすりつゝみとりする秋の夜ふけて虫の音ほそし

● 濱華　井上桂子
火影寒き紗窓に書の聲さびて芭蕉に白し秋の夜の雨

● 岩手　明石の浦子
さなきだに秋はかなしき山里に夜な〳〵まさる虫のこゑ〳〵

● 滋賀　森島こふゆ子
散り初めし桐の一葉に音立てゝまくらに近く時雨ふるなり

● 大和　堀川しづ子
あれはてし不破の關屋の虫の音は昔のさまをかたるに似たり

● 熊本　白藤すさぶ
涼風のはだ寒うして月細き籬のもとにこほろぎのなく

● 京都　櫻井松欄
廣前にをろがむ人もたねはてゝ神のともし火かげふけにけり

● 丹後　西木のぶ子
夜もすがらむぐらの宿に聲さねて露をよすがにきり〳〵すなく

● 鹿角　黒幹子
夜もすがら誰をまつ虫荻の葉に聲ふりたてゝなきあかすらん

● 秋田　紫天兒
板ひさしそぼふる雨の音きけば秋のあはれぞいやまさりける

● 鹿角　黒幹子
よもすがら文よむ窓のともしびは我身をてらす光なるらむ

● 周防　藤井はな
有馬山ながめやるまに消ねてけり夕暮れ近く秋雨のふる

● 周防　久米子
賤の男が馬草刈る手も留むらん心引るゝくつわ虫の音

● 周防　藤井ひさ子
千草咲く野邊の錦の中にしもあやなりかくる虫の聲かな

● 下總　石渡つれ子
なく〳〵も母の柩を見送りて胸思ふ夕秋の雨ふる

● 下野　みきね
せの君のみたま送りてかへる道日はくれかゝり秋雨のふる

● 長門　登世子
亡き友のみはか詣でゝそのかみをしのぶたもとに秋の雨ふる

● 北總　志眞由利
秋風にもまれてやれしはせを葉にそゝぐもさびし夕ぐれの雨

●佐賀　大塚つる子
肌になく子をだきあげて夫扉ふやれあんどんの燈くらし

●芝　賀美子
あちこちの砧の音もたえ〳〵に物おもはする秋の夜の雨

●甲斐　露子
山姫の情けの露やこもるらん千草色ます秋のむら雨

●伊勢　井戸つれ
たどりつきし關屋の跡にやすらひて虫の聲きく夕間ぐれかな

●岡山　福田實子
都をばはなれて遠きかくれ家に哀れを添ふる虫の聲かな

●印旛郡　平田すゞ子
人とはぬ秋の野末の草むらを住家にしたる松虫のこゑ

●宇都宮　大河原かめ子
かすかにも文よむこゑのきこゆるはかのともしびのあるじなるらむ

●群馬　木下むつ子
住みすてし御寺たづれて来て見ればあたり靜にきり〳〵すなく

●新潟　高島ちと子
螢火とたのみし父の消えしよりやみ路にまよふわが身かなしも

●茨城　牧野いと子
月夜よし夜よしと人を松虫のなくれにつれて野にや出なむ

●神奈川　川井あさ子
消え殘る星影淡き曉の廣野にしげしこほろぎの聲

●岡山　河本竹子
箏の音もいつしかやみて丸窓に燈火あはく夜は更けにけり

●麻布　伊藤富久子
かしまたつせこ見送りて追分のもどり小道に秋の雨ふる

●大村露子
わが友のおくつき所草深く鳴く虫の音もあはれなりけり

●京都　その子
讀經やみて人かげたえて山寺の庭にさびしく秋のあめ降る

●本郷　中村八千子
とく暮れし日影をしみて寄る窓に小萩さやきて夕時雨ふる

●四ッ谷　芳江
白露の數散る庭の小萩ばらしめりがちにも鈴虫のなく

●駿河　林すゞ子
古への人の心も見ゆるかな秋の夜長の燈のもと

●名古屋　森井せき子
おはしまに母のかたみの箏とりてひく夜かなしくこほろぎのなく

●赤坂　百合子
萩多き丸窓近く身をもたせ軒端にさむき秋の雨みる

●長州　今藤きむ子
小夜ふけて物思ふまどのともしびによりくる虫の數おほきかな

●常陸　石井けん子
あれ庭に桐の葉落つる音のしてねざめさびしき秋の雨かな

●麹町　福島安子
こほろぎのなく音しめりてふる雨に眞萩はなちるあきの夕ぐれ

秋の歌

秋くれば身にしむものとなりにけり昨日もきゝし荻のうは風　藤原俊成女

よひの間の月の桂のうす紅葉てるとしもなき初秋の空　鴨長明

おしなべて物をおもはぬ人にさへこゝろをつくる秋のはつ風　西行法師

玉かとてとれば消ぬる白露はおきながらこそ見るべかりけれ　泉式部

秋霧のはれせぬみねにたつ鹿はこゑばかりこそ人に知らるれ　大貳三位

露むすぶ萩の下葉やみだるらん秋の野原にをしか鳴くなり　相模

いなつまの光もいまはよわりけり田のもの風の聲はかはらで　藤原定家

目もかれず見つゝくらさん白菊の花より後の花しなければ　伊勢大輔

和歌兼題

菊
紅葉
鎭守祭

（〆切十月十五日）
（披露十一月五日）

▲家庭日記

▲寫生文

（〆切十月十五日）

▲雜文

（披露十一月五日）

▲庖厨座右銘（募集）

投書文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界させらるべし▲投書原稿一切返却せず

秋の山ぶみ

大阪　岡崎能鶴子

日頃朝いかちなるわれも今日は心合へる友どち打むれてきのこ狩りすてふいとも楽しき日とて朝未明より起き出でゝ空打眺むるに一面かき曇りたるにいさゝか心後れたれど一たび思ひ立ちたる事なり且つは伴れも多かるをと急ぎかにかくの用意調ふる内天もわれらが心あはれと思召しけむ群がり居たる黒雲をしなどの風のいとも静かに拂はせ給ふ嬉しさにひごろ信仰薄き妾さへ覚へず感謝の祈りさゝげにき、

やがて用意の車に打乗りて梅田にと馳せ着ればはや友なる君達は皆つどひ居て包み切れぬ楽しさ顔に表はれて後ればせのわれを待ちわびてありぬ、しばしいこふ程に汽車の来ければかたみに呼びかはしつゝのる、同行の数は五たり皆心合へる友のみなり常に混み合ふ赤切符のましてこの頃の乗客多きにわれらは腰下す場所もあらねば隅の方にたちてありぬ、常にわが輩のかにかくと悪し様に云はるゝはかゝる場合よとかたみにさゝやき合ひていとつゝましうしてありしが向ひに座したる人の無遠慮に煙草のけむり吹きかくるくるしさいと堪へかたければ窓ひらきて外の面をながむれば別けて今年は実のり好き田の中は刈り取られたる中に勇しく鎌たつる農夫、嬉しげに運ぶ若人そを助くるは花嫁にや赤きたすきかけたるが耻かしげにいそいそと働く様いかにも静寧に単純なる事よ、目をはなちて遠かに見渡せば山々の 木々は猩紅をなして緑り色濃き常盤木の間に打まじりたるなど得も云はれず、あし、まこも、などの生ひ茂りたる川の辺りに十許りなる男の子の四人五人喧しく呼びこふは雑魚などをあされるにや、見る見る移り行く景色に我を忘れてありしがいつしか四ツの驛をすぎて心あての處にとはつきぬ、こゝより下りて互ひに手をとり合ひ純潔なる田園の景色をたゝへつゝしばし歩み行く程に早くもたけ山にとは辿りつきぬ、此所には茶店などありて赤き毛布の客待顔なるに既打下して茶などすゝりやがて茶店のおきなのあないにてたけの生ふる所にと分け行く、凡そ数丁にしてかぐはしき香ひの鼻を打つに皆々心も空に日頃の優しさに似もやらでわれ勝ちに争ひてあさり出さむとする様いと可笑し、われこそ先登第一よと叫び給ふは静枝の君、ゝ二は松代ぬしわれも、オヤ妾もと残り二人もとり給ふ此所にもそこにもと忙はしげに狩り給ふにくや妾は一ツだに見当らず口惜しさに 其所彼所歩き廻れば静枝の君は今朝おむしをたうべ給ひしや、否、と答ふにさる故に目の見へ 給はぬなり、いや此君は近親眼にて在すよ、さりとて四ツも目を持ち給へるになどさまざまにからかひ給ふにますます腹立しうフト松の下を眺めてありしに土のフクリと高くなれるに土かきのくればあな嬉し尋ぬる主はかゝる所にとやさしく掘り出して袋に入れ猶あさりありく程に二ツ三ツ四ツとやうやう袋も重うなりゆきて人々もあまたとり得しかばひろげしたゝめむと平たき所に敷物など敷きて一同わりごひらきてかたみに楽しく語らひつゝ山の姿など眺むるに半ば紅ひ染し紅葉の太陽の光を浴びて一しほ美しきに清き谷川の流れに映りたる様嗜みある身なりせば歌にてもかきてましと思ふ計り 汚れし心も自然清めらるゝ心地のしてなむ、しばし雑談に時のうつるも知らざりしが暮れ足早き秋の日は早や山の端に沈みければ山に名残はつきねどもやうやうに麓に下りもとの停車場にかへりぬ此度はさきの如くせり合ひもせで七時三十七分梅田にとつきたれは此所にて 人々に別れを告げおのがじゝ家路にとは向ひぬ、帰りつきても猶かぐはしき茸のかほりにそゞろ今日の楽しさしのばれて面白かりし節々をかくはかひつくるになむ、

秋の野

大阪　田中しゆん子

今日此頃の花の盛りをなどてかよそに見る、一日を野邊に遊はすや、さあらば我れは汝に美妙なる詩あたへむと、錦繡の衣めしませる秋の女神、よべ枕元に立ち給ひての仰せに、今日しも柴の戸を立ち出でつ。

大空は高く晴れわたりて一ひらの雲だになくさすがに秋の氣すみて、浮世のちりに汚れたる我が心身をあらふも嬉しや。見わたせば秋の千草はおのがじゝ色香あらそひて咲きみたれ、そこにいくつとなき胡蝶あるひは高く或はひくゝ舞ひくるひて、折柄のながめに一しほの趣をそへけり。

女郎花のやさしうなまめきたるは、黃袖に海老茶袴のさる活潑なる女學生にはあらで、奧まりたる一室に髮を根高う文金に結び面てには厚化粧をほどこし、琴よ三味線よと日毎遊び暮すなる豪農の孃に、桔梗の何となう淋しげに打しづみたるは、紫の本つゝみかゝへたる時代の高き理想はみなわと消ね、希望は光うしなひて只だ〳〵せきあへぬおのが涙を、こよなき慰籍の友となせる薄命の佳人に。白露をける萩は、さるやんごとなき品高うおはす姫君の、つやゝかなる文机によりゐひて何とやらの古物語よみませるお姿に。撫子の華やかなるは、十四五許りの浮世といふ物未だ知らざる少女に似たるかな等と。例の空想にふける折しも彼の方よりほがらかなる鄙唄の聞ゆるに、人ありと思はぬ我はいたく驚き振りかへれば、色黑き里の童の千草をなしげもなう刈れるなりき。如何に「美」を知らぬとは云へ盛りの花の命たつとは、あまりに風情なくむなきわざならずや。

あゝさなり〳〵彼の童に刈取られ恐ろしき牛の口に入らむよりは、夜毎に宿る露とわかるゝはよしつらくとも、我が暖かき手に摘のせたのしき一家團欒の床にまゝるゝ方こそ、花もねかふならむ。咲き出でし甲斐やあらむ。花よ、花よ如何にと問へば、さつと吹そよく風に、すそに。秋になびきて葉づゑにさゝやきあり。

田家の秋

大阪　千代子

あな麗しき入日のかげや鎭守の森にうすれ行きてねぐらに歸へる鳥の群農夫は鋤鍬なんど肩にしつゝ己が家路に急ぐなり折しもさつと吹き渡る秋風に田面は一面に黃金の波をなすなど一幅の繪にして見まほしき風情なり實に豐けさの滿ちたる秋のみのりに村の祭の賑はしさも思ひ計られてなむ折から遙かあなたにまばらに立てる農家の小窓をもるゝ燈のかげさながら天つみ空の星か叢邊の螢かとあやまたるかの小さき光の下には一家の和氣みち〳〵て妻が心をこめてとゝのへし夕餉はよしや美味佳肴にあらずとも夫が一日の勞をなぐさむるに餘りあり又孫が笑顔をもてむかへ入るゝにおのが老の身に日々野良仕業のつらさも忘らるゝ事もありなんよしや其光はうすくともそは眞の平和の光なりなど思ひつゞけてふと

なあふげば夜の事はもらすくまなく蔽ひかゝりて先に淡かりし月かげも今はみ空に高く冴え抜けてさながら利鎌の如しわれもはや家路につきなんと思ふ時しも稲葉のかげより螢一つ我袖の上に飛び來りつ。

秋の月

長門　桂野花子

◎

今し方入合の鐘鳴りて秋の日の早くも暮れそめぬるに田に出で居たりし男は稲の束負ひ若き妻は荷つけたる馬の口とりつゝいと睦ましげに家路に向へるなり、折々笑を含みたるさゞめきの漏るゝは今年の收穫の豐なる悦にや、妻は空に星のきらめけるを仰ぎ見て明日の晴天なる由を語りては仕事の都合よきを喜びて靜に歩み行く、後方の鎮守の森の木影を離れたる月は平和なる二人を見送りつゝ長き双影を地に寫したり。

◎

欄干にもたれ給へる姫君はかたへの侍女を顧みて「げに今宵の月の美しさよ、歌一つ思ひ出でぬ、」侍女のそは如何なる歌にや姫君のものし給へるは月も恥づ可きものならむ、などて秘し給へる、」姫君はゝゐみて「かくさんも心なし、されど彼の月を見よ、げに此の圓らかに清きを倫敦に居ます兄上にも見給ふにや、此頃の音信なきは御病氣にやいと心もとなき事なり、」何思ひ出し給ひけむ、やゝうつむきて居たまふ折から南の方より雁金の聲するに顔を上げ給へば黒く〲連りたる一むれ過ぎ行きぬ。

◎

藤村の詩集繙き居たる吾庭にすだく虫の音打ちよする濱の聲以外に何か耳にしたれば、ふと耳傾くるにたしかに西洋樂器の音なりさては此の月の夜をバイオリンの調べか、はた緣側にピアノの合奏か、げに妙なるものよと思ひつゝ詩集手にしたるまゝ枢戸おし開けて出づれば海岸の月色美はしとも美はし、濱島松の配合よく吹きくる風の肌をとほるも身を仙境に誘ふが如し、遙に北の方を見やれば濱の余り太からざる岩の上に腰かけてバイオリンの調べ奏づる人あり、そも誰ぞや都の塵の巷にさわぐ人よ、こゝに靜の境のある事を知れりや否や。

山家の秋

周防　中谷鳥羽子

心なき身にも哀れは知られける。と西行法師の詠じ給ひしも實にことはりにこそ。片山里の秋の空吹き來る風も何となう身にしみ渡れる或日の午後つれ〲なるまゝいざ散歩をと思ひ立ち。露深き野邊の細道ふみ分けて、いまゝ小川の邊に至りぬ。あたりはいと靜かにて流るゝ水の音さへ夏にかはりて物哀れなるに岸邊に咲きし白萩は今を盛りと咲き亂れ桔梗かるかや女郎花。互に色香を爭ひ顔なるもいとをかしくて、我もそこ

はかとなくそゞろ歩みしける折しも彼方の山邊にほた〳〵と、なとのふものあり、いぶかしさに覗き見ればこはそもいかに、いが栗の姿の來たるを待かれ顔に微笑みつゝほた〳〵と落下したる様の優しさに、我を忘れてあゝ美しと一聲高く呼びたるにぞ今迄敵の是方になき戯むれし群雀の一度にばつと逃げ去れるもいとをかし。

秋も半ばを過ぎぬれば山田の稲穂重たげに、うつむき初むれば農夫等はあしたに星を頂きて夕に月の影を踏み老若男女のわかちなく立ち出でゝ稲をかり或は車につむもあり。其働きはなか〳〵に人の見る目もくるしきに、其身にとりてはさほど勞とも覺えざるにや。賤の男賤の女が時々腕を休めつゝ微笑むは定めし今年のとり入れ目出度きを喜ぶならん、なほも遠に見渡せば栗とらんとて三たり四たり男の子が向ひの山によぢ登れるは恰も猿に似て又なく哀れなるに木立茂れる彼方の山かげに炭たく烟の立ち昇れるなど見る物ごとにいづれ哀れならぬはなきに、片手に鎌利を揚げて畔の細路ふみ分けて通り行く乙女子の姿も暴からず手足み目觀の見にくきなど花の都の人々の見たらんにはいかに思ふらん。はやたそがれに近ければ鳥は塒にかへり、家路を急ぐ農夫の影は細く長く地に引きて夕陽今や西山にぼつせんとする折しも入相告ぐる鐘の音は彼方の森にひゞきて諸行無常と聞ゆなり。「今日の日もくるゝとはかり告ぐる鐘それにこたねて涙こぼるゝ」と慈鎮和尚の詠じ給ひし歌など思ひ浮べていと哀れなり

我家の庭

遠江　福井笹舟

僕は小笠郡の片隅に住んで居る土百姓である、都の御嬢様方は土百姓と言ねば一も二もなく穢ない着物を着て不味い物を食い苦勞をせる穢ない人間で見られた者ぢやないと思ふでしやうがそれは明菜、鋤、鍬、肥桶が友達だから随分穢ないのさ、其穢ない土民が拵つた穀物野菜茶などを貴嬢方がお食りなさるのだよ、茶など採む所を見ると汗を流して如何にも穢い、そこで我等百姓の家庭を玉簾深きお嬢様方にお話しするのも珍らしかつうと爰に禿筆を嘗んで記すとしやう、まづ百姓でも手間の無い家では下女下僕を使つて居るのだが百姓の十中八九は使はないだよ、そこでまづ朝は暗い内に嬶や嫁らが起きて流しで顔を洗ふと釜の前飯をたき茶を沸し座敷を掃く、明るくなる頃は家内も眼をこすり〳〵起きて皆々揃ひ朝飯を食ふ、僕などは十遍も起されてから起きるさ朝飯がすんだら男は夏は尻丈け襦袢に茄の枯ッ葉のやうなもゝ引股で抜けたやうな三尺帯油で煮たやうな手拭あたまに一蓋の笠を戴く、女は女だけに長い着物をたくし上げ、はゞきを着け草鞋を穿く、野良に出ては男勝りに働らく十時にはまた飯を食いに歸る、朝は冷飯に夏ならばすつぱい澤庵納豆梅干位のもんだが十時は温かい飯に茄子ぴの味噌汁だよ、又野良に出て仕事をし今度は茶付けと言ふて午後二時頃飯を食ひに歸る、百性は腹が空るから口が忙かしいのだ、そして又晩は暗くなりて家に這入り皆々揃つて夕飯を食ひ男は所用がなければ草鞋でも作り女は夢でもみまして十時頃には皆寝るのだが、米も夜分搗かれはならん茶を採めば其始末も夜せねばならん、番入月は繩ない俵を作り女はむしろを織るに忙がしい、あの大入道のやうな百姓男女が夏の晝中汗を雨にして

服なかつぎ田の草を取る所を郷の旗様方御覽じたら如何にも苦しそうに見ゐるでせうが幼少の時からだん〳〵馴れて居るから何ンとも無いよ、女も又十歳未満で冬など鼻を切らして飛んで歩行くから夏冬共もう馴れて居るのさ、汗を流して稼業をし家に歸つて裸躰になり涼む時は全く氣持が好い女も褌一つで飯を食ふのさ、又遠くの野良へ辨當持つて行つた時樹の下、川柳の下などて親子兄弟朋友裸躰にな り女共忘れてけしからぬ所嘘等田螺の死んだやうな齒を出して打笑ひつゝ中白飯に味噌漬食ふうまさ、節句や盆や正月の山海の 珍味よりがいくら美味いかしれないのだよ、又百姓は日待蜜事で御馳走は食い難しさ、これは卑しい話になつた、だから僕等が物見遊山に出ると在郷ッぽと言つて笑はれるのさ、百姓の收入は年中あるよ春は麥夏は茶葉秋は米冬は繭、併して四月の末麥を穫れば五月一番茶六月二番茶七月三番茶八月から 九月へかけて四茶八月豆九月十月米十一月繭、とたゞら大入に喪つたり、出したり百姓の家でも繁をして居て年に三四百圓宛働きだす家もあり大苦勞をして酒も呑ます煙草も喫はすだん〳〵親讓りの身代を凹す人もある我等の如き貧乏人はやつと着たり食つたりしてしまふが精一ぱいさ

初秋の庭におりて

和歌山 森 重子

◎門に立てる百尺の銀杏樹、梢のみ漸く黄を帯びたる、風ふく毎に飄り落つる葉、さながら春の野に胡蝶つ數々むつゝびあひ つ空より降り來るか如し、地に落つれざうなゐ等皆拾ひ行く、如何にするかと問へば書物の間に挾み置くなりとゝ。

◎去年の野分に中より凄まじく裂けたる巨松、いまだ枯れずして池の上に横はり、折々蕭條の譜を調べ、池汀の水草漸く枯れて黄葉し、水にも秋の色を見せたり。

◎今日の新聞子を見れば京の萩見頃といふに、我庭の萩、其枝いやが上にひろごり、葉もいと茂りつれど、何時花の咲くべしと思はれで、蕾さへ見えぬいと腹立し。

◎それとはうらうへにて楓樹一株、病葉の色紅更に花に似たる、晩秋の色將た如何あらんと、却て氣つかはるも憂し。

◎垣根にこぼれ種の鬼灯、やう〳〵色付きそめぬ、今六日早からば七夕女に青きを供ふる怨みもなかりしものを。

◎築土の側の柿の樹一本、秋のあはれを知り顔に、實の五つ六つ落ち散りたる。かきの内なれば拾ふうなゐもなし、またこの邊に塀の外より竿もてたゝき落しに來るいたづら兒のなきぞうれしき。

残月のかげ

横濱 名木山勝子

おどろがもとに歌ふ蟋蟀の聲に、そゞろ夢にゐますたらちねがことのみ忍ばれて、何となう胸おぼめくに、やをら立ちて椽の戸押せば、あらな

つかしや殘月！
荒籬の垣へだてし向ひの家の草ぶきの上に、ほのぼのにほふ殘月のかげ。
水色の空すが〳〵しく、限なく晴れ渡れりとはいはぬけさのしやう、眞綿ひきたらむごとき白雲のたなびきたるあはひに、いともゆかしき淡きその姿。うらがれて秋風のやどりぞますがあはれと見ゆらむと思ひてし芭蕉葉、無殘や、よべの嵐に吹き折られてか、こなたよりはかげだに見ねず。兩三株の小松立ちならぶあなた……。
木々の梢打拂ふざわめきは、はや秋の女神が渡り來ませし御裳のひゞきか。
桐の一葉もまひ落ちぬ。よべの雨は名殘なう晴れたれど、そのふの露けさ、小松にまとへる朝顔打ちうなだれて、細きその幹に、雄々しきその針の葉かげに、廣きその梢に見ねつかくれつ、紅、紫、白あるは絞り染ともいふべき色、かたみにきほはせたるも、あはれげなり。露重げに伏して、
四つ目垣よりそへるも、はたおなじ。
眞紅もゆるばかりの鳳仙花の花びら、ところせきまではら〳〵と打ちこぼされて、あら白きも、こは北國のみ霜にも、まがひつべくや。
何れも悲しげにたてる其樣る弱き姿を、一夜のうちに女神が、手づからつくりませる小さき鏡にうつしつ。何事なかみ空の殘月にや訴ふるらむ
優しき其のこゝろたのみて。
されどこれもやがてきねなむ命。
衣干す竿に露の白玉かゝりたるもうつくし一ときながら。
曉の明星早く此世をさりて、ひとりさびしきこの殘月のかげ。
別れし友はいまいかにしましけむあはれ。

ひなの夕立

登枝

圓光寺が岡のほとりより、此方の森の方に一筋の墨の如き雲の流るゝよとみるまに、さながら瀧の如き大夕立の只篠をつく如くに、今は農家の秋のまかりとて、留守居にのこれる老媼や小さき孫などあわてまどひてまろびながらも、庭のほし物、垣根の洗濯物をぬらさじとて、いつこも〳〵がた〳〵の大さわぎ。殊に野良は又一しほ……氣遣ひなげの青空をたのみに、遠き稻田は昨日一昨日より刈りては其まゝに野曝せまげにひろげ置けるを、不意のことに大狼狽、老いも若きも女も小供もあらん限りの力に、まくり集めてはたばね集めてはたばね、人は肩に、馬は背に、常の二倍三倍の荷をのせてチン〳〵と鈴の音いそがわしげに、家路へと走り道へどなか〳〵にまに合ふべくもあらず、里もみねわかずぶりこめ

て、おどろ〳〵しき音さへ聞ねそめては、かよわき人たちの胸は只大濤の寄するやう、いつのまにか凄うなりし電光のきらめきに色を失ひ、はげしき轟きにきもをけして、打ふるう手に漸くたばねしものもさ縄とりはづしては又…………とても〳〵運びきれぬ稲を、身は只しぼる計りにぬれながらもやう〳〵小田の隅にうづ高う積み終へて、ほつと一息安堵の音もらせば、にくや空も諸共に…………ありし気色は三年前の昔の夢よと計りに青々と晴れ渡りし夕空は美しき月のほゝゑみ淡く…………

都なる友の許に

鈴木豊子

あれはてし茅生の宿御見すてなくおとづれたまひしありがたさよ別れまつりてより月に花にしのばれしよ都の空ともにとちかひしむにいつはりはなけれど世は桑田の海のたとへにもれぬ我家のさま御はづかしく存候御歸郷との御玉章にうき秋も忘れ はてつ今日か明日かと待ちわびし久々にての叔母の許がり夕立にふりこめられ月かげたどり歸りみれば待ちし君はと ひたまひしぞ明日は晩かけて御上京とのことありがたき賜物并り机の上に飾りの御なつかしさに門邊に走せいでゝ見ればなつかしの姉君はいづこ月のかげさへ村雲におほわれて涙をさそふ 虫のこゑのみいとしげく聞ね申候夜中御宿りの門たゝかむもいかゞ心ならずも御無禮申上候悪からず思召遊ばしてよ黒い衛衛の 例になくふさ〳〵となりぬ五年の昔にもかへりしとしに来し方しのび出で清く味ひなんと思ひしを箱つめにして御送り申上候何とぞ御笑味遊ばされ度候 まゝよこの身が衛衛ならばかとへらぬくりごともいたし申候かしこ

須磨にある友に

河内 櫻井喜子

波濤に君を送りまゐらせしは落花紛の如き春の昼なりしを庭の翠々露の色いつしか今年も秋の最中となり侍りぬいかに過くさせ給ふや懐かしの君明石潟月明かに千鳥鳴く夕には欄に倚りて月宮殿の詩をや奏で給ふらん須磨の浦松青く砂白き磯邊に歩を 移しては松風の曲をや調へたまふらんさらぬだに忙しき都住の君と別れて合奏の妙音またと聞くによしなく小亭の庭樹あつて姉はんあはれ松間をもるゝ冴けき 月影咲き亂れたる庭の萩一しほ君なつかしき今宵にもあるかな今はとて恋ひ昔に奏つる旧友の譜一聯孤音昔のひゞきなく啾く指の調 成らさるを如何にせんあな懐かしの君よ

寫生文

福島　白川流子

堪に難かりし晝の暑さも忘れるが如き今の世間に名殘なく拂ひ去られぬしかも雨晴れしは夕陽今や西山に入らんとするの頃なりき紅燒ゆる夕ばね棚引く五彩の雲我を忘れて恍惚たる時赤き〳〵大なる月は東山の松影に輝き初めぬ我はたまらず明笛携ひて走り出でぬ田圃の小路足ふみはづせしこと幾度か町外一町餘り舊城跡に至りぬ月は次第に高く小さく去かも影いよ〳〵冴かなりあゝ忍ばるゝ其昔錦川の流れ未だつきせぬ頃なりせば今宵高樓の月の宴如何にか盛ならましなあはれ深き草村に昔を偲ぶ虫の音のみかしましく松の梢を傳ふ風のあやしく身にしみぬる心地す昔屋敷の跡とやら今は見渡す限りの田の面わづかに殘りし内ぼりの深き綠は月を宿して既往を語り顏なり固より上手にあらぬ笛にはあれど常にかはりて音色の冴ねし樣思はれしは僻心か幾臭たゞ月と笛とあるのみ寄方なき我心よ、月はいよ〳〵冴ねまさりて虫の音次第に細く遙かに見ゆる里の燈火一つまた一つ消ねゆくに驚きてやたら足をかへしぬあゝ荒城の夜中の月後に心は殘れども。

綠蔭の美人

信濃　小林こよし

黄金の髮ゆるく肩に垂れ、薔薇の頰匂ひゆかしく、綠の眼星のごと涼やかなり、名ある寶石ちりばめたるビヂチングドレスゆたかに纏ひて手にはあたりも薫る姫百合の一枝を持ちながら餘念なく行く水の態を眺めつ。影の斜に流れに映れる時、妬みてにや金波そを散らす、いと惜し。何處の氷室よりと思ふ許りの涼風、若葉の梢を搖りてさと來れば波動きて影ゆるぐ。天より落ちけん、地より湧きけん姫百合の花、半ば水に浮きつ沈みつせり。とみれば少女の影は水上にあらざりけり。されど彼はもとのまゝにして美はしき微笑める顔を粧へり。胡蝶か、エンゼルか、ひら〳〵と高く低く面白の舞なすに似たれど、愛らしき眸はそを見ざるが如し。

故里の月

伊勢　靑木敏子

「姉さんお月さん上つたわ」と弟の聲に驚かされて裏の竹縁に出でぬ、庭には露を貫べる秋草の月の光を浴びて芭蕉葉になく鈴虫の聲いと清かなり、お池の面にて鯉にやあらむはつしと躍りて銀波を起せば石積の傍の白萩ほろ〳〵とこぼれてそが面に浮びぬ、小籠へ鬱蟲いと勇ましげに泣くを弟は重き庭下駄をはき手を打ち足拍子をとりて喜ぶなりけり、妾や嘗て觀潮城畔にさすらひの客たりし頃、つめたき城跡の殘月に泣き動搖の濤聲にちひさき夢を破られ

ては、ひとりねたのぬ閨をおきへて何くれとなくいたはりくるゝ人妻の情にそゞろ征衣を絞りたりけるが、今春とある學びやの業終へて故里にかへりたる身、今宵こが平和なる月に座せば昔の面影續々として浮び來るなる。あゝ平和なるは故里の月夜川あゝそれなる哉。

秋

備前　小山松枝

秋としいへは、昔よりあはれにいひはやされて、吹く風にも心ないため、空ゆく雁にも故郷をおもひ、あるは、さを鹿の聲をきゝ、月にむかひても憾留の念堪へかたく、八千種におく露のはかなく、むせぶに似たり虫の音など、境遇によりていつれか思ひの種ならぬはあらざらむ。されど、人々かく四季折々のうつりかはりに、さのみ心とめて愁しむべきやは、月も見る人の心々によるとか。まして物學びするものには、この時ばかり、たよりよきはあらざらむ、暑のあつき打過ぎて、桔梗かるかや女郎花などの咲きみたれたるもなつかしく、明らけき窓の下、浄き机によりて書ひもとけば、樂しさも一層ならん、ことに、ともしびの影に古人の言行を顯して鑑となし、よきが上にもよからんといそしむは、長き夜のつれ〴〵もなく、いと益あるわざなり。とかく閑居すれば、おもひを増し、身體を害ふものぞかし。たれしの人も。暇あらば春見なつとめよ、また時には、野に山に露ふみわけて、興を求むるも智育體育上ともに必要なり、今や至る處に興あり、げに勉强すべく遊ぶべき時とは、此頃なりけり。

夏のあかつき

東京　瀬戸正

あかつき告ぐる鷄の聲におどろきて、いそぎ起き出でしに、まだたれも起きしけはひなし。先づ窓をはらふにさつと心地よき風、はだを洗ひぬ。あまりの心地よさに、寢まきのまゝにて庭におり立ちて、よも山の景色をうち眺むるに、曉の月淡く空に殘りて、雲の色すゞしく、しら波る山端にみどり色こき松のみね初め、朝風に吹かれてみどりしたたるばかりなる、あはれ言葉もなし。知らず〳〵にみにくき姿もうち忘れ、いつしか露つゞきの草原に出でぬ。ふと彼處を、みやりしにあな愛しのなでしこ、露にぬれし笑顔を風のまに〳〵あたりを見まはしぬる、いとなかしく、道にまよひしか、夜中の螢三つ四つともし殘るすゞしさ、何となく其わはりのよく掩映せるうつくしさに、餘念なく眺めたる折しも、後の森のうへよりきこゆるせみの聲におどろき東の方をみやりしに、日は早や山の端より光りまばゆくさし出で、草葉の露はきらく〳〵とかゞやき初め、一しほのながめなりいそぎ家に歸りきしに臺所の方に人のけはひす、はや下女も起き出でしか。げにたのしきは夏のあかつき、とく起き出でてふめや朝顔、やよ乙女等よ。

秋は來ぬ

靜岡　作山美子

水はほそりてうたもなく、
山又やせてこゑもなし、
きけや霜露のあさぼらけ、
さけびは高し秋のこゑ。

はた靄まよふ遠方の空、
夕ばねとはにうすれ行く、
山また山の其かげも、
海また海の其はても。

すみ渡りたる大空の、
あなたに遠くほゝゑみて、
さゝやぎたりし明星の、
またゝきすごし此夕べ。

みどりの髮をそよ風に、
くしけづらせし青柳も、
今はたあはれうら枯れて、
さけぶ鳥のこゑかすか。

廢社晩秋

わかやま　胡蝶

神垣に、　靄たちまよひ、
山の井に、　紅葉ぞうかぶ、
秋くれて、　社は荒れぬ。
ふるみすに、　蝙蝠とびて、
神鈴を、　啄木鳥ならす。
かしは手に、　山ひこふたへ、
山彦を、　月ぞきくなる、
狐火か、　峰のをちこち、
旅人の、　心まどはす。
たねかれて、　行かむとすれば、
朽ちはつる、　谷のかけはし、
はら〳〵と、　木の葉みだれて、
鳥の鳴く。

旅立つ君に

伊勢　河原芳子

霧立ち罩むるあかつきの、
山路は遠し峰たかし、
君はき馴れぬ草鞋の、
爪先のぼりこゝろして。

秋や興ある萩の戸に、
一夜の宿は借るとても、
夕くれ野邊をさまよひて、
蝮の牙にふれざれな。

幾十百里越ねて行く、
旅の哀れは深かるを、
若し夢凶しき夜のあらば、
すき洩る風も厭ふ可く。

かくて山村水郭に、
君が重ぬるうたまくら、
雁の便りに折々の、
高き調べは洩らしませ。

さらば前途の露汲みて、
別れな告げん檜笠、
世に殘る月影の、
あまり淋しき姿かな。

新月

牛込　稲田すみれ

秋つける夕の空は
淋しげに暮を急ぎて
ほのかなる天の川邊に
さし出でつ、淡き新月

新月のかげを眺めて
はしゐする母と我とは
夢のあと昨日に趁ひて
あたらしき涙にむせぶ

寫眞（うつしゑ）の前にそなへし
ともし火は風に揺ぎて
小瓶なる秋海棠の
露葉にも露は結べり

露よりもはかなかりしは
父君のいのちなりけり
短夜のゆめもさめじな
あゝ去りぬ、御靈は空に

大空のいづこのくまに
彼の清き眸ひらきて
この世なる母と我とを
見ますらむ、一夜もおかず

涙をばからし玉ひて
母もまたやまひの床に
力なき身を起しても
何に見る、淡き新月

げにもそは佛の國か
なつかしき父の姿は
蒼白き月のなかに
さまよへり、幻の如

いとせめて心慰さに
宵々の空をながめて
影よりも痩せたる母を
扶けゆくわが胸いかに

澄みまさるみ空を横に
老松のこずゑはなれて
いよ〳〵更れは深し
片われのあはき新つき

かへりみて母言葉なく
仰ぎ見て我もかたらず
蟋蟀、荒れたる垣に
たゞひとり聲たてゝ泣く

月下陳思

備後　紫女

天空高く輝きて
光涼しき秋の月、
白銀凝りしと怪まれ、
氷の塊と疑はる、
あな戀しの彼の君も、
今宵は嘸や眺むらん、
鏡となりて其すがた、
など映さずや我が為に。
天空高く輝ける、
月は己れの理想かな、
到らんとするに道もなく、
達せんとするも翼なし、
あな眼前に見ゆるとも、
遂に能はぬ事ならば、
寧ろ苦しき思ひせで、
煙と化して登らんか。

涙の秋

滋賀　神尾政子

実がちになりし朝顔の、
簀垣にそぼつ雨の音、
青葉いつしかうつろひて、
そこともしらに秋はきぬ。

樂しかりしよ露こき、
春若草の野に出でて、
ゆかりの色の花菫、
摘みては君の賜びし時。

露まだ深き暁を、
またゝく星の影ふみて、
二人手折りし姫百合の、
そのひめ歌は忘れねど。

または葡萄の下蔭に、
滴る露の房つみて、
限りもしらぬ歓楽の、
そのうま酒に酔ひし時。

あゝ春の野の花菫、
あゝ秋園の葡萄の実、
ゆかりの色は變らずて、
嵐ふく嵐か君は逝きぬ。

靈廟の墓を訪ひて、
花さゝげたる奥津城の
主の名をば問ふ勿れ、
涙の秋のわびしきに。

水の聲

磐城　作山美子

さぎり晴れ行く朝ぼらけ、
色とりどりに八千種の、
花のむしろの秋の野を、
水は北へとさゝやけば、
我は南へうたひつゝ、
自然のしらべに合せ行く。

水はさけびぬ聲立てゝ、
昨日は君を山かげの、
水上遠く見たりしに、
今日は又しもこゝに見ろ、
そもいつの代の縁ならむ、
さはおぼさずやや君と。

我は答へぬさればきみ、
みにしは知らぬ我なれど、
花の色香をなつかしみ、
朝夕こゝにさまよひて、
はからず君を見てしより、
うれしと我は笑みにしよ。

水は又しもこねたてゝ、
さほどに我をめでつるか、
さらば行末程ながく、
我身と共にうたはずや、
草むらしげき野末まで、
荒波高きいそはべまで、

我は答へぬやよや君、
行末ながくうるはしき、
泉と君はいますかよ、
とはにけがれのおはさぬか、
さらば行かなん呼鳴されど、
とはにこりの無からずや。

秋月の想

信濃　小澤　八重子

妾の知れる壯者にして常に不遇を喞ちつゝある人あり、其人に代りて、

○燈の下に史讀みて
遠き昔の跡追ひつ
眠り想に沈む時
小窓に梢の影さしぬ、

すゝき靡ゆるぐ秋風は
細き蟲の音送り來て
今年もすでに秋立ちぬ
雄志滅さむすべもなく、

あはれ篋底枕に
劍錚々の響して
梢に凄き月見ては
遥よ遠しライン河、

吁、谷深き信濃路の
遠き深山に我一人
共に語らん友もなく
裏戀ふ鳳の聲きゝつ
今年も秋はすでに立ちけり

かざしの花

鮎ヶ谷　大亦隆子

かざしにせよと賜りし、
つゆ新しき紅薔薇、
戀しき君が情に、
いき暖く吹きいれし、
血汐や通ふ花びらの、
唯永久にあせざれな、
輕きキッスを與へつゝ、
挿す少女が髪の上に、
愛の色添ふ花の榮、
妬むか風の一しきり、
雨はら〳〵と濺ぎ來ぬ、
あなやとばかり悼く、
おほふ袖笠ぬれひちて、
かぐろき髪の亂るれば、
花もやうやうよわりゆく、
恨はながし戀道。
あせでよ、あはれ花うばら。
戀ははかなき玉ゆらの、
手にだもとれぬ露の間、
神の結べる、たはふれと、
悟らぬ胸のつみなきに、

紅恨

伊勢　西井　よし子

春は床しき淺緑、　花さく野べに君とわれ
蝴蝶の影のあと追ひて　いと面白く遊びてき
夏はみ空の虹消ねて、　涼風かよふ夕まぐれ
清き流れに舟浮けて、　共に樂しく語ひてき。
秋は月影さゆる時、　冬はみ雪のつもる時、
秋に憂ひを忘れては、　世をば嬉しく思ひてき。
さはれ慕しき君逝きて、はやひと歳(とせ)も夢と過ぎ、
野山の緑うつろひて、　秋蕭條のきのふけふ。
落日迷ふ夕間ぐれ、　そこはかとなく彷徨(さまよ)ひて、
樂しかりけるそのかみの、追憶(おもひで)の網たどりては、
そゞろ亂るゝ我胸の、　懊惱や盡きむ果もなし。
あゝいつまでか君戀ひて、
愁ひに泣かむ我身なる覧。

新刊紹介

▲日本漫遊案内

坪谷水哉氏は精緻なる事務家として又忠實なる操觚者として久しく、東都の出版界に聲名ある人、氏の多方面なる嗜好中旅行はその尤も好む處にして多年の好癖、南船北馬に托して今や足跡海内に遍く、八十餘州の山水煙霞都邑、風物の巨細、交通の難易山河の景象等概ね氏が藥籠中に在りといふも敢て誣言にあらざるなり頃日氏はその漫遊中に得たる新らしき材料を以て玆に此の案内書を編纂せられたり。日本漫遊案内即ち是なり、篇を別ちて上下二巻となし、今回發行したるものはその上巻にして日本の東半部たる、東海、東山、北陸、北海の四道に亘りて。都邑、山川、港灣、海沼、より扱ては社寺、堂観、名所舊跡の限々、氣候、風俗、物產、交通の便宜、往來の順序並に旅費、物價の大体に至るまで悉く網羅して説述周到を極めたり。加ふるに巻中所々に詳細なる部分地圖と風俗に關する寫眞とを挿入して對照に便せしめたるは又一段の用意といふべし。印刷の鮮明、裝釘の美、一々言ふまでもなし且つその表紙裏には本書が説明する東半部地方の詳密なる日本地圖を疊み込み、以て携帯者の便に供せしめたるあり、要するに本書は一部の新式風土記と見るべく優に旅行界の燈臺たる價値を具ふるものといふべし、上巻價金一圓、博文館發行

▲人類界の現象　　神田裏神保町　光風館發行

我々自身人類であり、我々の日々交はる處ろの者も又人類である、單に此事實から考へても人類に關する智識が我々に取つて如何に肝要であるかゞ分る。とは人類學の博士坪井氏が此の書に序せられたる冒頭の言なり。著者大鳥居氏は早稲田出身の秀才にして數年間地方の中學及び師範學校に敎鞭を執り主として修身敎授に力を注がれたる篤學の人なるが人間生活の組織的智識普及の必要を感じ、自ら奮つて之が任に當らんと志し、專心研究の餘今回遂に此の書を公にするに至れり。其の内容を總論、人間の身体、精神、活動、種類、人類の起源、發達、人間社會、人類と自然の大綱目八章に別ち、更に各章に就て小項目を分ち、肉體の構造組織より精神活動の詳細を叙し兩性の差別、年齢、氣質、境遇等の委曲に入り、進んで人間社會全般の成立、影

審を說き更に人類と自然關係の現象等を綿密に叙述したり。

本書の特色はその分類の多端なるに拘らず、よく前後の關係に脉絡ありて、綜合の宜しきを得たる事と。深奥なる學說を平易に解釋して何人にも詳かに合點せしむるを得るやう、丁寧に叙したるとにあり、從來此の種の書を著はすもの動もすれば徒らに學術的の文字を並列して讀者を苦しむるもの多き例なるが、本書に限りて少しもこの弊なく、三百頁の書中何れの個所を披き見るも悉く趣味ある有益文字にして。科學上の智識を收獲するの量少からざるべし。著者が材料蒐集の勞莫大にしてその挿畫、圖解の撰定尤も注意を加へたり予輩は本書を以て單に敎育家、學校敎師の參考用として必要とするのみならず科學的智識の普及を要する今日の家庭の讀物として極めて適當のものなるべきを信ず。（定價一圓二十錢）

▲世界お伽噺第五十編　骸骨島　　博文館發行

小波山人巖谷氏が世界お伽噺に筆を着けられてより既に三年每月殆んど一冊つゝの割合を以て編を重ぬる茲に五十編、本書百冊の豫定なる上半丈今回を以て芽出度完了せられたるは非常の勢力と言はざるべからず。元來このお伽噺たるや、世界各國に散逸せる片々たる口碑傳說を以て材料としたるものなるが此の片々たる童話に就て每編その趣向を異にし萬有界のあらゆる事物を驅使して自家藥籠中の物となすの意匠と平易にして解り易き文章とを以て東西を辨せざる我が兒童の腦髓に世界的の槪念を智得せしめたる小波氏の功勞や極めて大なるものありといふべし。此篇は北亞米利加の傳說に基き印度人の口碑より材料を得られたる者なり

▲歐米名士の家庭

本書は多年女子敎育に經驗あり、目下日本女子大學の敎授たる松浦政泰氏の編述する所、歐米名士の家庭に於ける夫人及名士の性行、事業、佳話等を具に紹介したるもの、就中ヴイクトリヤ女皇、コロンナ公爵の婦、コクレーン子爵の小女、コンジオ公爵夫人、フーケレー、漁夫の家庭、大統領リンコルン、侯爵夫人マーリー等最も見るべく、記事は流暢にして平易、躰裁亦た優美なり、讀む者本書に依て泰西婦人の人爲及び其の家庭を知らば、自己の人格を養ひ、婦人の資格を盡す上に、裨益少からざるべきを信ず、定價金七拾五錢、警醒社發賣。

▲名士の交際術

これは一名、名士の應接間ともいふべきものであつて、我邦知名の貴紳が其の家居に於ける交際ぶりを觀察したもので、流儀や嗜好や人品や性質や談話や裝飾を微に入り細に互つて紹介した評論的の訪問記であるい、著者は犀利の烱眼を以て家庭の模樣や主人の性格を洞察してゐるので、其の筆路も深刻にして餘程面白く讀ませるのである、故に強ち今の名士に肖似かれといふではないが、其の平生を知り、自家の人物修養に資したならば、處世上に益にならうと思ふ、故に此の意味に於て本書を讀書社會に薦むのである、著者は日本新聞の東臺隱士といふ人、發行所大學館、

懸賞文募集

女學世界定期增刊（十一月十五日發行）

玉あられ

投書〆切十月二十日限

才媛詞藻 冬の卷

女學世界は婦女文藝の進歩を圖るの目的を以て毎年四季に定期增刊を發行して天下才媛の手に成る佳什を集載し來りしが今回その冬季增刊を編集するに際し例によつて汎く作品を江湖の女性に募るその課題は下の如し。時は是れ初冬萬朶の楓樹霜に飽いて梢上千段の錦を織るの好季節に會す天下の才媛乞ふ錦繡の心腸を披瀝されん事を

文種

▲小　說　二十四字詰二百行限

▲和　歌（秋季雜題）　葉書に一題一首の事

▲消息文　二十四字詰二十行限

▲寫生文　二十四字詰四十行限

▲雜　文　二十四字詰四十行限

賞品規定

特賞金十圓（小說に限り）一名

甲賞金五圓（圖書切符）二名

乙賞金二圓　仝　三名

丙賞金一圓　仝　五名

秀逸金五十錢仝　二十名

注意

▲和歌の高點は乙賞以下の事

▲原稿二枚以上は紙繕にて綴る事

▲封筒には必ず「玉あられ」と附記の事



文苑



小説 秋風嘆

泉斜汀

其一

一躰此のお育と云ふのは、極めて情の深い女で、何か些細な出來事でも、大きく考へる癖が有る。

縦令ば姉の良人が、肺病になつたと云ふ。もう其の姉の身になつて、是が自分の良人であつて、理學士で秀才で、年紀が若くて、好男子で、可愛がつてくれる人で、其でもし肺病になつたら……。などゝ一所に死にたくなる。

見舞に行つて、子供を見る、自分を叔母ちやん叔母ちやんと言つて、恁麼者でも可懐がつてくれる、可憐盛の娘があるのにと、もう胸が支へて來る。又其の娘の身になつて、此子が今に大きくなつて、もし今の私達のやうに、お父様が亡つて居たら……。などゝ涙が溢れて來る。

親類の子に不具が在る。其の母親の氣になつて、餘所の娘を見るに就け、那の子がもし自分の娘で、器量が好くて、優しくて、嫁入盛の妙齢になつて、其で貰ひ人が無かつたらと、もう悲しくなつて來る。

又娘の身になつて、自分がもし此の年紀で、那麼に片足が利かなかつたら……。などゝ自殺が爲たくなる。

貴公子に伴はれて、偶ま逗子へ避暑に行く。田越の濱で地曳網を見て、自分と同じ妙齢の娘が網を曳いて居るのを見ると、此處に恁云ふ僥倖な、縮緬の單衣を着て、錦の帶を立やの字にして、金剛石の指環を掛めて、團扇を持つて、高島田で、日本一の大金持、某保險會社長、子爵家の若君に手を携へられて來て居るくらゐな、私と云ふ者の在るのに。と、もう其の娘が氣の毒になつて、日に燒けて、黒くなつて、襤褸を纏つて、暗くなるまで、汗水流して、働いて居るのが、熟と見ては居られなくなつて來るので、貴公子を急立てゝ、直ぐに旅籠へ歸つて了ふ。

然れば、此の二月ほど前より、良人と思ふ貴公子がふッつり姿を見せなくなつてからも、日陰者の悲しさには、手紙を出す事も協はず、尋ねて行く譯にも行かず、病氣ではなからうかと言つては鬱ぎ、屋敷へ知れたのではあるまいかと言つては沈み、切めてもの心遣にと言つては、茶斷をする、鹽斷をする、朝夕の神佛を念ずる。

始の内こそ其でも濟んだが、日は一日と經つに從ひ可慕さは彌益すばかり、館の首尾も案じ過して、終には病氣になる、三度の食事も一度で濟して、其の一度も漸との思。

縁に落ちたる繪團扇に、養神亭と有るのを見ても、去年の逗子を思出して、あゝ、那の時は恁うであつたに、此の時は那であつたか。

二階の書齋の座蒲團を見ても、此上に恁う坐つて、物の本を讀みながら、育と言つて呼ばれたものぞ。

小庭に茂つた秋草を見ても、あゝ、此の苗を栽ゑた時は、此處の縁に腰を掛けて、卷煙草を燻しながら、今に此の花の咲く時分には、お前を屋敷へ引取つて遣ると喜ばせて下すッたに。

釣合はぬは不縁の基と、豫てより言聞かされた、而して其爲に苦勞をして、今も場末に獨住む、一番上の姉の言葉を、今更のやうに思出して、面目ないやら口惜しいやらと、妙に憂き世を味氣ながり、藥を飲むさへ胸に支へ、梳るさへ懶げなので、間さへあれば小搔

卷を引掛けたまゝ横になるが、其さへ物思にばかり沈んで、起きやうとして起きられず、睡らうとして睡られぬので、日本から纖弱い體、此頃は風にも耐へず、泣いてばかり暮して居るとは、主思のお仙と云ふ、お育の女中で十九になるのが、痛はしい主の樣子を見るに見兼ねて人知れず、此の客の宅へ來ての話し。

其二

客は素より貴公子が、兄のやうに敬ふ人。法學士で瀨脇と言へば、某學校の敎授であるが、酢いも甘いも辨へた人で。貴公子も此人にばかりは、如何なる秘密も打明けて、相談相手になつて貰ふ、謂はゞ後見のやうな人。

此春正月此家で、始めて貴公子に紹介された時も女中が生憎宿下に、其里へ行つて留守だつたので、自分で、暗闇を飛出して、酒の下物を調へに行つて、途中で、法界節が劍を拔いたと言つて、見物の人頽がした質に、溝の中へ落とされて、怪我をして歸りながら素知らぬ顏で着物を着換へて、笑つて酌をして居たくらゐ。お育も大事に思つて居る人。

然らぬだに、其以前より、お育が貴公子へ情を立てて、戸外へも滅多には出ず、家にばかり閉籠つて、切めてもの樂と云ふのが、草双紙を讀む事と、昔の錦繪を集める事と、其に此の年紀で植木弄。家さへ故と此の邊鄙な、麻布簞笥町に引越して、つひ先頃まで賑な下町に、住馴れて居たものが女中のお仙と唯二人、寂しい暮しをして居る。

と云ふ事も瀨脇は善く呑込んで知つて居る。

又、二階の座敷が書齋になつて居て、貴公子の机の上には、いつも內證で寫眞を据ゑて影膳を供へて置く花を生ける、香を焚く、死んだ者を扱ふやうだと、いつかも姉に笑はれたさうなが、晝はいつも二階へ上つて、其傍で裁縫をする、本を讀む、茶を立てる、茶を立てゝも一人は飮ます、屹度お初が寫眞に供へて、其から飮むと云ふ始末。

寐る時も、起きる時も、一々二階へ上つて行つては

生きた人に物言ふ如く、お先へ御免蒙ります、又お早うございます、など丶言ふ可怜さも。
　勿論土曜日々々々には、豫め貴公子に見付からぬやう、其の寫眞を取片付けるさうなが。
　縦令又留守の時でも、身見舞だけは怠らず、髪一筋亂さないで、整然として衣紋を正して、女中にさへ馴れさせず、其癖例の人一倍思遣の有る女ので、寐かす時は早く寐かす、起す時は遲く起す、飯炊と拭掃除の外に、坐拵へも自分でして、植木に水も自分で遣れば御馳走をして食べさせもする、又緣日へも出して遣るが、其の行の正しさは、宛として良家の夫人。
　其も、追而は貴公子が館、乃ち金殿玉樓に、乘込まんす下心。
と云ふ事も瀨脇はよく呑込んで知つて居る。
　然ればお育を妹のやうに、娘のやうに可愛がつて、縦令貴公子の來て居ない時でも、氣が向けば俥を飛して、氣の利いた手土產を持つて、一人で恁麼處に寂しからうと言つては、慰めに來てくれる。お育の爲には頼母しい人、又嬉しい客。
　酒の上では笑談も利く、調戯ひもする、面白い人、厭味の無い人。
　眞面目な時は怖い人で、其換いざ改つたとなると、隨分不都合も責め兼ねない、又、其だけに、宜し引受けたとなると、縦令如何なる心配事でも、立處に處決して了ふ、男らしい立派な人。
　其癖情が有餘るほど有つて、思遣が有つて、察しが好くて、深切で、優しくて、外面は淡泊して居るやうでも、悲しい事には泣きもする、心の底は弱い人。

其二

　お育から見たならば、年紀の若い父親のやうな、叔父のやうな、兄のやうな、旦那のやうな人なので。
　縦令貴公子は打絕えて居ても、もし此人さへ來てくれたなら、或は是ほどに疾はなかつたかも知れぬ。
　と云ふものは、いつかも貴公子に此のお育が、笑ひながら言つた事が有る。

(私は瀬脇さんが大好よ、貴方よりも捌けて居て可いわ、私は瀬脇さんに然う言つて、奥さんにして貰はうや。)と、貴公子が何爲と言つたら。

(貴方は餘り御身分が好過ぎて、いつ何時御心變がなさらないものでもないから、)とお育は點々と泣いたさうな。

其は左に右、此の瀬脇さへ尋ねてくれゝば、渠は如何なる病氣の時でも、乾度病の床を撥きて、得々として喜ぶのであつたから。

瀬脇は氣の利いた男だけに、縱令貴公子が其の嚴父に、蓋し品行の點に於て、怪まれるやうな事が有つても、よしなに執成してくれるばかりか、此の瀬脇の許にさへ行つて居たとなつて居れば、甚麽に歸館の遲くなる時があつても、貴公子はいつも信用が有るので、嬉しい逢瀬を遂げさせてくれる、お育の爲には神樣のやうな難有い人なので。お育はいつも此客の方へは、足さへ向けて寐ぬと言つて居た。

然し爲にならぬと思へば、今日は止したが可からうと言つて間へ入つて家へ歸す。貴公子の爲には導師のやうな、信用すべき人だつたので。貴公子はいつも此人の言には、必ず背かぬと誓うて居た。

其の、神のやうな難有い、導師のやうな頼母しい人が、貴公子の來なくなると同時に、ぱッたり來なくなつて了つたのだもの。

お育は、是が、疾はずに居られやうか、案じずに居られやうか。

女心の淺墓にも、貴公子の可慕いだけ、其だけ、お育は此人を恨んだのである。戀の敵と憎んだのである。

憎み、曾つ恨みつゝも、猶且つ貴公子の來迎を仰ぐと共に、此人の來遊をば、一日千秋と待焦れて居たので。

恁くと密に女中のお仙が、言傳へたとは知らぬお育が、戸外に俥の停つた時は、如何ばかり喜んだであらう？夢ではないかと疑りもした。

戀人ならぬ此客を見ては、幾らか飽氣ない心地もし

たが、其ではならぬと氣を取直して、強いて嬉しく思つたのであつた。否――お育は廣い世の中に、此人を差措いては、貴公子の便が聞かれぬのだもの――飛立つやうな思がした。

其の平然たる様を見ては、貴公子の身の上に變つた様子も無いらしいので、始めて安堵の思もしたが。自分が是ほどに疾つて、待焦れて居たものを人の氣も知らないでと、相變らずの暢氣さを見



ては、可憎しくも思つたのである。早く安否が聞きたさに、歯痒くも思つたのである。憤れッたくも思つたのである。思迫つて涙が出たので。

（よう、まあ、其でも、忘れずに。）とは、胸の内で言ふ言葉であつた。

偖恁う遣つて尋ねられて見ると、今まで、長の月日の間、一人で忡々思つて居たのが、馬鹿々々しいやうでもあり、手足の唯さへ細りして居たのが、彌よ

細くなつたのを見ると、我ながら口惜しいやうでもあり、又悲しいやうでもあり、今まで樣々恨んで居たのが空可恐しいやうでもあり、又濟まないやうでもあり、若しや此人の機嫌を損じて、此の儘家へ歸られたなら、など、思うと、心細いやうでもあり、お育は穴あらば入りたい心地。

迂濶とは口も利き得ぬのであつた。



其四

臺所の戸ががたりと、鳴つて女中が歸つて來た樣子。

客は何か言出さうとして、弗と口を噤んだが。

廣くはあらぬ家の內、旋て茶の間から顯れると、玄關から。

「おや、お珍しい。」

客を見て笑ひながら、

「奧樣、唯今。」と挨拶をする。

お育は是に氣を取直して、振返ると、
「あゝ、歸つたのかい」。
寂しい聲で、
「甚麽でした、鬼子母神樣は？」
「大層賑でございましたよ。」
「然う、其は好かつたね。」
「難有うござひました。」
お仙は何か物足りなさうに、
「あの。旦那樣は如何が遊しました？」
客が、
「來ないよ。今日、」と言ふ。
四邊を眴しながら、
「嘘ですよ」何處かへ隱れて被在るんでせう。」
お育はふと機嫌を損じて、
「仙！」
「はい」と畏る。
「那樣事はとうでも可いから、早く御酒の支度をおし。」

默つて、其儘引下らうとする處を、
「お待ち、」
お育は呼留めて、客に、
「ビイルを食りますか。」
首を掉つて、いつになく沈んだ調子で、
「今夜は少し話があるんだから……。其に、直ぐに是から廻らなくちやならん處があるので。然うもしちや居られないから、」
「お見合せになりますか。」
「あゝ、何しろ酒だけは見合せやう。」
お育は然も氣遣はしげに、屹と瞳を据えたまゝ、其の顏を覗き込んで、
「ま。宜しいぢやございませんか。」と言つたが、客は默して答へなかつたので。
附穗なさうに女中を見返り、
「ぢや、可いよ。お前は那裏へ行つてお在。」
女中は引下る。
お育は後の紙門を閉めたが、氣遣はしさに耐へぬと云

ふ風。
客の傍へ膝行り寄つて、
「何なんです、よう、瀬脇さん。早く聞かせて下さいましな。」
客はころりと横になつて、肱枕で寝轉びながら、
「う丶…………。」とばかり考へて居る。
「女中が居て面倒なら、二階へ灯をつけさせませうか。」
「其より何處かへ出したら可からう。」
餘ほど大事件でもあると見えて、一も二もなく思う言つたので。
お育は直ぐに茶の間へ行つて、又緣日へと出して遣つた。
　而して女中の出て行つた後で、茶の間なる佛壇の下に蹈いて、瀬脇には知れぬやう、心を籠めて、何事をか念じて居たが。
　茶道具を手に持つて、六疊に引返すと、今にも何か言出さうとして、言出し兼ねて居るらしい、客は煙草を燻しながら、天井を仰ぎ見て居る、瀬脇の様子を一目見て、唯、何と云ふ事なしに、悲しくなつて涙が出るので、茶を注ぎながら、袖で拭つて、内向いたまゝ其へ出す。

其五

「病氣は甚麽様子だね。」
「相變らずで困ります。」
「猶且頭が痛むのかね。」
「此頃は何ですかもう、自分で自分の體が可厭になつて了ひました。」
「藥は?」
「藥は、水藥と粉藥と、其に自分で調合して、臭素加里を飲んで居ます。」
「お飯は食べられるかね、」
「些とも戴かれません。食べると胸に支へて了つて、直ぐに吐いて了ふのです。」
客は、

「困つたものだね。」
と言つて、良暫く考へて居たが。
煮返たなつて、温いのをがぶりと飲むと、
「大事にしなくちや可けないよ、是からだ、お前さん
の體は！」
「え…………？」
「否ね、體を大事にしなくつちや、可けないと云ふ事
さ。
柳田も大變心配して居た、那どうも病氣ぢやア為方
がないッて。
大層末を案じて居たよ。」
お育は唯默つて泣く。
「と、私が恁う言つたら、手紙一本出さないのに、と
うして私の病氣の事をと、お前さんは不思議に思ふだ
らうけれど。
僕は何も彼も全然知つて居る。
恐いものだね、人の異心と云ふものは。思ふ一念巖を
も通すで、お前さんは誰に一人、打明けない意でも、
ちやんと知れるから妙なものだ。
否、全く感心した。今時には珍しい。
よく、まア、然し、其ほどまでに、あの柳田を思うて
くれました。
僕は更めて禮を言ふよ。否、本當に、」
と起返つて、
「其の情の深いお前さんに向つて、實は、全く言辛い
のだけれど。
言はねばならぬ事ではあるし、言はなきやとうせ知
れる事なんだから、僕も思ひ切つて言ふ意だがね。
お育さん、」
「…………。」
お育は默つて泣いてばかり居る。
「惡く思つて聞いては困る。」
と瀬脇は言葉を改めて、
「世の中と云ふものは、恁麼儚いものだと思つて、お
前さんの為ばかりではない、柳田の為を思つて、可い
かね。今までの事は今夜限、夢だと思つてくれません

か、私が折入つて頼むのだから、折入つて頼……だか
ら、」と後は言得ず口籠る。
お育は素より分過ぎたる栄誉を望む女ではない、女
ではなかつたけれども、或時雨の寐物語に、高根の花
を手折らんと欲して、身を過つた事の有る、姉の身を
思ふの餘、巳が身の行末に、打案じずには居られなか
つたので、女氣の弱々しくも、心變を危んだ時に、貴
公子は一言の下に、其懸を笑つた事があるので。來ん
秋は必ずと、それのみ頼に思うて居た。
お育は素より分過ぎたる栄誉を望む女ではない、女
ではないけれども」如何にもして添遂げんとは、兼て
よりの望であつた。
餘の事は唐突に、何と答も爲兼ねるので、唯潸々と
泣伏して居る。
と、其の泣顔を覗き込んで、客は又穏に、
「私が唐突に恁麼事を言出して、然ぞ驚きもしたらう
けれど、譯も言はずに切れるとは、何たる情無い言葉
であらうと、可怨しくも思ひなさらうがね。
お前さんも怜悧な方だ。其のくらゐの事は言はなく
たつて、今までの様子を見て、大概察して居なさるだ
らう。
と思ふから私も言はぬ、又言ひたくはないのだから
緊い事は言はない意だ。」

其六

「其換、お育さん、唯一つお前さんを喜ばせる事が有
るよ。
外でもない、此家だ、此の家と諸道具一式、其に、
此處に懸つて居る、此の柳田の置忘れて行つた時計。
と後の自然本の瑩澤しい床柱に懸けられながら、意有
りげにかッち〳〵〳〵微妙の音を發して居る、女持の懐
中時計、金光燦爛たるを指して、
是はもう本の寸志、聊の志ではあるが、今までの
御禮として、不殘お前さんに差上げる意だ。
差上げる意だなんて、高慢な事を言つて、何も私が
上げるのではない。

皆柳田からお前さんに、渡してくれろと云ふ事なんだ。可いかね、柳田から、解つたかね、何要らない？」

お育は漸う口の内で、

「な、何も要りませんから………」

「要らないから、何だつて？」

「き、切れるのは可厭です可厭です、可厭ですよう。」

と首を掉りつゝ、

「そ、奈何にかして下さいまし、奈何にかして下さいましよ。」

と言つて渠は身を顫はして泣いた。

瀬脇も是には困つた樣子で、

「其は私もよく知つて居るさ。知つては居るけれど、て、困つたものだね、何てッたら可いのか知ら……。」

瀬脇はチヨッと舌打して、其のまゝ腕を拱いたが。

「然う思ふのも無理はないね。是が何も本人に不足がわつて言ふのではなし　態う遣つて大人しくして、命懸で思つてるものを………。

いや、全くだ、尤もだ。洒落や、浮氣や、笑談で、族はれる譯のものではなし、切ないお前さんの志も、私にはよく解つて居る。解つて居るだけに猶言難いのだけれど。

とうしてもお父さんの方で、不承知なのだから爲方がない。

私が幾ら間へ入つて、甚麼に骨を折つたからつて、何の役にも立ちはせぬのだ。

以ての外だと言はれるばかりで。

然うかと言つて今まで通に、柳田に此家へ來られるやうでは、私が第一柳田のお父さんに對して申譯もなし、折角那の圓滿な家庭が、若し其が爲に不和になるやうな事が有つては、又嫁に來た女にだつて、氣の毒な次第ではあるし。

其も柳田が思つて居なけりア可い。お前さんを思つて居なけりや可いが。何方も思合つて居るだけに、猶始末が悪いのだ。

歴とした夫人を迎へながら、内々妾宅通をされるやうでは、家の爲にも案じられるし、柳田の爲にも宜し

くない。
何も宜しくないと言つて、お前さんを疑るのではない、又柳田を案じるのではないが。唯世間を案じるから起つた事なので。
何もない、唯其だけだ。
其だけの事で澤山なのだから、此處の道理を汲分けて、」
と瀬脇は噛んで含めるやうに、
「可厭でもわらうけれど切れておくれ。」
お育は泣きながら、
「可厭です!」と言ふ。

其七

「何、可厭だ?」
「はい、可厭でございます。」と判然。
瀬脇は頷いて、
「應。」と言つたが、
「何てッても可厭なんだね。」

と念を押して再び聞いた、其の言葉が鋭かつたので。
お育は怯えて顫へながらも、
「貴方が、幾ら、御深切に、有仰つて、く、下すッても………。」
「切れる事は出來んと言ふのか。」
「堪忍して下さいまし、そればかりは。」と言はせも果てず。
瀬脇は故と威長高になつて、
「此方で幾ら切れないと言つても、先方で可厭なもなア爲方がなからう!」
お育は涙の顔をあげて、
「何でございますッて?」
「勝手に那樣眞似をしてるが可い!」
瀬脇は言切つて衝と立上つた 索々と玄關へ出て行く。
お育は、
「あれ、」と追縋けて出て、
「もし、瀬脇さん、瀬脇さん、些とお待ちなすつて下さいましよ。で、後生でございますから、もし、」

と憫を乞ふもの丶如く、其袖に縋り着いて、わッとばかりに泣伏した。

瀬脇は冷に、然かも急込調子で、

「お放しなさい、お放しなさい、これ、何を爲るのだ。」

と振切つて行かうとするのを、お育は前に立塞つて亂るゝ鬢を掻上げながら、

「どうぞ、どうぞ、もう暫く、長くはお留め申しませんから。」

と淸しい目を屹と睜つて、瀬脇の顔を見上げながら情無さうに涙を點々。

「いや、急ぐんだからお放しなさい、急ぐんだからお放しなさいと云ふに。是から結婚式へ臨む處だ。」

お育は聞いて、

「えゝ？」と吃驚。

進二無二座敷へ引戻すや否や、瀬脇を床の前に坐らせて、ばッたりと跪くと同時に、

「私が惡うございました、堪忍して下さいまし、堪忍して下さいまし。」

裕衣の袖を噛占めながら、瀬脇を拜む可憐さ。瀬脇も思はず涙含んだが。

お育は身も世もあられぬ樣で、あゝと思はず嘆息しながら、

「もしお屋敷へおいでなすッたら、大人しく切れたつて、どうぞ、然う有仰つて下さいまし、お願でございます、お願でございます………。」

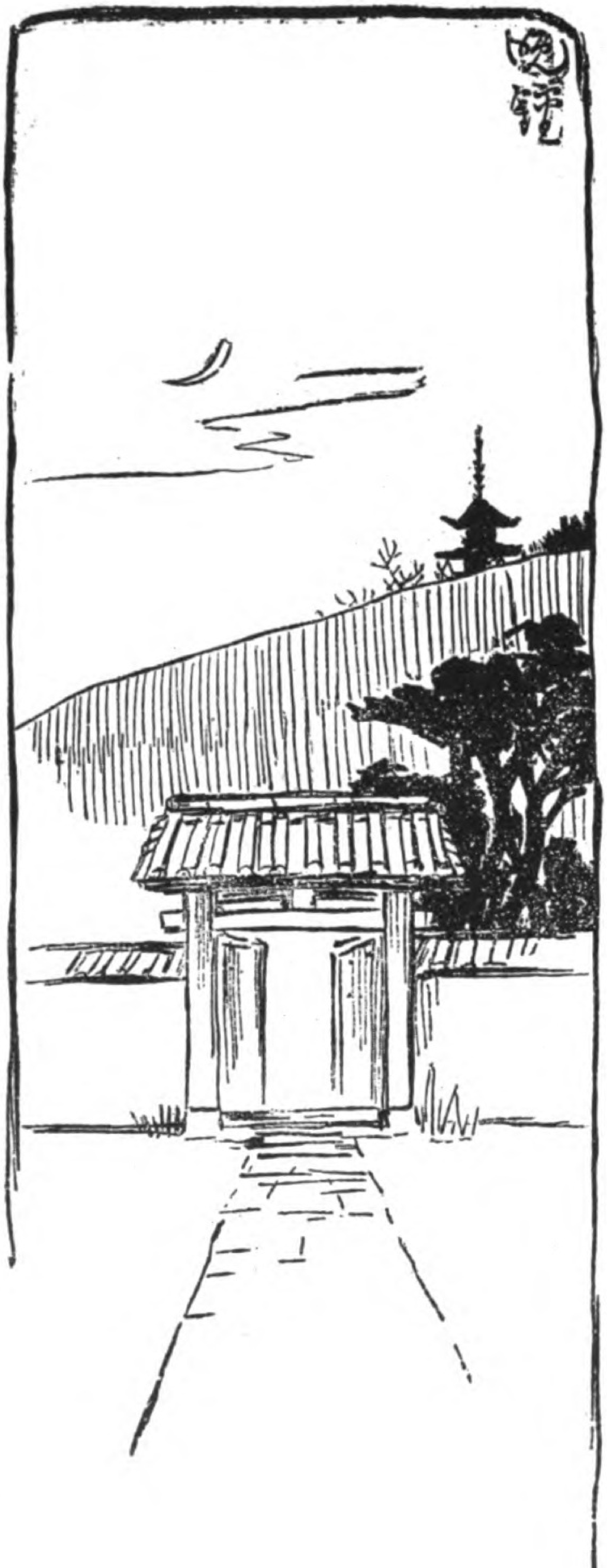
と繰返して云ふのであつた。

其八

門内には馬車腕車、夜目には煌々と列を正して、皆其の主人を待つて居る。

夜も彼是十一時過、芝山内の紅葉館では、折しも華燭の典を畢へて、子爵柳田家の若君弘氏新夫婦が、玄關に横附にした、二頭立の馬車に乘つて、是から直ぐに新橋の停車場へ新婚旅行に向はるゝと云ふ處。

送出でたる人物は、朝野の貴顯紳士達、紋附・袴、



フロツクコオト、或は白衿、五つ紋、花の如き貴夫人令孃。

瀬脇も無論其中に居たが、日來の快活な擧動にも似ず、此時ばかりは酒にも醉はず、悄然として首垂れて居た。

馬車が玄關を離れやうとする時、一同欣喜雀躍して柳田君萬歳を唱へた。而して其聲は谺に響いた。瀬脇は一人默つて居た。

馬車は間も無く門を出て、森の下を潜らうとした。見ると行手の暗闇に、白地を着て悄然した、娘が一人うろ／＼して居る。

馭者は其儘鞭を上げて、叱とばかりに追退けた

言ふまでもなく幌の内には、絹帽子の貴公子と、洋装の貴女とが、二人仝乘をして居た。　（完）

彙報

▲濠洲の珍客

客五月來朝して先頃歸國の途に就かれたるロール氏は濠洲メルボルン府の人にて、夙に一視同仁主義を持し、一九〇一年有色人種排斥法案が議會を通過せし時氏は書を公にして之に反對したり、殊に我日本に對しては非常の景貫心を有し日本人の爲には狂奔して斡旋の勞を取れり。氏はあらゆる方面に於ける日本趣味を解し特に圍碁に就て造詣する所尠からず、之に關する著述をなすべく用意し居ると、去月十五日、我朝野の有志は氏の爲に盛なる招待會を紅葉館に催したり。氏は夫人并に令孃と共に出席し大要左の如き演説を爲せり

濠洲首相サー　エドワード・バルトン氏は嚮に論じ有色人種入るべからずとの議論を繰返しつゝあり現に數週日前ジョホールの酋長がメルボルンに來りし時も其有色人たるが爲め期限を切りて滯在を許可せり尙ほ濠洲議會に於ける反對黨の首領レード氏も數ヶ月前公開の席にて吾人は有色人種を濠洲に移住せしめんよりも寧ろ之を沙漠として殘さんとする者なりと云へり然れども是の如きは荷も人道を顧みる者の決して首肯する能はざる處なり予の持論に於ては世界上一方に於て激しく繁殖せる人類が他の稀薄なる土地に移住するは全く天賦の權利にして僅々人口四百萬を有する濠洲は決して之を拒絶するの權利を有せざるなり又予の主張に從へば濠洲は此際須く或る特別の人種を拒絶せず否却て適當なる規則を設けて彼等を輸入し其人種の如何に拘らず耕牧すべき移民は之を招徠して廣大なる土地を開拓せしめ相互に幸福を求むるに如かず是れ卻て現今濠洲の取りつゝある犬欲主義（食桶に於ける犬は他をして之を取らしめざらんとするが爲め自らも亦た安全に之を食する能はざるの意味）の方針よりも人道に適ひ正義にして且つ賢明なる道なり元來有色人種は太陽の光と四圍の境遇に依りて色々となるものなれども若し其適當なるを得ば本然の白色人種に復するを得べし何ぞ其色を以て人類の優劣高下を判別すべけんや予が有色人種を庇護するの説を爲すは其猶太人なるが爲めなりと某新聞は記載したるが予は純粹なる英國人にして猶太人には非ず但し耶蘇基督は猶太人なりし若し予にして假りに猶太人なりとするも決して恥づべき事には非ず予に向ては總ての人類は國籍の如何を問はず總て同胞なり豈に又親疎を分つの要あらんや云々

▲動物館と花屋敷

第五博覽會餘興の一部なりし動物館は閉場と共に拂下ぐることとなりしに付淺草公園の花屋敷にて總皆を一萬四千圓にて買受けたしと申込み遂に相談調ひて同花屋敷に引取ることゝなりたるが其動物の重なるものは左の如し

獅子(牝牡)	二	虎(茶色)	二	象	二
丹頂鶴	四	鴛鴦	十八	鵓子鳩	十二
モーンガー	二	琉球ハブ	四	熊猿	二
鼠尾猫	五	豆鹿	三	山牛	一
海坊主	一	黒猿	七	冠鳩	十
コンカン	二	冠家鴨	六	白猿	二
ヒマラヤ猿	二	尾赤鼠猿	二	大猿	二
南洋鴻鶴	三	印度牛	二	アシカ	一
鼈甲龜	一	狸猫	三	狽	一
大鷲	一	山猫	一	食火鶏	二
山鼠	二	麝香猫	二	山鼠	一
孔雀	二	段々猫	一	金蛇	一
南洋小熊	一	鰐	四	キウカン鳥	二

其他にて都合四十一種百八十六頭、其外剝製二百餘種ありと淺草公園是より一層の賑を增すべし

▲倫敦日本協會

我が同盟國たる倫敦の日本協會は會長に歴代の日本公使を頂だき副會頭には日本贔屓を以て有名なる英人ヂオシー氏を推し會員は在留日本人と日本贔屓の英人とを以て組織せられ年々夏期に於て總會を催し日英人打混じて晩餐を與にし日本に關する種々の演說談話を爲し互ひに交を締し歡を罄するを以て例となせり然るに本會は日本の國威輝き殊に日英兩國が東洋に於て同盟提携するとなりてより益々盛大となり近頃は日英新報と稱する美麗なる英文の機關雜誌さへも發行せらるゝに至れり現に先月十三日開かれたる總會の如き來會者は二百四五十名の多數に達し珍しくも支那公使夫婦さへも出席せり然るに本會に於て偶然にも小說的なる一場の奇遇こそ演ぜられたれ事の顚末は在ケンブリッヂ大學濱口擔氏が當夜日本婦人に關する講話を試みたるに始まり其の講演終るや來會者の貴婦人某氏は突如として現はれ濱口氏に向つて握手を請求し自分は曾て日本に濱口梧陵てふ賢人あるを知る幵は今を去る五十年前に紀州てふ地方に海嘯起りたる節資産を傾け心身を捧げて罹災民の急を救ひ又其の善後策を講じたりしとヘーン氏の著書中に見ねたればなり云々と（此事は先年三陸海嘯の砌大阪朝日新聞に掲載せられたりしをヘーン氏の譯載せしものなりと）同氏は聽きて事の意外に驚き、幵は予が亡父の事蹟なりとて吃驚を以て語るに之を耳にしたる同婦人は氏よりも多くの驚喜の態度を以て氏を握手しやがて感謝の誠意を耕に捧げたりき實に奇遇といふべし

▲府下女學生の總數

近來女子教育の勃興に伴ふて、府下に遊學する女學生の數著しく增加し來り、無慮一萬と註するに至れり三十四年東京府統計表に依ると府下の私立學校に籍を置く女學生の實數四千四百五十六人なりしが今ま東京府廳に就て昨今調製中なる帳簿によりて見るに昨年末の女學生數私立學校の分六千七百三十七人となり前年にくらべて二千人餘の增加なるが之は前に書きたる微々たる校舍をも此のたびは加へた爲めに俄に生徒の數を增加せるが如き觀をなするものゝ如し私立女學校生徒六千七百三十七人、府下女學校一千二百五十三人、官立女學校一千零七十二人、合計九千零六十二人、大約一萬人が所謂府下の女學生と名付くるものゝ總數なり、官立三、府立四私立七十一の學校がツマリ此の一萬人の生徒を容れ居る勘定なり今之を細別すれば猶ほ校別によりて百名以上の生徒を收容し居る私立女學校及其の生徒數を擧れば左の如し

（三十五年末現在）

香蘭女學校	一一二	跡見女學校	三〇〇
青山女學校	一七三	體操學校女子部	一八〇
女子英語塾	一〇〇	女子學院	二二六
成女學校	一五四	三輪田女學校	二〇八
和洋裁縫學校	三七〇	共立女子職業學校	二二〇
東京女學館	二五〇	立教女學校	一五二
日本女學校	六〇〇	明治女學校	一〇五
東京裁縫女學校	八九九	女子裁縫專門學校	一二〇
日本女子大學	三三七	女子美術學校	三二八

▲女子大學校の秋季運動會

日本女子大學校に於ては當月（十月）廿五日同校構内に於て第三回運動會を催さるゝ由聞く處に依れば當日の重なる遊戯は左の如くにして猶ほ此他に十數番の競技ある由委細は他日報導する事あるべし

瑞典式體操……
丁抹式體操……　英文學部

輪體操……
木環體操……
吉野の里（國風遊戯）　國文學部

長竿體操……
陣容列張（衛國遊戯）
旌旗翩々（日耳曼遊戯）　家政學部

球竿體操……
星月夜（米國遊戯）
啞鈴體操……
花賣女（佛國遊戯）
擊鞠々（西國遊戯）
西班牙式體操……
クラブ體操……
豆嚢體操……
御給仕（米國遊戯）
毬體操……
競技……　附屬高等女學校



次號記事豫告

（第參卷第拾四號十一月五日發行）

▲嫁の資格　棚橋刀自
▲女子教育談　秋元子爵
▲婦女雜觀　大町桂月
▲貴婦人の嗜好（五）　中村鈴子
▲米國風の家庭　櫻田夫人談
▲泰西家庭談　元田作之進
▲家政二十四時　河西天放
▲勞力と食物　塚本はま子
▲未亡人の心得　水原翠香
▲婦人と意匠　雨谷湖心
▲瓦斯の應用　石井研堂
▲二宮尊德の逸事　報德生
▲一日醫者　糸左近
▲魚の話　今井象氏
▲女學生の生活　近藤正一
▲隣の家（小說）　嵯峨のや主人
▲泰西家庭奇談　巖谷小波

毎月五日發行

定價表

一册	（紙數二百八頁）	金二十錢
四册	（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册	（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册	（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二册 / 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等			割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文署規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治卅六年十月五日發行　第參卷第拾參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

（後付の一）

（後付の二）

花すゝきは天下の名媛才嬢か年頃日頃洗煉の筆を呵して作成せる金玉の佳什にして其小說たり

女學世界秋期増刊



口繪●秋の山路（彩色石版）不折筆●哀音萬里筆●宗祇と山賊●支那音樂隊●ナイヤカラの瀑布●秋の花園●紀州神宮川の網打●富士と箱根外數葉

●今日の智識（評論）×××
●婦女小觀（同）池田秋長
●二重の名畫（文藝）高柳橘蔭
●秋の夕暮（同）米光關月
●撫子の花（小說）河原芳子
●庭の露（同）渡邊たみ子
●白萩（同）宮澤すみ子
●女性の涙（同）失戀詩人

詞藻には天下の才媛が其錦心繡腸に成れる歌、寫生文、新躰詩、消息文を滿載し紅紫錯綜、黃白相映して文壇に異彩を放つ

●初戀（小說）宮城野女史
●冒險婦人（逸話）高木蔽日
●佳人遊魂譚（同）夜窓鬼史
●阿能局（同）中内蝶二
●支那衣食住（社會）×××
●福田育兒院（同）一記者
●支那の少女……長谷川天溪
●池畔の寫生……上村左川

九月十五日
十二號 本文二百八十頁 口繪十二頁
正價二十錢
郵稅二錢

發兌元 東京本町 博文館

杼情文たり其他わりとわらゆる各編興趣津々として絶えるとなし同好の人は男子といへども一願せられたし

致富の要道

芳川遞信大臣題辭
小松通信局長序文
大阪通信管理局長 法學士 松永武吉君著

貯金要論

全一冊 大判洋裝 紙數四五〇頁 正價五十錢 郵稅十錢

目下貯金に關する著書尠しとせず然れども概ね皆貯金の梗要を說示するに止まる本書は著者多年の經驗に依り得たる智識を以て先づ貯金制度と社會改良政策との關係より說起し貯金制度の變遷發達貯金の收容方法運用制度公債證書の代買制度貯金小切手振替計算制度奬勵方法並に郵便年金及保險制度等に就き歐洲各國の制度を比較參照すると共に正確なる最近の統計表六十餘種を挿入し說明詳密を極め貯金に關する智識は殆んど網羅して遺すなし苟も貯金事務に從ふ人は勿論教育家工場管理其他貯金の奬勵開發に志す諸君は是非必讀すべき良書なり希くば愛讀を給へ。

森一兵君著 ●致富要訣 正價廿五錢 郵稅六錢

天城安政君著 ●勤儉貯蓄 正價十五錢 郵稅四錢

東京本町 博文館

（新刊）

工業叢書

工學士 簑田猪太郎君著

硝子製造法

全一册

中判クロース金字入総紙數四百三十六頁

正價八十錢 郵税十錢

硝子製造業は製品甚だ廣くして從つて其製造技術の如き最も多岐に渉れり本書は**總論**に於て沿革畧説より硝子の成分及原料の調合溶融等を述べ**各論**に於て硝子器製造法、硝子板類製造法非日用品並に工藝硝子品製造法を述べ終りに其製作品になすべき**裝飾摸樣**に就て十分の說明を與へたり蓋し本邦未だ此種に關する良書に缺く今此書を發刊して斯業の發達に貢献す

瀬戸陶器學校長 黒田政憲君譯述

●陶器製造化學

中判全一册洋布上綴三一四頁

正價六十錢 郵税八錢

東京本町 博文館

故小中村文學博士校閲

萩野由之、池田義象、増田于信、三君校訂

日本古代法典

洋装総クロース 正價壹圓廿錢

紙數約一千頁 小包送十五錢

●全壹册

帝國古代の法典放逸して今は探ると容易ならず此編は故小中村博士主となり三氏と共に博く採り周く求めて漸く纂輯して校定せられしもの乃ち律疏、殘編、律逸、法曹至要抄、貞永式目、同新編追加、建武式目、同追加禁裏内御法式、公家法式、武家諸法度、諸士法度、江戸高札御定書百箇條を編次す、凡そ帝國に法律ありて以來明治以前迄の金科玉條は盡く本書に備はる希くは愛讀を給へ

發兌元 東京本町 博文館

少年商業文庫

{第三編}

天城米海君著

世界金傑譚

全壹册

正價拾五錢 郵税四錢

本書要目

愛國的、學理的 公共的、摸範的 豪商 ●貴族商人●海上王●長者の子孫●鐵道王●俄分限●瓦斯王●京針の翁●牧場王●眞の親方●投機の王●世界の帝王●砂糖王●電信王●鋼鐵王●世界一の月給取●石油王●銀行王●德望家●雜貨王●道德家●技術的富豪●聯合會社王等十四傑

小峯大羽君畫 密圖數十個 挿入……

發兌元 東京本町 博文館

（後付の四）

幸田露伴先生校訂

（全部三册）



校訂 狂言全集

中卷

每一册 價各同一

和裝裝幀頗優美
紙數三百九十頁
正價 五十錢
郵稅 八錢

中卷 續狂言記

第壹 連歌毘沙門、秀句大名、居杭、飛越新發意、鶯、河原新市、盜人、荷文、針立雷、墨塗女

第貳 蛭子大黑天、鷄立江、雁爭、菊花、見物左衛門、成上物、寳笠、土產鏡、瓜盜人、鱸庖丁

第參 岡太夫、竹子爭、朝比奈、暇袋、鬼養子、つんぼ座頭、金岡、こんぶ布施、六人僧、寢聲

第四 目近大名、櫻評、六地藏、柑子俵、膏藥練、俄道心、禁野、猿替勾當、狐塚、とちはぐれ

第五 牛馬、入間川、路連坊主、箕かつぎ、蟹山伏、素襖落、磯石、三人片輪、算勘聟、節分

既刊 上卷 狂言記五十番

續刊 下卷 狂言記拾遺五十番

發兌元 東京本町 博文館

日本新聞の評に曰く

（前畧）此卷では武帝の彊外徒略を五章に分ち匈奴西域及西南夷朝鮮と分ちて叙説した所は尤も刮目すべしだそれから兩漢の過渡に王莽を眞天子の例に入れたのは最も贊成せざるを得ない望蜀かも知れぬが一歩進んで新朝興廢などゝ書いて貰らいたかつた乍併それは眞面目な歴史家のするとではない歴史家としては此卷のよふに一紀を立てた位が穏當であらふ

文學士 久保天隨先生著

東洋通史

卷の三 新刊

菊判和裝上綴一册二百八十頁總計三千五百頁

◎全部十二册 隔月發行

正價 一册＝五十錢六册二圓七十錢 全部十二册五圓郵稅一册八錢

二卷概目

中古期漢族繁榮時代 前漢の世＝高祖の諸政、匈奴と南越、呉楚七國の叛、武帝の彊外政略、鶴光の輔政と鶴氏の敗、宣帝の中興、西漢對外策の成功◎兩漢の過渡＝新朝の制度及び施治、外夷の離畔、王莽の敗亡、更始と光武の即位、群雄の剿平等廿四章

第壹卷 漢族生育時代（太古より春秋の終り迄に至）

第貳卷 壹卷の續 漢族生育時代（戰國より漢紹に至る）

東京 博文館 本町

（後付ノ六）

醫事通報曰
余輩之を繙き殆んど巻を掩ふの遑もなく讀過し了したるが恰も天人論を骨にして一年有半を肉にしたるが如きものにして近來稍々高尚ならんとする傾向ある讀者社會の渇を醫するに足るもの

男爵石黒忠悳君序文 醫學博士森鷗外君題言 ◉大判洋裝紙數二百五十頁

醫學士近藤常次郎君著

仰臥三年

全一册 正價卅五錢 郵税八錢

著者曩に帝國醫科大學を出て海外に遊びて造詣甚だ深く、學は漢歐に精通し健筆縱橫、議論風發、杏林社會推して飛將軍と爲す、往年痾を得、京都醫科大學の病室に入り、半身不隨、仰臥三年、其間筆を執て此奇警の文を爲す、世の病者の境遇、醫師の内幕、人情の機微、養痾の秘訣、東西の哲理と現時の社會とを經緯とし◉巧に説破し、嘲俗の間に幾多の箴誡を寓し、痛快匹儔稀なり。

故中江兆民先生著

◉一年有半 價卅五錢 郵税八錢

◉續一年有半 價卅八錢・郵税八錢

東京 博文館 本町

中學世界秋期增刊

白雲黄葉

第拾貳號 九月廿日發行 正價廿錢 郵税二錢

口繪

サツソシー宮殿の晩餐○和尻島の薄暮○伯耆大山の切通○アテレート動物園○新羅馬法皇○韓國平壤愛蓮亭○船橋里の紀念碑○新嘉坡の土人○犬鳴山の千丈ヶ瀧外數葉

懸賞作品

◉論文◉敍事文◉抒情文◉小説◉書簡文◉英獨文◉新體詩◉漢詩◉俳句◉和歌

節正に秋に入つて天高く氣清く、燈下最も親むべき此の讀書の好時に際して中學世界の秋季增刊は出づ六月以來天下に募りたる懸賞文の披露にして選評は**大町桂月、中内蝶二、巖谷小波、高島捨太、水野繁太郎、佐々木信綱、岸上質軒**諸氏の手に成り入選の作品百數十篇の上に尚名流雜俎欄に左の諸編を收む

名流雜俎

平安朝の和歌批評者……鐵幹
桑港の妖怪……廿三階堂
中央亞細亞の麒麟兒……犀東
瀧の窟……江の水陸
哀愁……徳田秋聲

伶人……小川煙村
王政吏談……栗島狹衣
落第……石橋思案
文藝家雜話……田中鹿州

發兌元 東京本町 博文館

(後付の七)

(後の付八)

女學世界
毎月壹回五日發行
(明治參拾六年拾月五日發行)
第參卷第拾參號
(明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可)

(定價金貳拾錢)

Vol. III. (東京市小石川區久堅町百八番地 博進社工場印行) No. XIII.